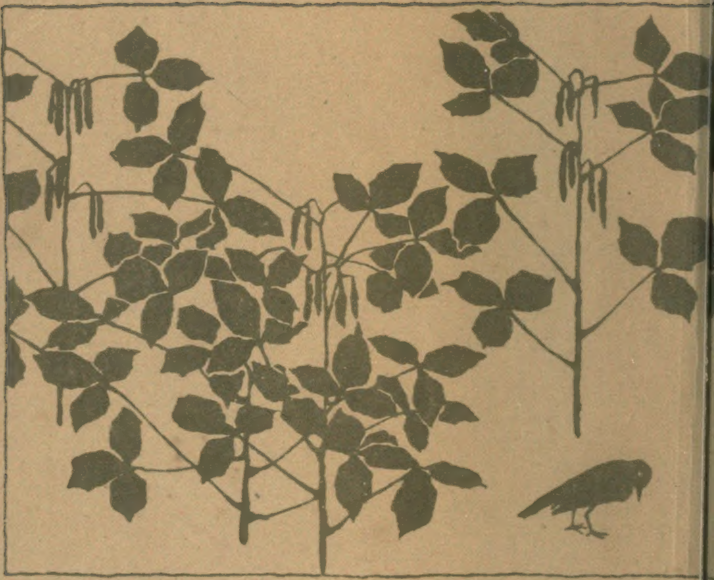
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03014 1105



大正二年九月一日印刷
大正二年九月四日發行

有朋堂文庫
集義和書（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

○律僧行人　一二一ノ三
○輪廻　一六三ノ一二
○柳下惠の和　二六七ノ六
○里仁爲レ美の解　四〇九ノ一

レ

○禮
易簡と略儀　四六三ノ一三
格法よりも誠　一一七ノ九
位々の非禮　三七三ノ九
神儒佛の典禮　一一四ノ二
無禮は巖牆　三一八ノ五
禮に立つ　四〇〇ノ一二
禮なき人に對する道　九二ノ一〇
禮の始　二三八ノ一一
禮之用の「用」字の意義　三七二ノ五

ロ

○老子の三寶　四一六ノ一
○論語首章の解　六一ノ一〇
○論語と大學　二〇一ノ一

ワ

○和歌
住めばまた（憂世なり）　三一一ノ五
七重八重（花は咲け共）　二三〇ノ一
ひきよせて（結べば柴の）　一九二ノ二
よきにのみ（爲さんと）　三一三ノ四
○和歌論
歌に心有りといふ義　四三六ノ二
道の餘力　三五ノ九
○和文と漢文　二六五ノ二

集義和書索引　終

仰レ之彌高 四〇二ノ三
神儒佛各特異の見解 二四ノ一三
人道の圖 一五三ノ一
聖人の道 二三ノ五
大道とは何ぞ 一二九ノ八
大道の實義 三八七ノ一
天道の圖 一五一ノ一
道德の古今 三八八ノ二
人によりて道の信不信なし 六七ノ六
費にして隱 四五三ノ一〇
佛教の印度に起りし理由 七四ノ三
佛道論 三三二ノ八
志ニ於道一の章の解 三九九ノ一一
道の興廢 三三五ノ九
無極太極 三八五ノ一三
無物自然の心 四六ノ一〇
理氣一體の名 四五五ノ六
○耳 一三三ノ一一

モ

○孟子の語勢 八九ノ一
同 九〇ノ三
○孟子、伯夷、柳下惠 三四一ノ一
○文字の起源 一九九ノ九

ユ

○勇
君子の勇小人の勇 四七五ノ五
沈勇 三六ノ一〇
日本の武勇 三一八ノ一
○遊戲
兒戲の選擇 四九七ノ六
鞠 三六ノ五
○有神論無神論 九七ノ五
○夢の正思と前知 八六ノ一

ヨ

○養子の說 三〇一ノ一〇
○欲望

黃老淸靜の化 二七二ノ一〇
禁制の本末 三九一ノ六
無欲と欲 七九ノ四
○義經
其人がら 六七ノ一二
次信に馬を與ふ 四八三ノ七
辨慶の忠 七ノ三
正成との優劣 三二一ノ二
○より親 四六四ノ一二

ラ

○雷
恐るゝは惡氣と惡人 八五ノ三
天の怒 四七四ノ九
○耒耜 一六九ノ三

リ

○吝嗇(儉約を見よ)
○六藝の御の義 二六三ノ二
○六子 二〇三ノ五
○六韜は僞書 一六ノ二

能近取レ譬の解　二七六ノ一〇
○非禮視聽言動せずの解　三三三ノ八

フ

○伏犧　一六七ノ三
○風俗の惡は心の憂　一八一ノ一〇
○夫婦の義聽　一五七ノ九
○武王の心事　四四四ノ三
○武器甲冑
　刀の鑑識法　三七ノ一
　具足のあはせめ　三一ノ九
　弓を粗末にせず　二五三ノ七
　弓矢の起源　一八九ノ六
○奉行職　一七三ノ八
○武士
　歌鞠を弄ぶの可否　三五ノ六
　士の始め　二一〇ノ七
　其心掛　三三ノ一
　武藝の德　三三八ノ二
　文武兼備の要　二七四ノ四
　武門の政治　二三五ノ六
　弓取の本義　二五三ノ七
　弓矢を尊ぶ心の誠　二五五ノ一〇
　陽氣に我意なる者　四七ノ七
　よき武士　三四ノ二
○不仁（仁及び愛情慈悲を見よ）
○不生不滅　一六五ノ二
○佛教（道を見よ）
○佛心宗　三三五ノ七
○舟の起源　一八五ノ四
○不眠の理由　二三五ノ四
○文王
　忠　一八ノ五
　伯夷を遇す　二三ノ三
○分業　二四一ノ一

へ

○平凡
　奇は惡し　二九一ノ四
　入道珍しき事なし　三〇九ノ一〇
　大賢は平地の如し　四二一ノ三
○辨慶論　六ノ三

ホ

○方位の由來　九三ノ七
○法規嚴なればいよ〳〵惡　五〇〇ノ六
○法然坊制禁教示の書　一〇八ノ二
○朋友
　助太刀の死はこれ命　五五ノ一
　有レ朋自二遠方一來　五〇三ノ七
　朋と友との別　一二六ノ一〇
　道に志なき智者に交る
　道　二九ノ三
○本願寺宗　一〇八ノ八

ミ

道（學問參照）
　一陰一陽　四五七ノ五
　有、無、中　四三ノ一〇
　同　三〇七ノ二
　空則實　二九四ノ一
　孔子の所謂異端　二七七ノ一〇
　志ある者は遂に歸る　五三ノ二

○中庸
　中の說 三一三ノ三
　同 三八四ノ九
○著述は今日の天職 三六八ノ一二

テ

○田畯田長 五二五ノ一
○天照太神 五五ノ八
○天仙、地仙 四五ノ八
○天地
　自然の勢は天命 四六九ノ二
　天地萬物の終始 四二〇ノ一二
　天道の仁、否運のきざし 三〇八ノ六

ト

○道學（學問を見よ）
○當下一念 四九〇ノ六
○刀劍（武器甲冑を見よ）
○藤樹先生（江西學參照）
　聖學無起の端 三二七ノ一
　道佛 二七九ノ一三
○湯武と桀紂 三二六ノ五
○昨米 三三六ノ五
○讀書（學問を見よ）
○獨立の難 二六二ノ一〇
○鳶飛魚躍 四五四ノ一
○鳶飛戾レ天 五〇三ノ一一
○豐臣秀吉論 二三一ノ一七
　同 二五六ノ五
○操るときは存すの解 四二七ノ五

ナ

○內典外典 四三ノ八
○南北朝 三五四ノ一一
○なら茶 八二ノ一三

ニ

○日蓮宗 一〇八ノ六
○日蓮の言 一〇九ノ三
○日本の國體 二二三ノ一〇
○人相の極意 三九ノ一一

ハ

○伯夷叔齊 三三ノ八
　同 二六七ノ九
○博文約禮の意義 四〇三ノ一一
○八卦の始め 一六七ノ二
○恥づる心の要 三一四ノ五
○蕃山
　其學說 二一二ノ八
　其抱負 三三五ノ一
　同 四〇八ノ二
○萬物一體の說 一〇ノ一

ヒ

○美談逸話（奇行異聞を見よ）
○獨を愼むの解 三二三ノ一一
○貧
　貧と清福 七七ノ一
　貧は世界の福の神 七五ノ一
○譬喩
　近くたとへを取る 四四九ノ二

人に肺肝を見らるゝ思　四ノ九
○政治
易簡の治　一七九ノ三
寛大の政　三一五ノ一
君の臣を遇する道　三五六ノ四
堯舜の治を萬代の師　四二五ノ四
殖産興業の要　三七五ノ九
政權武門に歸したる理
由　二三五ノ一
政治と學者　三ノ二
政の次第　三七七ノ七
大政奉還　二三一ノ三
治國の備　三七五ノ三
治國平天下の要　三四七ノ六
治國は知を主本とす　四四四ノ一
地方官四ヶ年の法　四八七ノ二
天下を取ると天下を持
つと　九二ノ三
天下有レ道則庶人不レ議　三九五ノ二
徒善は政をするに不レ
足　三八〇ノ七
農政論　五一一ノ二
無爲の治　二六八ノ一
本才と學問　六九ノ九
○井田　五一一ノ二
○西伯(文王)　一八ノ四
○説教は渡世の事　一〇九ノ七
○節分の鬼の豆　四一ノ一二
○禪學　三三四ノ二
○戰爭は不德を討つ　四八五ノ八
○先天の圖　四四ノ一三

ソ

○葬儀(祭祀を見よ)
○租税
輕税なほ賊あり　四五一ノ八
孔子冉求を責めし理由　三五九ノ四
四分六分　五一八ノ一〇
民屋の頽廢　五二一ノ五
○存養省察　九六ノ七

タ

○大學先后の主と工夫の實
地　二四六ノ二
○太公望登庸の説　一五ノ五
○大受、小受　三二一ノ一
○大名祿　二三二ノ九
○勿レ正勿レ忘勿レ助長一の解　一三四ノ一〇
○達尊の三つ　一三三ノ二
○他力宗の可否　一〇八ノ六

チ

○知(才知參照)
世間知　三二九ノ四
知行合一　四二七ノ九
知者の心　一〇三ノ二
知者動仁者靜の説　四〇四ノ一〇
○地獄極樂　四三ノ二
○地士　二一六ノ一
○忠信を主とすの解　一一五ノ二
○治體の解　四八五ノ一三
○忠質文　二五〇ノ一
○紂王文王を用ふ　一八ノ二

自得と心の位　一三〇ノ一一
自反愼獨、致知格物　二四八ノ四
小人の言賢知の言　九九ノ一
壯年と老年　二九三ノ六
獨知の知　二三八ノ四
人德の功　四九八ノ九
人みな賢人たるべし　三九七ノ四
日々に善をせんのみ　四五〇ノ一一
○儒學（學問を見よ）
○朱學と陽明學　一一ノ九
同　二一ノ八
○儒者
其罪　四五ノ五
其本義　二六ノ四
○舜の心　三四四ノ二
○壽命（生死を見よ）
○精進潔齋　三三八ノ二
○小人の行　一〇四ノ七
○淨土宗　一〇八ノ六
○賞罰―義理の賞　四八三ノ五
○職務―務を失ふ勿れ　九五ノ六
○諸侯卿大夫諸士の等級　二一七ノ七
○子路　三四二ノ一〇

ス

○水籠（水牢）　六五ノ七
○すゑ物　一三三ノ九
○菅原道眞怨靈の辯　二五六ノ八

セ

○性　一五二ノ九
○靜坐
自然の無爲にあらず　二八五ノ六
聖賢の靜坐　二五〇ノ一〇
其本義　二八三ノ二
其利益　四九四ノ六
○生死
犬死の眞義　三一八ノ八
死後の心　六四ノ一
死得ﾚ是　四七一ノ一
自逝、遺言　四六二ノ二
死生一貫　四五四ノ六
死生勞安は時なり　三九ノ五
生を好み死を惡むは人情の通情　四〇六ノ四
生を知る　四七一ノ五
生死と死生　四七七ノ七
生死不二　四二三ノ二
同　四三〇ノ八
生死は終身の晝夜　八八ノ三
善惡と壽夭　二九一ノ一一
曾子易簀　四八九ノ一〇
明には五論、幽には五行　八八ノ九
臨終の一念　八七ノ七
○聖人
聖人神人　四六五ノ六
聖人と時勢　七二ノ一
聖德の形容　四一二ノ一
聖の仁　三九四ノ四
聖の盛なる者　四九一ノ七
○性善
性善論　三五五ノ四

○式の意義 一七一ノ一三
○思索、覺照 一〇九ノ九
○自逝(辭世) 四六二ノ二
○時勢
後世道なきか 二七一ノ一
聖言の採り用ひ方 二一一ノ三
聖人と時 七二ノ七
○四端の解 一五三ノ一一
○七書聖賢の論 二三ノ一〇
○七情 四三八ノ一一
○漆器 四七八ノ三
○質問(學問參照)
心を用ふれば疑生ず 一〇一ノ一三
知らざるを問ふ 一〇一ノ三
問ひ尋ねぬ過 四九六ノ二
○師弟
小藝の師 一二三ノ一三
蕃山の藤樹に對す態度 三八六ノ七
我に弟子なし 五〇ノ一一
○視聽言動の解 二一三ノ一

○支那
朝廷の沿革 三五三ノ一〇
武威 一六ノ六
文明の沿革 一三八ノ三
○仁、仁者
仁者不レ憂知者不レ惑富者不レ懼の解 三八八ノ七
仁者必ず勇ある說 三一九ノ九
仁者の心 一〇二ノ一〇
仁者立レ人の解 二七六ノ四
仁者は勇 二七一ノ七
仁と愛と 三八五ノ七
仁の用 四〇五ノ六
仁は全德の名 三七一ノ二
不仁者の亡ぶる所以 四〇九ノ九
○心位 四六ノ五
○心學
其名不可なり 一二ノ三
特殊の學にあらず 三二三ノ三
禁制 三九一ノ五
○仁義禮智信 一五二ノ一〇

○信仰—定見なきに信 六四ノ九
○親戚の交 四八〇ノ八
○神道(道を見よ)
○親等の說 一四六ノ一
○神農 一六九ノ二
○信美大聖神 二一二ノ七
○神佛(祭祀參照)
勸請の宮社 五七ノ一一
神慮に從ひ非法を改む 六八ノ九
罰利生の有無 二八二ノ一
○蛇(神の使者) 六八ノ六
○釋迦 七四ノ一
○社會
隔心の不可 九六ノ二
義理順義 四七五ノ一二
謀從レ衆 三一九ノ六
○奢侈(儉約を見よ)
○戎衣の由來 三一ノ一三
○修養(學問參照)
氣力と德の力と 一〇六ノ九
孔子修德の次第 一三一ノ六

判官贔屓　六七ノ一〇
身のあつ火をはらふ　一三一ノ九
無學行レ政如ニ無レ燈夜行一　六九ノ七
柳は緑花は紅　四六ノ八
流水は常に生てたまり水は程なく死ぬ　七七ノ一〇

サ

○財貨
國の蓄　九〇ノ三
しはきと名を好むと　四六三ノ七
費は弗貝　四七九ノ五
○祭祀喪儀（神佛參照）
天照太神へ參る理由　五六ノ一一
位牌は神主と同一　九五ノ一一
棺槨の起源　一九三ノ三
君子祭禮の心　三六八ノ七
三年の喪　一一〇ノ七
同　一一六ノ一
三年の喪と心喪　一二一ノ三
葬儀は後世の人情　九七ノ一
葬の厚薄　一九五ノ一
其鬼にあらずして祭るは諂ふなり　二八一ノ六
喪中の肉食　一一九ノ一
喪服の數　二九五ノ二
○才知（知參照）
學問才知を生ぜず　三八一ノ七
大才は刀のごとし　三八三ノ六
○酒－孔子酒の困をなさず　四八八ノ六
○さし矢的前　二五三ノ一一
○座の者　五〇一ノ八
○三種の神器　四四三ノ一二
○三省の解　一三四ノ三
○殘忍（愛情慈悲を見よ）

シ

○詩
莫ニ赤匪レ狐　五〇六ノ六
鴥彼晨風　五〇九ノ五
維鵜在梁　五三六ノ二
薈兮蔚兮　五三六ノ一〇
彼候人兮　五三五ノ一〇
丘中有レ麻　五〇八ノ四
九月築場圃　五三三ノ四
五月斯螽動レ股　五三一ノ六
四月秀葽　五二八ノ一一
七月流火　五二二ノ八
同　五二五ノ七
同　五二六ノ一二
詩に興る　四〇〇ノ八
上古の詩と後世の詩　四七二ノ三
其用　二七九ノ一
北風其喈　五〇六ノ一
北風其涼　五〇五ノ一
墓門有レ梅　五一〇ノ八
墓門有レ棘　五一〇ノ一
○士
其天職　四九五ノ一
其律義　四九九ノ一〇
○史官　四六一ノ一
○色卽是空　四四ノ六

敬は心の德 二七五ノ三
孔子毋意の義 二四六ノ九
志の主本 二三七ノ四
心と行 三三一ノ九
心の向內と向外 三九七ノ九
心の向ふ所 四五六ノ五
死後の心 六四ノ一
人鬼幽明 一九四ノ一
人心、人欲 四七ノ四
愼獨の心掛 三〇八ノ九
心法の圖解 一五九ノ三
聖學は無心虛無の至 四一七ノ七
性、心、氣 六三ノ一
艮ニ共背ー 四七四ノ一一
程子の敬の心法 三八四ノ四
道心と人心 四二二ノ一〇
念慮と無心 一三〇ノ五
伯夷と柳下惠 一〇四ノ一
獨を愼むの說 三三三ノ一一
妄念心寬 四三一ノ一〇
凡心の圖解 一六二ノ一

身と心との關係 八六ノ二
靈覺 一六六ノ二

○五事 二四八ノ一
○御馳走 二三一ノ九
○悟道者とは上古の愚夫愚婦 四三ノ一
○諺、格言
相圖兵法自身の取合 五一七ノ一
石にて手をつめたる樣 一八四ノ二
一文は無文の師 二四三ノ一三
一犬虛を吠ゆれば萬犬聲を吠ゆ 二六二ノ一
從兄弟は他人の始 一四六ノ九
顏にて人をきる 四九八ノ二
患難に素しては患難を行ふ 八ノ九
細工は流々 八七ノ九
鹿を逐ふ者は山を見ず 三三二ノ一一
聖人に夢なし 八五ノ一一
尺璧を輕くして寸陰を重んず 九二ノ一

千金の裘は一狐の腋にあらず、大廈の材は一丘の木にあらず太平の功は一人の略にあらず 二四四ノ六
大智は愚なるが如し 三九ノ八
天下はまはり持 四〇ノ三
天空にして鳥の飛ぶにまかせ海廣うして魚のおどるにしたがふ 二五ノ一三
德なきの富貴は浮べる雲の如し 七八ノ四
歲寒くして松柏の凋におくるゝを知る 二二三ノ九
鈍刀骨をきらず 三四六ノ八
杜には虫入るも鋤の柄には虫いらず 七七ノ一〇
貧は士の常 四〇ノ一〇
貧は世界の福の神 七五ノ一
福は內へ鬼は外へ 四一ノ一三
武士は相たがひ 五一ノ一〇

ケ

○系圖　一四四ノ四
○兄弟頁悌　一五八ノ一
○刑罰
　罪科を輕くす　四三一ノ一
　彼我他を換へて察す　四四〇ノ四
○撃柝の起源　一八六ノ一一
○家語　三〇五ノ一二
○穴居　一九一ノ七
○結婚―同姓を取らず　一三七ノ一
○結繩、網罟　一六八ノ一一
○毛見　五一四ノ五
○喧嘩はよき武士のせざる事　五四ノ一〇
○元亨利貞　一五一ノ六
○見聞と志　三六一ノ一
○儉約
　其なし難き理由　四九ノ二
　無欲無心の儉約　八一ノ一〇

コ

○後悔（過失を見よ）
○孝行
　神に祈るより親に孝　五九ノ九
　氣質の美　二一三ノ六
　君親の輕重　三〇九ノ三
　孝を以て天下を治むの意義　二二〇ノ一二
　孝子愛日の理　九一ノ六
　孝子と境遇　二一二ノ九
　孝子の怨　四四三ノ九
　孝の心法　二〇二ノ一二
　學問嫌ひの父に對する道　二八六ノ九
　身分身分の孝　六〇ノ五
　孟莊子不レ改三父之臣與二父之政一　三九二ノ一
○孝經の大綱　二一五ノ三
○甲州流、越後流、信州流　三二一ノ五
○江西學
　其遺風　五〇ノ九
　其利害　三〇四ノ九
○黄帝　一七七ノ五
○洪範　三三七ノ三
○五官無體の理　四一五ノ四
○五行　一五一ノ八
○國家（政治參照）
　國の治亂　三五二ノ八
　人民本位　四六〇ノ四
　治平長久の大本　三六三ノ一二
　武威の衰頽　一六ノ八
○克己復禮の解　一三五ノ五
○心
　安重の意義　三二八ノ三
　有心無心　四三五ノ一二
　戒愼と無心　三七四ノ七
　感應　四三六ノ七
　間思雜慮　四五二ノ三
　氣質の善惡と志　三九八ノ八
　氣の動靜　四二八ノ一
　敬の受用　三〇一ノ一

○家老の字義 一九ノ四

キ

○氣逸者 四〇ノ二
○奇行異聞
太田道灌簑を借る 三三九ノ五
奇特なる親類知音の交 八二ノ六
空海と守敏 三五八ノ八
士になりし士民の話 二九〇ノ四
仁厚の國主 四四〇ノ六
曾子の彈琴 二一三ノ一三
田夫の清福 七七ノ二
董永の孝 一九六ノ一三
明慧と解脱 四五ノ一〇
老親は福の神 五九ノ五
○箕子 三三五ノ三
○氣質變化の學 一三ノ一〇
○鬼神敬遠の解 二八〇ノ一一
○吉凶禍福遲速の理由 六六ノ五
○喜怒哀樂
怒思レ難 四四二ノ一三
怒りは巖牆 三二〇ノ五
春秋秋冬の喩 一五六ノ一一
○君と親との輕重 三〇九ノ三
○禽獸 一六五ノ三
○鬼門金神 九三ノ七
○牛馬の使用の起源 一八五ノ一一
○毀譽
道と誹らば默すべし 二九三ノ四
名利の人これ小人 一〇五ノ五
世擧りて譽むる人 四九ノ一〇
勞すると安んずると 三一二ノ一
○教育
內仁に外嚴 八三ノ九
文才と德行 一ノ一
○恭敬の德 四四七ノ一
○堯舜 一七七ノ五
○橋梁船楫の起源 三五一ノ一
○清盛 四四一ノ一二
○許由子陵と舜 三一七ノ八
○吉利支丹あらため 三三八ノ五
○議論
他の非を論ずるは天吏の分 二四二ノ一〇
道の勝敗にあらず 二三ノ五

ク

○公家
其尊大 二二六ノ七
武家の態度 二二七ノ二
○楠正成
其評論 五ノ四
義經との優劣 三三一ノ二
○君子
不重不威の解 一二五ノ八
其意思 一〇三ノ六
其の行 一〇二ノ九
知仁勇の兼備 三八八ノ九
○君臣
君公善を好むの道 三六七ノ七
筋目ある臣の道 九五ノ九
大家に對する君の態度 三五六ノ四

豫 一八六ノ一一
理と卜筮 四一四ノ四

オ、ヲ

○鬼の豆 四二ノ三
○己を知るべし 四七八ノ一
○音樂
雨乞に音樂 二五二ノ五
雅樂の益 一八三ノ二
樂に成る 四〇一ノ九
移レ風易レ俗 四一八ノ二
溫和慈愛恭敬悍々 二八四ノ一三

カ、クワ

○怪異を見るは眼病 三三三ノ四
○悔悟（過失を見よ）
○快樂
君子の樂 四五九ノ五
正樂の必要 一八二ノ七
俗樂眞樂 四二八ノ一〇
○家屋の沿革 一九一ノ七
○下學上達の解 一二四ノ九
同 四一七ノ四
○格物致知の心法 二〇九ノ八
○學問、學者（道及び修養參照）
爭はんが爲に學ぶは非 三三二ノ一
異を立つるは小道 一一三ノ四
暇ありて後學ぶにあらず 二八九ノ九
溫故知新 四〇六ノ一三
會合論議の弊 二八三ノ四
下學上達 四二七ノ四
學者商賣 二一六ノ一一
學問の效用 三八一ノ六
窮理の義 二三九ノ八
經義と心法 二〇ノ九
詩作聯句と其人物 三二八ノ一一
師とならず 二四三ノ一一
修養は上に立つ人の役 一九ノ五
初學より德の力 一三一ノ一三
聖學の心法 二〇六ノ一一
道學の諸流 一九ノ一三
讀書と心傳 七〇ノ九
讀書の要諦 四三九ノ四
讀書の要領 一二八ノ二
內向と外向 九四ノ一三
同 二六九ノ一
不知を質問す 一〇一ノ三
學而時習レ之 五〇二ノ一一
未熟の學 二四五ノ一三
道と學派 一二ノ三
孟子以後の諸子 四六六ノ七
理學と心術 一五ノ一
○過失
過を二度せざる工夫 二〇五ノ八
悔悟の要訣 二三六ノ三
子路過を聞くを悅ぶ 三四二ノ一三
恥と懺悔 三四六ノ二
○かせ奉公人 一二一ノ一一
○嘉遯貞光の解 三一八ノ八
○かまひ 四四〇ノ三
○感應篇 七九ノ一三
○鴈の長幼の序 一六五ノ七

集義和書索引（主として思想的に分類せる題目を掲げ、發音に從つて五十音順に排列す）

ア

○愛情慈悲
人民を惠まぬ罰　六五ノ三
水火の仁　八三ノ一一
不仁の天罰　一二三ノ九
○雨乞ひ　二五一ノ六
同　三五一ノ七

イ、ヰ

○易簡と略儀　四六三ノ一二
○怒を遷さずの解　二〇七ノ一〇
○遺言の不用　七六ノ九
○以心傳心　九五ノ二
○板垣信形　九五ノ八
○異端の說　二七七ノ一〇
○市の起源　一七五ノ三
○居レ易俟レ命の義　四五二ノ一一
○亥の子の說　三〇ノ一一
○位牌　九五ノ一一
○今川の書　九九ノ六

ウ

○臼杵の起源　一八七ノ一二
○禹の治水　一八〇ノ九
○うはべ
疵をおほはぬ所則ち君子　四三五ノ五
君子の外聞と小人の外聞　三二七ノ四
實と文　四七五ノ二
誠のよき人　一〇七ノ一〇
見掛を張ると內所に耆ると　二六一ノ三

エ

○易
夬　二一九ノ九
同　三一四ノ九
渙　一八五ノ四
咸と恒　三一七ノ七
睽　一八九ノ六
卦　一六九ノ一
乾坤　一七七ノ四
孝經との比較　二〇一ノ七
小過　一八七ノ一二
隨　一八五ノ一一
噬嗑　一七五ノ三
損益の理　一七〇ノ四
大過　一九三ノ三
大莊　一九一ノ六

集義和書終

小人云々ー小人等の凌辱によりて艱苦に逢遭するの義

世間の禍福窮通はなき者なり。通達して幸福を得る時は人をよくし、窮塞して禍難にあふ時は其身をよくす。小人の犯ししのぎて患難來るは、君子の徳をみがくなり。たとへば良醫には毒藥なし、用ひやうによりて病を治するがごとし。

りたり、親の時は下に居たる者上にをれり、世間にしたがひたまはゞ人の下にはたたざるものを、いふがひなき有様かなと思ひ恨むるなり。彼欲ふかく辭すべき職祿をも辭退せずして過したる者を、初めはきたなしと思ひし者も、自然によく備りて其體よきを見ては、かしこき者なり、今の時代を見知りたりとて、よきになるなり。終には欲心利害習性となりて、貴賤ともに高知行を取るを美目とし、上座へあがるを第一として、本の義不義を知らざれば、親子兄弟の中も、欲に逢うては目の見えぬ風俗となりて、凶亂いたるものなり。此きざしを見て、賢者はひきこもりて奉公せず、艱苦を凌ぐといへども、父母妻子凶亂をばまぬかるゝなり。彼委女はじめはうゐたれども、終には賢夫の禮を得てやしなはる。不貞の女の富貴につきたるは、容色さかんなる間こそ愛せらるれ、本より不仁の夫なれば、おとろへて老後にはあさましき有様になる者あり。道なき時は賢夫貞女ともに一旦は困窮する者なり。この賢夫は道統の賢人にはあらず、禮義を守るの賢夫なり。心法を受用する者には、

清人―所得淸風高節の士

んなるが如しとなり。婉孌は若くかたちよきなり。小し人にこえたる女は、時を得て寵愛せらるゝに、此婉孌のかたちよき女うゐたり。何として左樣なるぞと思へば、貞正の心ありてみだりに人にしたがはす、賢夫の禮にあらざればおもむかず。時に賢夫なく禮なし、故に困窮せり。是を以てたとへとす。小人は富貴をきはめ、賢者は貧賤困窮に居てうゐに及ぶとなり　たとひ十分賢ならでも、道なき代には少しもよき者はおちぶるゝ者なり。無欲をたて義を行ひて祿位などを辭すれば、其分に成りて主人にも傍輩にも奇特とも思はれず、又むさぼり取付てかゝはり居れば、いつともなく其欲心不義の者よく備り、彼淸人のするゐは勢を失うて却つて不淸人の下に付き、いふがひなき體になるものなり。初は無欲にして義理を行ふを奇特と思ひし者も、其なりくだりたる末の體を見ては、今の時代義理淸白はあしく、無用の禮儀忠節だてをしておちぶれたりと思へば、夫にこりて禮儀によらず、子孫たるものも賢人君子は世にまれなれば、親の時にあはざる道だてをいひて、我等かくな

赤芾―芾は韠なり今の膝掛の如し

婉孌　詩經の曹風に出づ

武器なり。之をもたするは今の鎗長刀もたせたるが如し。赤芾は大夫以上の命服といへり。三百とは人多くつれたるなり。「維鵜在レ梁。不レ濡二其翼一彼其之子不レ稱二其服一」鵜は鳥の名なり。羽もぬらさず何の苦勞もなくして梁の魚をとりて食するなり。是を以てたとへとす。前章にいふ人徳もなく功もなくて富貴なるが如し。其服に不叶とは、大夫の服はきたれども大夫の器量はなきとなり。卿大夫の職は其君を道徳にみちびき、士を文武にならはし、民を教へ安んずるものなり。其徳功一もなく、よき衣服著て人多くつれたるばかりなるは、鵜の梁の魚をぬすみ食ふが如しとなり。「維鵜在レ梁。不レ濡二其咮一。彼其之子。不レ遂二其媾一」咮はくちばしなり。媾は寵なり。出頭し諸役にたづさはり時めくものなり。前章の意なり。皆小人なれば其寵にかなはずとなり。何の勞功もなくよき事はなきものなれども時めくとなり「薈兮蔚兮。南山朝隮。婉兮孌兮。季女斯飢」薈蔚は草木の盛に多きをいふなり。朝隮は雲氣ののぼるなり、南山は君朝にたとふ。小人時を得て雲氣ののぼるが如く、草木のさか

君師―君道と師道を兼備せる君

になる者をや。士の文を學び禮儀を愼み弓馬に遊び武勇をたしなむは、民の耕作の業に同じ。士は天下を警固して民を安からしめ、君上の干城となり、武威を以て世のしづかならん事を欲す。是道徳をしるが故に、少し民の勞に報いんと思ふものなり。國郡の主は士の文武をすゝめ人の善惡を知り、民の艱苦を忘れずして人民の君師たり。何ぞ下の情を知るをいやしとせん。みづから飮食をたしむを心とするを飮食の人といひて、是をいやしむ事古今の通義なり。夫諸侯大夫士の會合は、遊ぶに弓馬を以てし和するに禮樂を以てす。詩を作り歌をよみ、造化の功用を吟詠して道德仁義を思ふものなり。然るに其人々の言語の、飮食衣服家屋器物米穀金銀の事にのみ及びぬるは、其心の道にあらずして欲にある事をいやしとするなり。

一心友問。候人の詩は賢者の時を失ひたるものか。云。しかり。其詩に云ふ「彼候人兮。何ニ戈與ト祋。彼其之子、三百赤芾。」候人は賓客を送り迎ふるの官といへり。君に先達つて隣國の君の客たるを送り迎ふる者なれば、卿大夫の事なり。戈祋はみな

むぎ、此冬より來年春夏をへて五穀の出來るまでのたくはへ備れりとなり。また禾をいふものは、禾は五穀の惣名なり。五穀皆たくはへ有りとなり。嗟我農夫とは、我等農人といへるが如し。一家のみならず隣家みなおしなべての意なり。既同とは田野のたなつもの皆とり入れて、一所にあつめたるなり。上入は公へ奉るべき貢物を君の藏に入るゝなり。執宮功とは、農事終りて初めて公儀の役をつとむるなり。いにしへは民の力を用ふる事一年に三日なり。それだに農事に指合せてはつかはず。農事終りても民の遊ぶいとまはなし。やねをふきかへ、棟をつゝみなほし、垣をゆひなどすれば、晝は山に行いてかやをかり、夜はなはをなひむしろを織りこもをあみ、又は晝は薪をとり木をきり、春の耕作前に春夏秋冬までの用意をするなり。播百穀は、春はいろ〱の物を播きうゝるを云なり。膳中の一飯も、一粒々々民の辛苦より出たり、古の人は食するごとに其功を思へり。天下は相助け相報ゆる道理なり。故に善をなさゞる者は天地の賊なり。況や驕りて民をくるしめ、人の害

治世云々—易繋辭に君子安にして危を忘れず治して亂を忘れず是を以て身安くして國家保んずべしと

此室にいりて寒をふせぎ春を待つべしとなり。是老者の愛なり。此詩冬をふせぐを主とす。然るに五月斯螽の鳴くを聞いて、一陰下に生ずべききざしを知り、いまだ暑の初において嚴寒のことを思ふ。治世に亂を忘れず、天應をむなしくせざるの義なり。「九月築場圃、十月納禾稼。黍稷重穋。禾麻菽麥。嗟我農夫。我稼既同。上入執宮功。晝爾于茅。宵爾索綯。亟其乘屋。其始播百穀。」場はにはなり。圃はそのなり。春夏より七八月まで、物生ずるの時は土をおこしかへして菜物をうゑ、九十月菜終り稻かり入るゝ時は、つきかためてこなし場とするなり。十月納禾稼は、田より場にをさめ入るなり。禾は穀の皮をとらざる惣名といへり。もみの事なり。食とする時當座にすりうすにて皮をとるなり。常にはもみにてをさめ置くなり。米の虫になりてすたる費なし。其上當座にすりて皮を取たるは風味各別にして、人の元氣を養ふものなり。稼は禾の秀で實のりて田野にあるをいふなり、さきへうゑて後に熟するを重といひ、後にうゑてまづ熟するを穋といふ。禾麻菽麥とは、あさまめ

なく蟲多し。動股とは初めてをどりてもゝを以て鳴くなり。斯螽は兩の股を以て相切てなくなり。振羽とはよく飛んでつばさを以て鳴くなり。松蟲なども羽をふるひて鳴くなり。蟋蟀はきり〴〵すとよめり。今俗にきり〴〵すと云ふ虫にはあらず。斯螽莎雞蟋蟀は、一物時に隨つて變化して名異なりといへり。斯螽は五月の中より鳴き、莎雞は六月の中より鳴き、七月は此むし野にあり、八月は屋ののき下に來り、九月は戸のうち壁などにあり、十月はゆかの下に入るなり。暑氣の時は野にあり、寒氣には人に近付ものなり。歌にも「きり〴〵す、なくや霜夜」とよめり。此きり〴〵すを今俗にいとゞと云ふなり。穹窒は家の中のすきま〳〵、風の入るべき所をふさぐなり。鼠をふすぶるは、屋の中に穴し害をなさゞるやうにふすべ出すと見えたり。向は北に出たるまどなり。夏はあけて風を通し、冬は是をふさぐなり。墐戸は竹のあみ戸などにて、夏は風を通し冬はぬりて風をふさぐなるべし。家の老父よめ子に告げて云ふ。天さむくして事もまたやみぬ。屋の冬用意も成りぬ。年も程なく改たまらんとす。

きりぎりす―鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしき獨かもねん（新古今集）

を知る。五月なく蟬を聞いて一陰下に生ずる事を感ず。是より八月の四陰をへて十月の純陰に至り、大寒至れり。君子は善惡共にきざしの時に知つて、其備をまうくるなり。此章冬の末民のいとまにかりして武事をならはし、裘を作りて寒をふせぐ事、詩の主意なり。然るに四月の秀葽五月の鳴蟬をいひて辭を起し給ふ。其意其體ゆたかなる事、聖人にあらずして誰か加レ此ならん。道德の事なくして道德の盛善言外に明なり。天道の造化人倫の正道文武の美、悉く備れり。「五月斯螽動レ股。六月莎雞振レ羽。七月在レ野。八月在レ宇。九月在レ戸。十月蟋蟀入二我床下一。穹窒熏レ鼠。塞レ向墐レ戸。嗟我婦子。曰爲レ改レ歲。入二此室一處。」斯螽莎雞、みなむしの名なり、斯螽はいなごとよめり。されど今俗にいへるいなごにはあらず。蟲は詩歌ともに秋の物とすれども、斯螽は五月に鳴く、莎雞は六月になく。莎雞ははたおりとよめり。斯螽は五月一陰生ずるに感じてなき、莎雞は六月二陰生ずるに感じてなく。皆陰類なれば陰に感じて鳴く。故に夏より鳴くといへども蟲は秋の物とす。其上秋は盛に

教へざる云々―論語子路篇に子の曰く教へざるの民を以て戰ふ是之を棄つると謂ふとあり

初尾―初穗と書くを常とす義は字の如し

をしたがへし、其武功に繼いで習はすなり。十一月は農事終るといへども民冬の用意などすれば、はやく仕廻したる者は私に小牧にかりするなり。十二月は民事ことごとく仕舞て民力用ふべし。故に大にかりして戰陣の法をならはすなり。教へざる民を以て戰はしむるは、人をすつる道理なりといへり。よく軍法にならへば疵をかうぶる事死すること各別すくなし。萬事なれたる人のする事は、人すくなにても功あり。人多なればよくまはるものなり、豵は一歳の豕、豜は三年の豕なり。其小を私にし大をおほやけに奉つる。盡くしかるにあらず。かりの初め知りそめたる時の事なり。いにしへは農兵なり。其上かりの得物を君所にあつむる事なし。かりは近き所其くみ〳〵にあつめ、數ばかりを書付て君の御目にかけ。其組にての得物のよきを、俗に初尾といへる如く君にたてまつるなり。多くは皆命じて民間の用となさしめ給ふなり。君の民を見給ふ事子のごとし。故に私欲を忘れて何事にもまづ君を思ふなり。四月は暑さへ未だいたらざれども、秀葽を見て陰氣の初めてきざす所

遠志 ―ひめはぎの漢名

其豵、獻豜于公。」秀は花さかずして實のるをいふ。葽は草の名なり。今の遠志なりといへり。四月純陽の月にて陽氣上に極まる故に、微陰已に胎を下に受け、葽草是に感じてはやく秀づ。蜩は蟬なり。五月は一陰下に生ず。故にせみ陰氣に感じて先鳴くなり。秀葽は物成の初めなり。鳴蟬は秋の漸なり。穫はわせいねを刈るなり。隕蘀は草木の葉の落るなり。十月は諸木の葉おつる故に、風をも木枯といへり。貉はまみともむじなともいへり。狐貍はきつねたぬきなり。裘は皮衣なり。公子の裘といふものは、皆公子の爲にするにあらず。初めてとる者をまづ公子の裘に作るなり。國君の子弟山野をめぐり民のために勞すれば、民其功德を感じてかくの如し。二之日同とは、十二月は國中悉くおこりて山澤を取廻し、大にかりするなり。十一月は面々に少しづつ小がりし、十二月國君みづから國中の兵をひきゐて大にかりし給ふ。必ずしも獸を多くとらんとにあらず。軍法をならはさんとなり。故に纘武功といへり。武事をならはすなり。先人の武威を以て國天下を平治し、夷狄

下がさね―束帶の時袍の下に著る衣

くし黄にし、中にてよきをば朱にそめて、明かにあざやかなれば公子の禮服にたてまつるなり。赤きは婦人の服に近けれども、禮服となりては花やかなるも却つて正し。今日本にても衣冠束帶になりては、下がさねに紅を著し、太刀のつかさや赤地の錦にてつゝみて花やかなれども、少しも見にくからず。かへりて文明に見ゆ。禮儀の尊き所なり。夫天地の物を生ずる、冬用ふるものは春夏出來、夏用ふべき物は秋出來て來夏の用となる。こがひのわざは來冬の用なれば春夏に出生す。麻は夏の服なれば、七八月の陰氣になれり。此故にこがひの時は陽に來るうぐひすに感じ、麻の時は陰になく鵙に感ず。故に君子は天に則りて、何事もときに先達て助なさしむ。暑氣に當りて俄にかたびらの用意し、寒きにのぞみて小袖のしたくをすれば、せはしくて事たらず。萬事手おくれになりて世中ゆるやかならず。政道ゆたかなれば萬事時に先達、くるしめば時におくるゝものなり。「四月秀葽。五月鳴蜩。八月其穫。十月隕蘀。一之日于貉。取㆓彼狐狸㆒爲㆓公子裘㆒二之日其同。載纘㆓武功㆒言私㆓

月鳴鵙。八月載績。載玄載黃。我朱孔陽。爲公子裳。萑葦はあしなり。八月に成りてかるべし。こがひの時分このあしを以て作りたる筐を用ゆ。こがひは來春三月よりの事なれども、あしは今年八月になるものなれば、來歲の爲にかりてたくはへ置くなり。七月流火を見て、來月はあしを刈るべき事を思ふなり。蠶月はこがひの時分をいふなり。條桑はこがひの盛なる時は、葉ばかりつみては足らざる故に、枝ながら折り來りてはましむ。斧斨はをのまさかりの類なり。伐遠揚は桑に大木あり。婦女の手にかなはず木末の葉をつむ事はならざる故に、遠き上の枝をば切おとして下にて葉を取るなり。猗は葉ばかりつみて枝をたすくるなり。女桑は若き小木の桑なれば、引たわめ葉ばかりとるなり。切ては桑もいたむ故なり、去秋流火を見葦をかりしが、はや春ふかく夏もきてこがひの最中となりたり。こがひの事やうやう終りぬれば、七月來りて鳴鵙あり。麻をかりむしひたして緖となしぬ、もずは其時節に鳴く鳥なれば、且おどろかされ且感ずるなり。八月は其麻ををうみ、くろ

ひて行き、やはらかなる桑を求めて、蠶の初めて出てちいさきに食ましむるなり。遲々は日のうらゝかに長きなり。日の行く事はいつも變らねども、春は長き故におそきやうなり。蘩はしろよもぎなり。かひこ初て生れていまだおひとゝのほらざれば、桑を食ずる事なりがたき故に、白蒿をはましむと云へり。祁々は徐なりとあればゆるやかなる心なり、春の日ながくしてゆるやかなれば、天人一體の心にて女の心もいそがはしからず。こがひの女事にのみを入るこゝろなり。女心傷悲。春は女悲、秋は男悲といへり。天地の物化に感ずるなり。公子は國君の子弟なり。同歸とは、春は婚姻の時なれば、公子國中に來りて、かねて縁邊を約せし女をむかふるなり。親迎の禮なり。女は父母に遠ざからん事を思ひてなげくなり。是いにしへ公子貴家の質素にして驕奢なき風俗を見るべし。國中の女の賢なるを求めて妻とし、みづから稼穡蠶桑の事をつとめしかば、家事富有にて民にむさぼらず。此故に爭亂の憂なし。「七月流火。八月萑葦。蠶月條桑。取彼斧斨以伐遠揚。猗彼女桑。七

田畯—勸農の官也田の大夫

花がみた—花又若菜蔬菜等を摘み入るゝ籠

田畯田長といひて農事をつかさどる官なり。今の郡代郡奉行のごとし。時に先達てよく農事をつとむる事を悦ぶなり。今の郡代郡奉行代官の民間をありくは、民の煩ひに成る事多し。庄屋肝煎近村の者まで出ておくりむかへし、宿所へ見廻宿おくりとて人足多くつかはれ、さま〴〵農事のさまたげに成る事多し。この故に功者なる地頭は、民間へ奉公人の往來せぬ樣にするなり。いにしへの田長は民間へ入る事しげきを民よろこべり。農をさまたげる事少しもなく、助くる事のみ多かりしゆゑなり「七月流火。九月授衣。春日載陽。有鳴倉庚。女執懿筐。遵彼微行。爰求柔桑。春日遲々。采蘩祁々。女心傷悲。殆及公子同歸。」春の日初めてあたゝかにして、倉庚のうぐひす鳴くを聞いて、去年七月の流火九月の授衣、きのふ今日のやうなりしが、はや春になりて日のどかに、うぐひすも鳴くと心に感ずるなり。懿筐は内ふかく美しきかごなり。花がたみなどの如し。微行は細き道なり。柔桑はわかき桑のやはらかきなり。桑とりに行く道は、常に人の往來する道にあらざれば、ほそ道を傳

まくは―水田を均す具、上に柄あり下に齒あり馬鍬と書く

は今の二月なり。斗柄卯に建すの月なり。擧レ趾は田をかへすなり。すきにて土をかへすは、足をあげすきを土中にふみ入れ、土をはね發すなり。易に上入下動とあり。耜は農具の初なり。今日本にては牛にからすきをかけて耕す所もあり。馬にまくはといふ物をかけてすく所あり。すきにて人のかへす所もあり。いにしへは上田は毎年作り、中田は一年やすめて作り、下田は二年やすめて三年め〱にめぐりて作りしなり。此故にこやしといふ物さのみ用ひずと云へり。今は中田下田ともに毎年間なく作る故に、こやし多くいれば、一年中こやしを取るにいそがはしき所もあり。又昔なれば田畑にはせざる地をも、今は田とすれば人力にてははか行かざる所あり。次第に世間せはしくいそがはしければ、人ばかりにてはならざる所もあり。此故に牛馬の力をかるなり。今も上田の地こゝろよくこやしも入らぬ所にては、牛馬なく人力ばかりにて耕すも有り。同二我婦子一饁二彼南畝一とは、若き者達者成る者は、皆田に行いて勞するゆゑに、家の老父よめ子をひきゐて食物を作り田におくるなり。

斗柄—北斗星第七位星の指す方向

れば、歳差といふものにて十六七度退く。故に此大火星六月の昏に中して、七月の昏には地の末の位に有るなり。七月はいまだ殘暑甚しといへども、大火星の西に行くを見て、八月を越えて九月霜降るべし。此故にいまだ暑氣の中に冬の用意有るなり。何事も時に先達てなさゞれば、行き當りてせはしく、人痛み煩ひて功なりがたきものなり。九月の初めて寒く衣を用ふべき事を、七月流火を見て心に感ずること妙なり。故に人に衣をあたへ寒をふせがしむることあまねし。一之日は今の十一月なり。斗柄子に建す。一陽の月なれば一之日といへり。此故に周の代となりて此月を以て正月とし用ひたり。觱發は風の寒きなり。二之日は今の十二月なり。斗柄丑に建す、二陽の月なり。栗烈は氣寒きなり。風吹いて寒きはいまだ至極にあらず。風なくても寒きは寒きの至なり。衣はきぬの衣服なり。褐は毛おりなり。衣服の用意なくては此寒氣をしのぎて年を越がたしとなり。三之日は今の正月なり。斗柄寅に建すの月なり。于耜とは農具を取出し其用を利するなり。四之日

窮理の學—究理とも書く

七月流火—詩經豳風の篇

なり。民食の事くはしく知らでは、國郡を治むる事あたはず。予かれを治る者にあらずといへども、治國は事の大なるものにして、窮理の學是を知らざる事あたはず。予がごとき者だに、窮理によりては少し知る事あり。況や大君諸侯は其任にして天の責あり。知り給はでは天に應じ給ふべからず。故に云ふ。人君は億兆によつて尊し。是を撫で是を治むるの道至誠を盡すべし。人の至誠を盡す所子に過たるはなし。人君は民の父母なり。親の子における何をか先とする。養を顧るを第一とせずや。養道備りて後敎ふべし。故に仁君は稼穡の艱難を知れり。周公旦の詩に云ふ。「七月流火。九月授衣。一之日觱發。二之日栗烈。無衣無褐。何以卒歲。三之日于耜。四之日擧趾。同我婦子。饁彼南畝。田畯至喜。」七月は夏の代の七月なり。斗柄申に建の月なれば今の七月なり。流火は星なり、大火心星なり。此星六月の昏に地の正南に見ゆ。七月の昏に至りて下りて西に流る。故に流火といへり堯の時は此星仲夏五月の昏に南に中せり。周公旦の時までは一千二百四十年餘な

砂にて云々─成功の難きを云ふ

になり、家の百軒も有りし村に、二十三十殘るやうなれば、田畠あらす事御法度とあれども、作るべき力なし。うゑ付まき付たるばかりなれば、毛見しても昔の免の半分もなし。如ㇾ此なりぬれば、多くのすくひ米を出し取立んとしても、砂にて淵を埋むといへる諺のごとし。昔に歸りがたきものなり。

一　毎年毛見を入れ、あらだてゝ強く取る人の領內を見れば、百姓屋敷の本屋の跡は石ばかりにて、かたはらに乞食の小屋の如くにして居る者をとへば、其屋敷主にて高作の百姓なり、何として其田畠を作り年貢米を仕立るぞと思はるゝあり。左樣になりては、昔二石ありし田に今は一石も有るかなきかなり。しかも米あしきものなり。貪欲の地頭といへども多く取るべき樣なし。斯樣のたぐひ一々云ひ盡しがたし。如ㇾ此なりて國郡を不ㇾ失はなし。近年思ひの外なる凶事出來て身をうしなひたる人に、民の困窮せざるはなし。民は是國の本なりといへり。天命のかゝる所なり。問。如ㇾ此民間の事を宣ふは、野卑なりと人申し侍らん。云。國の本は民なり。民の本は食

作取—收納全部を自己の物とするを云ふ

まめしげ—忠實勤勉の貌

も昔の二三分のさがりにもあらず。作り取りにさせても本の樣にはならざるなり。奉行代官心ありて、其始に少しづつの用捨すれば、如此亡所にもならず、免もさがらざるものなり。

一水田濕地にて麥まかれず、山林のたよりなく、田より外にはよすがなき所あり。さやうの村は、今とても十にして二三を年貢に出し、七八を得ざれば民立がたし。此差別を知らで、なべて四分六分を心得て毛見すれば、やがて亡所となるものなり。田地に米の有無をもはからず、しきりに催促して取たつれば、春はなくて叶はざる牛馬をも先賣りて出し、やがて作の助と成るべき子をも年切とて奉公に出し、をさなき男子女子は永代人にあたへなどすれば、夫婦共になげき悲しみて、まめしげもなく心氣かじけて力つかれ、耕作に精も出されねば、田畠いよ〳〵出來あしく、牛馬を冬は下直にうり、春高直に買求め、萬事前後して借銀ます〳〵かさなり、田畠屋敷富人にとられて、民間にいへる絶人となり、其跡の田地は村中のわりといふ物

水を云々―二毛作をなし得る田地

やう〳〵六分の米をさむる故に、百姓の得米はなし。年貢米のくず米をあつめて食とすと雖も、農具諸色の代には何を賣りてとゝのふべきや。一向無理なり。

一 山林ある村里は、山林を日當にして田になき高免を置くあり。此故に山林日々にあれて、後々はたよるべき物なし。家屋をこぼち田畠を賣りて、村の體昔のかげも無くかじけて取るべきやうなければ、無二是非一免をさぐるなり。

一 水を入るれば田となり、水をおとせば畠となり、麥を田に作りて百姓の食とする所有り。かやうの所は四分六分ほどの高免を出しても、とかく取りつゞくものなり。然れども麥のあしき年とて、田免のゆるしなければ借物出來ぬ。さあらでも用たらざるに、借物の利を出しぬれば、毎年借物かさみて出す樣なければ、田地をしちに入れて他領へとられ、四十反持ちたる者わづか二三反になり、村の家居民の衣食、乞食の如くに成りぬ。其間に先の代官死しなどして、前代の非をいひ外聞あしく成りぬれば、俄におどろきて免をさぐれども、田畠賣りて後なれば、一寸二寸さげて

亂逆の本となれば、是を下といふなり。いにしへの上とせし仁愛淸直の代官は、今是を下とす。其身淸く直なれども仁愛あり、民のなつくを以て、下にゆるす所多かるべき事を疑ふなり、今の世の勢にては、仁心ありといへども人にかはりて民に許す事はなりがたし。民も國用のせまる所を知れば世なみには出すなり。仁愛淸直の奉行には、民和する故に無用の費なきを以て、所もあれず民も甚困窮せず、其跡を見たる時は用捨多きに似たり、不仁淸直の者は、一旦多く取るといへども、所あれ民かじけて、數年の後は免も大にさがるものなり。此善惡のしるしまでもまたず、淸直にしてつよく取るを以てよき代官と思ふなり。淸直不仁の仕置によりて村里の亡ぶ處となる條目をいふべし。

一　剛直の代官四分六分を目當とす。百姓迷惑して高免なりといへば、步がりして六分を年貢四分を百姓とす。然れどもしいさしをれなどいふ物をこめての事なれば、此四分六分さへ全からず。藏納は米の吟味つよければ、百姓の四分をも打ちこみて、

しいさしをれ—さはなの誤にや未詳

事大にあしき事なり。此道理を不レ知してする者あり。又知れども私欲の爲に代官手代など是を好むもあり。代官は仁愛有りて清直なるを上とす。私欲にして不直なるを中とす。不仁にして清直なるを下とす。問。私欲不直は下にあらずや。云。聞たる所は、不仁にても清直なるはまされり。然れども今、君のため國のためには、私欲不直の者に劣れり。私欲の代官には、民まひなひて免をさぐれば、とかくつゞきて居るなり。私欲よりまひなひをうけて免をゆるすは不直なれども、民大に困窮せず、凶事おこらずして、ゆがみなりにも無事なるは亂世にまされり。是君のため國の爲ならずや。彼不仁にして清直の代官をば、世間これを上とす。然るに下といふものは、己がまひなひを取らざるを以て清とし直として、世間になき樣に自滿し、身にくもり無きまゝに恐るゝ所なく、上への奉公ぶりに、免を高くあげ米をつよくとれり、口事ざたなども、依怙なくすみやかに決斷すれば、世間にほまれありて立身する事有り。右の私欲不直の者よりも大欲なる所あり。終には村里あれ民困窮して

定免―定式に年年の納税額を一定しおく事

有るべし。扨かなたこなたする間に風吹き雨ふりては、稲のかり時過ぬれば、民の心に四にはうくべしと思へるも、三七八分にもうけがたくなる事有り。米すくなく成るのみにあらず、わらも悪しくなりて民迷惑す。とかくすれば麦のまき時卅日もおくれて、來夏の取實すくなし。此損又三四五分にも當るべし。萬事手おくれとなれば、十二月卅日迄もいそがはしく安き心なし。妻子の女事も成りがたく、こゝかしこにて困窮す。其上に足らざれば借りて利を出しぬ、其外如レ此の費あげてかぞへがたし。地頭も損し百姓はつかれて、あしき事のあつまりは毛見なり。百姓に此道理を云ひきかせてまかすれば、公儀毛見に出合ひては大に損ある事を得心して奉行代官の目よりは免つよく取付て、毛見のいらぬ様にするものなり。今の世の勢には是にまされる仕様はなきなり。無事の時は定免よし。定免なれば大かたの不足は堪忍して出すものなり。毛見を受くれば免のさがりは知れてあれども、右にいふ如く、其さがりよりは一倍も損有るによりてなり。故に豊凶によらず。年々の見とりといふ

免のわび―年貢が免されん事を歎願するなり

過ごさず、麥のまき時もおくれず。上下共によきなり。問。ことわざに、相圖兵法自身の取合といふやうに、百姓に毛見させては私曲あらんか。云。此毛見は何の手間もいらざれば、試にこの毛見の内帳をかくし、世間なみの毛見を入れて見給へ。百姓毛見に五物成あらば、世間なみの公儀毛見には四六七分ならでは有るべからず。二四分ほどは地頭の損あり。民の痛みは其上に四五分にも過べきなり。彼此一物成の費は有るべし。其故は、世間の毛見を見るに、國大名の下なれば、五六萬石の郡へは、二三百石取の士十人も毛見に出づるなり。供の者七八人ならしにして七八十人なり。馬をかけて百人には當るべし。百の人數一郡へ入りこみて廿日も卅日もかゝるべし。此荷物宿おくりに百姓をつかひ、藁鞋薪米つき水くみ、朝夕に人たゞ勞するのみならず。農のつとめもせず、用なき者も立さわぎ、免のわびと訴訟に日をくらし夜をあかせば、此入用又費なり。隨分直に淸くするとも、免の外に毛見の出し米五六分は有るべし。其上によからずして庄屋肝煎私欲あれば、無用の費一物成は

毛見―檢見に同じ出來秋の稻の豐凶を檢する事

肝煎―村役の一階級、世話役

かんと云ふ。例へば一反の田に稻百束あれば十束を貢とす。いにしへは五家として、共にたがへし共にうゑ共にかりて、秋の取實いね五千束あれば五百束を貢とし、四千五百束を五家の有とす。是を五人組ともいへり。軍法の五々も是より出たるなりいにしへは農兵にて、軍役民間より出でたり。いまも九州には農兵の遺風殘れる所行りといへり。此故にむかしは毛見といふことなし。毛見の費また舍なきの費にひとし。問。今の勢にては、毛見といふことなくても叶ふまじきか。十一にてこそなくとも、束をかぞへて分つ法をも行はるべきか。云。今は毛見なくて不レ叶勢もあり。然れども毛見の仕樣あり。四五萬石若くは七八萬石にても、郡奉行心得よく功者なれば、一人して毛見する樣あり。民の中にて心得よき者をえらび、一萬石ばかりの毛見をつかさどらしめ、當村の庄屋肝煎に近里のものをかね、二三人づつ指加へ、下毛見させ帳を作りて、郡奉行こゝかしこ順見のついでに、其下毛見の帳と我見分とくらぶれば、功者は只一目に知るべし。日數もかゝらず、かり納も時を

農は云々―孟子に見えたる語等を引用せるか

病死といへども、食あしき故に腹中損して死するは皆餓死なり。是皆仁政の法みだれてかく成り來る事久し、在々舍なきの費をさめば、凶年の餓をば救ふに足りぬべし。問。唯今仁政を行ひ給はゞ、此舍を先んじ給ふべきか。云。是より急なる事あり。舍を命ずるにいとまなし、國天下の多き、大君諸侯といへども俄にはなしがたき勢なり。其上山林あれて、今の民用だにつくのひがたし。此上に天下在々の舍を作らば、材木薪ともに盡きて、民いよ〳〵困窮し、士大夫も難義に及ぶべし。先仁政を急にせば、數十年の後仁君つぎおこり給ひて、自然に出來ぬべし。夫農は民の力を奪ふべからず。勞する事は彼が秋の收めに利ある事に勞し、使ふ事は彼がゆく〳〵休息すべき事に使ふ時は、民勞すといへども恨みず。是を佚道を以て民を使ふと云ふなり。其本は仁君良相の心に民を子とするの愛を立て、用を節し民に取る事すくなきにあり。如此なれば、民の心君上に歸服し、天道順にして天下長久なり。是を財散ずる時は民あつまると云ふなり、問。貢法の十一、豐年凶歳其わかつ事い

みはー食料

宗領ー長子家を継いで他は皆是に養はるゝの法

たし。俵縄こもむしろ草履藁鞋馬のくつ牛馬のはみ、薪の不自由なる所にては、朝夕の薪木とす、かやの遠き所にては、屋のふき草とす、城下に持ち出でて賣りて用をもかなへり。米といひ藁といひ、此舎なき故のつひえ、天下を合せてはおびたゞしき事なり。しかれども民は地なく、舎作るべき竹木なく、力なければ是非なし。民の力には成りがたき事を知り給へば、上より給はるなり。是は田畠にさし次いで重き事なり。天下の本なれば、公家武家の文庫武庫米藏よりも先にすべき事なり。生れながら榮耀にて、民の艱苦を知らざる人は心もつかず。今は山野といへども、地せばく成りて舎をとるべき所なし。宗領を立つるの法なきゆゑに、子弟に田地をわけ〳〵して、後々は作り取りにしても家内の衣食にたらざる體なり。山野に行きて薪を取り、賣りて餓を助けんとすれども、山林次第にあれて勞するのみ。牛馬の食にかはらざるものを食して、其一日をおくるばかりなれば、地有りとても舎作るべき樣なし。此故に凶年には餓死多し。餓死と云ふ事を、奉行代官をはゞかるとて

井田―周の世の田地の制度

こなし屋―稲を米にこなす爲の小舍なり

ふとも、かひ有るべからずとなり。

一 心友問。井田は九一といへども、公田より二十畝をとれば、貢の十一よりもかろし。此輕重ある事はいかゞ。云。上古のゆたかなりし代、すこしの輕重に心は有るべからず。山野は地廣くして舍を取る事安し。舍は今のこなし屋といふものなり。國中は田地の外空地まれなり。故に公田の中より舍をあたへ給ふ。たゞ舍を與ふるに心ありて、貢よりかろきに心はなし。此舍には深き意あり。空地なき所にて、田地にこなし屋を作る事は、民迷惑に思ひて作らざるものなり。然れどもこなし屋といふものなくては、いねをかり入るべき所なし。今は民間に此舍を持ちたる者は、百人の中にも有るかなきかなり。此故に田に直に稲をほし、屋の前に積みなどすれば、雨に濡れては米あしくなるのみにあらず、藁もくさりて性あしくなり、すたる費多く、民の憂すくなからず。長雨に日をかぞへ、はれを待つうちに、思ひの外にぬらせば、もみ又めぐみはえ出て用にたゝず。わらの民の用を達する事あげてかぞへが

り。其詩に云ふ、「墓門有レ棘。斧以斯レ之。夫也不レ良。國人知レ之、知而不レ止。誰昔然矣。」墓門は墓道なり。いばら生じて人をふせぐ事門の如し。夫墓所は以來田畠と成るべからず、郷里と成るべからず、城地と成るまじき、無用の地をえらびて安んずるものなり。良木なき凶僻の地には荊棘生じやすし。人心道なく教なき時は邪惡生ずる事、道路はらはずして荊棘生ずるが如し。是を以てたとへとす。いばら有らば斧を以てひらきさくべし。人不善あらば賢師良友を得て道義をたゞすべし。今此夫よからず。衆皆知りてそしれども改めず。是れ幼少より賢師をたのまず良友をえらばずして、其惡をなす事をとがむるなり。「墓門有レ梅、有レ鴞萃止。夫也不レ良。歌以訊レ之。訊レ予不レ顧。顛倒思レ予。」鴞はふくろふなり。惡聲の鳥なり。梅は靈木なれども、墓門凶僻の地に植うれば惡鳥のやどりとなれり。人の性は善にして生付よしといへども、不善人と居る時は惡に習うて凶人となる者なり。詩を作りて諷諫し、深く是をせむれども、我言を顧ず。必ず禍災來りて後思ひ當るべし。悔ゆとい

集註—朱子の集めたるもの

晨風—詩經秦風に見ゆ

墓門—詩經陳風に見ゆ

に甘き様にても、衣食なくて人生とぐべからざるが如し。廣き丘中に麻麥を去りて李ばかりを植ゑたるが如し。民を養ふべからず。玖は眞の玉にあらず。佩は外のかざりなり。我に貽るは人に及すなり。人民に及ぼす所實なく理に叶はざれば、終に平治なるまじきとなり。晨風は集註まさりたり。賢者の事としては見がたし。其詩に云ふ、「鴥彼晨風。鬱彼北林。未レ見二君子一。憂心欽々。如何如何。忘レ我實多。」鴥は疾く飛ぶなり。晨風はたかなり。鬱は茂りさかんなる林の體なり。此疾飛ぶたかだにもしげれる北林に歸りて安んずる所とす。夫は妻をすみかといひて、公用外事をつとめては歸安する所とするものなり。然るに夫外に久うして、我を問ふ事なし。この故に憂ふる心切にして忘るゝ時なし。我はかく思ふに、夫は何として忘れたるぞと恨たる詩なり。公用に勞して歸ることあたはずば、かへりていたはり思ふべし。恨は有るべからず。是は心のすさみにまかせてわくる事有りしと見えたり。然るをそむき怒らずして一人を恨み思ふは、貞女の心なるべし。墓門は程子の說まさりた

てうたんとせしかば、宣王難義に思はれたり。孟子を客として馳走あり。行かよりたる事なれば、其難を聞いては歸られざる事なる故に、思はず久く居給ひし類なり。

問。丘中有麻の詩、程朱の說かはれり。いづれか是ならん。云。程子の說まさりたり。其詩に云ふ「丘中有麻。彼留子嗟。彼留子嗟。將其來施々。丘中有麥。彼留子國。彼留子國。將其來食。丘中有李。彼留之子。彼留之子。貽我佩玖。」丘中は麻麥を植ゑて人を養ふべき所なり。王宮國都には賢者あつまりて、人民ゆたかなるべき政敎あらんにたとふ。子嗟子國は其時朝にあるの小人なり。朝に小人を愛しとゞめて、君子は野にかくれたり。故に人民君子の朝に來らん事を願ふなり。來食とは、家食せずして朝祿をうけん事を思ふなり。之子は子嗟子國同事の小人ばかり時めくなり。李はたゞに人の口に甘きのみにて、終に人を養ふべきものにあらず。麥ありて食し、麻ありて衣にし、其間の菓子には李あるもよし。朝に君子賢者有りて政敎行はれ、其下に使ふには小人も苦しからじ。小人ばかりより合ひては、一旦李の口

齊云々—孟子周游の間齊に留る事最も久し

これ小人の愚痴にして欲ふかく、利をむさぼりて類を損し物を害し、上をへつらひ下を苦しむるに似たり。狐は邪知ありてわざはひをなす者なり。小人の中にても才ありて事をとり、上の氣に入るべき事をいひ、主人の心をたぶらかし、人をまどはし、亡國の本をなすは狐に似たり。小才ありて事を取る者と見ゆるは皆狐の如し。故に赤しとして狐にあらずといふ事なしと謂へり。赤とは少し知も有る樣なるはといふ意なり。愚痴不肖と見ゆるは、皆烏の食をむさぼるが如くなれば、黑しとして烏にあらずと云ふ事なしといへり。如此にして亡びざるはなし。君子の目には亡國ちかく見ゆれども、小人の心には何とも思はずおごり居るなり。事急にはあらねども、みづからなせる禍なれば逃るべからず、亡國にきはまりたれば、君子機を見て去るなり。又君子の危を見て命を授くといふは、外より來る禍なり。人の難に逢ひたるを見ては必ず救ふの義あり。其時は命ををしまざるなり。孟子齊の宣王を見て、共にする事あらん人とは思はれざれども、其比天下の諸侯齊の强きをにくみ、會し

靈烏―詳ならず

は、見すてゝ行かれざる義もあるべしとなり。「北風其喈。雨レ雪其霏。惠而好レ我。携レ手同歸。其虛其邪。既亟只且。」喈は殺風の聲疾きなり。涼よりもはげしく、霏は雱よりもつよし。初めは寒氣のさむきばかりなりしが、早寒風のするどなる聲あり。雨雪分散して密ならんとす。亡國のきざしいよ〳〵急なるにたとふ。仕官をやめて故郷に歸らんとなり。ゆる〳〵思ひて難にあひなば、士君子の義其難に死すべし。無事なる時に祿を辭し、役儀をかへして歸るべしとなり。「莫レ赤匪レ狐。莫レ黑匪レ烏。惠而好レ我。携レ手同レ車。其虛其邪。既亟只且。」狐は惡獸なり。烏は惡鳥なり。共に不祥の物なり。是を以て小人の多きにたとへたり。小人は國家を亡すものなれば、其不祥狐烏に過ぎたり。又君子をあたとす。よき人はむつかしければ去る事を悅ぶ者なり。故に何となく事をよせていとまを乞ひ、車馬にてゆる〳〵と行くなり。烏は食をむさぼりて害をなす鳥なり。春は靈鳥の巣をこぼち其子をとり、夏はなはしろをやぶり、秋は木の實をそこなひ、すべてあしき事のみするものなり。

危亂のきざしを見云々―論語子張篇に士危を見ては命を致し得を見ては義を思ふとあり

集義和書　巻第十六

○義論之九

一心友問。北風の詩は危亂のきざしを見て去るの意と見え侍り。然れば君子危きを見ては命を授くるの義に異なり。此間に處すべき事いかゞ。答。北風の詩に云ふ、「北風其涼。雨雪其雱。惠而好我。携手同行。其虛其邪。既亟只且」北風は寒き風なり。涼は寒氣なり。夫春は東風氷をとき物を生ず。夏は南風物を養ひ、秋は西風物をなす。冬は北風物を殺す。北風の物を害するを以て虐政にたとへたり。北風さむき時はやがて雪さかんに降りなん事を知り、國政あしき時はやがて凶亂おこりて亡びんことをしる。親き者志同きもの、めぐみありて我をわすれずば、手をとりあひて他國へ行かんとなり。ゆるくゆるやかに思ふべからず。既に亂逆の事出來て

子の時に逢うて道を行ふことかくの如し。天運に乘じて少も心なし、其道を天下に達するのみなり。故に君子は私の福なし。人民安く國富有なるを以て福とするなり。魚躍于淵は、下其宜を得るなり。魚淵水に逍遙自躍して、然るゆゑを知らざるが如く、有道の代の民は其樂をたのしび其利を利とし、日々に善にうつりて其化するゆゑを知らず．君子は上にたのしび小人は下にたのしむ。或は知りあるひは不知といへども道體をはなれず。鳶の飛び魚の躍るがごとし。

一陽來復—易の復卦の本義に見ゆ

三陽生ずる—正月の季節

和する事を習ひ、朋友には眞實を習ひ、臣には仁を習ひ、子には慈を習ひ、弟には愛を習ふ。人五倫をはなれて時なし。故に時として習はずといふ事なし。五典十義みな心をみがくの受用なり。自得すれば逍遙たり。理義の心をよろこばしむる事、美味の口をよろこばしむるが如し。故に亦よろこばざらんやとのたまへり。悅は自己の生意なり。十一月一陽來復すれば寒氣いよ〳〵甚し。唯梅のみ雪中に春意を得たり。

一 有レ朋自二遠方一來。不二亦樂一乎。すでに三陽生ずる時は天地交泰す。天下の春なり。自己の生意達せり。遠方の人來る時は近き者知るべし。見龍在レ田、天下文明なり。君子のたのしむ所なり。しかれども是とせられずしていきどほらず、時と共に進退す。自己の悅を得ればなり。如レ此は君子ならざらんや、君子なりと謂へり。

一 鳶飛戾レ天は、上其道を得るなり。鳶の天にいたるは少しも力を不レ用、氣にのりて翅をのぶるのみ。逍遙として自然に乘じ、手の舞ひ足のふむ事を不レ知の意なり。君

乞食心―利慾を
庶幾する卑劣心

らざれば、日本の俗樂は淫聲の格と云ふばかりにて、人の心をとらかすほどの害はなし。みづからなしても一旦の事にて、後はあくものなり。まして人のいふを聞けば、小唄三線といへども一時の興にて、跡にのこるそこなひはさのみなし。よき事をきく樣にはなけれども、其害淺し。彼者に歌學文學せさせて子弟に近付給はゞ、文學のゑばうし歌道の衣服きて、同學同輩の如くなるべし。惡くせば師ともなるべし。もとより世間をわたる乞食心やむべからず、いやしき習ひたるべからず。此あしき事子弟にうつり染まん事、水中に木を浸したるが如くならん。小唄三線の害には百倍すべし。左樣のものには其身の所作のみさせて、士君子の事を敎へざるものなり。いやしき者はよき事をうらやみ、よき人にまじはりて、風俗をみだる事を好むものなり。

一　學而時習ㇾ之。不亦說ㇾ乎。學は孝弟忠信の道なり。君につかへては學ぶところの忠を習ひ、親につかへては學ぶ所の孝を習ひ、兄長には弟順を習ひ、夫婦は別ありて

くせある者、よき人にきらはれ、無是非きびしき家へ奉公するなり。きびしきにはり合よく、忍びて悪事をなし、主人のきびしきを何とも思はざる横道者あつまると聞え侍り。この故に悪事出來るなり。又きびしき主人によき者使はれざるのみならず、中人ありてふと奉公に出ても、たしなみうすきものなり。主人よければ何とぞして此家に久敷居るべく思へば、たしなみも出來て、中人も能者になる事あり、とげて居るべき家とも思はざれば、主人によく思はるべきとも思はず、友あしければ其方にいざなはれて、中も下にくだるものなり。

一　心友問。野拙が舊友予に問ひ侍り。座の者のむかしよりお出入する者あり。三線尺八などの類を以て、子弟の相手となさば害あるべし。歌連歌文學などをしへて、子弟の相手となすべきか。彼も左樣の事に器用にて、願ふとの事なり。いかゞ宜しかるべきや。云。左樣の者は、わかき人の相手と成りてはあしき事多し。大躰の出入ばかりにて、近付ことは無用なるべきか。淫聲と云ひても、もろこしの樣に上手な

座―芝居能樂等を演ずる座方の者

淫聲―鄙猥なる音樂

横道者―邪者に同じ

ず見る事のみゆるすと云へるは、其人を信じての事なり。しかるに借りたる人、是善事なればかくし寫して苦しからずと思ひて、寫しとむるは、隱して惡をなしたるやうには無けれども、心に律儀の立ざる事は、惡をなしたる人に同じ。左樣の堅固ならぬ心根あれば、其事なくても人たしかに思はざるなり。人に疑はれざる律儀の心を立定むべし。此所なきは人にあらず。

一朋友問。我等召仕ふ者、惡事をなす事數度なり。常々つよく法度を立て油斷なく申し付侍り。然るにかやうなるは、不レ足所侍るならん。云。貴方法度きびしく下知つよきによりて此惡事あり。しかるに足らざると思ひて、ます〱念を入給はゞ、惡事いよ〱重なるべし。後には妻子までも困窮して家亡ぶべし。貴方の法度下知は常に過ぎたり。この故によき者は居がたし。世間の人情を見聞侍るに、人つかひよき主人の所へはよき者あつまり、きびしき主人の所へは惡しき者あつまれり。其故は、よき者をば人々かゝへたく思へば、よき家をえらびて居るなり。横道者惡き

得かた—自己の便利とする勝手の方に

事を忘れて多言なる者あり。或は人をほむるによりて、そねむ者そしる者是を聞いて害になる事あり。或は心やすき朋友一類など思ひて、人の密事をもらす事あり。聞く人君子ならば悦ぶべからず。言はざるを以てへだてと思ふべからず。言はずして不叶義もなきに、人の密事をいはゞ、父子の親と云ふとも、父君子ならば其子を悦ぶべからず。況や其外をや。或は人祕すといへども、善事なれば苦しからずと思ひて云ふ事あり。善事はたれも人に知られたき者なれども、祕するは故あるべしと知つていふべからず。すべて言は、いひて人の益とならず、己いふべき義なくば默するにしかず。行のあしきは悔改めて後は善なり。言の失は物に及びて害あれば、悔ゆといへどもかへらず。故に君子は是をはじめに愼むなり。

一舊友問。士之義何をか先立べきや。云。律儀を立つべし。一言の約誓紙誓言なくとも人の見ざる所に於て人の言ひしに違ふべからず。少し問學ある者、得かたに道理を付て不信なる事あり。たとへば人の祕する書物をかる時に、先の人うつすべから

收斂　事物を一所に集中する事

朋友には相勝ち相爭ふの慢心となりぬ。世上の人をみるに、慢心勝心の强き者は、朋友の交に和すくなし。ことわざにも、顏にて人をきると云へるが如し、左樣の人、家内の者にはかへりてやはらかなるあり　我にしたがふ者なる故なり。又朋友にはよけれども家人に惡き者あり。是は氣隨より起れり。内外共におしくては、氣遣のみにて安からねば、一方にはゆるがせなりと見えたり。甚しき者は内外共に和なきもあり。是は一向怒氣のために胸中ふすぼりて、苦樂のさかひも知らぬ成るべし。これ皆幼少の時より父母奴僕の敎へならはせる所に出でたり。終には父母にも不孝になり、家人のあたとなる事を不レ知。

一心友問。入德の功いづれの所よりはじまるべきや。云。精神の收斂するよりはじむべし。精神を收斂する事は、言を愼むよりはじまれり。是口は好みをなし兵をおこすといへり。誠に吉凶のかゝる所なり。惡口妄言世俗の卑辭は、少し心ある人はいはず。言の發し易き事は吾人の通病なり。或は道學善事を悅ぶによりて、愼むべき

第一に云々—第一に戒むべきは奴僕を虐視する遊戯なりとの義

はみづからの才知に自滿し、はじめ功ありしにほこり、いよ〳〵己知ありとして、みづから任ずる事ます〳〵強なり。この故に善を告ぐるものなく助なく、人心はなれて大功不レ成。是帝堯のはじめより終あらじと知り給ひし所なり。世人は鯀の才知のすぐれたるを見てすゝめ、堯は其心のみづから滿てるを以て、功あるまじき事をしろしめしたり。

一　舊友の幼少の子の、土あそびするを見て、惡しき事するとていましめけるに、告げて云ふ、是あしき事にあらず。彼が今のしわざなり。其上土なぶりは脾胃をも養ふべし。今より第一に戒むべき事あれども、かへりてつけますと見えたり。舊友いかにと問ふ。云。奴僕を打てたゝけなど云ふたはぶれあり。幼き子の手なれば、いたみもせず腹も立たず。奴僕もたはぶれて、痛きぞかなしきぞなどいへば、子いよ〳〵勝にのりぬ。是人の痛をいたむの本心をそこなへり。此心習性と成りて、成人の後氣隨になり、妻子を怒りのゝしり、下人を打ちはしらかしなどする惡行の根と成り、

問たづね―論語公治長篇に敏にして學を好み下問を恥ぢずと

鯀―禹の父洪水を治めて功無し

めたり。予は人々のなす事をゆるしたるのみ。後には人にとひたづね、見習をしへられて少し功もありしなり。世に事を取行ふ人のあやまちを見るに、多くは問たづねざるより起れり。京の事は京そだちの者にたづね、山の事は山賤にたづね、川の流洪水の勢は、河邊の者に尋ねて談合し、堤をつき水よけをすれば後悔すくなし。事の大小たとへがたき事なれども、堯の時にあたりて天下洪水の難あり。是を治め平ぐべき人なし。朝廷の諸臣より下民人に至るまで、みな鯀をさして其人とす。帝堯ひとり、其才はあれども其功をとげざらん事を知り給へり。しかれども其時は舜は未だ知られ給はず、禹は若年なり、天下鯀の右に出づべき人なし。其器量は此難を任ずべき人なり。貴賤共にすゝむるによりて、不ㇾ得ㇾ已して命じ給へり。はじめの程は才知すぐれたれば其功なきにあらず。終に成就せざる事は、己を立て人に下らざる故なり。夫治亂となく大任に當る者は、其心至公にして己をすてゝ人にしたがひ、天下の才知を用ひ衆のはかりごとを盡さゞれば、其功をなすこと能はず。鯀

他山の石―詩經鶴鳴篇に他山の石以て玉を攻むべしと

一心友問。士は何を以てか天職とせん。云。人を愛するなり。民は五穀を作りて人を養ふ。婦女はきぬをおりて人に著せしむ。士はする事なし。人を愛せずば濟ふところなし。問。何をか人を愛するの事業とせん。云。問學して心を正うし身を修め、上は賢君のおこり給ふを待ち、下は凡夫のまどひをさとし、武事をよくして凶賊を禦ぎ天下を警固す。是を文武二道の士といふ。人を愛するの事なり。君子時を得れば、小人皆やしなはれて、その樂をたのしびその利を利とす。小人時を得れば君子を犯し凌ぎはづかしめ苦しめんとす。君子自反敬謹して徳益進む。他山の石はあらきが故によく玉をみがくと云へり。君子の徳を大にするものは小人なり。

一朋友問。貴老先年池堤をなして當然の飢饉をすくひ、後の日損をとゞめ水損をふせぎ、民今に至りて其功を稱すといへり。何として鍛練し給ひしや。云。予左樣の事見たる功もなく習ひたる事もなし。若かねて功者ならば、自分の才覺を發して人の才知をふさぐべければ、功をなす事あるべからず。不㆑知故によくなす者になさし

主とするとは、心のうちに専なるにや。内に専ならば不善不レ見不レ聞ことあらんか。云。心内外なし。一といひ中と云ふは天理の別名なり。精神内に専なりとはいふべし。心内に専なりといへば少しつひえあり。一を主とするは天理に専なるの心なり、故に不善の中に有りといへども、目みるべく耳きくべし。心はうつらずとがめざるなり。とがむといふも不善の人に近き所あればなり。

一心友問。目を閉ちて靜坐するは何の益ぞ。云。精神の勞せる時、其つかれを養はんとならば可なり。動をいとひ靜を好み、思慮をやめんとせば不可なり。動靜は時なり。なすべき事は皆人事なり、いとふべからず。思は心の官なり。正からんことを欲するのみ。風神はその氣色顏目に發す。耳のきく所目の見る所かぎりあり。是精神はかぎりあり。故に動過ぐれば勞す。勞すれば息す。呼吸の數のごとし。動靜は晝夜の道なり。死生は古今の理なり。只心は遠近なくきはまりなく内外なし。精神限りあれば、養ふ時は内に守つてつひえず。養ふの本は欲を少くするなり。

一を主とす―前に出せる程子の敬を見よ

夫をないがしろにし、父母に不幸なる時に至りて禁ずれば、やぶれとなれり。子も成人にしたがひて教有るべし。俗にも、まぐべき時に曲げざれば、こはく成て制しがたしといひ、古人も、おごれる子の用ふべからざるが如しといへり。妻子のみにあらず。士大夫より民に至るまで皆しかり。火の火うちより出て物につきたるはじめ、指をしても消しやすし。大になりて家屋につき大山をやく時は、むかひ近付べからず。國家の凶亂も、治世の中にすくはずして亂世に至りては、善者ありといへども如何ともする事なし。

一心友問。程子云。人の不善を我かたはらにするを我不見、人の善事を我かたはらに云ふを我聞くものは敬なり、心一を主とすればなりと。少し達せざる所あり。云。これ目の見ざるにはあらず。見れどもとがめず、化せざるは見ざるなり。凡人は人の不善を見て、己がせざる事なればとがめにくめり。然らざればその不善に化するものあり。善事をいふを聞く者は是を好するなり。耳のきくのみにあらず。問。一を

生民云々—孟子公孫丑上に有若が曰く生民より以來未だ孔子より盛んなるは有らずと

惡を云々—事物は總て其始に注意すべきを謂へり

子の如くなるは有らじといへるは何ぞや。云。是又實語なり。萬事名と聞とは實に過ぐる者なり。見ては聞たるやうにはなきものなり。唯聖人の德のみ言語文筆の形容に及びがたし。故にいにしへの聖人の德を傳へたるはおもかげばかりなり。孔子をば見て知りたるものなれば、先聖にまさると思へる理なり。列聖心に於てかはりなし。唯聖にして知るべからざるの神德、時と共に盛衰あり。

一 程子云。惡は其微なる時に止むべし。盛にして後禁ずる時は、勞してしかもやぶれあり。君の惡既に甚しき時は、聖人をして救はしむるといへども、違ひもとる事をまぬかれず。民の惡すでに甚しき時は、聖人是を治めしむるとも刑罰をまぬかれじと。己が惡をやむるも又しかり。一念の微に於て正し去るべし。念を重ね言行に發して後は、禁ぜんとすれども心苦しくなりて去りがたし。大臣の惡も驕すこしきなる時に戒めざれば、侵し奪ふに至るものなり。あらはれて押ふるときは、恨をふくみそむく者なり。妻のほしいまゝなるも、嫁の始より用心すべし。既に權をとりて

年のたくはへ十年のたくはへなければ、凶年饑饉に逢うて人民をすくふべき道なし。これより兵亂おこり天下亂るゝことも有り。これ近き憂にあらずや。子を養育するも、其心のおもむき習の美惡をかんがへざれば、必ず人がら惡くなるものなり。これ大なる憂なり。萬事遠き慮なければ憂あらずといふ事なし。俗に遠慮といふも又通ぜり。たとひ凶亂の事なくとも、民の父母として父母たるの道を失ふは、上たる人は德をそこなひ、其次は名をおとすべし。

一心友問。貴老堯舜を以て聖人の盛なるものなりと宣ふとは何ぞや。云。三皇は德神明にして行不測なり。後世及びがたし。禹湯文武周公孔子、皆聖人なりといへども自から盛衰あり。堯舜は聖人の盛に當り給へり。故に後世作者ありといへども、虞帝には及ぶべからずといへり。作者とは聖人の事なり。程子云。天地盛衰あり、一時の盛衰あり、一人の盛衰あり。一木一草の榮枯陰陽消長の理なり。天地聖人おのづから此理にもるゝ事あたはず。問。しからば孔門の諸賢、生民ありてより此かた孔

作者―論語憲問篇に子の曰く作す者七人無しと

董子―董仲舒を指す乎

「一人の罪なきを殺し一事の不義を行うて、天下を得る事もせずといふものと心を同くす」と、予が如き者も、道に志あれば、一事の不義をなし一人の罪なきを殺して、天下を得ることもせざる事はなすべし。簀を易ふるの心は及ぶべからず。大義を行ふ事は力なり。又名根力量を以て死をよくする者もあり。平なる心にて簀を易ふるの正は、日用の養ふ所至れるものなり。

一學友問。學士當下一念といへり、然れども孔子は遠き慮なければ必ず近き憂有りと宣へり。云。當下一念の語は異學に似たり。然れども取り用ひやうあるべし。董子云ふ。仁人は其義を正して其利をはからず、其道を明にして其功をはからずと。先學皆稱美せり。當下一念といふ共可なり。又孔子の遠き慮と宣へるは、則ち當下に思ひはかるべきの遠慮なり。民の耕作の業も遠き慮なり。皆時に先ちてたくはへあり事あり。是におこたれば父母妻子饑寒に及べり。是近き憂なり。士大夫より國君にいたるまで、入ることをはかりて出す事をするも遠慮なり。天下の主も三

簀を易ふ—禮記檀弓篇の語曾子死に臨んで簀を易へたり

狂にいたる者は亂の後なり。聖人此言、平人をして俯して就しむるのみにあらず、才氣高く志高遠なる者をも、おさへて等をこえすゝましめざるなり。聖人の禮を立て給ふ事飲食男女にはじまる。心術も是より實にふみ行ふべし。これを以て淺近の事とし、去つて高明の理にしたがふ者は、虛見にはせて實學をなさず。是をこゆると云ふなり。實なきの高明は眞の高明にあらず。終に物をなすべからず。唐虞の事業は古今和漢共に及ぶべからずとす。異學の徒といへどもそしる事あたはず。然れども堯舜より見給ひては、一點の浮雲の太虛を過ぐるが如し。是を以てかたしとし給はず。心を用ひ給ふ所は人倫日用の中にあり。この故に唐虞揖讓三盃酒、湯武征誅一局碁といへり。堯舜湯武の心をしれり。

一曾子簀を易ふるの心、たゞこれ天地生々の理なり。死生一貫にして晝夜の如し。病煩を以てうつされず。唯今死するを以て心をうごかさず。平生かりそめにすぢかひたるものを直におきなほするが如し。一貫の唯こゝにあらはれたり。程子云ふ、

酒の困―論語郷黨篇に酒困をさずとあり

やう仁政もほどこし行はれ、風俗善にうつらんとする比には、任はてゝかはり來る守令、前の守令の善政に習うて相繼者は有りがたかるべし。甚しき者は己を立てんが爲に悉くけづり捨て、若はけづらずとも用ひざらんには、其德功空しくなるべし。大方時の間を渡して過ぐる者中人ならん。中人に恥を與へずしてかはらしめ、よきをば年をかさねて在國せしめん爲の法ならば、四ヶ年の大法しかるべきか。

一　心友問。孔子酒の困をなさずと宣へり。是凡人躰の事なり。あまりなる事の樣に聞え侍るはいかゞ。云。聖人の道は天のごとし。高うして且遠し。人常に及ばざらん事を恐る。及ばずとせばおこたるに近し。故に聖人の教は常に俯して是に就かしめ給ふ。然りといへども、いやしむ所を以て人に敎ふるのたぐひにはあらず。平人は酒をひかへて亂に及ばず。よきほどに飲むと思へり。この故に常に過ぐる事を不ㇾ知なり。聖人はよき程に飲みたまへども、猶も中に過ぎたるかと思ひ給へり。亂と云ふは酒狂にはあらず。其身の中に過ぎて氣血をみだるを謂ふなり。心みだれて酒

上中下國―大寶以降日本六十餘州を大上中下の四等に分てり

一心友問。いにしへ上國ときこえし國も中となり、中といひしは下國となり、國郡山澤あれ侍る事は、國主郡主のよからざる故なり。しかれば王代の一任四ヶ年の法よき道理あるべきか。云。古の時勢をば不レ知。今の時勢には行ひがたかるべし。昔といへども仁政を行ひ給はんが爲ならばよかるべし。帝舜の象を有庳に封じたまひ、代官をつかはして其國を治めしめ、象は其國の貢物ををさめ、諸侯の富貴をたのしめる計にて、象が不仁の仕置の民に及ばざる樣にし給へり。日本のいにしへも、國の貢物を給はりて、諸侯にひとしき人都にありしも有りと見えたり。扨國政は守介の下知なれば、帝舜の遺法に近し。仁政を行はざる時は、秦の制法にて、侯をやめ守令を置きたる法なればよろしからず。其守令あしきものならば四ヶ年を待べからず。惡からざれども、さして功もなく守令の任なき者ならば、四ヶ年にてかはるべき事尤もなり。若其守令仁者にて國政よろしくば、四ヶ年にてかへん事は益なかるべし。初めていたる一二年は、國の民情もくはしく知りがたし、教令も熟せず。やう

り。人君知明ならざれば、たとひ君子の行ありて萬事正しといへども、たゞ一のしまりなき故に、よきも皆惡くなるものなり。ゆゑに人君は學を好みて理をきはめ心をみがき、古今の人情時變に達するものなり。神代より人皇に傳へて、三種の神器を人君の御たからとし給ふ中にも、內侍所本體なり。中庸にも知仁勇と云うて知を先とす。知神明なれば仁勇其中にあり。學を好むといへども、文學のみもてあそび跡になづみ法によれば、かへりて其知をふさぐものなり。人君の天職あり。人を愛するを以て心とす。國主は一國の父母なり。天下の主は天下の父母なり。故に樂める君子は民の父母なりといへり。父母の心寛厚にして子の成人をたのしめり。怒といへども愛するなり。人の親たるもの子を大切に思ふあまりに、子の心行あしき事あれば腹立の顏色をなす。其實はにくむにあらず。愛の厚きなり。君子の人民に於ける事如此。伯夷叔齊みづからためにする所は淸に專なれども人に於ては寛なり。怨こゝを以て希なり。其仁をしるべし。

軍法云々—敵國の虚に乘ずるの不仁なるを謂ふなり

あればそこ、意には君のたのもしからぬ事を知るものなり。忠義の亡ぶる所なり。この故に明君は徳を賞するに位を以てし、功を賞するに祿を以てし、才を賞するに職を以てす。晝夜の奉公に小祿あり。當座の奉公には其品の褒美あるべし。

一心友問。軍法に、敵の疲にのぞみつひえに乘ると云ふことは、君子もなすべきか。云。國君の死して其子幼少なる、或は敵將の病疾の時、もしは水旱にて不作しなど難儀したる所へ、取かけて利を得るたぐひは、一戰に國を取るといふとも君子はせじ。人の憂を以て己が利となせるは甚不仁なる事なり。君子の敵のつひえに乘ずると云ふは、不備不意ごときの、彼が不徳を討つこと有るべし。己有徳にして彼不徳なり。己義ありて彼不義なり。故に討つことあり。人の憂を見て悦ぶは、己先不徳不義なり。何を以てか討つ事をせん。賊相討なれば君子の軍にはあらず。

一心友問。治體の言あれども未だ其體をしらず。治國平天下の根本なれば、其事にあづからずといへども、其理を知るは窮理の學なり。治體は何ぞや。云。治體は知な

大學ー第十章に未だ上仁を好んで下義を好まざる者は有らざるなり

よき馬に乘給ふとも何のかひかあるべき。故に名將は功有し者の子孫を取立て、親の代に忠ありしを忘れず、筋目を尋ねてほど〱にめぐみ養ふ時は、衆皆たのもしき主君と思ひて、己が身のみならず、子孫のためにも忠をはげますものなり。されば賞を得ざる者も得たるが如く思へり。義理を行うて私なければなり。孔子の春秋一經の奧旨、一の義理を立給ふなり。義を不知は夷狄禽獸なり。大學の理も上仁を好むときは下義を好むといへり。しかるに上仁を好みて下義におこらざる者あるは、其仁眞ならずして義なければなり。仁義は本一德なり。故に君子の仁は必ず義あり。

問。今時筋目ある者を取立善人をあげても、衆そねむ事あるは何ぞや。云。利心のみにして辨へなき者は、一旦さある事有り。少し義理をもわきまへ心あるものは然らず。ゆく〱聞傳へて服するものなり。又にくゝそねましく思ひし者の子孫にて、上よりは恩賞なくて不叶筋目あり。忠功あれども其沙汰なくおちぶれ居るを見ては、かくあるまじき事とは思ひながら、凡情の習にて何ともいはざれども、人々本心

次信―佐藤嗣信なり嗣信屋島に戦死するや義經名馬を以て供養の料とせり委しくに出づ

や。しかるに今の問學をする人、義理を不レ知は何ぞや。云。たゞに經傳の上に義理を論辯し、或は身に行ふと思へる人も、眞を欣んで法に落などすれば、眞の義理には遠し。故に氣質の美なる人の義理を知りたるには及ばざる學者多し。生付義理を知るべき人も、學によりて其知ふさがり、おもむき惡しくなりたるもあり。いにしへの人は文學なけれども、貴賤共に義理を知りたる人多し。君たる人一人を賞して衆人悅ぶは、義理を以て賞すればなり。また一人を賞して衆人そねむは、義理の賞にあらざればなり。源義經、次信が志に感じて、又たぐひなかりし名馬を、合戰の最中に事かくべきもかへりみず、引馬にあたへられしは義理の賞なり。しかる故に人々給はりたる樣に思へり。利心の分別あらば、大將の不慮の死をすべきも馬なり、十死に入りて一生を得べきも馬なり、二なき名馬を死人にひきてすてんよりは、此大事に臨んでみづから離たず乘給ふか、若たまはらば、生て用に立つべき者に給ふべき事と云ふは利なり。利を以てあたへば衆の恨あるべし。軍士の心そむか

てなさんとす。名を好むが故なり。名によつてなす時は大も小となる。君子は小善積んで德をなすものなり。眞の大善は德より大なるはなし。德は善の淵源なり。德ある時は無心にして善かぎりなし。貴老小親類の多きによりて、懇情の善を行ひ德をつみ給はんは幸にあらずや。求めずして令名きこゆべし。善をするの媒と思ひ給はゞ、いとふ心生ずべからず。かへりて其つとめ心の樂となるべし。其上人の悦ぶ心をあつめば和氣家にみつべし。日々に無聲の樂をきくならん。人心服從する時は號令行はれ禮儀立つものなり。和して且禮あらば、子孫必ず多福を受くべし。易に云ふ、「積善之家必有餘慶」と。

積善云々ー易經の文言に出づ

一　心友問。いかなるをか士といふべき。云。義理を知るなり。五典十義其中にあり。問。いかなるをか君といふべき。云。義理を立つるなり。君の義理に專なるは、臣の忠を進むる道なり。人をすゝむべき爲にするにあらず。みづから義理を尊ぶなり。臣下は其義に感じて心服す。服すれば忠あり。問。道を尊ぶは義理を知るにあらず

る事の多きなり。悦ぶべく憂ふとも憂ふべからず。若貴老微少にて親類富貴ならば、貴老のおとづれをいとはん事、貴老の微少のゆかりを厭へる如くなるべし。しからば遠慮してひかへんより外の事あらじ。何を以てか善をなし給ふこと廣からん。幸に親類微少にて貴老のおとづれを悦ぶなれば、貴老是をしたしみて善をする事を樂み給へ。貴老富有の人にあらずといへども又貧賤ならず。志次第にて、ゆかりの人人の貴老の志を悦ぶ程の事はなるべき事なり。衣服米麥菓子肴等、もしは金銀も、少しづつ折にふれ有にまかせてかはるぐ〵與へ、物なき時は見廻使言傳の音信も可なり。己を盡して後飽きたらずしてうらむる者あらば彼が非なり、とがむべからず。人皆惡名をにくみて令名を好めり。小善を積みてつもらざれば令名あらはれず。小人は人の目に立べき大善ならばせんと思ひて、小善をば目にもかけず。君子は日々になすべき小善を一もすてず。大善も應ずれば之を行ふ。求めてなすにあらず。夫大善は稀にして小善は日々に多し。大善は名に近く小善は德に近し。大善は人爭ひ

是たからとせずして用の廣きなり。道は天下の道にして君子の私すべき理にあらず。然れども其大本は未發に存して、聲もなく臭もなし。聖人といへどもあらはす事あたはず。是を無といはんとすれば神明不測なり。之を有といはんとすれば形色聲臭なし。無欲なるが故によるところ無し。好惡なきが故に過不及なし。しばらく名をかりて中といへり。昔も今も末世も終にあらはれざる物なり。故に造化の根たり寂空虛無もこれが名とすれば病あり。たゞ隱といひて無に流れず有を殘さず、かくるゝと云ふにつきて其神を知る。聖人の言妙なり。

一舊友問。予が母方に微少の親類多く侍り。うと〳〵しければ恨み、ねんごろにする事は、餘多の者なれば成りがたく侍り。予が宗領によめを迎へば、親類すくなき者をえらぶべしと思ひ侍り。云。是心を立るの過なり。むづかしきと思ひ、いとふ心を以てむかふる故に勞苦なり。むかし大舜の君、鷄鳴いておきてつとめて善をなし給ひしは何事ぞや。人倫の交に道あるなり。貴老微少の親類おほきは、善をす

宗領―惣領に同じ長男

罪人を怒り給はず―罪を憎んで人を憎まざる義

罰に落る時は、政教のいたらざる事をなげきて、其罪人をいかり給はず。悪をにくむべきは當然の理なり。一人を捨て萬人を助くべきが爲なり。天下の廣きも一家の如く、萬古の遠きも一日の如し。仁愛の誠やむ時なし。是則ち天地生々の心なり。

一 心友問。費の字を解して、たからとせざるなりと宣ふは何ぞや。云。上古には貝を以てたからとす。費の字弗貝の二字を合す。如心を恕とするの類なり。財散ずる時は民あつまるといへり。散ずるはたからとせざるの義なり。用の廣きといへると意相近し。財の字も貝にしたがふ。いにしへ貝をたからとせし故なり。古のたからの貝はいづれの貝といふ事を知らず。後世金銀錢を以てこれにかへたり。堯の時天下洪水にて五穀不足ゆゑに、錢を作りて交易の助けとなし給へり。廣く天下に用ふるのみ、いまだ君の藏にたからとし納めたる事なし。賢君のたくはへは民の爲のたくはへなり。故に王城にあつめずして、在々所々に五穀をつみ置て、水旱饑饉の備とし給ふ。民みな己が用と思ひて君の物とせず。君の私のたくはへなければなり。

己を不知—論語學而篇に人の己を知らざるを患へずと

一人己を不レ知は大憂なり。己を不レ知して人を知らんとし、外事を知ることをつとむるは惑なり。己を知りて後、天下の事疑ひなきは樂なり。

一心友問。漆器は美なる物なり。舜何ぞ如レ此の美器を始め給ふや。云。是凡人の知るところにあらず。數千歳の後をはかり給へばなり。上古飲食の器物は多くは燒物なり。朝夕用ふる物なればくだけやすく損じ易し。人も次第に多くなりて、天下に是を用ふる事かぎりなし。帝舜の時より五百歳千歳の間には、目に見えぬ事なれども、數千歳へて後は山林あれて、人民の難儀天下の凶亂の根となるべき勢あり。天下の廣きといへども、盡くるに至りては俄にすべき樣なし。故に山林ふかき時に於てうるしを取り木地をぬり、飲食の器を始め給へり。問。世人貴賤となく我一代をはかるのみ。子の代を思ふ事だに深からず。他人の代萬歳の後を憂ひ給ふ事、何ぞ如レ此いたれりや。云。父母の子を愛するは愛の至りなり。しかれども子不孝なれば其愛心うすくなる事あり。聖人の民を見給ふ事、凶人惡人といへどもにくみ給はず。刑

れば財用も乏しくなり。少し心には思ひ出ても、實の義理をばする事あたはず。親類知音の筋目ある人、家頼などにも見おとされ、たのもしからぬ者といはるゝ實の惡名をばかへりみず。終には家の亡びたゆべき利を失ふ事をばしらず。畢竟くらき故なり。心身家國天下、共に幸福は仁義にしくはなし。とりわき人に君たる人義理の實なければ、衆の心そむき離れ、利を好むの小人のみ近付て、國家のほろぶる事日をかぞへて待べし。

一朋友問。佛者は生死といふ。儒者は死生といへり。意ありや。生死は言順にて死生は逆なるが如し。云。別に心はなかるべし。しかれども死生と云て言順なり。語默は晝夜のごとく死生は古今の如しといへり。語は晝うごくの理なり。默するは夜息するの理なり。祖の死は父の古なり。父の生は今なり。父の死は子の古なり。子の生は今なり。天地の造化はおりばたのたての如し。人の死生はよこぬきの如し。死生常の理にして二あらず。故に古今といふのみ。

義を和するの利―利を得ると共に正義にも協へるなり

へり。是をなさでは、忽世間の名利を失ひて身に害あり。之をつとむるを以て義理をかゝずと思へるはあやまれり。是はなさで不叶公役の如きか。云、しかり順儀とはいふとも義理とはいひがたし。義理といふは時を失うて微賤に居る者にても筋目のあるをばすてず。親類の末々なれば、いやしといへども見放たず。知音の由緒までもわすれず。家頼の功ありし者の子孫を取立つるなど、たのもしきところあるを義理といふなり。是等はさしあたら世間の利にはならず。當分身には損ありて益はなき事なれば、今の義理順儀の人、大方此實をば捨ててかへり見ず。却つて外聞あしきなど思へり。善人の名となり利となる所は異なり。心の仁義に基きて不忍の本心よりなせる義理なれば、人にたのもしと思はれ、仁者のほまれ有るはくちせぬ名なり。眼前の利にはあらざれど、天道の冥加に叶ひ、末のさかえ久しきは、義を和するの利なり。不善人の名利は、小人と共に時めきて、飲食衣服器物家屋等の上に於ていやしき名を悦び、時にあはせて利ありと思へり。欲心と驕奢にひまなけ

したる頃大凧ありしなり

蓋藏—少しも隱す所なく

順義—今の吉凶相慶弔する等の儀式を云ふ

り。

一　人先實あり、是をかざるに文を以てして禮あり。實すくなくして文過ぐるは奢なり。實ありて文の不レ足を儉と云ふ。古の人は實あまり有りて文みたず。故に禮の本とす。今の儉を用ふる者は、禮を廢して儉と思へるは誤なり。

一　心友問。和漢大勇の者あり。勇に於ては君子の勇にひとしからんか。云。氣質に得たる大勇も、死をかろんじ物に勝つことは、まことに君子の勇に似たり。しかれども心地光明ならず。若勇者道に志ありて蓋藏なくかたらしめば、必ず恐るゝ所あらん。心にまどひある者は恐なき事あたはず。君子は惑なし。智仁勇は心の一德なり。故に君子は恐るゝところなきなり。小人の勇は氣に得たる故に氣にいさむ。されば死すまじき所にても死し、又死すべき義に死せざる事もあり。君子は義にいさめば、死すべき義を見ては、此身をすつる事やぶれたるわらぐつの如し。

一　心友問。世間に義理順義といへるは皆利なり。さし當る公界の音信往來振舞等をい

艮其背―背の不動なるが如く心も亦慾の不動を要すとの義

一心友問。艮其背とは如何。云。せなかは不動無欲の所なり。人の身中、目の見耳の聞口の味鼻の臭腹の飲食手の取足の行、みな欲あり動あり、たゞ背のみ欲なく動なし。故に一身の本たり。一身は背の不動につきて用をなす者なり。これ我身によりてたとへをとれり。心無欲にして身の主たるべし。欲あるときは主たる事あたはず。況や家國天下をや。欲を好み惡むなり。好んでは得んことを欲し、惡んでは去らんことを欲す。其好惡にもとる時は心うごきさわぐ。或はいかり或は恐れて心くらくなれり。心は靈明を以て身の主たり。靈明の眞を失ふ時は主の用なし。これを放心といふなり。

周公云々―流言ありて周公恐懼

一學友問。雷は天のいかりと云ふ說あり。云。よろこびとは言ふべし。雷雨のうごくみちみてり。草木生意をまし。人氣すゞしく心地よろこばし。先王以て樂を作り給へり。風雷共に造化の常はよろこばし。常にこゆるは怒とも云ふべし。周公の德をあらはさんが爲に大風おこり、北野の天神の忠臣の怨を感じて甚雷ありしたぐひな

日本の國遠し――領土の廣遠にあらず

名を得しも、上古のしらずよみたる大方の人の歌にも風躰は及ばざるが如し。上代の歌は優柔なり。中古以來の歌は上手といへども迫切にして優柔ならず。これ自然に人心の感ずる所なり。人心は正敎風化の然らしむるなり。其世中に習たる人の心氣、歌の本なれば、おのづから言にあらはるゝものなり。たまさかに優柔に似たるもあれども、それをよしとして作りたるものなれば、自然の風にあらず。いにしへは日本の國遠くして廣く、近來は近うしてせばきが如し。政道ゆたかなる時にひろくて、せはしき時はせばきなり。しかるにせばきを以て一面によく治まりたると思ふはあやまりなり。いにしへは人心上に服せしかば、人質といふ事もなく、凶事なければ早使早馬といふこともなく、禮式定りてしげき往來もなし。この故に諸國のおとづれも遠く、人の步行もいそがずゆるやかなりしかば、日本ひろく東西遠かりしなり。其代の風、歌にあらはれて知らるゝなり。もろこしにては國郡村里の婦女の小歌をとりて、其政其俗を知れりと云へり。

詩―三百篇時代の詩と唐宋作家の詩とを比較せるなり

者なり。共に終をたもつ事あたはず。故に富貴の道は禮をこのみ人を愛す。貧賤の道は外をねがはずしてよくつとむるにあり。是を天地人の三才とす。

一　心友云。もろこし上代の詩よりも、後世の上手の詩面白し。この故に人のもてあそぶも皆後世の詩人の詩のみなり。云。尤も詩は名を得たる詩人上手なり。然れども上古の詩の樣に優柔ならず。問。しからば後世といふとも賢人の詩は優なるべきか。云。賢者といへども、後世の詩はたゞ其言葉の正しきのみにて、優柔の風はすくなし。賢者は心の正きのみ。その風は其代の神氣の化する所あればなり。上代の人は玉冠を著せり。後世は賢者といへども常に著する事あたはず。是神氣のうつりかはれるが故なり。日本上代の人、道德の學は知らざれども、今の知りたらん人の及ばざる所あり。世中ゆるやかにして神氣あつき故なり。今の道學ある人道理を知ることは古人よりも精しといへども、世中のせはしきに習うて神氣うすし。故に風は古人に及びがたき所あり。其跡の見るべきものは詩歌なり。中古の歌人學ひろく

生を知る云々―論語に未だ生を知らず焉んぞ死を知らんとあり

一心友問。程子註に、朝聞ㇾ道夕死可矣とは死得ㇾ是なりと謂へるは何ぞや。云。是字意をふくめり。君子天年の數を盡して無事に終るもあり。義に當りて戰死するもあり。生も一事なり死も一事なり。君子は事として正を出ず。正に心ありて死に心なし。是死得ㇾ是なり。

一學友問。孔子曰。生を知らずば死を知らじと。生を知らば死おのづから知るべきか。云。生を知るは人の人たる所を知るなり。人の本を知るは則ち天を知るなり。天を知るときは人鬼幽明死生眼前に明白なり。人と生れても人たる所を不ㇾ知、故に人鬼幽明二にす。故に目の見る所のみ知つて、見ざる所を疑ふゆゑにさとりの學あり。聖學には一事の疑ひはあれども一生の疑なし。佛氏は天下國家の用なし。故に一事の疑を不ㇾ知、幽明輪廻のまよひあり。これ終身のうたがひなり。富貴貧賤は天命の常造化の自然なり。此不同なければ人事を行ひて造化を助くる事あたはず。故に富貴にして驕且吝なり。貧賤にして憂ひ且安くせざる時は、天地鬼神の妖恠とする

計にて、公家の如くなりて亡びたり。武家の强大を以て公家の微弱なるを尊敬し給ひてこそ、後世のほまれとも成るべき事なれ。强大の人微弱の人をおしつけて眉目と思へるはくらき事なり。其非禮を武家の例とする人有るはあやまりなり。

一　學友問。先學云ふ人心は人欲なりと。先生の解は異なり。云。古語を解く事人々の見立あり。古人の主意に叶ふと不叶とありといへども、叶ひたるを以て必ず賢なりとせず。不叶を以て不賢とせず。予思ふに人心は人欲にあらず。大舜宣はく、人心惟危と。すでに人欲なれば、危といふまでもなく惡なり。人心は形氣の心なり。此形あれば此心あり。聖凡共に同じ。飮食衣服男女等の心これなり。既に形氣あれば欲有り、欲あれば則あり、則は禮儀なり。人心欲ありといへども、禮儀の天則にしたがふ時は道なり。則にしたがはざる時は人欲となりて惡なり。天則は微妙にして聲もなく臭もなし。自反愼獨常に存養せざればうしなひ易し。君子の及ぶべからざるは、それたゞ人の見ざる所かといへり。

小を以て大につかふる―孟子梁惠王下篇に此語出てたり

なり。問。天何ぞ不徳の人を命じて有道の人の上に立しむるや。云。勢の自然なり。自然の勢は天命なり。故に君子は自然にしたがひ、小人は力を以て自然にもとり災を招く者なり。故に云ふ「小を以て大につかふるは天を恐るゝものなり」と。小はまことに大に敵すべからず。是自然の天命なればなり。大を以て小につかふるは天をたのしむ者なりと。大はまことに小をしたがへ易し。しかれども恭敬してつかふる者は義理あるを以てなり。心につかふべき義理をしれば、其義理をたのしびて外の勢を忘るゝなり。將軍家の禁中につかへ給ふが如し。將軍家は天下を我ものとして、大といふにも及ばず。しかれども天照太神の皇統にて、三種の神器おはしまして、天威のおされざる所あり。故に代々の將軍家おろそかにし奉り給ふ事あたはず。足利家の盛世の時は、本より將軍家にまかせられたる公家なれば、ないがしろにしたりとて眉目にもならざるに、天を樂むの道理をしらで、勢にまかせ日々に公家の威をけづりたる天罰にや、足利家の威も程なくおとろへて、四五代は公方といふ名

言を知る云々ー公孫丑上篇の我言を知れりとあるを指すか

一時にしたがひて變易して道に從ふは君子の中庸なり。時に隨つて變易して利に隨ふは小人の中庸なり。其知の明は一なり。只主とする所異なり。

一心友問。孟子言を知るといへり。道學に於て重きことは何ぞや。云。予は予が言を知るのみ。心定る時は其言重うして舒かなり。不㆑定時は其言輕うして疾し。問。事の急なる時はいかゞ。云。心定る時は急なりといへども變ぜず。只其言すみやかなり。重舒變じて分明なる者なり。無事の時に疾きは心いそがはしき故なり。急なる時すみやかならざるも心とゞこほればなり。

一心友問。聖人の言をおそるゝの意いかゞ。云。聖人は萬歲の師なり。其言は我に敎ふるなり。我必ずこれを受用せんとす。故に畏る。天より命じて師とす。今日の君命の如し。舜の曰く、四海困窮。天祿永終と。聖人の言違はず。甚だ恐るべきなり。問。大人をおそるゝと。大人は在位の人か。在位の人不德にて、我道あらば何をか恐れんや。云。天命じて貴人とし上に立たしむ。故に畏る。畢竟天命を恐るゝ

人材云々―人材を作るは難けれども人の材器を變化するは易しとなり

たはず。師弟共に先學の非をあげ、當世の學者を相そしれり。先人の德を好し、今の人の善をあぐる事あたはず。其議論可なりといへどもかへりて人の善をそこなふ者なり。

一賢不肖生付といふべからず。治亂命といふべからず。君相志を立て賢を求め、職々其任にあたるか當らざるか、つとむるかつとめざるかを明に知るときは、國おのづから治まるべし。天下小人を以てみづから安んぜざるは人心の靈なり。君相志をはげまして君子の心術躬行をなす時は、士民これにしたがふ。心はいまだ化せずといへども、其用は君子の事なり。この故に人材を成すことはかたし、變化する事は易しといへり。未だ王者の德に及ばざれども、志立つ時は變ずべし。大に變ずれば大に益あり、すこし變ずればすこし益有りといへり。婦女の知識なき赤子の物いはざるだに誠あれば其欲に應ず。あたらざれども遠からず。况や男子の知識才能あり、民人のよくものいふは、慈仁の誠あらば保つこと易かるべし。

時去つて後―後世に及びて

も、賢君良相も是をおこす事あたはず。跡ありてだにもなりがたし。況や跡なき事を初めて作するは人力にあらず。鬼神は人の作用はならず。人も鬼神の妙用をばなすことあたはず。幽明人鬼の異るなり。聖人は人にして神の妙用あり。鬼神にも優れる所なり。しかれども聖人は人道をつとめて神妙に心なし。是聖にして自ら知るべからざるの神なり。又聖人の上に神人の位なきにしもあらず。伏犧神農黃帝堯舜これなり。禹王文王周公孔子、神にあらずと謂ふべからず。

一學者ありて云。孟子以後の諸君子、皆言の失ありといへり。師とはしがたからんか。答へて云。皆師とすべし。其志の賢なる所は後世の學者の及ぶべき所にあらず。言の失をあげて先人の非をいふ事は易し。其德を取つて身に行ふ事はかたし。予が言の如き、今の人の惑に當り今日の受用に益ありとも、時去つて後人の議論に及ばゞ大半非ならん。只實義あれば人の良心を感發す。善心興起する時は聖賢を師とすべし。其中間の奏者なり。世に博學篤行の師多しといへども、人の良心を開くことあ

聖而云々―孟子の語靈妙不可測なるを神とす

指刀のさしがへに至るまで、其つひえかぎりなし。これ略によりて奢にながれ、人の禮儀亡びてもの多く、事しげきにあらずや。事しげき時は人の精力及びがたし。正直律儀なる人といへども僞なきことあたはず。この故に聖人は易簡の善に配して人道の禮儀を制し、畧を戒めて多事をふせぎ、僞の生ずる源をふさぎて誠を立つるものなり。

一 心友問。聖而不レ可レ知之謂レ神。先學皆いへり。聖人の上に別に神人あるにあらずと。いかゞ。云。聖人には神明の徳あり。此徳ある事聖人みづから不ニ知給一なり。空中より無き物を生ずるは鬼神の造化なり。天地ひらけて未だなき物をはじむるは聖人の神徳なり。八卦を畫して六十四卦とし、天地人三極の道をあらはし、萬事萬物の理を盡し、醫藥灸針の事を作し、律呂管絃を興すなど、皆神明の徳なくてはならざる事なり。律呂たしかにのこりてだに、ふりの絶たる樂は再興する事なりがたし。舜はじめて五絃の琴を作りて南風をうたひ給へり。琴の曲絶て後其器ありといへど

文花―文飾多きなり

直垂―中世禮服の一

上下―袍と裳又は肩衣と袴などを云ふ

て略儀を示さず。人に略儀を教ふる時は禮儀亡ぶ。禮儀亡ぶるときは驕奢生ず。驕奢なるときは物文花にして事しげし。事しげき時は僞生ず。物文花なるときは略儀いよ〳〵行はる。それ烏帽子直垂ちひさ刀は無位無官の士の禮服なり。この禮服文色定まれば數を用ふる事なし。たゞ一くだりありて禮儀達しぬ。下著ひとつふたつは時の寒暑にかなふのみ。數を用ひ美を盡すべき樣なし。ちひさ刀たゞ一腰なれば、大中小の脇指刀のさしがへ用ふべきところなし。平生はちひさがたな一つにて、内外ともに事たれり。軍陣に太刀を帶きそふるものなり。これ禮儀備り人道うるはしくして易簡なり。善なるにあらずや。いつの程にか烏帽子下地のまゝに髮ををりわけ、直垂はかまを畧して上下とす。一旦は易簡に似たれども、略儀にて禮儀なければ、小袖上下數を盡していろ〳〵あり。其つひえかぎりなし。ちひさがたなを脇指とし、太刀を刀として二腰さしたるは、かひ〴〵しきやうなれども、國容軍容まじはりて治道長久ならず。戰陣威かろし。しかのみならず大わきざし、中脇指、小脇

を云ふ

人はせざるの類なり。今の俗此非義の義を義とす。あやまりてもせめて義と思ひてなさば可なり。たゞ其中間の名利の情にまとはれてせんかたなき故なり。盗賊は本より不義の者なれば、義理を思ふ者にあらざれども、其中間の難を去ることあたはず。これ其情にまとはるればなり。問。より親義を行うて去らば與すべきか。云。より親義を行はゞ、自己一人義を行うて去るべし。何ぞ人をひきゐて其家を危くし其國を亂さんや。故に君子はより親とする人をはじめよりえらぶ事なり。

一心友問。程子云ふ「誠あらず、財を惜む者は、善をすること不ㇾ能」と。財はをしまざれども、誠なき者あらんや。云。名を好んで財をほどこす者は、惜まざれども誠なきなり。問。不仁なる者しはき者も、堂寺の佛事には金銀ををしまざるは何ぞや。云。しはきも不仁も心くらき故なり。後生の僞妄を信ずるも心のくらきなり。くらき故にくらき所へ用ふると知るべし。

一心友問。易簡と略儀と相近きがごとし。云。大に異なり。聖人の敎は易簡の善あり

自逝—辭世の詩歌等を言ふ

道著—言へば

より親—組子より組頭の如き者

不知は、まどへるなり。

一　心友問。自逝は有るべき事か。云。自逝する者は生死に心あり。或は名を好めるが故なり。近うしては晝夜、遠うしては生死なり。夜に入りていぬる者、何の心あり何の名ありて自逝すべきや。死生は天地の常理なり。道理にしたがひて始終する者は無心なり。むかし程伊川病で死なんとす。郭忠孝と云ふ者往いて見るに、伊川目をとぢて默然たり　忠孝云ふ「夫子平生の學ぶ所此時に用ふべし」伊川云ふ「道著用便不是」と。忠孝いまだ寢門を出でざるに伊川卒す。問。遺言といふ事は有るべきか云。死去人のいひ置くべき事は、生殘る人々の心にあり。時所にしたがひ子孫の位に應じ、義に害なき事は勢にまかすべきのみ。死者何をかいはん。但し遠方へゆく人の、留守居の及ぶまじき事をいひおく如き事あるまじきにもあらず。子弟に教ふるの言は平日の言なり。遺言にあらず。

一　心友問。より親に與し主君にそむきて出るは何の義ぞ。云。非禮の禮非義の義、大

史官―記錄官

天工―造化自然の大經營

一心友問。いにしへ聖主賢君史官を置いて、主君の言行を初めとして天下の善惡を記さしむ。おもねりてほむる事不レ能。怒りてそしる事不レ能。殘さずかさねずたゞ有のまゝなり。後世惡逆の主無道の君の、時に威權つよく、其惡を後世に傳へん事を恐れて、之を記す事をふせげり。とゞむべき事やすき勢なり。然れどもとゞむる事あたはず。本よりの惡名の上に又惡聲を重ぬ。人力こゝに及ばざるは何ぞや。云。鬼神は福善禍淫なり。いにしへの聖主賢君は、天工にかはりて史官を立て給へり。是造化を助くるの道なり。人道に史官を立てざる時は、天命の史官ありて善惡を記せり。問。天命の史官其心に知るところありや。云。其心には知ることなし。たゞ天然と其才其時の善惡を知り、或は時を過ぎて生るれども前代の事に達せるものあり。皆天道鬼神の福善禍淫なり。天下の主といへども鬼神に勝つことあたはず。故に人力を以てふせぐべからず。みづから惡をなす者は、其心くらき故に此理を知らず。若此理を知らばつとめて善をせんのみ。善をする事の惡名を亡すの道なる事を

民爲貴—君は民を以て本とすと云ふも此義なり

一心友問。惟聖人然後踐ㇾ形とは、人道を盡し得たるなりと云へるはいかゞ。云。人は五行の秀氣、神明の舍、天地の德なりといへり。是によくかなふを人道を盡し得るといふべし。聖人あらはれて人の天地の德たる事を知れり。是形を踐むなり。

一心友問。孟子の云ふ「民爲ㇾ貴。社稷次ㇾ之。君爲ㇾ輕」此言甚だ抑揚あるに似たり。一國の爲に一人の君を置て治めしむる道理をしらで、君一人を樂ましめて一國の人民を苦むる事の、天道にそむける義を明さんが爲なるべし。云。しかり。又先天の理なり。天地ひらけて人あり。人の多きを民といふ。山川國土の神、民の爲に財物を生ず。是神といへども民に次ぐの理なり。民は其本を報じて是を祭れり。人民の多き、これを治むるものなければ亂る。故に君を立つ。是又國君といへども民に次ぐものなり。孟子先天の理によりて云へり。後天よりいふ時は、君は上に位して威重あり。民は君にしたがふ者なり。君民の爲に社稷を立てゝこれを祭れり。是後天用をなすの時なり。

樂める君子—詩經に樂し君子は民之父母とあり

にごれども、力を用ふる事勇にして敏なるは數年ならずして淸み、ゆるきはおそく淸めり。人生れて靜なる以上は說くべからず。わづかに性をとけば性にあらずと云へり。

一心友問。樂める君子は民の父母なり。樂しまざれば君子とするに足らずと謂へり。君子のたのしむところは何事ぞや。云。程子云ふ。樂は理にしたがふを樂とすと。此意味學びざれば不レ知。たとへば音樂を學ぶが如し。淫聲は知らざれども聞いておもしろし。正樂は知らざる人聞いておもしろからず。學び得て後面白き所あり。學びて理を照す事明かなれば、自然に理にしたがふ事を樂しむものなり。音律耳に入れば自然に雅樂を好むが如し。凡人は欲にしたがふを樂と思ひて、理に從ふをつとめと思へり。道をしらざるが故なり。君子より見れば、欲に從ふは皆苦なり。然るをたのしみと思ふは惑るなり。雅樂の神氣を養うて、あかぬ所あるを知らずして、淫聲の神氣を害するものを好むが如し。

多少萬品―多きと少きとに依りて萬品の差を生ずるなり

れり。其性にしたがつて動くときは、仁義禮智の性ありて善なり。性の德を失ふ時は、不仁不智不禮不義にして惡なり。水の中間清濁の異あるが如し。天は無心無欲なり。故に理氣はなるゝ事なくして四時あやまたず。人は有心有欲なるが故に、心法なき者はあやまちあり。聖人以下の人過なき事あたはず。よくあらたむるを善とす。心法は天命の德にしたがふ受用なり。人心天理に從ふを道と云ふ。則ち一陰一陽を道といふと一致なり。人幼より善なる者あり、幼より惡なる者あるは、氣稟の自然なり。幼より惡なりといへども、仁義禮智の性なき事あたはず。故に恥る所有り憚るところ有り。この故に成長して人となれり。絕て無きものは一日も生くべからず。水濁るといへども、低きにつきて下るは水の性善なり。にごるは水の本性にあらずといへども、水にあらずと言ふべからず。人の性は善なりといへども、惡も又性にあらずと言ひがたし。赤子の時いまだ善惡の名なし。後來濁る事の多少萬品なり。終に濁らざるものは聖人なり。少くにごりて早くすゝめるは賢人なり。多く

忠信を主とす—論說學而篇に忠信を主とし己に如かざる者を友とする事勿れと

源出云々—本源のまゝに淸なるを淸と云ふの義

忠信を主とすといふ。忠信外より求め來りて主とするにあらず。本よりの主なり。今は人欲主となるが故に、忠信は心を起して存す。客來の如し。故に程子云ふ。不レ之レ東不レ之レ西是中也と。東西にゆかざるを中と云ふにあらず。東にゆくを必とせず西にゆくを必とせず、義と共にしたがふ時は中なり。

一學友問。一陰一陽謂二之道一。繼レ之者登也。成レ之者性也と。云。太極時に動いて陽生じ、時に靜にして陰生ず。動靜は時なり。陰陽たがひに其根をなす、太極の時にたがはず。太極もと無極なり。故に是を道といふ。一陰一陽生じてやまざるを繼といふ。やまざる時は四時行はれ日月明かなり。善是より大なるはなし。造化の流行を見れば善なり。山下の出泉其始にごれるものなし。いまだ淸濁を云ふべからず。中間にごりをなすものあれば、本源の水色を失ふ。こゝにおいて淸濁の名出來ぬ。源出るにたがはず、繼げるものを淸といはんがごとし。造物者人を成して人の性あり。萬物を成して萬物の性あり。人は天地の心なるゆゑに、一陰一陽の理全うして明德備

其化やむ。人の背不動にして四肢作用の體たり。萬事皆しかり。道は寂然として不レ動、隱微にして不レ發、この故に天下の根本なり。物に體してのこすべからず。道の不レ動は形の不レ動の如くならず。至神至動なりといへども、無欲にしてあらはれざるを謂ふなり。

一　心法は心の向ふところを愼むべし。向ふ所實なる者は自然にいたる者なり。孟子性善をいへり。善は内より出るものなり。故に邪をふせぐ時は誠おのづから存す。善といひ誠といふ。皆性の德なり。一體異名なり。誠は則ち善なり。善は則ち誠なり。今の人心の好み向ふところ利と欲とに有り。必ずしも利欲を主とせんと思はざれども、自然に利に赴き欲に住す。工夫力を費さずしてよくする者は、向ふ所實なればなり。誠は天を以て根たり。固有の德なりといへども、志の向ふところ實に茲に有らざれば、思ふ時は存し忘るゝ時は亡するが如し。工夫を用ひ力を付るといへども存養しがたし。若心實に德を好み邪をふせがば、誠自然に立て善行はるべし。是を

予欲無言—論語陽貨篇に此語あり

もに三千年來、生死に恐動せられて、生死の夢を見てさめたる者まれなり。異學は惑に居て惑を解かんとす。夢中に夢を見るがごとし。聖人の道は日月の明なるが如し。まがふべき事なく悟るべき事なし。故に孔子云ふ。予欲レ無レ言。天何言哉。四時行焉。百物生焉。顏子默識して辯論なく、愚なるが如くなるもの是なり。

一理をいへば氣をのこし、氣をいへば理をのこす。理氣は離れざれども言にのこす所あり。たゞ道といふ時はのこす事なし。理氣一體の名なり。其大に付ては空虛といひ、その小に付ては隱微といひ、其妙用に付ては鬼神といふ。天地位し日月明かに四時行はれ萬物生ず。みな道よりなれり。其眞は寂然不レ動無レ聲無レ臭なり。これを未發の中といふ。天下の大本たり。道は自然にして窮なしといへども、陰陽の度日月の寒暑晝夜の變常あるは、無極にして太極の理なり。中庸の名ありて心法の受用すべき所なり。しばらく形ある物に付て見るべし。不レ發不レ動者は、物の根と成り體となれり。木の根土の中にかくれて花實青紅の變をなす。其根土中より出る時は

一 鳶飛魚躍。鳶魚は無知なり。故に天機にうごく。人は知ある故に、私心天機をふさぐ。程子云ふ。必有レ事勿レ正の意なりと。必有レ事とは、人は人の性命あり。性命にしたがふは必有レ事なり。勿レ正とは私心有るべからざるなり。人性知あり。故に深く天機に通ず。活潑潑地なり。

一 心友問。佛氏は死を說いて生を不レ說。孔子は生を言うて死を不レ言。儒佛のたがふ所こゝに有るべきか。云。死生一貫なり。孔子何ぞ生を言うて死をのこし給はんや。人の死を問ふは本をすてゝ末による惑あるによりて、其本に達する時は末おのづから知るべき理を敎へ給ふなり。聖人の心に生死なき事、常人の心に晝夜なきが如し。晝夜死生一貫にして二あらずといへども、常人は晝夜を知りて生死を知らず。是晝夜も亦不レ知なり。しかれども疑なき者は、古今不レ惑の常によるのみ。堯舜の民は生死も亦かくのごとし。佛氏は生死の理にまよひて生死を恐るゝが故に、生死を說くことやまず。聖學には生死の惑なければおそれなし。故に死生を不レ說。和漢と

正叔—程頤字は正叔伊川先生是なり

肫々云々—懇誠なる貌

費隱—中庸に君子の道は費にして隱なり夫婦の愚も以て與り知るべし其至れるに及びてや聖人と雖も亦知らざる所ありと

り。死生も則ち容なり。故に朝に道を聞いて夕に死すとも可なるものなり。正叔云ふ。吾日履安地。何勞何苦。他人日踐危地。此乃勞苦。凡人は苦を以てたのしびとす。是を惑といふ。日々にさかしき所を行うて幸を求む。命のいたる事を不知。柔弱の者はさし當りて憂哀し、勇強の者はせまりては是非なしとして亡ぶ。ともに心のくらき事は一なり。仁者其言也訒。言うて不行は虚なり。君子の恥る所なり。仁は實理なり。故に仁者は言行相かへりみて虚なし。其言の出る事を難とする所なり。好人は言すくなし。其行ふ事のかたきを知ればなり。故にいへり、肫々たるは其仁なりと、厚を云ふなり。剛毅木訥の仁に近きも、質朴遲鈍にして物に屈せず、終にやまずして發する所あればなり。

一 君子之道は費隱。費はたからとせざるなり。寶とせざるはをさめかくさゞる意なり。君子の道はあまねく敎てかくす事なし。しかれども言語に述べがたき所あるは隱なり。君子かくさざれども隱れて發せず。只入德の人默して知るべし。

ども、末々の子弟は盗をするにいたる者なり。知行を取る人の子弟だに強盗を好む者あり。況や民をや。此俗長ずる時は亂世の端をひらくものなり。

一　學友問。間思雜慮はらへども生じて制しがたし。云。間雜の二字を妄とす。思慮は絕ゆべからず。只邪なからんのみ。程子云ふ。人は活物なり、動作あるべし思慮有るべし。邪を閑ぐ時は誠おのづから存す。則ち忠信を主とすといへり。誠は無欲なり。思ふ事もなく爲す事もなし。寂然不動にして感じて天下の故に通ず。今の人は一己の人欲身の主たり。故に思ふこと天理ならず。動くこと義理ならず。思爲共に皆妄なり。妄の主をかへずしてその末をふさぐとも制し得べからず。間雜をはらふの、念また心上の累をますべきなり。しかじ有念無念ともに忘れて誠をおもはんには。

一　心友問。居易俟命の義いかゞ。云。富貴貧賤安靜患難死生壽夭みな命なり。俟は客をあしらふが如し。心惑なく願なく、安易の地に居て天命の客をあへしらふ意なり

あへしらふ―應接し待遇するなり

たらずば善人とならざらんや。名は實の聲なり。又善人の名あるべし。實あり名ある、是を德といはざらんや。人利に入る者は義をなみす。義を尊ぶ者は利をいやしむ。天理人欲ならび立たざるが故なり。

德治—德を以て天下を治むる事

一いにしへ王者の天下をたもち給へる時は、王城といへども池堀なく要害せず。是民を保んじて王たり。德治の遺風を見るべし。武家の代となりては、力を以て天下をとれり。故に力を以て有てり。城池をかたくして一家を守るのみなり。民を外にして不保。是故に力衰ふる時は亡べり。

十一—十分一なり—公九民の制

一朋友問。關東には年貢十一よりも輕き所あり。然れども民盜をする者多きは何ぞや。云。是も徒善は政をするに不足といふものなり。日本もむかしは農兵なりし故に、皆十一の貢をとれり。十一よりかろきは其後開きましたるものなるべし。飢寒に及んで盜をするは凡人の常なり。民の如きはにくからず。上より盜をなさしむるが如し。政なく敎なければ、いたづらに暮す者多し。この故に貢かろく地ひろしといへ

古人云々―忿を忍ぶは有得なり之を忍ばざるは下德なりと

樂のいとま無からんか。云。義は仁の時なり。天下の主は天下の困苦を以て其心をいたましむ。故に困苦なきの仁政あり。國主郡主皆しかり。士庶人は其一家の困苦にあづかるべし。是其分によりて仁のほどこし異なるは義なり。仁を好んで義を不知者は、國郡の主として天下をすくはん事を願ひ、士庶人として國に及ぼさん事を欲す。却つて倫をみだり、仁の累をなす者あり、これ不知なり。

一　心友問。古人云ふ。忿慾忍與不忍。便見有德無德と。是小德の者の事なるか。云。有德は見る所大なる故に、世事かろくして心にかゝらず。故にいかりなし。心に眞樂あり。故に世間の願ひなし。凡人は心せばくして怒りあり。道德の樂を不知して、欲ある者を以て見る時は、忿慾の堪忍しがたきを、よく忍びすぐすと見るべし。

一　吾人德をなさん事を思はゞ、日々に善をせんのみ。一善益ときは一惡損ず。日々に善をなさば日々に惡退くべし。これ陽長ずる時は陰消するの理なり。久うしておこ

つみても｜抓むなり或は撲ち或は抓み捻るなり

禮。今之强有力者。將以爲亂」と。

一

一心友問。よく近くたとへを取ると云ふ事はいかゞ。云。これ事にあらず心にあり。人耳目口鼻四肢を取つてたとへとせば甚近しとせん。其己に有するが爲なり。それ仁者は天地を一身とし、天地の間の萬物を四肢百體とす。今の人の一身を見るが如し。外より取來りてたとへとするにあらず。この故に萬物を取つてたとへとすれども、世人の一身の中にたとへを取るよりも親切にして人の心に通ず。夫人己が四肢百體を見て、爪皮にいたるまで愛せずといふ事なし。疾痛快樂その心に切なり。たゞ手足しびれなえたる人のみ、うちつみても其心をわづらはさず。手足我にありて疾痛あづかり知らざれば、是を不仁の病といふ。人の物我のまよひありて、他人の困苦に其心を動かさゞるたとへとす。聖人は至神なり。故に天地を父母とし人民を兄弟とす不仁の人は父母兄弟の困苦だに己が四肢の如くならず。この故に恩を不知者あり。問。今の時天下困苦の人多し。これを以て一々其心を累さば、快

禍淫―淫は亂なり禍惡と云ふに同じ

敬は云々―百の邪惡も敬によりて消除せらるゝを云ふ

合すといへり。これ恭敬の徳にかなふべきか。云。上下恭敬に一なる時は、氣和せずといふ事なし。天地おのづから位し、萬物おのづから育す。人民春風和氣の中に遊んで、其利を利とし其樂を樂めり。天尊く地卑うして、乾坤定り四時行はれ萬物生ず。無爲にして成る、これ篤恭にして天下平なるの至極なり。天地と其德を合するなり。日月の道は貞明なり。至誠なるものは常久にして不レ息、これ貞なり。誠なる時は必ず明なり。則ち日月とその明を合するなり。鬼神は福善禍淫に誠なり。故に不レ怒して威あり。君子善を好むに誠ありて、惡をにくむに實なり。其信人民の心に感通す。故に天下惡をする事を恐れて邪僞をわすれ、德にならひて善を常とす。これ鬼神と其吉凶を合するなり。古今邪僞凶亂のおこる事、皆不レ愼よりなれり。故に敬は百邪に勝つともいへり。況や有德の君子上に在して、無心の恭敬行はるゝ時は、人心の萬惡消し山川の衆邪滅す。知謀勇力ある者は、其才を禮樂弓馬書數に用ひて、天下益文明に武威彌盛なり。故に云ふ「古之强有レ力者。將二以行一

篤恭—篤實恭敬

集義和書　卷第十五

○義論之八

一心友問。篤恭而天下平。修己以敬。以安百姓といへり。恭敬のみにして天下國家を平治するの功をなすべき事は迂遠ならずや。云。これたゞ誠のみなり。誠なる人は其容躰自然にうや〳〵し。上たる人誠の徳篤うして下にのぞみ給ふ時は、天下の人天性の誠を鼓舞せられて、不知不識禮儀あつき風俗となつて愼みうや〳〵し。刑法を立てゝ恐れしむる者は、まぬかれんとして恥る心なし。心ありて戒愼する者は忘るゝ時多し。道徳によらずしてつとむる者は終なし。才知を用ひて令する者は、一旦利ありといへども、人民も亦知謀を起して僞生ず。君子は明知にして無爲を以て無事なり。問。大人は天地と其徳を合せ、日月と其明を合せ、鬼神と其吉凶を

敵の子を立―宋國は殷の後なり

を亡したまひて、其子を立置き大國を與へ給ふ事は、凡知の及ぶべき所にあらず。天命を知り給へばなり。敵の子をたづね求めて殺すは、子孫のため害を除くはかりごとなれども、是によりて却て天命をそむく理をしらず。敵の子を立おくは心もとなき樣なれど、是によりて天命にかなへば却つて長久なり。誠に天命の歸するところは人力の及ぶべきにあらず。武王は聖知にてよく命を知り給ふ故なるか。云。尤も此理武王の心に明白なりといへども、是を事とし給ふにはあらず。如ㇾ此の天命をわきまへて、道を行ふは吾人の心術なり。武王は天命をかうぶり、伐つべくして伐つのみ。時の勝負を必とせず、後の利をはからず。害をさけず。故に惡人亡びて後は、紂が子は商の孫子なれば、立て退き給ふのみ。天下これを主君とせば、ともに仕給ふべし。天下武王を主君とするは、天の命ずるところなり。又辭せず。

神器は三德の象
—三種の神器を知仁勇の三德に配せる説有り。

給ふが如し。知を重んずる事は何ぞや。云。人君の國を治め四海をたもち給ふ事、知を以て主本とす。知明かなれば、とりしめ有りて事可にあたる。故に太平の時は無事にして治まり、事ある時は士民皆主君の下知を信ず。生付仁愛勇强にして、一旦人に譽らるゝ人有りといへども、知明かならざれば命令可に不レ當。故に法令數多に成りて事しげし。人あまねく從ひがたし。しひて立んとすれば人をそこなひ亂をなす。立る事あたはざれば法令出てもなきが如し。人皆上の下知を不レ信時ありて、國やぶれ天下亂るゝものなり、夫神の代人代の其むかしは、治躰に通じ給ひし故に、鏡璽劒を以て知仁勇の象とし、知を主とし給ひしなり。知の實は人を知る是なり。人を知る事は帝堯をもつて師とすべし。

一心友問。紂王が亡びしことは、自の大惡虐を以てなり。商の天下をたもてること六百年なれば、天下皆代々の臣なり。宗族外戚かぎりなし。紂亡びて惡人だになくば、四方皆商の子孫を君とすべき人情あり。何ぞ同輩の周を君とせん。しかるに武王紂

懐刑—論語里仁篇に出づ

樂而不淫—論語八佾篇に出づ

過し行をあやまり、後悔の難あるものなり　甚しきはあたを得るに及べり。君子は懐レ刑、小人は懐レ恵の類なり。恵を思ふは利害の心なり。刑をおもふは君子孝子の愼みなり。怒つて難を思ふは、深淵に臨んでは落入らん事を愼むの道理なり。小人は甚難を恐れさくるといへども、愚にして火氣にをかされ、其難を前に辨へず、君子は義に當りては難をさけずといへども、自まねく禍をばつゝしみさくるなり。火氣うすき故に心明にして、後の難を前に知るなり。故に怒れども難あらず。樂んで不レ淫哀んで不レ傷に同じ。

一　心友問。舜の怨慕は、註に非三怨二父母一といへり。孝子のうらみ有りて聞くときはいかん。云。則ち孝子の怨なり。常人の父母を怨むる心にては無しといへども、父母を怨むにあらずとは云ひがたし。二三歳の幼子の母にうたれて、泣きながら父母をしたひて跡につき行くこゝろなり。

一　心友問。神代の三種の神器は、知仁勇の徳の象とうけ給はりぬ。内侍所を第一とし

り。天命を知る人より見ればしからず。色に迷はずして人の根をたつべきよりは、色に迷ひてなりとも助けたるはまされり。義朝の子を不レ殘殺したりとも、清盛が惡虐平家の奢にては、外より敵おこりてほろぼさるべし。平氏天命にそむきて自ら敵を生ずるなれば、誰と云ふ事はあるまじ。迷ひてなりとも助け置て人の後をたゝざる故に、平家のほろぶるにも、子孫こゝかしこに落とまりて今にたえざるなり。

本體工夫—本體と云ふに同じ下文參照

一心友問。書簡中主二忠信一は本躰工夫なり、誠意は工夫本躰なりと候は、陽明子の學術異學の病あるに似たり、如何。云。予も此語意不二中和一とおもへり。然れども義に於て害なきが故に改めず。忠信は人の人たる根本の德なり。誠は天の道なり、則ち本躰なり。誠を思ふは人の道なり、則ち工夫なり。主二忠信一は誠を思ふの義なり。誠意の誠は意を誠にするなれば工夫なり。然れども意終に誠に歸するときは誠は本躰なり。故に工夫本躰といふなり。

一心友問。怒思レ難と。利害をはかるに似たり。いかん。云。怒の火氣の中には、言を

に思ひ、夫よりは古主の言葉の相違なき様にとたしなみ、皆よき奉公人に成りぬれば、其言葉もむなしからずと人のかたり侍りし。人皆父母妻子あり。一家を助立つるのみならず、不善人を善人とし給へり。それ人の善悪を記すは、其役人にあらざれば無用の事なり。されど如此の善人ばかりは、その姓名を聞きて記しおきたき事なり。九州の郡主にて、十萬石ばかりの人とおぼえ侍り。まことに有がたき好人なり。罪の輕重を論じて理屈を以ていはゞ、誰かものいふ人あらん。善悪賞罰の理にしたがはんよりは、如斯の大徳こそあらまほしく侍れ。天地の間に生れ出て、數十年のつとめをなし、一家を養育すべき者をかよひて、世のすたり者となすことは不便の事ならずや。倘孟子につまびらかなり。士に本よりの高下なし。上下は一旦の命なり。唐日本ともに同じ。

一　舊友問。平清盛常盤が色に迷ひて敵の子を助けおき、子孫の憂となれり。其外如此のためし多し。よくたづね求めて殺すべき事なるか。云。凡人より見る時はしか

かよひて―かまひて歟

敵の子―今若乙若牛若等を云ふ

目をかくし目をつけて哀憐するなり

養ふを以て主意とする時は、飲食みな助けとなり、味を好むにながるゝ時は病を生ずるが如し。

一舊友問。今の世にかまひといひて、一代奉公をおさへて、先々をふせぎて困窮せしむる事は、或は死罪流罪の罪につぐ者なれば、尤もことわりとは思ひ侍れども、君子を諸侯にしては如何はからひ給ふべきや。云。此習久くして深ければ論じがたし。しかれども君子までもなく。近き世に或國主の仁厚寛裕なるありしが、他家ならば切腹もさすべき罪あるものにても、我彼者になりかはりて見ば必ずいひわけあるべし、されど主君に對していひわけは成りがたきものなり。又死を惜むにも似たれば、默して切腹すると見えたりとて、ゆるして扶持をはなし給へり。又不届なる事にて立退たる者をも、先々をばふせぎ給はず、他家に扶持せらるゝ時、其主人より子細なき者かと尋ね來ることあれば、不屆なりし者にても、重寶なる者なり、目をかけ給ふべしと返答ありしなり。あしき事は身におぼえある事なれば、感涙をながし悦び

博文多識云々―學問の中毒と云ふもの卽ち是なり

七情あり。凡夫といへども又四端あり。凡人の四端は百姓日々に用ひて不レ知と云ふものなり。聖人の七情は、形色は天性なり、ひとり聖人にして後よく形を踐むべしと云ふものなり。

一同志の人々の書を讀むこと、心を用ひて書を讀むか、書を以て心を讀むか。多くは書を本として心を末とし、書の文義を解せん事を求めて心を忘るゝならん。陽明子是を食にたとふ。食は此身を養ふものなり。食しをはりては消化すべし。若食積みて消せざれば病をなす。後世博文多識胸中に滯る者は食傷の病なりといへり。故によく書を見る者はかたはしより解せんとせず、文義にくるしまず、只書によつて自己の心を說き得て、悅ぶところを樂むなり。知り得れば本知るべきことなし。さとり得れば本さとるべきことなし。知覺は知覺なき所に至らんが爲なり。しかれども不レ知ときは論埋す。問。先言往行を識して德をたくはふると云へるはいかん。云。本立つときは知識たすけと成るべし。末によるときは知識累をなすなり。此身を

七情—喜、怒、哀、樂、愛、惡、欲

故に萬物一體の理感じて惻隱の情發す、義の理感じては羞惡の情發す、禮知も又しかり。是皆眞實無妄の天理なり。之を天理流行と云ふ。則ち無思無爲寂然不動の常體なり。思無邪を無思と云ふ。私己の動なきは無爲と云ふ。天理の寂然不動は有事無事を以て二にせず。陽明子云ふ。鐘未ㇾ扣時。原是驚ㇾ天動ㇾ地。既扣時也。只是寂ㇾ天寞ㇾ地。問。天理を主とし人欲を主とす。心の外に天理人欲と云ふものあるが如し。いかん。云。此心の外に天理なし。人欲も亦外ならず。たとへば目の如し。喜悦する時の眼色と忿怒する時の眼色と、眼色各別なりといへども同じ目なるが如し。たゞ心のおもむきを以て天理人欲をわかつのみなり。心裏に向ひ性命の本源を不ㇾ失ときは天理を主とすと云ひ、心表に向ひ末にしたがふ時は人欲を主とすと云ふなり。問。心内外なし。何ぞ裏に向ふといふや。云。本より心に内外なし。内外に出入するをいふにあらず。只心のおもむきを云ふなり。問。七情は聖人といへども無き事あたはじ。放舍のしるしとは心得がたし。云。たゞ聖人のみならず天地といへども

操存―孟子に出づ

ず聞くべからず。その跡によつて云ふのみ。わづかに感應をいへば本躰にあらず、天下の故に通ずる所に付て其本を知るのみ。故に感と云ふ。氣にわたりたる所を以て云へるはあやまりなり。又本躰に感なきと見るも本躰を不ㇾ知なり。至神は神ならず。

一　心友問。操ときは存すといへり。とるといふ時は一物有るが如し。いかゞ。云。古人の云ふ。欲すべき物は是形色の上にあり。留藏すべき物は氣象の上にあり。欲すべからず留藏すべからざる所に於て、操といひ存すといふ。惻隱羞惡辭讓是非の四端の、發見し著るゝ事多きは操存のしるしなり。忿懥憂患好惡恐懼の情日々に滋長するは、放舍亡失のしるしなり。問。四端も亦情ならずや。本心の無思無爲寂然不動の常躰にあらず。自然の感はさもあるべし。しげきを以てよしとするは何ぞや。云。天理人欲竝不ㇾ立。心天理を主とする時は人欲亡失す、是を操存と云ふ。心人欲を主とする時は天理亡失す、是を放舍と云ふ。天理存する時は日夜天理の感應のみ。

心無情はよきにとれり。しかるに歌によむ時、心有るといふはよく心無しと云ふは惡しきはいかゞ。云。歌に心有ると云ふは、なさけ有りといふたぐひにて仁愛有り、物に心得て平人ならざるをいふ成べし。心なきといふは、何をも知らぬ賤男賤女に同じき者にて、なさけ人といふ義成るべし。聖人に無情といへるも、情なきにはあらず。天地の四時の色の如く、理に和して氣のうごきなきを云ふなり。無心と云ふも至公にして私心なきの義なり。

惻隱云々—孟子の本文に據れり

一　或問。本體は空々寂々たり、感あるべからず。わづかに感ずるは是氣なり。惻隱の心も赤子の井に入るなど見て發す。物の感ずる事あれば應ずるなり。感應は陰陽なり、理といふべからず。仁義禮知ともに氣の靈覺なり。本然に陰陽感應をはなれたる物にはあらずや。云。本體の理は應ぜざれども時ありて感ず。太虛無一物の時、何者か來りて感應すべきや。本理の無聲無臭は寂感なり。ひとり感ぜずば天地も何によりてかひらくべきや。感の聞べく云ふべきは氣なり。本躰の感は見るべから

三―玉の誤か

見て尊信美稱する人には睿明の才少し。睿明廣才の者には厚勤篤實の質有りがたし。人見てあやしといへる所、則ち睿明の天質につきたる疵なり。小兵美男の人に大勇あるが如し。大勇のきこえありて其人を見ればあやしきが如し。我心を以てむかへて人を見るが故なり。神靈ある名珠に疵あるが如し。石にはなべて此疵あれども疵とせず。三なるが故に瑕とす。睿明の人其疵をおほはず。君子の風をつくらざるところ、則ち君子なる事をしらず。平生しられずとも、歳寒うして松の紅葉におくるゝ事あるべし。此故に人を見る事古よりかたし。たゞ聖人にして篤實睿明備るべし。それだに十一人の列聖同坐し給はゞ、其氣象同じかるべからず。況や大賢以下の人は、恭敬篤實にしてうち見るより君子と思はるゝ氣象の人には、天下百千歳の習惑をひきかへす程の睿明廣才はなきものなり。それ程のすぐれたる英才は、必ず恭敬篤實の所不足なり、然れども心の無欲清淨なる事はかはりなし。

一學友問。天は其理萬事に應じて無心なり。聖人は其心萬事に順にして無情なり。無

主ずる―生ずるの誤か

子云。養生は清心寡欲を要とす。養生の二字自私自利。此病根東に滅して西に生ぜん。清心寡欲終に得べからず。又云。寧靜を求めんと欲して念生ずる事なからんと欲す。これ自私自利する意必の病なり。是以て念いよ〳〵生じていよ〳〵寧靜ならずと。今吾子念をはらひ去つて無念なる所を本躰と思へるは不可なり。これ却つて私念死體なり。維天之命、於穆不已といへり。天機活潑しばらくも息むべからず。故に人念なき時なし。たゞ正しからん事を欲するのみ。思無邪の三字心法を盡せり。言近うして旨遠し。故に學者ゆるがせにして無窮の味をしらず。戒愼恐懼して獨を愼むも則ち念なり。君子は無欲を以て靜とし。好惡なきを以て無念とす。

一　心友問。古人の書きおきたる書を見れば、博文にして約禮を說く。人情時變に達して甚睿明なり。其世に有りて直談せし人のいへるは、書にて見たる様にはなくて、あやしきが如くなる人なり。厚勤篤實の君子にあらずとなり。疑ひなき事あたはず。

云。尤もさあるべし。天の物を主ずる、二ながら全き事なし。厚勤篤實にして、人の

一致百慮―私欲の累を除くによつて思慮悉く其處を得るを云ふ

や。此一事には欲惑の病なければなり。故に一分の心を盡せば一分の明悟安樂あり。明悟安樂ともに性の妙用なり。性を盡すに從つて生ず。明悟安樂を求めんがために學ぶ者は私欲なり。私欲を以て道を得べき事かたし。心はこれ活潑々地生々不息の理なり。是故に心の官は思といへり。私欲の累除いて天理流行する時は、思慮皆私官を得。これを一致百慮ともいふ。淸水濁水同じく一河の流なるが如し。思慮はたとへば水の如し。間雜は濁の如し。濁をいとひて水をふさがんとするとも、源ある泉なればとゞむべからず。間雜を忌みて思慮をやめんと欲するとも、心の活潑流行なれば絶ゆべからず。源泉ながれて不ㇾ息ときは、まじはりたる濁は一旦の事にて根なきものなれば、終には本源の水計に成りて淸むなり。學者も又期する所なくして實をつとめてやまざる時は、間雜の妄は一旦の惑なれば、次第にのぞき去つて心の本然を得べし。天理人欲竝不ㇾ立といへり。吾子私欲を心の源として、其心の源より出るものを去らんとするは惑なり。天理を心源とせば制せずとも間雜除くべし。陽明

義襲取—孟子に出でたる語なり

闇夜の明たるが如く惡夢のさめたるが如くならんと思へるか。云。しかり。云。何ぞや吾子が願へる心樂といふは。世間諸の苦痛去りて心常に快樂ならんと思へるか。云。しかり。云。それ諸の惑諸の苦は皆私欲より生ず。吾子凡根の私欲を祕藏して、私欲より出るものを去るとも、終レ身功なけん。佛者の今生やすからざるが爲に後生を願ふが如し。其心則ち地獄なる事を知らざるなり。貪欲を本として願へばにや、後生を願ふ者は欲深く惡行なる者なりといへり。世間利とする者は終に道學をきかざるの人なり。吾子苦惑をさとれる事は平人に異るが如くなれども、凡心の私欲利害を帶たる事は同じ。夫欲と惑とは一病兩痛にして、間思雜慮の源なり。此源を不レ絶して此間雜を克治せんとす。凡心を以て俄に聖人の無思無爲寂然不動、感じて通ずるの位を望めり。是義を以て襲うてとると云ふ者なり、身を終るまで得べからず。吾子恒の產なけれども恒の心あり。盗をせざるの事に於て精義入レ神、故に盗をすべき間思慮なし。盗をしたる夢もなし。是何の工夫何の學に得たる

侍らず。むかしの武士は人を大切に思ひて、理屈をやはらげ侍れば、罪科に行ふべき者をも、又よき所あるものなれば惜みてかくし置き、我と悔さとりて改めん事を欲せしなり。世上の理屈をもつては殺すべき者なれども、其身に成りて見ればことわりも有りながら、命を惜む様なるゆゑに、默してことわりをも言はざる者有り。其心を察して助け侍り。今は世間無事なる故に、理屈專にして人を愛せず、罪過を求め出し、理屈を以て穿鑿せば、直なる人は多くは侍らじ。世間さわがしく國家あやふき時は、用にも立べき者をば、何事をも見ゆるし、言葉をやはらげて頼むものなりと謂へり。俄にひきかへては見苦しかるべき事を思へば、かねて有事無事一ならん事を願ひ侍り。

一心友問。間思雜慮の妄念、拂へども跡より生じて克去ること成りがたし。いかなる工夫にてか此心魔を降伏すべきや。云。吾子何の爲に此妄念をいとへるや。云。悟道を得て惑なく、心樂を得て苦なからん事を欲す。云。何ぞや吾子が悟道と云ふは

仕官―先生の仕官は二十七歳の執政時代を最初とす

も、或は名により、或は學見により、心を起して强て安んずるなり。晝夜の道に通じて知る者すくなし。

一　心友問。世の學者の云。人死して精神なし、父母先祖を祭といへども、其祭を受くべき者なし、たゞ孝子の心の、死に事ふること生に事ふる如くするのみなりと。誠に我人共に死しては何かあるべき。云。如此見て悟道せば、まことに易き事なり。たゞ人心のみを見て此見あり。人心は形氣の心なり。此形なければ此心なし。吾人の本心は理なり。理は無始無終。生々して不息、則ち性則ち心なり。君子は此理明にして存す。死生を以て二にせず。人心も天理を以て動くときは、形色共に天性にして形をふむ者なり。亡びざる者は常に存し、亡ぶるものは今よりなし。生死を以て有無をいふ者は道を不知なり。

一　舊友問。貴老いにしへ仕官の時、罪人あれども吟味もし給はず、殺すべき者をも助け給へり。和に過たると申す者あり。云。野拙はむかし風にて、當世の風にはあひ

火氣—感情

融繹—融合和解する事

苦を生ず。況や患難の來ること、冬の寒氣のいたるが如くにして防ぐべからず。故に俗樂は佛家にいへる水の泡の如く、電の影の如く幻のごとくにして其有無を定めがたし。眞樂は悅樂憂患を以て二にせず。憂ふべくして憂ふといへども、憂心中人欲のまじはりなければ其樂を改めず。悅ぶべくして悅ぶといへども、其喜心中人欲のまじはりなければ樂んで淫せず。怒るべくして怒るといへども、火氣の動なければ心躰廓然太公にして本躰の正を不レ失。たとへば外人の相爭ひ相鬪ふ者を見るが如し。其非道なるは我心にも怒る。怒るといへども我にあづからざれば心不レ動が如し。病苦といへども病の爲に心躰を苦めず。常に快活の本然を不レ失。此心の不レ動ところ則ち樂なり。ひとり死生の理に於て、聖學の徒大躰惑なし。晝夜の道とひとしき理はさとれり。然れども其心死にあたりては、日暮れて寢ると同じく思ふ事かたし。爰にいたりて毫髮もいさぎよからざる所あるは、全躰に於ていまだ融繹せざる所ある故なり。さればいまだ至樂に至る事あたはず。世間死をよくする者多しといへど

定性―程子に定性書あり

一　心友問。周子靜を主とすといへり。心を存すればおのづから靜なり。自然に未發の中立つがごとし。いかん。云。靜によりて靜を求むるは氣の靜なり。今の人氣を定め得て存心と思へるは、未發の中にあらず。古人靜を主とするの工夫は、平生義にうつり理にしたがつて私なきを無欲とす。無欲なれば心自然に靜にして未發の中存す。此未發の中は、動靜を以て損益なし。靜を好むは動をいとふ心あり理にしたがふ事專ならず。物にさへらるゝは眞の靜にあらず。程子定レ性を云ふ。定は心の本躰なり。動靜は遇ふところの時なり。王子云ふ。「精神道徳言動大方收斂を主とす。發散は是不レ得レ已なり。天地萬物みな然り」と。此說主靜の功に益あり。人常に不レ得レ已して應ずるときは過すくなし。心無欲にして行無事なり。

一　心友問。俗樂眞樂の分いかん。云。憂苦を去つて悅樂を求むるは俗樂なり。天地の理陽のみにして陰なき事あたはず。人生の境苦樂たがひにいたれり。苦をいとへども去る事あたはず。樂を求むれども得ることあたはず。たまく樂を得ても樂中に

んとするは、たゞ其まゝの虛文不實にして棄て置くには劣つて、私いよ〳〵すゝむべし。事の多少博約にかゝはらず。唯心の誠を立て天下誠を尊ぶは、太古無爲淳朴の眞ならん。風俗は漸をもつて復して害あるべからず。

一心友問。下學上達は、下人事を學んで上天理に達すといへり。いかん。云。しかり。陽明子云ふ、「敎て學ぶべく工夫を用ふべき者は皆下學なり。上達は下學の裏にあり」と。耳目の聰明、說解の精微、心思の工夫は人事なり。此人事の中より、耳目言說心思の人力に及ぶべからずして自然に得る者あり。これ則ち上達の天理なり。下學のつとめの誠あるによつて至るべき所なり。

一心友問。知行合一といへども知て不行者多し。知ることは易く行ふことは難し。されば知行合一とはいひ難からんか。云。王子云。知は行の始なり、行は知の成るなりと。此說易簡にして得たり。知と雖も行はざるは、始あらずと云事なし、よく終有る事鮮しといへるものなり。知ること實ならざるが故に成ることなきなり。

下學上達―論語憲問篇

始あらず云々―詩經大雅蕩之什に見ゆ

無爲—老子莊子の謂ふ所の如し

りて、衣服飲食動作の異なるごとし。久しければ弊あり。故に時に因つて損益すべし。又曰はく「麻冕は禮なり。今純は儉せり。吾は衆に從はん」と。緇布冠は三十升の布を用ふること禮の法なりと雖も、今の人の手になりがたし。故に世人これを省約す。孔子も從ひ給ふなり。三代の禮といへども、今の世の人情時勢氣力に叶ひがたきものは用ふべからず。萬々歳といへども、日本の他方といふとも、祖述して師とすべきは唐虞の治なり。孔子云ふ。無爲にして治るものは其舜か。黄帝堯舜衣裳を垂れて天下治る。問。陽明子云ふ。行ふに太古の俗をもつてせんと欲するは老佛の學術なりと。眞に反レ朴還レ淳ことは、萬事を放下せずは叶ふべからず。專無爲を事とするは、三王の時に因つて治を致すが如くなる事不レ能。云。無爲にも又眞あり跡あり。時に因て治を致して、近者いとはざるは則ち無爲なり。俄に太古淳朴の跡をかへし行はんと欲すとも得べからず。勢ある人しひてなさば大に害あるべし。天下の大亂は虛文勝ちて實行衰ふるによるといへども、事をもつて儉約朴素にかへさ

他方―支那以外の國

仲尼云々―中庸に見ゆ

行夏時―論語衛靈公篇に出づ

なり。

一心友問。陽明子云。唐虞以上の治は後世復すべからず。三代以下の治は後世法とるべからず。惟三代の治可レ行。しかれども世の三代をいふ者、其本を明にせずして其末を事とす。又復すべからずと。三代の法令の時に叶ひ侍るや。云。萬世師とすべく他方法るべきは堯舜の治なり。禮いまだ備らずといへども渾然として存せり。篤恭にして天下平なり。易簡の善至德に配し、中和を致して天地位し萬物育するの至なり。子思云。仲尼堯舜を祖述し文武を憲章す。孟子云。堯舜を師としてあやまてる者はあらじと。唐虞三代共に其本を明かにする時は一なり。其末を事とする時はみな復すべからず。三代以下は道行れざれば謂ふにたらず。世の三代をいふもの、多くは周の博文の末を事とせり。夏商をまじへ時に應ずるをとれる者すくなし。孔子云。夏の時を行へ、殷の輅にのれ、周の冕を服せよ、樂は則ち韶舞をせよ。これ孔子の堯舜三代の法の其時に行ふべきものを取給ふ意なり。聖人の法は春夏秋冬の時によ

精一―人心惟危し道心惟微なり惟精惟一允に厥の中を執れとある書の大禹謨の語による

是を人欲と見るは異學に似たり。人欲にはあらず、義理の上より知覺して、寒をふせぐべき理に叶うてふせぎ、暑をさくべき理に隨つてすゞしくし、飲食すべき理ある物を飲食し、男女も禮あり理ありて相親む。是みな道なり。何ぞ人心を人欲とせん。寒暑其分にこえて溫涼を求め、飲食已に得ざる物を飲食し、男女禮をまたず理に不叶して相交るは、人欲の私なり。此形ある間は形に付たる生欲あり。此生欲の好む所は實にして虛ならず。求めに應ずる物も又形色あり。物あれば則あり。故に此生欲の節に中るべき精靈の照しは、微妙にして聲色なし。精一の工夫おろそかなれば存しがたし。精といふは心を神明にして、相火たかぶらず、氣にごらず、清淨の眞樂存す。故に形氣の欲にながれず。一は一團の天理のみにして形をふむものなり。二心なく二道なし。陽明子當世の學者の心理を二にして、外に向ひ去るの病を格すに急なれば、朱子の苦心を察し意をむかへて解にいとまなく、時の弊によりて謂へる成るべし。又程子の人心を人欲といへるは生欲の心なるべし。かろく見て可

人心道心―人心は人欲道心は義理

朱子王子いづれも賢者なり。他の文義に於ては見る所かはり有れども、人心道心天理人欲の所に如此の異は有るまじき事ならずや。云。尤も心は一なり。人心正を得るものは則ち道心なり。二あるにあらず。惣じて語を解すること、古人の意を迎へて見ずして、言語文章のみを以てする時は、古人の苦心かくれて見えざる故に、非をあぐる事有り。今愚朱子の意をむかへて見るに、人心道心二ありとするにはあらず。道心一身の主と成りて、人心命をきくと云へるものは、暫くたとへをとれるなり。故に云ふ。心の虚靈知覺は一のみと。性命の正に基きて、天理の上より知覺する時は、これを道心と云ひ、形氣の末によりて知覺する時は、これを人心と云ふ。尤も人心を人欲と見るも、所によりての文勢なり。堯舜傳受の人心道心は、天理人欲をさして宣ふにあらず。人欲なれば危しといふまでもなく惡なり。危しといへるものは、今惡きにあらざれども、惡くなるべき勢をいふなり。人心は此形の有る間形につきて知覺運動するものをさして云ふなり。寒暑を知り飲食男女を知る所なり。

大を云々―中庸に此語あり

築山の如し。そのすこしきなる事を知るべし。

一 心友云。人死して其神天に歸すといへり。何の精神か一物と成りて天に歸すべき、魂氣游散し魄躰蟬脱の如し。空々寂々たり。たゞ此空のみ本來の常躰ならずや。云。しかり。世人形躰の上より見を立るが故に、生死を以て二にす。此故に天に歸するの説あり。吾本不來、天と吾と一なり。何の歸するといふ事かあらん。吾心の靈明則ち天地の萬物を造化する主宰なり。則ち鬼神の吉凶災祥をなす精靈なり。天地鬼神の精靈主宰なくば吾心の靈明もなからん。吾心の靈明なくば天地鬼神の靈所もなからん。今死躰の人は精靈游散す。死躰の者の天地萬物いづれの所にかあるや。故に君子大を語れば天下よく載ることなく、小を語れば天下よく破ることなし。

一 心友問。朱子道心常に一身の主と成りて、人心毎に命を聞くといへるを、陽明子二心なりといへり。程子の人心は人欲なり、道心は天理なりといへるを引て云ふ。「天理人欲竝び立たず。何ぞ天理主と成りて人欲の命を聞くといふ事か有らん」と。程子

夜氣云々ー靜平にもちつきたる頃の精神

犧皇已上の人ー晉の陶潛が語なり人品の高き事伏犧時代より以上の義

二萬歳に配す。陽明子云。夜氣清明の時、視る事なく聞く事無く、思ふ事なく作す事なく、淡然平懐なるは則ち是伏犧氏の世界なり、平旦の時神清く氣朗にして雍雍穆々たり。則ち是堯舜の世界なり。日中以前禮儀交會氣象秩然たるは、則ち是三代の世界なり。日中以後神氣漸く昏くて往來雜擾するは、則ち是春秋戰國の世界。漸々昏夜にして萬物寢息し、景象寂寥たるは、則ち是人消し物盡くる世界。學者良知を得て氣のために亂されずば、常に犧皇已上の人とならんと、晝夜の道に通じて死生をしり、死生に通じて天地の有無を知るべし。有形のもの何ぞ常なるべき。我無に歸する所、則ち天地の終なり。

一心友問。聖賢君子は大に人に異なり。しかるを其世に人知らざる事あるは何ぞや。云。君子は富士山の如くならんと思へるか。富士高しといへども平地にしかず。萬山を戴いて重しとせず。河海ををさめて漏らさず。廣厚の德ありといへども、平地何の見るべき事かあらん。世中少し學知有る者大に衆に異なるが如くなるは、庭前

居は氣を移す—孟子の語なり居は躰を移し躰は氣を移すと

少し學びてこそ殊なるものゝねも聞えはべれ。たとへ世俗達者に琵琶琴をしらべ侍れども、爪音のけだかき所公家には及び侍らじ。物かきたるも、手はわろけれど公家の手蹟はいやしからず。能筆にても平人の手蹟はけだかき所なし。世々天のゆるせる位ありて、居は氣をうつすの道理なり。しかれば樂ひろく成りて、始めて公家の公家たる位も知り侍りぬべし。しからざる人は、たゞいらざる物ながらそなへ物とならでは思はず。其上何程すゝめなさしむるとも弘くは成り侍らじ。至理の寓する物にてあはき聲なれば、俗と近きものなり。筑紫琴さみせん能拍子などのおもしろきを捨て、思ひつかれぬ樂を好む人は、百千人に一二人なり。異なる志ある人ならでは好まず。

一　心友問。いかなるをか是中和とせん。云。いひがたし。過不及を知るところ今日の中和なり。中和を致して天地位し萬物育すといふものは德の至なり。

一　心友問。天地萬物の始、十二萬歳の數、何を以てか是を知るや。云。一晝夜則ち十

やつりのために妻子離散し田宅を失ふ者多からん。心肝をいたましめて之をきく事をいとふべし。何の風化の益かあらん。其上始は故事をとるとも、十年の前後には事かはり風俗を失なふやうなる事に成り行くべし。よからんと思ふ事も、本たゞずしては皆害になるものなり。一向に善事もなさでうち置きたるには劣る事なり。あやつりなどの座の者は、凡俗の中にてもすぐれて習ひあしゝ。かやうの者の心氣風俗もかはりゆき侍らん時ならでは、故事の善も定り侍らじ。問。禮樂をしたふ者あれども、ふせぎて爲さしめざる人有り。其言に云ふ。「絃などは世に人の知らざるを以て其家の規模とす。俗に廣く成りては詮なき事なり」と。まことに公家などは世俗の知らざる風流あるをもつて、人の思ひなしも異に侍り。糸竹の樂世にひろまり侍らば、公家の御爲には惡しくや侍らん。云。樂の世に弘くなることは、公家の御爲には猶以てよき事に侍らん。樂を知らざる人の耳には、樂も能拍子も筑紫琴も同じことに思へり。其中能拍子、筑紫琴などはおもしろし。樂は何のおもしろげもなし。

移風易俗—此語禮記に出づ

かたるべし—かたかるべし歟

操—悩偶之居の事

なり。なす所義にかなはざる事あれば動くものなり。

一心友問。移風易俗。無善於樂。今の樂を以て民俗風化に益あらん事心得がたし。云。先民俗風化の本たる道學興起し、上に賢君立給はゞ、今のあやつりなどいふものも、孝子忠臣貞女等の故事をのべて、農工商家業の暇に及んで、勞役を休せしめがてら是を觀る事を得せしめば、風化に於て益あるべし。他の良心を感激する事すくなからじ。糸竹の雅樂の如きは、道學に志す者か、又は上臈に生付たる人ならではおもむきがたし。道の行はるゝ事數年せば、いやしき心奢の習など去りて漸くおもむくべし。道德を本として禮樂行はれば、すたれたる音律歌舞の曲も漸を以て興るべし。問。有德の君出世し給ひ、道學の興起するまでの事はかたるべし。しからずとも、孝子貞女忠臣義士等の故事をもつて操とし、能として民俗の男女に見せしめば、其本心の發見をもよほし、善心をひらき導くべきか。云。道なくして之をなさば必ず奢べし。奢りて財を費さば、其流れ皆民間の困窮なるべし。此能あ

陽明の語ー仙家佛家皆可なれども偏の一心より來れるに如かずとなり

す。吉祥家門にあつまる。儉は無欲の道なり足ることを知る者は富めり。不レ貪をたからとするの義なり。事をもとめず物を備へず、所レ有に隨つて心足りぬ。物すくなく事しげからずして靜なり。まことに慈仁にして求なくば、これに與ふるに天下を以てすとも顧るべからず。況や國郡をや。富これより大なるはなし。

一 心友問。貴老老佛は虛無をきはめ得ずと宣へり。彼虛無を其道としてくはし。聖學は虛無を學とせず。何を以てしか宣ふや。云。我心則ち大虛なり。我心則ち聲臭形色なし。萬物無より生ず。聖學は無心にして虛無存せり。虛無の至なり。老佛は虛無に心あり。故に眞の虛無にあらず。心を用ひて虛無を云ふ。故に其學くはし。然れども爲にする所あり。陽明子云ふ。聖人といへども仙家の虛上に一毫の實を加ふる事あたはず。然れども仙家の虛は養生の上より來れり、佛家の無上に一毫の有を加ふる事あたはず、しかれども佛家の無は生死の苦海を出離するの上より來れりと。告子が不動心も又似たり。心を不レ動上より工夫を用ふるなり。心の本體は原不動

老子―老子に我に三寶あり寶として之を持す一に曰く慈二に曰く儉三に曰く敢て天下の先と爲らずと

一學友問。老子慈謙儉を三寶とす。其意いかん。云。慈は仁の實なり。人を愛すれば人も亦己を愛す。人の悦ぶ心をあつめて親を敬ひ子を愛す。和氣身にみちて命ながし。善をよみして惡をにくまず。至公無我にしてひろく躰ゆるやかなり。天地萬物皆己が有なり。太虚を心とすればなり。人の貧賤も己が貧賤の如し。故に義に當つて財をしまず。人の富貴も己が富貴の如し。故に富貴の人の、德ありて士を敎へ民を安ずるは、己が子のよく家を保ちて己が子を養ふが如し。不德にして士を不レ敎民を不レ安は、己が子の不明なるが如し。耳に聞目に見るべし。口にそしるべからず敎ふべくして敎ふることあたはざるは命なり。謙は虚明の德なり。心一物なき故に、天下の益をきたして爭ふことなし。明かなるが故に、天下の人みな己にまされる所あるを見る、故にゆづらずといふ事なし。天下の知をあつめて用をなす。人のために苦をになはず、常にゆたかなり。天下の谷となりて人に上たらん事を欲せず。しかれども謙は尊くして光り、卑くして踰べからず。人にくだる者をば人つねに愛敬

五官無體—五官ともに對象ありて始めて用をなせばなり

たゞ事のうたがはしき時の變に至りては、常理のいまだあらはれざる事あり。こゝに於て卜筮を用ひて天に問ふなり。これ又理なり。神明は不測なれども、神明理にたがふ事なし。故に理の必然なる事には卜筮を不ㇾ用。

一 心友問。陽明子云。目に躰なし、萬物の色をもつて躰とす。耳に躰なし、萬物の聲を以て躰とす。鼻に躰なし、萬物の臭をもつて躰とす。口に躰なし、萬物の味を以て躰とす。心に躰なし、天地萬物感應の是非をもつて躰とす、とはいかん。云。しかり。此理明白なり。唯心は空を躰とす。故に天地萬物に於て感應せずといふ事なし。たゞ心のみならず目耳鼻口も同じ。目に色なきは空なり。故によく五色を明かにす。耳に聲なきは空なり。ゆゑによく五音を聞く。鼻に臭なきは空なり。故によく好惡を知る。口に味なきは空なり。故によく五味をわかつ。これみな心の空竅を目耳鼻口にひらくものなり。心は生々の理を以て神とす。日として生せずと云ふ事なし。是を性といふ。性は心の本然なり。

雨ふり時に風ふき、枝をならさず壤をながさず、鳥獸魚虫草木までも其澤をかうぶりて其生を遂ぐるをいふ。帝堯六尺の身方寸の神舍、如ㇾ斯の廣大に至れり。神明不測の妙、天下古今是にしくものあらんや

一　心友問。易經に於て、程子は理を主として傳をし、朱子は卜筮を主として本義をせり。陽明子云。卜筮は是理なり、理も又是卜筮なり。卜筮は疑を決し吾心を神明にする事を求むるなりと。まことに發明なりといへども、いまだ心よく落著せず。云。易に無卜の卜無筮の筮あり。卜筮を用ふるは末なり。禮樂に玉帛鐘鼓の有るがごとし。故に卜筮を主として云へば卜筮にあらずといふ事なし。理を主としていへば天下の理易にもれたる事なし。初九潛龍勿ㇾ用。君子潛龍の時に當りては、よく其才知をかくして、ひとり其身をよくし德を養ふべし。如ㇾ此するときは吉なり。之に反する時は凶なり。これ卜筮を不ㇾ用して占明かなり。他皆是にならふべし、無筮の筮にあらずや。理を以て占ひ考ふるに、たがふ事なきことは筮を用ふるに及ばず。

傳本義—程子に易傳朱子に易本義の著あり

主師—主師の誤か

きものをえらび用ひ給へり。天下の人帝堯の聖知を忘れて善言を奉れり。故に四海の人情殘さず知り給ひて、其命令よく可にあたれり。みづから聖知を以て先達たまはず、天下の人の天質の美を盡さしめらるゝは謙讓の至なり、己を捨て人にしたがはんと思ふ心はなけれども、心虚にして一是を有せず、明にして人を知り、人の才知の得たる所をのこさず、天下の事を天下の人になさしめ給へり。帝堯の天下の人の才知に主師たる所は人不レ知なり。終に天下をも子に傳へずして賢にゆづり給ふは、遜讓の大なるものなり。帝堯一人の奇特にあらず、理の當然なり。然れども此理の當然を行ふ事、至德にあらざれば行ひがたし。光二被四表一とは、天の覆ふところ地の載するところ、日月の照す所霜露の墜つる所、舟車の至るところ人力の通ずる所、凡血氣あるものは尊親せずといふ事なし。聲名中國に洋溢して施て蠻貊に及び、數千歲の末の世に至り、日本の遠方の者までも心にしたふ事あり。格二于上下一には、天地の化育を助けて陰陽の氣至和至順なる故に、風雨民の願にしたがひ、時に

易簡にして天地の理得たる者なり。允は信なり。恭儉にしておごりたかぶる事なきは、天地人三極の至德なり。天は高遠なれども、其氣降りて萬物を造化す。日月は高明なれども、下土を照して淸濁をえらばず。大山高峻なれども、山澤氣を通じ潤澤下にくだる。聖人富貴にして諸民を子とす。帝堯の恩澤天下にあまねくして、恨み憤る者まれなる故に、諫鼓をかけて民庶のいきどほりを直に聞しめされしは、げす近きの至なり。俗にげすちかきといひて、人のほむるも恭の一端なり。又恭には恭儉とて自然に儉の道理あり。道德仁義に富有にして天理の眞樂ゆたかなれば、世間の願は少しもなし。事物求めなければおのづから質素なり。心有りての儉約はいやしき所あり。無欲仁厚より無心にして儉なるは、殊勝に淸白なる者なり。四方の物を帝土へあつめざれば、天下ゆたかにして帝土長久なるものなり。これを財散ずる時は民あつまると云ふなり。克讓とは、帝堯の御心虛明にして一物なければ、百官の諫言天下の善言をうけいれ給ひて、其中庸の至理に叶ひ、時變に達し人情に近

げす近き―下情に通じて眞卒簡易なるを云ふ

集義和書　巻第十四

○義論之七

一心友問。古人あまた聖人の德を形容す。其中一人の聖人をゑがき出して親切なるはいづれぞや。云。書經に帝堯の德を記して云ふ「欽明文思安々。允恭克讓。光被四表。格于上下」と。如此親切にして著明なるはあらじ。欽は本躰固有の敬なり。無心自然にして存せり。維天之命於穆不已といふものなり。深遠にしてやまざる者は常に虛靈不昧なり。故に欽明といふ。文思はあやあるおもひなり。心の官の思のみにて、閒思雜慮不常往來の妄なし。思ふべき道理ある事にのみ覺照して不時の思索なき故に、思ふといへども自然なり。故に文思といふ。安々は應事接物。起居動靜從容として天則にあたる。自然に出て無事なり。篤恭にして天下平かなり。

善人豊富―詩經に出づ

或は家を亡すものなり。共に久しき事あたはざる所なり。周に大なるたき物ありて善人是富めりといへり。武王天下を有ち給ひて、商の代につみたくはへたる財用を、天下にほどこし散じ給ふ時、四民のたよりなき者にあたへて、餘あるをば善人をえらみ與へて富しめ給へり。善人は人欲の私なき者なれば、天下の財用は天下の通用なる道理にまかせて、富有に成りても自らたからとし樂まず、人にほどこすを以てたのしびとす。君子は民の父母といへるも、父母たる者たからあれば、子に分ち與ふるをもつて樂びとするが如し。上より國天下に財をわかち與へんとし給ひてはいかほど多く有りてもあまねく及ばざるものなり。しかのみならず與へて却つて害になる事あり。たゞ其利を利とする樣に政をし給ふばかりなり。なほも漏るゝ所あれば、彼善人仁者是をすくへり。私にほどこすはよく當るものなり。外より見て我にもたまふべき事と思ふ者なし。故に善人を富しめ給ふは、洩るゝ所なく仁政をあまねく及ぼさんがためなり。

一　心友問。里仁爲美とは、孟子の仁は人の安宅なりといへる意にて、人の身を安んずる所は古郷なり、心の安樂にして常なるは仁なりと宣へる義なりと云へる人あり。集註の解は外ざまの事なり。此説おもしろく侍り。云。しばらく學者の内に力を付る爲にはよし。本解は集註の旨なるべし。此語は爲にする事ありて宣へるか。本よりの古郷ならば、風俗惡しとても立さりがたき義もあるべし。人の國には仁里有りとても、行いて住むことならざる勢もあり。一偏には定がたし。好んで不仁の風俗の地に居る者のために、知仁ともに失へる道理を敎へ給へるか。此章にて仁を本心の事とせずとも事闕ることとあらじ。所によりて解べし。問。不仁者の約に居がたく、樂にも久しからざる事は何ぞや。云。不仁者は物を二にす。一己の私を持して世を渡るものなり。順を好み逆をにくみ、富貴をねがひ貧賤をいとふ。故にせはせはしきはいとひにくむ所なれば、其地に安ずる事あたはず。或はあふれ或はやぶるゝものなり。富貴を得ては大に悅び、己一人の榮耀とす。終には病苦をまねき、

親炙―孟子に出づ親近して薫化せらるゝを云ふ

る者の其家職をつとむる事は常の業なり。

一心友問。貴老の書を見て、口にはあざけりそしりながら、心にはひそかに取得て、みづからの惑ひをもわきまへ、我心より出たるやうに人にも敎ふる者侍り。書をあらはし侍るにも、貴老の書の筆法發明多し。知らざる者はいづれを先ともわきまへ侍らじ。貴老祕して出し給はず。取用ふる者の書は出で侍れば、かへりて末や本に成り侍らん。云。いにしへより實德ある人にはにせが多し。予不德にて言語のみなる故に、人の取事やすきなり。夫有德には親炙する人其化をかうぶれり。文明の時は有德の人なけれども、言說を以て世の惑をひらく功あり。予が言としられて世に益あらんも、人の言と成りて助あらんも同じ事なり。予が言はなほ人の言のごとく人の言はなほ予が言のごとし。共に天の靈明より生ず。たとへ取用ふる人あしき心ありとも、聞く人はまどひを辨ふべし。其言によりて吉利支丹如きの左道にまどはざる風俗とならば幸甚なり。

學而不思云々―論語爲政篇に學んで思はざれば則ち罔く思ふて學ばざれば則ち殆しと

鍛錬し、いまだ知らざる事を日々にたづね知るといふ事か。云。溫故は古の道を學ぶなり。知新は今に行ふべき至善を知るなり。いにしへの道の眞を得てその跡によらず、今の時所位に叶うて、知りやすく行ひやすき様に敎へ治むるを君師といふなり。今の學者博く古の書を見るといへども、心に工夫受用をせざれば身に行ふ所をしらず。書に向つて講談する時は學者の如し、書をはなれて日用常行に交る時は平人に異なる事なし。是を學びて思はざる時は罔しと云ふべし。又晝夜工夫受用して心思をくるしめ、道を行はんとする者あれども、學せばくして己が異見にまかする故に、己をあやまり人をあやまる者あり。これを思うて學びざる時は殆しといふなるべし。問。博學とはいかほどの書を見る事に侍るや。云。古の博きといふは、易詩書禮樂弓馬書數のみ。今の萬卷の書はあるべき様なし。數多の書にわたりても見せばき者あり。博學ならずしてひろき者あり。今吾人の己が爲に學ぶべきものは四書を本とすべし。其餘の經傳は年と氣力とにまかすべし。其家に生れた

川の云々—論語子罕篇に子川上に存りて曰く逝く者は斯の如きか晝夜を舍てずと

溫故知新—論語爲政篇

宣へり。これ聖人天下を有つの能事なり。是によりて仁を求むべからず。形あるものは必ずかくる所あり。不相通の勢なり。鳶飛んで魚躍る。形より見れば各別なり。其飛躍する所以のものは一なり。

一　心友問。死生の道はまどはずながら、生を好み死をにくむの心はきよくつきがたきと見えて、年より白毛生じ身體かはりゆくを見ては感慨の心おこりぬ。いかなる受用にてかかゝる凡情は變じ侍るべきや。云。これ學者不學者共に人情の通情なり。くらくまどひて多きか、明にさとりてすくなきかの違ひのみなり。ともに仁ならざる事は一なり。孔子川のほとりにまし〳〵て、逝く者はかくの如きか晝夜をとゞめずと宣へり。是道體なり。川流の見やすきを以て、道躰の無聲無臭を敎へ給へり。吾人白髮生じはだへなみよりかはりゆくものは、彼ゆく者と共にゆく川流の道理なり。仁を知るものは何をか好み何をかにくまん。

一　心友問。子曰。溫故而知新。可以爲師矣。とは前に學びたる事を復してます〳〵

どはず。故にたのしむ。流水を見て歎息す。左右其源に逢ふ。知の象あればなり。仁者は萬物をもつて一體とす。死生禍福ともに吾有なり。故に生々して不亡ものは命ながし。無欲にして靜なり。山の象あり。德性の動いて樂むを知といひ、靜にして壽きを仁といふ。

一心友問。仁は全德の名なり。しかるに博施濟衆をもつて、仁よりも大なりと宣ふは何ぞや。云。これ仁の用をいへり。仁は天地萬物を以て一體とすといへども、用に於ては天地の大なるも人倘恨むる所あり。堯舜もやめることわりなり。仁者の己立んと欲する所、則ち人を立る所なり。己達せんと欲する所、則ち人を達するの事なり。思ひ謀てしかするにあらず。仁者は一己の私なくして天理流行す。故に人我の隔なし。物を利するの德ありて己を利するの欲なし。この故に自然にしてしかり。よく親切にたとへをとるも物と二あらず。遠は物にとり近は身にとるなり。仁の體をいふときは、太虛天地中國夷狄のこす物なし。子貢は其用につきて云へり。故に

博施云々—論語雍也篇に子貢の問へる言なり

べきとーべきこと躰

周流ー物に凝滞せずして思慮を周悉するを云ふなり

用ふる時は行ひ舎つる時は隱るゝなり。我を約するの禮は、人欲きよく盡きて天理流行するなり。欲罷不能ものは、見る所明かなる故なり。今の人志の立てがたき事を憂ふる者は、いまだ見る所明かならざればなり。明かなる時は、こゝろみに止めんと欲すれども止むる事あたはず。竭才とは、手の取り足の行くがごとし。天質の心知を用ふるなり。顏子志學より善信美大に至れり。其才を竭してつとめて及ぶところなり。如有所立卓爾。雖欲從之末由也已。これより後大にして化せんとす。功夫つとめの及ぶべきにあらず。聖學峻絶の地位、言語の不及ところなり。此時顏子天年終らんとするの前なるべし。天顏子に年をかさましかば、化して聖人となるべきと期すべからず。

一心友問。知者は動き仁者は靜なりと。動靜は不相似といへども、ともに有德の人なるか。云。是二人にあらず。一氣の屈伸天の陰陽なるが如し。一動一靜互に其根をなせり。よく動く者はよくしづかなり。知者は周流して世にとゞこほらず物にま

仰之云々—論語子罕篇
博文約禮—論語雍也篇

も文學せざれば其道理に通ぜず。文學樂道かね用ひても、心術を知らざれば是を心に得て樂む事あたはず。この故に樂に成る者すくなし。

一心友問。仰レ之彌高。鑽レ之彌堅。瞻レ之在レ前忽焉在レ後。此章道の得がたき事をいへるか。顔子だに得がたき道ならば、後學の者いかで及び侍るべきや。云。然るにはあらず。大山を高しといへども、限あればのぼり盡すべし。天を大なりといひ日月を遠しといへども、象形ある物は數學を以てはかり知るべし。たゞ道の高遠はきはまりなし。故にその高きに付て、仰レ之彌高うしていたりがたし。目力見解の及ぶところにあらず。鑽レ之彌堅とは、力を以て入るべからず、才覺をもつて得べからず。瞻レ之在レ前忽焉在レ後とは、文章言語を以でかたどるべからず。知識の及ぶべきにあらず。たゞ實義を明かにして後、不レ仰して高遠に及び、德行ありて後無窮の門に入るべし。無知の知を得て後無方の神に至るべし。問。博文約禮はいかん。云。我を博るの文は、致知格物を以て萬物一體の身を修め、古今人情時變に達して

嚴厲—きびしくおごそかなる事
五聲—宮、商、角、徵、羽

と見るに、是をなし得て利祿を求むべきとも名を得べきとも思はず、文を學びては道理をわきまへ、弓馬を習うては其業をよくせんが爲なれば、よるところの心もよぎなり。しかれども其人の間暇無事の時、從容遊樂の地において心を用ふるを見るは、其安ずる處なり。爲ところ依ところ迄よき人はあれども、安ずる所に於て正しき人稀なり。その故は、爲ところまで依ところまでは心を起してつとむればなり。大勇力の人ありて志篤實なりといへども、樂を不ㇾ知時は、安ずる所に於て心を用ふる事あたはず。或は怠惰或は嚴厲なるものなり。是正しき事にあそぶ道を知らざればなり。正樂をもてあそびて後、心の安ずる所遊びたのしむ事正しく、德に入ること易し。夫樂に五聲十二律有り。或は歌舞し或は糸竹をしらべ、人の性情を養うて邪穢を蕩滌し、和順にして道德を得るものなり。故に風を移し俗を易ふる事樂よりよきはなし。道學の樂に成就することわりは、問學し正樂を習うて後初めて知るべし。文學して道理を知るといへども、樂を不ㇾ知者は其風情に通せず。樂を學びて

を來す。不レ爭不レ奢身にほどこせば肌膚の會筋骸の束をかたくす。事に用ふれば節制度數の文あり。家國天下に及ぼすときは吉凶軍賓嘉の品有り。吉は祭禮なり。凶は喪禮なり。軍は軍法なり。賓は主客往來交會の禮儀なり。嘉は婚姻の禮及び冠禮をいふなり。人恭儉なき者は心を喪ひ身を失ふ。家國天下に至るまで、恭儉謙遜の敎なき時は、驕奢日々に長じて爭逆の事發す。終に國亡び天下亂る。故に身より家國天下に至るまで、禮なければ不レ立故に、禮を知るものは、敬もつて心を存し、儉もつて身を修め、遜順以て家をとゝのへ、謙明以て國を治め、篤恭にして天下平かなるに至れり。禮に立つの義明かなり。問。今管絃の樂といふものを見侍るに、樂によりて正心修身齊家治國平天下の事、成就せんとも思はれ侍らず。古の樂に成りし者はいかん。云。孔子曰。視二其所一レ以、觀二其所一レ由、察二其所一レ安と。こゝに人ありて、其平生のなす所は何事ぞとみるに、文學弓馬等を學びて文武のつとめに怠らず、其する所はよけれども、其心のよる所德業を立んが爲か、名利を求めんが爲か

天眞の正きに基き養うて得るところあり。大體にしたがふものなり。藝に遊ぶは禮樂弓馬書數等の、人倫日用のことにおいて正しき所にあそぶなり。六藝は至理の寓する所なり。故に專にをさむる時は、末の理に流れて本心の德を失ふものなり。遊ぶ心を知つてなす時は、其術を盡してきはまるといへども、道德の助けと成りて末藝にながれず。遊ぶ心を不知して上手となるものは、道德の大なるをもつて藝術のすこしきなるをなすものなり。是その厚うするところを薄うすることわりなり。其薄くする所を厚うすれば、藝術身の害にも成るもの多し。

一心友問。詩に興るといへども、後學の者興る事あたはず。古のおこりし者はいかん。云。古の文を學びしは詩を始とす。詩は志をいへるものなり。善惡邪正共にみな人情の實事なり。故にこれを學ぶ者は實學なり。人倫日用の實事に於て、善心を感發し善行を興起し惡をこらし邪をふせぐ事をしれり。これ詩によりて志のおこるにあらずや。問。禮に立つものはいかん。云。禮は恭儉謙遜を本とす。虛中に天下の益

詩に興る—論語恭伯篇に詩に興り禮に立ち樂に成るとあり

左道―邪道なり禮記の王制に見ゆ

志道云々―論語述而篇の語

ども昨日の我にはまさるべし。一たび道に志すものは、いまだ道を見る事たしかならざれども、志善にむかへば大なる不仁不義をばなさず。邪僞の左道などには惑ふべからず。氣質によりて正しき人は、行跡よしといへども道をしらざる故、心に守なく明かなる所なければ、其身は好人の樣に見ゆれども、事の邪正を知らずして不義をもなす事あり。又左道などにまよふ者あり。天の物を生ずる此德あれば此病あり。知不足なるものは行正し。行不足なるものは知明かなり。志ある者は多くは行不足にして知明かなる所有り。外より見る時は、知くらくても行正しき人まされり。たとへば草木の如し。今日養を得て明日長ずる物ある、其本をはからずして末を同じくせば、一尺の養を得て長ずるは、二尺の木の長ぜざるには、俄には越えがたかるべし。

一　心友問レ志二於道一。據二於德一。依二於仁一。遊二於藝一章。云。他岐の惑なく、人道の正きを得んと欲するは道に志すなり。德によるは有德の人により近付なり。仁に依るは自己

或は形是をさけ、或は心是をさくべし。我身にも如ㇾ此の不善有りやとかへりみるべし。是よき受用なれども、かくの如くのみ見る時は、よき事はよけれども師外にあり。心の外に向ふ事を免れず。もし師を内に求めば、善を見て好する心は、則ち我身に善を行ふの師なり。不善を見て悪む心は、則ち我身の不善を改むる師なり。心は無ㇾ聲無ㇾ臭なれば、感應の跡依て知るべし。明師ありといへども一念の微は知りがたし。たゞ我にありて善惡を知るの靈明を奉持するときは、師我に有りて幽明のへだてなし。

一心友問。人みな志ありといへども、志す所たしかならず。云。志といふは道に志すなり。初學の人道に志ざして、いまだ道を知らずといへども心思のむかふ所ㇾ正なり。故に邪僞の惑すくなし。問。志なけれども正しき人あり、志有りといへども正しからざる人あるは何ぞや。云。氣質よき人は、道を學びざれども正しきものなり。氣質あしきものは、道に志すといへども俄に善人と成ることあたはず。しかれ

人皆聖人—曹交が孟子に問ひし人皆以て堯舜たるべしと亦同義なり

三人行—論語述而篇

と。君の祿福もながく絶えて天下やぶるとなり。此時に當りて、彼財用を心のまゝにして榮えを極めし富商も、盜賊の奴と成りて、悲哀すとも益なかるべし。聖人の言たがふ事なし。

一 心友問。人みな聖人たるべしと云へり。迂闊なる樣にもきこえ、又聖人をことあさき樣に思へる者もあるなり。云。其全德をいふ時は、聖人は神明不測の號なれば、平人の知らざる所なり。しかれども人の人たる實躰は聖人と異なることなし。人みな明德あり。大人は赤子の心を不レ失ものなりと云へり。學は後來の人欲を去りて、元本の天理を存する事を學ぶものなり。此心天理に專にして人欲の私なき時は、則ち聖人の心なり。

一 心友問。心の内に向ふと外に向ふとの模樣はいかゞ。云。言ひがたし。論語に三人「行必有二我師一」といへり。こゝに人三人有り。其一人は我なり。善きを一人とし惡しきを一人とす。善人を見ては是を好しこれに與し是を習ふべし。不善人を見ては

堯云々—書經大禹謨に出づ

や。云。其口を箝て私議せしめざるにはあらず。自然の勢を云へるなり。天下有レ道ときは、天子は天下の富貴を有つて人にかさず。國君は一國の富貴を有つて人にあづけず。大臣は君を助けて私の權勢なし。農は耕し、工は其職をよくし、商は有無を通じて其利をするのみ。天下國郡の財用は自然の勢ありて商はからず。何ぞ國天下の政令を議する事をせん。天下道なき時は、國君世主の驕奢なる事、有道の時に十百倍すといへども、富貴の權は下にうつるものなり。故に商人國天下の財用の本末を心に取得て、國天下の利をあみし、山澤の淺深河海の運行をたなごころの内にす。故に商は日々に天下の事に委しく、士は日々に萬事にうとくなりぬ。たゞ庶人の私議するのみにあらず。財用の權商の手にありて心のまゝに成るものなり。故に商日々に富みて士日々に貧し。士の貧乏極まる時は、民にとること法なし。士民ともに困窮する時は、天下の工商利を失うて衣食を得べき便なし。よき者は纔に富商の數十人のみなり。是を四海困窮すと云ふ。堯の曰はく、四海困窮。天祿永終

敵の美云々―齋藤實盛が維盛に源家の盛なる勢を談ぜし類なり

にしたがひ給へば、迎へて位をかへしたり。若改めたまはずば伊尹天下を有つべし。しからば簒ひたるの名あらんか。任重きが故に辭せず。問。しからば天下の民の水火の中に苦しむが如くなる事は、聖賢皆あはれみ給ふべし。いづれも任ずべき事ならずや。云。天任ぜしむる時は任ず。天任ぜしめざる時に任ずるは私心なり。この故に孔孟は道を任じて天下を任ぜず。孔孟の時諸侯の强大なる者みな思へり。孔孟を助けとせば天下を一統せんと。若孔孟の才ある人、功名のまじはりありて時の諸侯を助ましかば、天下を一統せしめん事たなごころの内なるべし。又まじふるに仁を好んで義を知らざるの異學をもつてせば、みづから天下をとりて人民を安んぜんか。しかれども聖賢は道をまげて天下を安ずることはせず。兵をやめ食をやめて、天下の人餓死せしむるとも、信のみ存すべきの心なり。

一 心友問。天下有レ道、則庶人不レ議といへるは、法ありて天下國家政道の善惡を言はしめざるか。軍中に於て辯者をして敵の美を談ぜしめざれと言へると同じ事にて侍る

任と時—孟子に見ゆ

巣許—巣父と許由となり

商—殷の別名

太甲—湯の孫

位祿共に分に過ぐる者多し。父子相繼の禮にあらず。この故に孟莊子が如き者すくなし。

一心友問。伊尹は聖の任なる人なり。孔子は聖の時なる人なりと。しからば孔子も任なるべき時に當りては任し給ふべし。列聖の中何か任に當れるや。云。湯武是なり。天下の治亂萬人の安否を以て己が任とす。故に德に恥るの惡名をかへりみず。實は天下を欲するにあらず。巣許が淸あれども、任重きによりて進みて辭せず、桀を流放せり。若桀改むる志ありて、湯王の教を受て道を行はゞ、必ずむかへて天下をかへし授くべし。紂若悔ゆる心ありて武王に降り、先惡を改めて善にうつらば、必ず助けて仁政を行はしむべし。武王は紂をとらへて流放し置かんと覺したるべきを、剛惡勇心ありて自害せり。其後紂王の子を立て大國を與へ、商の祭をつがしめ給ふにて知るべし。後世敵の子孫と云へば、たづね求めて殺すとは雲泥なり。太甲無道なりしかば伊尹是をおしこめ置きたり。伊尹の幸にて太甲先非を悔いて、伊尹の教

守なり。夫人善にして知不足なる者あり。知有りて行不足なる者あり。善人にして知不足なる者は、平生のなすところ行跡正しといへども、肝要のしまりなき故に、其よき事も多くはあしくなるものなり。行不足なれども知恵ある者は、平生のなすところ十にして七八まで禮儀にあたらずといへども、肝要のしまりある故に、其よからぬ事も消失せて、人情時勢に叶ふものあり。父善人にしてほまれ有りといへども、知不足なれば人を用ふる事あたはず、政時所位に不叶。子不賢なれども知ありて人の善惡を見知り、政時所位に叶へば、外より見ては父よく子よからざれども、内より見る時は父の代には國家とゝのほらず、子の代にはよく治まる者なり。父不賢なれども知ありてよく人を用ひ、政時所位に叶ふ者あり。子善人なれども、知なければ終には不明の所より讒言入りて、子の代に其功遂げず。此二の者は自然の勢なり。父にえられし者こそよからぬ者も有るべけれ。其外又國に舊功の奉行役人多きを、子の代になりては其賞のさたなくして、何の功德もなき人ども、方ずみとて

孟莊子―論語子張篇に此の語見ゆ
方ずみ―子息に附置かれし者

一心友問。曾子の曰はく、「孟莊子之孝也。其不ㇾ改三父之臣與二父之政一、是難ㇾ能也」と。莊子が父獻子が賢德ありてよく人を用ひたり。故に其政よし。不ㇾ改事尤もなり。何ぞ是をかたしとするや。云。父の獻子賢にして子の莊子知あり、又孝心厚し。故に是をよくせり。古今父にえられる者の、子の代にあはざる事二あり。一には其者よけれども、子の方ずみの者權をとり立身せんことを欲して、父にえられし者を年年あしざまに云ひなせば、よからず思へり。其上父子好惡別なり。故に父の臣を用ひず、父の政を改むる者あり。是は子不明にして孝心うすければなり。二には父にえられし者私多く、よからぬ事を年々見置いて是を不ㇾ用。又父の政可にあたらざる事多ければ改むるものなり。是は子知あり、不孝とも云ひがたし。父の本心は善人を用ひ善政を行ふことを欲す。しかるに時に反する者は、人欲これを害すればなり。親の本心にしたがひて惡を改め善にうつり國家の長久をなして、親の先祖に不孝の罪をまぬがれしむるは大孝なり。親の好惡は一身の私なり。國家は代々の

かけ双六—双六に金を賭くるなり

時は、孔子だに至り給はざるにあらずや。しからば後世の人いかでか及び侍らん。云。今も人あり。我よくつとむる事を同志のつとめざる時は、我よくつとめ得ずと云ひて人をすゝむ。我よくする事は人皆しれり。その人をすゝむるといふ義は謂はずしてさとれり。

一朋友問。心學には碁象戯の遊びも禁制なりと申し侍り。まことなるか。云。心學の事は知らず。惣じて道徳仁義に志す者は、人欲を禁制する理にて侍れども、全く格し去ることあたはず。何のいとま有りてか末の碁象戯を禁じ侍らん。道學六藝を事とする人は、日を愛して足らずとせり。碁象戯をすゝむるともせじ。文藝武藝をも心がけて徒に月日を送る人は、碁象戯の遊びもせざるには勝れり。禁ずるに及ばず。かけ双六などは博奕の下地とも成りなんか。博奕は悪事の根ざしなれば、左様のきざしをば戒めても可なり。本立ときは末のいたづらごとは禁ぜざれども自から止むものなり。本不立して末を禁ずるは、禁ぜざるには劣れりと有り。

大森彦七―太平記に楠公の靈に遭ひたる話見ゆ

ず。不レ憂は知わきまへ勇たわまざるところあればなり。氣質に得たる知者は俗にいへる分別者なり。然れども萬物一躰の仁なければ物を成すの功なし。人間世の名利得失の分別のみかしこくて、幽明死生の理を知らず。この故におそるゝ所も有り。不レ惑とはいひがたし。氣質に得たる勇者は、熟れ知りたる所にはおそれざるなり。山に行いて虎狼をさけざるは獵者の勇なり。海に入りて蛇龍を恐れざるは海士の勇なり。戰陣において弓矢をいとはざるは武士の勇なり。大森彦七ほどの武勇者にても、妖物に逢うては氣をとり失ふことあり。其上海に入りては海士に及ばず、山に入りては獵者に及ばず。大勇の名を得たる武士といへども不レ懼とはいひがたし。物によりて恐れ物によりておそれざるは、知てらさず仁一躰ならずして、物と二つになる故なり。道學に得たる者はさあらず。勇者は仁知をかねて恐るゝ所なく、知者は仁勇をかねて照さゞる所なく、仁者は知勇をかねて憂ふるところなし。故に君子の道三と宣へり。一もかけては君子とはいひがたし。問。我よくする事なしと宣ふ

浩然の氣―孟子公孫丑上篇の語

婦よりいへば夫と名付るがごとし。仁知勇同じく性の德なれども、君子の天地幽明順逆死生禍福をもつて一にして己にあらずと云ふことなければ、憂ふるところ無きにつきては仁者と名付、君子の陰陽人鬼富貴貧賤夷狄患難入るとして自得せずと云ふことなく、心にとゞこほりなき事流水のごとく、無事を行うて明かなる所につきては智者と名付、君子の浩然の氣天地にふさがり、剛强盛大にして萬物の上にのびやかに、物欲にたわまされず、威武に屈せられず、惡鬼妖物猛獸もふるゝ事あたはざる所につきては勇者と名付たるなり。常人の憂ふる所を不レ憂によりて君子を知ることもあるべし。凡夫のまどふ所にまどはざるによりて君子を知ることもあるべし。世人のおそるゝ所を恐れざるによりて君子を知ることもあるべし。時により三人となして見るとも害あらじ。又仁にして知勇をかねず、知にして仁勇をかねず、勇にして仁知をかねざる者あり。是は氣質に得たるものなり。氣質に得たる仁者は好んで人を愛し、或は其身溫柔寬裕なるばかりなり。不レ憂といふには及ぶべから

古の云々—論語憲問篇の語

仁者不憂—前出

德をひろめ、門人よく師の學を新にせば、ともに恩を報ずるなり。

一　心友問。春夏秋冬かはらず、日月星辰同じ。人の形異なることなし。仁義禮知の性備れり。しかるに古昔は道德の人多くして今稀なる事は何ぞや。云。孔子曰はく「古之學者爲レ己。今之學者爲レ人」と之今の世に道德の人稀なる所なり。古之士者利レ人、今之士者利レ己。とおのれが爲にすべき學は人の爲にし、人を利すべきの義を失てう己を利す。この故に士君子多くは其德を失うて小人となれり。

一　心友問。仁者不レ憂、知者不レ惑、勇者不レ懼とある時は、三人の樣に聞え侍り。君子の道三とあれば、三ながら有りて君子と云ふ義か、仁者知者勇者いづれも君子との義か。云。君子の不レ憂は仁なり。不レ惑は知なり。不レ懼は勇なり。此三ある時はともにあり。君子の道廣大なりといへども、心の德に基く時は此三にすぎずと云ふ義なり。己を成すは仁なり。物を成すは知なり。性の德なり。外內を合するの道なり。故に三本一なり。一人の人あり、子よりいへば父なり、臣よりいへば君なり、

民生三—國語に父之を生み師之を敎へ君之を食ましむ

なり。問。何をか大道の實義といふ。云。五典十義是なり。一事の不義を行ひ一人の罪かろき者を殺して天下を得る事もせざるの實義あり。不義をにくみ惡をはづるの明德を固有すればなり。此明德を養うて日々に明かにし、人欲の爲に害せられざるを心法といふ。是又心法の實義なり。先師と予とたがはざるのみならず。唐日本といへども違ふことなし。此實義おろそかならば、其云ふ所みな先師の言にたがはずとも、先師の門人にあらじ。予が後の人も予が言を非とし不用とも、此實義あらん人は予が同志なり。先師本より凡情を愛せず、君子の志を尊べり。未熟の言を用ひて先師を贔屓するものを悦ぶの凡心あるべからず。先師存生の時變ぜざるものは志ばかりにて、學術は日々月々に進みて一所に固滯せざりき。其至善を期するの志を繼いで、日々に新にするの德業を受たる人あらば、眞の門人成るべし。古より民三に生ず。父母生じ君養ひ師敎ふといへり。恩ひとしき故にともに三年の喪をつとめき。予が先師に於けるも其恩君父に同じ。子よく父の家を起し、臣よく君の

す太極圖說の著者

なし。此無の字老佛より出來ると。此說面白く侍り。云。これ文字になづめり。易に太極ありと。是聖語にあらずや。易は變易してきはまりなし。きはまりなきは無極にあらずや。周子初めて無極の字をいへるといへども、無極は易の字の意なり。初めていへるにあらず。夫無の字何ぞ老佛より出んや。老佛も本は聖學にとれり。上天の載は無ㇾ聲無ㇾ臭といへり。佛語は本梵字とて、日本のいろはの言葉のごとし、みな中國の字書をかりていへり。中國の字異學より出べき樣なし。

一心友問。先生は先師中江氏の言を用ひずして、自の是をたて給へる高慢なりと申す者あり。云。予が先師に受けてたがはざるものは實義なり。學術言行の未熟なると、時所位に應ずるとは、日をかさねて熟し時に當りて變通すべし。予が後の人も又予が學の未熟を補ひ、予が言行の後の時に不ㇾ叶をばあらたむべし。大道の實義においては、先師と予と一毛もたがふ事あたはず。予が後の人も亦同じ。其變に通じて民人うむことなきの知もひとし。言行の跡の不同を見て異同を爭ふは道を知らざる

周子―周敦頤字は茂叔濂溪と號

至るまで生意一貫なり。根の土中にあるを大本とし、枝葉を達道とし、土中にある生意を中とし、枝葉に有るの生意を和といふ。されどいまだ盡せりとせず。木の木たる所以のものを中とし、時に發するものを和といはゞ可なり。土根枝葉生意へだてなし。只中は見るべからず。和の跡は春花秋紅の節に當りて見るべきのみ。問。中と仁といかん。云。中をいへば仁其中にあり。仁をいへば中其中に有り。古の聖王を民の君師といへり。君たる所より見れば尊し。師たる所より見れば親し。たゞ一人の聖主なるが如し。問。仁と愛といかん。云。仁は生理なり。愛は生氣なり。仁は性なり、愛は情なり。たとへば木の根本より枝葉まで流通する生意は氣なり。春花夏緑秋紅の時色のあらはるゝは情なり。みな生氣の變化なり。其變化をなすゆゑんの理は仁なり。唯人は此仁を得て明德そなはれり。明かにする時は己が有なり。萬物は明德なければ己が物とする事あたはず。仁中に造化せらるゝのみ。

一心友問。先儒いへり。周子無極にして太極といへるは非なり。聖人の言に無極の語

貧しきが爲の仕へ―孟子萬章上篇に仕は貧の爲にするに非ざる也而も時有てか貧の爲にすと

程子の敬―一を主とする之を敬と謂ひ適無きこと之を一と謂ふ

地なく金銀なき者は、つかへて才知を不ㇾ用は、何をして父母妻子を養育し侍らんや。云。これ炎暑甚寒にも鹽菜をあきなふ者のごとし。貧きが爲の仕を求めて、己が天性によりて一役つとむべきのみ。其職事とゝのはゞ可なり。

一　心友程子敬の心法を問。答曰。言論の及ぶ所にあらず。書により言によりて敬する者は、多くは敬といふもの胸中にふさがりて心の本然を失へり。古人の心と我心に相通じて自然に得ることあり。是力を用ふるの功なり。我敬の心法を得るとも、吾子にかたらば子が心の一物とならんことを恐る「所謂中者。天下大本也。喜怒哀樂。未發之時。此性渾然在ㇾ中。心有二散逸一則失三其所二以爲ㇾ主」これ説得てよし。無物の敬を知るべし。問。事々物々の上に天然の中有りといふものは何ぞや。云。器物其則を得たるも中なり。飲食其味を得たるも中なり。中は天下の大本なりといへども、充塞して有らずといふ處なし。其躰を中といひ、その用を和といふ。人の不動を立といひ動を行ふといふが如し。同く一人の人なり。百尺の木根本より枝葉に

五人九人の才臣―論語泰伯篇に舜に臣五人有りて天下治る武王曰く予に亂臣十人あり云々と

ひろまり侍らば、人みな不才をたのしまん。しからば天下國家誰か是を治めんや。云。才知かくれて人民拙き時は惡なし。不治に平かなり。惡の源は才知より生ず。至治の世何ぞ才知を用ひんや。問。堯舜文武の代五人九人の才臣有り。孔子も才かたしと宣へり。才を用ひたるにあらずや。云。これ天下の才知を亡して惡の源を絶つの才なり。今の才といふものにあらず。今の才は堯舜にありて用ふる所なし。大才は刀のごとし。よくとぎてつかさやをし、晝夜身をはなたずといへども一生用ひず。威をもつて無事なり。小才は刀を朝夕用ふるが如し。人をそこなひ身を害ひて無事なるいとまなし。今の才は小才なり。朝夕閙はしくて國家無事ならず。終には國やぶれ天下亂る。驥は其力を稱せずして其德を稱す。力は驥の才なり。世に驥の力ある馬ありといへども、驥の德なければ平馬にもおとれり。驥は力あまりありといへども、無爲にして幼童にもあつかはる。故に善馬の名あり。況や人才有りて德なきは妖物なり。不才の德に近きがまされるには如かじ。問。今家領なく田

斧斤云々—莊子おいて所謂樗櫟の材は是を顧るの工匠なきを云ふ

なり、「拙は德なり巧なるは賊なり」と、不才にして拙きは德に近し。自然の幸なり。才知有りて巧なるは僞に近し。一の不祥なり。吾子天然の吉を得ながら、變じて凶となすべき事を願へるはまどひなり。學はかくの如きの迷ひを解て自明にせんとす。世人皆夭死をいとひいのちながからん事を思ふ。不才は命ながく才は命みじかし。人みな勞をいとひて安を願へり。才は勞し不才は休す。才知ある者は己が身の凶をまねくのみならず、人の凶事をもあづかれり。深山の木も材あるは斧斤の憂へ有り。不材の木は斧斤の禍なくして其天性を全くす。民にして拙きは其農事をつとめて他の累なし。才ある者は庄屋となり肝煎と成りて人の爲につかはる。武士にして拙き者は武道のたしなみをよくして國の干城と成るのみ、無事の時は文を學んでみづからたのしみ、よき士と成て他の勞なく累なし。才知ある者は役儀を命ぜられて一生いそがはし。武士なれども武業をたしなむべきいとまもなし。いはんや文德をつとめんや。一生無知にして老衰の後悔益なし。問。如此の道學天下に

君子の徳―論語顔淵篇に出づ

つり、其徳化民庶に及ぶものなり。故に孔子の曰はく「君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草に風を加れば必ず偃す」と。故に君子の治世は殺を不用。君威なければ殺すとは雖もしたがはず、おそれざるものなり。其上君に威なき時は必ず下に威あり。下として上の威をうばふ者は必ず不善なり。不善なれども威ある所にしたがふものなり。

一 朋友問。我甚だ不才なり。かくても學問成り侍るべきや。學問し侍らば何事の用にも立べきや。學によりて才知の生るゝ道理あらば學びたき事なり。云。よく學ぶ者は、元來ありつる才知もかくれてなきが如し。何ぞ學問によりて才知をぜ生んや。學は己が明徳を明かにせんとなり。才知ありて徳をそこなふ者は多し。徳の助けとなる者は稀なり。學は天眞のたのみしを求めんとす。才知は己が心をわづらはしめ、己が身をくるしましむ。學は「齊家治國平天下」の道なり。才知は家とゝのほらず國をさまらず天下平かならず。故に古人云ふ。「つたなきは吉なり。たくみなるは凶

古人云々―巧詐は拙誠に如かずの義

葉枯槁す。物の盛衰は物の自然なり。況や己が利を専にし衆の苦みをなす者何ぞ久しかるべき。

一　心友問。孔子の曰はく「其身正不令而行。其身不正。雖令不從」。又季康子が政を問ふに對て云ふ。「政は正なり。子帥るに正を以てせば、孰か敢て正からざらん」と又宣はく、「子が不欲ならば、是を賞すといふともぬすまじ」と。然るに後世は上正けれども下正からざるものあり。上不欲なれども士は欲あり、下々は盗をする事やまざる者あるは何ぞや。云。徒善は政をするに不足といふ者なり。惡なれども、君の手に權威ある時は下隨ふものなり。善なれども、君に權柄威嚴なき時は下したがはず。後世君たる人、其身正く不欲なれども威なきは柔善なり。しかのみならず政をするの道を知らず。この故に正く不欲なるは善なれども、その化士にうつらず其澤民に及ばず。是氣質の美にして道德より出たるものならざればなり。道德に得たるものは善にして威有り。又善をほどこすの道を知れり。故に其德義士大夫にう

身正云々―論語子路篇に見ゆ

不足飢寒—孟子に所謂楽歳には終身苦しみ凶年には死亡を免れずの義

ありといへども、其大本三有り。一には大都小都共に河海の通路よき地に都するときは、驕奢日々に長じてふせぎがたし、商人富て士貧くなるものなり。二には粟を以て諸物にかふること次第にうすくなり、金銀錢を用ふること専なる時は、諸色次第に高直に成りて、天下の金銀商人の手にわたり、大身小身共に用不足するものなり。三には當然の式なき時は、事しげく物多くなるものなり。士は祿米を金銀錢にかへて諸物をかふ。米粟下直にして諸物高直なる時は用足らず。其上に事滋く物多き時はます／＼貧乏困窮す。士困すれば民にとること倍す。故に豐年には不足し、凶年には飢寒に及べり。士民困窮する時は、工商の者粟にかふべき所を失ふ。たゞ大商のみます／＼富有になれり。是財用の權庶人の手にあればなり。夫國君世主はかりそめにも富貴を人にかすべからず。富貴を人にかすときは、權を失ひて國亡び、天下亂るゝ時は商の富は身のあたなり。虎は皮に文ある故に田獵の災をいたし、商は金錢多きが故に盗賊の奴となり或は命を失へり。草木の情なきだに時ありて落

恒の産―生業を云ふ

子貢―孔門屈指の弟子端木賜

るべし。信ありて衆和する時は、杖を以ても堅甲利兵に勝べき理有り。又不㆑得㆑已して二の大事を去るべき時は、食を絶ちてうゑて死すべし。天下の人一時に死して天地やぶるとも可なり。信なく禽獸と成りて生べき義なし。故に順にして義に害なき時の政は食を足すを先とす。恒の產なくして恒の心あるものはすくなし。是も又誠を立るの備なり。又逆にして義に害ある時は誠のみ殘り持つ。人の命あるおのづから此次第なり。食によりて成長し、兵を持して生を全くし天下を警固す。信の道を立て人の義を行ふ。其老衰に及びては、力つきて兵さり、食咽にくだらずして死す。不㆑亡ものは誠のみ有り。子貢にあらずば此問をまうくる事有るべからず。孔子にあらずば此答あらじ。天下の政道治亂得失、たゞ此三の大事の存亡によれり。一も缺けては國其國にあらず。天下其天下にあらず。易簡にして明白なり。問。後世豐年ありて食足るときは士困窮し、凶年にして食不㆑足ときは民餓ゑ、上下かはるがはる苦んで。位づめに亂世と成るものあるは何ぞや。云。此そのより來る所餘多

繪の事―論語八佾篇子夏と孔子との問答を參照せよ

おこり易し。たゞ立がたきものは誠なり。誠不立ときは、聖人の禮儀法度全く備るとも何の益かあらん。五典十義は誠の條理なり。風厚く事すくなき時は五倫よく相親む。如此して後加ふるに禮樂を以てすべし。繪の事は素におくれたり、禮は後かのこゝろなり。天下國家飲食衣服備り足りて、武具おほく武藝達者にて、誠の道明かにしてまどひなく、君臣相和し、父子相親み、夫婦別あり、兄弟序あり、朋友相ゆづりて爭訟なくば、亂を願ふとも得べからず。問。信は本なり。第一に宣はずして第三に宣ふは何ぞや。云。これ政の次第なり、人生れて飲食にあらざれば長ずる事あたはず。故に最初に宣へり。兵具にあらざれば、禽獸人に交り强弱相凌いで靜ならず。知を上にし愚を下にするの備なり。故に次に宣ふ。赤子母の胎内を出て一聲なき初むる所に則ち天眞存す。父母の赤子を養育すること、能はずといへども遠からざるの誠によれり、信之は此天性を人欲の爲にそこなはざるのみ。故に終に宣ふ。故に此三の大事をのぞくに至りては、不得已してやむる時は兵を去

はりこや―張拔等を作る職

ざる時は、五穀の生ずること限なし。食たり士民ゆたかにして武備なき時は又亂る。故に武藝のすぐれたる上手を招き集て、常に弓馬をならはし、士の筋骨を強くし、間よき馬の生ずる樣にし、弓うち矢師矢の根鍛冶、鎗刀の鍛冶とぎ屋具足屋、鎗屋しろがねや、鞘師、塗師屋、鞍に鐙轡切付屋、はりこやの類、すべて武具の細工人を多く置きて、軍用に事かけざる樣にするを兵を足といふなり。士民共に無病にして、氣血すこやかなる政教をなすこと第一なり。信之は天道は誠なり。其誠を本心として生れ出たる人なれば、其元本の誠を思ひて失はず、邪なく僞なく厚き風俗をなす教なり。此信の中に仁義禮智の性理はふくみてあり。人といへば耳目口鼻の備れるが如し。民と云ふはすべて位なき者の惣名なり。つかへざるの士工商、尤も其中にあり。庶人だにあるに、まして庶人を教へ治むる人は言ふに及ばず。天下國家の政道のことなれば、禮法の事を宣ふべき事なるに、信とのみ宣ひて、禮儀法度に及ばざる事尤も妙なり。德の衰ふるにしたがひて禮法しげきものなり。押へても

是を罰する—孟子が梁惠王に對へたる獸を率ゐて人を食ましむる喩言の類なり

るなり。

一　心友問。軍陣には必ず備あり。かねて備なき時は、敵に逢うてやぶるゝ事すみやかなり。治國の備は何にて侍るや。云。治國の備は政なり。政をば孔子既にのたまへり。足レ食足レ兵信レ之の三なり。食不レ足ときは士貪り民は盜す。爭訟やまず刑罰たえず。上奢り下諛うて風俗いやし。盜をするも彼が罪にあらず。是を罰するは、たとへば雪中に庭をはらひ粟をまきて集まる鳥をあみするが如し。教へずして殺すだに不仁なり。況や民を死地にかりおとし入るゝをや。上に立者用足らざれば下をむさぼる。下困窮すれば上をうらむ。是逆亂の端なり。戰陣をまたずして國やぶるべし。兵を足すにいとまあらず、況や信の道をや。問。食を足すの道いかん。云。上恭儉にして威嚴ある時は、大夫士むさぼらざるを寶とす。民は己が力によつて五穀を生ず。工商は粟にかへて食す。年貢をとること甚すくなければ、民遊樂を好みて耕作の事におこたるものなり。甚多ければ飢寒を憂へて力足らず。おこたらずうゐ

三月云々―論語雍也篇に見ゆ

といへり。天行健なるは禮の體なり。君子用ひてみづからつとめて息まざるは非禮なきなり。心上はいふに及ばず、視聽言動のかろきことにも、須臾もはなるゝ所あるは顏子分上の非禮なり。三月仁にたがはずといへるも。四時みな三月にしてうつれり。故に三月といふは年中のことなり。年中たがはざれば違ふことなし。しかれどもいまだ心ありてつとむる故に、三月の字あり。無心にいたらざれば至誠の無息にあらず。顏子は聖人に近し。一時化するときは則ち聖なり。これ此語を事とするところなり。問。聖人にも戒愼ありや。云。あり。問。しからば無心と謂ふべからず。云。戒愼則ち自然に出て、時として戒愼せずと云ふことなし。即ち無心なり。いまだ心あれば時として須臾の息なき事あたはず。無心に至りて初めてやすみなし。自強は克レ己なり。不レ息は復レ禮なり。用ひて自強不レ息ときは、天行健に合す。吾心氣造化と一なり。故に天下吾仁内にあり。春夏秋冬、日月星辰、寒暑風雷、雨露霜雪、土地山澤河海、こと〴〵く吾身に備はらざるものなし。これ天下仁に歸す

美人大人の五品中の一類

和も又とげがたし。禮節過る時は煩しうして又亂る。故に禮樂互に其根をなす。陰陽動靜の理なり。先王の道天下の事、大小となく是によらずといふ事なし。夫禮は上を安んじ下を治むるの備なり。然れども古今人情時變の異なる事あり。易に云ふ「黄帝堯舜垂衣裳而天下治。通其變使民不倦。」衣裳をたれて治るは無事の至極なり。其變に通じて人の退屈せず、禮法に苦まず、いとふ事なき様にし給ふは、よく時と人情とを審にし給へばなり。則ち是和を貴しとする義なり。

一心友問。顏子仁をとへば、孔子非禮視聽言動せざれと宣ふ。少し道德の學にこゝろざすものだに、好みで非禮のものを見聞言行することはし侍らず。顏子の大賢にしてこの受用を事とするは何ぞや。云。其位々の非禮あり。常人分上學者分上の非禮あり。進みで美人大人分上の非禮あり。聖人に至りて初めて非禮なし。顏子聖人に不及こと一等なり。故に聖人に至るべきところをのたまへり。禮といふは天理流行してしばらくも息まざるところなり。易に云ふ。「天行健、君子以自强不息」

いたづがはしー煩雑なる事

和ー中庸に所謂中和の義なり

びれなへたるを不仁といふ。よく形容すといへり。氣不ㇾ通して人のはたらきならざるところ有ればなり。富貴貧賤死生壽夭夷狄患難、入るとして自得せずといふことなし。天地の陰陽人生の順逆みな吾に備れり。何の好惡する所あらんや。纔に好んでねがひ、惡んで避くる心あるは一貫ならず。義と流行せず。是不仁なり。

一　心友問。禮之用和爲ㇾ貴と。此用は體用の用ともいひ、用ふるところの用ともいへり。總じて此章受用に心得がたし。云。禮の用は禮の行はるゝ所なり。禮いたづがはしき時は必ず亂るといへり。和を知らざればなり。夫禮は恭儉を尊ぶ。易簡にして時所位に應ずる時は、和ありて行ひ易し。天は易を以て知なり。地は簡を以て能なり。天地上下の位定るは禮なり。易簡の善は和なり。易なる時は知りやすく、簡なる時はしたがひやすし。知やすき時は親み有り。したがひやすき時は功あり。是日月のかはる〲明かに、四時運行して息ず、天道の悠久にして無窮なる所なり。禮樂の本なり。人事和に專なれば流やすし。故に禮を以て節すべし。禮節なければ

如有王者ー論語子路篇に出づ

集義和書 巻第十三

○義論之六

一心友問。仁の理は孔子といへども一言にして説盡し給ふ事あたはざるにや。門人の問に答へ給ふ所皆かはれり。云。仁は全徳の名なり。門人の問に答へ給ふは、其心の位によりて徳に入るべき端をのたまへり。子曰。如有二王者一必世而後仁と。是恩澤のあまねく天下に行はるゝを以て仁政とするの義なり。吾心太虚天地の間において不レ通ところあるは、未だ仁と云ふべからず。問。然らば天地萬物の理、事々物物にして是をきはむべきか。云。さにはあらず。事々物々の理を知るといふとも、吾心事々物々の上に於て好惡する所ある時は仁にあらず。たゞ天下において好惡するところなく、義と共にしたがつて無心なるとき初て仁なるべし。醫書に手足のし

今日の天職なり。時文明の運に當りて、人心の闇昧をひらくは少し天恩に報ずるなり。是を以て世のそしりを顧ず。

王公位をさしはさみ、大臣權勢にほこりて、賢知にくだらざる時は、善人義士皆野にかくれて知られず。讒諂面諛の人は利を好むばかりなれば、無禮をいとはず。いよいよ君臣の惡をますものなり。賢士は道德を樂みて人の勢を忘れたる者なれば、王公といへども敬をあつくし禮を重くし給はざれば、其知力を盡さしむる事不レ能。賢士不レ悅して知力を盡さゞる時は、有りとてもなきが如し。後世善を好むの君臣ありといへども、勢を忘れ賢士を敬するにいたらず。故に善も益なし。

祭禮―父母死後の祭祀なり

一　學友問。君子の父母を祭禮する心いかん。云。君子は幽明人鬼くらからず。故に死生一貫にしてへだてなし。たゞ明々たる心ばかりなり。この故に孝子の心に親を死せりとせず。祭時には何の心もなし、至誠を盡すのみ。

一　心友問。和書の前言多く削りすて給へり。五三年過なば又けづりたく思ひ給ふ章有るべきか。云。殘る章今も半は心にみたず。しかれども人により迷ひを解くべき事あればけづらず。後世のそしりは眼前に見ゆれども、今の人の迷ひを解くべき事は

位づめ—不才にして位に叶はず官位に負くるなり

惡はおのづから亡びぬ、天理人欲並び立たざる故なり。善を好むの德は一國に用ひてもよし。大に天下に用ふる時は愈よし。善を不ㇾ好人の氣象は、訑々として聲音顏色たかく、賢人知者をば千里の外にふせぎ、諫を拒む意思あり。善人こばまれて退きかくるゝ時は、小人時を得ていよ／＼賢知を惡口しうとましめ、媚諂ふ人のみ前後左右に充てり。若しいさめがましき事をいひて心をつくるも、上の心に叶ふべき所をはかりて云へり。只目の前の間をわたすばかりにて、終の治平の用には不ㇾ立。上たる人に剛惡なければ、位づめに亡ぶるなり。問。然らば善を好むにも道ありや。云。あり。孟子の曰はく「古之賢王。好ㇾ善而忘ㇾ勢。古之賢士。何獨不ㇾ然。樂ニ其道一而忘ニ人之勢一。故王公不ㇾ致ㇾ敬盡ㇾ禮。則不ㇾ得ニ亟見一ㇾ之。見且猶不ㇾ得ㇾ亟。而況得而臣ㇾ之乎。」古の聖王賢君は、賢知の人あるを聞給へば、みづからの位も勢も忘れたるが如く、へりくだりて禮をあつくし招き給へり。執政大臣たる人も猶しかり、これ善を好むの道なり。みづから德を尊び重んずる故なり。善を好むの至極なり。

善柔―媚説に工にして諒直ならざるなり

國の治まらむ事はかたかるべしと思へり。世間の善き事すきといふ者あり。世に善柔の人なり。左樣の類と思へり。天眞異同のわきまへなく。よき事とだに云へば、好みしたがふ者あり。如此の人は、政には却て害になるものなり。事はよくても、時所位に叶はざれば、人情にもとりてよき事と云ふも出ざるには劣るものなり。樂正子の善を好むと云ふは左樣の事にはあらず。凡情の我慢なき故に我是を立てず。人の善なるを悅び好してそねまず。德性を尊んで問學によるの功にて、眞知明かなれば正邪おのづからよくわかれり。事の時所位に叶ふと不叶と、善の天眞に應ずるか跡になづむかの分別は、鏡に美惡をうつす如くわきまへ知るなり。えらぶ事は我心にあれども、仁厚溫和にして善を好み、人のいさめを悅ぶ故に、人路次の遠きをも苦勞とせず、來りて善を告しらす。下々の情は上に立つ人のあまねく知らざる事なれば、思ひよらぬ人情などを知りて、政令みな其可にあたる故に、天下の人民政道に倦む事なく、善をするにいさむなり。天下の人善をするに進む時は、

訑々―淺はかの心より得意なる貌

乎。曰。好善優於天下。而況魯國乎。夫苟好善。則四海之內。皆將輕千里而來告之以善。夫苟不好善。則人將曰。訑々予既已知之矣。訑々之聲音顏色。距人於千里之外。士止於千里之外。則讒諂面諛之人至矣。與讒諂面諛之人居。國欲治可得乎。」魯國に孟子の弟子樂正子をあげて政をなさしめんと云ふをきゝて、孟子大に悅んで夜もいねられぬとなり。かならずよき士數多出來て民安かるべしと思ひ給へばなり。公孫丑之を不審して云ふ「樂正子は强力にしてよく事をつとむるに退屈せざる人か。知慮分別ありて事の裁判をよくすべき人か、古今人情時變の來歷くはしく聞知る所の多き人か、政をする才は是等の備なくては叶ふべからず。尤も大方は此才なくても政にあづかれども、それ故よからず。樂正子は左樣の才ある者にてはなきを」と、不審に思ひて問へるなり。孟子の答に「此才なしと謂へり。公孫丑「然らば政をなさしむるともよくは成るまじきを、何ぞ悅んで不寐や」と、押返して問へるなり。孟子云、樂正子は善を好む者なり。公孫丑善を好むばかりにて大に

樂正子—孟子の弟子

此本存するときは吉なり。此本亡する時は凶なり。君及び執權の大臣善を好み賢を親む時は、君子位にあり小人野にあり。君子進み小人退かば、國家天下亡びん事を願ふとも得べからず。三皇五帝三王の代の興起し治平せし、其同じき所の大本なり。禮樂法度は時によりて變りありといへども、君子進み小人退くの治根においては變りなし。是にそむくものは、治平なる國天下も亡びにおもむく事すみやかなり、德を不ㇾ知人は、君王大臣といへども、みづから其知を足れりとして善言をこのまず。隨分我才知勇力を以て國天下をよくせんと思ひて、賢知の者を近づけず、實義の士有道の君子を遠ざくる時は、媚へつらふ者すゝみ至りてほめあぐる故に、いよく予知ありと思ふ意思長じぬ。其間に國家天下の根本くづれて、人情そむきぬる事を不ㇾ知。すでに亂逆に及びては、驚くといへども復るべからず。孟子曰はく、「魯欲ㇾ使㆓樂正子爲㆒ㇾ政。吾聞ㇾ之喜而不ㇾ寐。公孫丑曰。樂正子强乎。曰。否。有㆓知慮㆒乎。曰。否。多㆓聞識㆒乎。曰。否。然則。奚爲喜而不ㇾ寐。曰其爲ㇾ人也好ㇾ善。好ㇾ善足

切々—懇到の義なり論語子路篇に朋友には切々偲々とあり

給ふをおどろき給へばなり。賢德ある士の、民間に居て人の勢を忘るゝことは、天を樂び命を知るゆゑなり。畎畝の中に居て堯舜の道を樂び、其位に素して行ひ、其外を不レ願なり。一治一亂は氣化の盛衰あり。人事の得失あり。反覆相尋は理の常なり。富貴貧賤の上は下へうつりかはるは、寒暑の往來するが如し。賢士これを見て何の心もなし。故に王公も敬をいたし禮を盡さゞれば、切々相見て其言を聞くこと不レ能。上より求め給ふだにも召す事不レ能。いはんや我より上に求むべけんや。何ぞ國天下の得失を心とせんや。吾人共に少し問學ある者の天下國家を憂ふるは、惻隱の心をゑばうしに著て凡情の主たるなり。しかのみならず自からの性命の分を不レ知、天命の勢を不レ知。わづかに古昔の事を聞ては今を非とし、これを以て變せん事を思へり。甚非なり。その愚を不レ知者はあやふし。

一心友問。天下國家の存亡長短治亂のかゝる所の重きものありや。云。品々あり。一をあげていひがたし。しかれども天下國家の興起し治平して長久なる大本一あり。

古之賢王―孟子盡心上篇に此文見ゆ

ふは非なり。畢竟吾人の位を越て政道の事を思ふは、勢を不レ忘凡の情より起れり。孟子の云はく「古之賢王。好レ善而忘レ勢。古之賢士。何獨不レ然。樂二其道一而忘二人之勢一。故王公不レ致レ敬盡レ禮。則不レ得二亟見一レ之。見且猶不レ得レ亟。而況得而臣レ之乎」いにしへの聖王賢君は徳を尊び道を樂び給ふ故に、みづからの富貴をば物ともし給はず。君子の富貴はひろく衆をすくひ教をほどこすに重寶なるばかりなり。故に善人を好ししたひ給ふに當りては、位をも忘れて禮を重くし給へり。後世徳を尊むの道すたれたる時には、奇特なる事の樣に思へども、根本天下達尊三の中にても、徳は天爵なり位は人爵なり。古は天爵を得たる人に人爵をもあたへたれば、徳は位の本にして二にあらず。老を尊び養ふことも、天爵人爵かねたる賢君ありて後行はるる事なり。しかれば三達尊も徳なければ殘り二もむなし。賢王下にある賢者を見給ひては、位威勢共に忘れて、禮を重くし給ふこと必然の理なり。君王の御子などの民間におちぶれて知られざるを見付奉りたると同じ。天爵のある人、賤しき中に居

日新―大學に湯の盤銘を擧げて苟日新日日新又日新と云へり

る時は、其小きなるもの觀るに不足といへり。學術かくの如くならば高慢となるべきか。云。高慢はせばく見る所小きが故なり高慢の者は必ず胸中くらし。道の廣大にして理の無窮なるを知るときは、自足れりとおもふことなし。日新日々新也。予むかしより國家天下のふさがり通ぜざるを聞ては、氣の毒にも笑止にも思ひて、道行はれば上安く下ゆたかなるべきものをと願ひしを、近比其非をさとりしなり。五島對馬の小島に生れそだちて、少し知見ある者は、其島中のよくをさまらん事を願ふべし。其者を京江戸へ出しなば、日本國中の長久を思ひて五島を忘るべし。大明の臣とせば、大國の治亂を心にかけて日本を忘るべし。死して陰陽の神となりては普天率土の造化を助けて、東夷南蠻西戎北狄の一方、百年の治亂のみを心とせじ。太虛に歸せば、十二萬九千六百歲を一歲として、天地の壽をみじかしとせん。何ぞ日本の小國に生れて、わづかに五十年の命數の間に見る所を悅び憂へんや。しかれども理に大小なし。一躰の仁感じて惻隱の情發するは不能已、然れどもしひて思

季氏—季氏は魯の臣なり然るに富王侯を凌ぎ行事亦王侯に擬したり

孔子云々—孟子に見えたる語なり

たるものなり。古は農兵なりし故に、つよきといふ分にても十にして二とりたり。民の得分八の中三ほどは、中にてつひえてすたるべし。仕置をよくせば其三のすたりなく、一を上へまし二を民にますべし。故に主人滿足し民悦ぶなり。上下の爲によけれども、孔子の責給ふ主意は、季氏道に志あり、仁政を行はんとする者ならば、費る物を上下にあたへて仁政の助とする事尤もなり。季氏は仁義を不知、たゞ利をのみ好めり。然るにいよ〳〵富ましめて、其利心を助け奢を長ずるは僻事なり。其上惡を後にのこす道理あり。冉求裁判の間はよかるべし。奉行かはりなば、上へましたる所は其まゝにて、下のつひえ又むかしに復るべし。しからば民のいたみ初に倍すべし。是惡をのこすなり。君子は人の惡をのこさゞるものなり。故に孔子深く歎き給ふなり。

一 心友問。孔子東山に登りて魯國を小きなりとし給ひ、登泰山天下を小きなりとし給ふ。居るところ益高きときは、其下を見る事益小きなり。見るところ既に大な

ゆゑに臣なり。されば親き交も有り。賞罰ともに大臣の取なしにかゝる所あり。諸人信を取りて服するものなり。この故に大臣賢なれば國天下の治る事すみやかなり。古の聖主といへども、賢臣を得てあまねく行はるゝ所なり。

一　孔門の高弟なれば、後世の如く不仁にしてせめとる事はよもあらじと思はれ侍るに、孔子其罪をならして、これを責めよと宣へり。我等ごときの淺學不德の者だに、さは有るまじき事なるを、心得がたく侍り。云。よき不審なり。後世の樣に民をしへたげて取りたるにはあらず。其はじめにすくなく出したるよりも、民はゆる〳〵として、物成は多くとりたるなり。民も悅び地頭も滿足する事なり。問。しからば孔子何とて甚だしくせめ給ふや。多くとりては民の爲によき事あるまじきと思はれ侍り。云。不審尤もなり。凡夫は才知かしこけれども欲深く、實のくらき所あり。其上物の筋目を知らざる故に、財用のわき出づる道を知らず。多くは誰爲にもならず費してす

冉求—論語先進篇に冉求が聚斂して季氏を富ましめたるを孔子の怒れる一節あり

物成—租稅として民より收納する物貨

巨室—大臣

事なるべし—なかるべしの誤か

の權威をとり過たる大身なりとも、俄に威をおとし恥辱をあたふる事なく、君たる人みづからの德を明にし行を愼みて、大臣の恥恐るゝ樣にし、君の威をうばへるは大なるあやまりなり、臣の道を盡してこそ名をも揚ぐべき事なれと、仁愛ふかく教へみちびき、是非利害を明かに心得させ、我方より欲を損し德をます樣にし給はば、巨室必ず心服し向ふべし。本よりよからぬにだに、士民ともに久しくしたがひ來りたる大家なれば、君の德をあふぎ同德にて助とならば、眞に沛然としてふせぐ事なるべし。問、君の教にもしたがはざる無道人ならばいかゞ。云。さほどの惡人は、國人ともに常にうとみはてし者なれば、之をすてゝも可なり。其上君の道正しく、仁至りて從はざる者ならば、士民皆にくむべし。憂ふるに不レ足。問。君は祿を與ふるだに士民服しがたし。大家は祿もあたへざるに士民したがふは何ぞや。云。君は遠くして尊し、故に親からず。何事もかくれて過し易し。大臣は尊けれども下に近し。少しのこともしられ易し。故に恐れはゞかるものなり。しかのみならず君

より子―寄賴むべき家筋
今出頭―新に權要の地位に立てる人
出來出頭―今出頭に同じ

りの役人は恨をいだき引入り、新しき役人ときめきをどす。共に凡夫なればかはる事なき中に、人のうらみを取り損をます事なり。其上人情は筋目と位の備れるとを尊ぶものなれば、同じ道なきにては、世臣大家のなす事をうらみず。無理と思ふ事にも、より子の筋目出入の子孫などはしたがふものなり。さなき人も威勢におされて口舌なし。今出頭には、昔よりの好もなく備りもなし。却つてそねむ人々あれば、事はよくしても心服せざるものなり。況て變らざる事の少しよきと云ふばかりにては、人心戾りそむけり。もし君に大力量達才ありて下知し給はゞ本より主君なり、大家は傍輩なれば、同じ事の少しあしきにては君に從ふ事もあるべし。されど君一人して主にもなり臣にも成りて下知はならざるものなれば、必ずたすけの出來出頭あるものなり。一國此出來出頭をにくむ心より、共に君をもそむくものなり小臣だにかくの如し。況や大臣はいきどほりをふくめり。國のあやふき事は、大家の威をとりたるも、主君みづから下知し給ふもかはる事は無きものなり。たとひ今

爲政云々―孟子離婁の上篇に此の語あり

といへる所なり。孟子も性の本躰に善と云ふもの有りといへるにはあらず。無聲無臭の心の本躰の、無思無爲、寂然不動にして感じて天下の故に通ずる跡を見れば、皆善なり。其跡の皆善にして惡なき道理をみて、性善の理を知るべし。

一友心問。孟子の曰はく「爲政不難。不得罪於巨室。巨室之所慕一國慕之」といへり。古今國天下共に王代も武家も、君を蔑にして權威をとり、或は國を奪ひなどする者は大家なり。君たる人知なく勇なく、打ち任せてはからはする時は大臣の心に叶ふべし。しかれば君は有りて無きが如し。終には國天下を失ふに至るべし。君に智勇ありて君の位を持給はゞ、今の大家は皆損するに近し。しからば大家は道ある事をにくむべし。大臣何ぞ悅服すべきや。云。徳を行はずして力と才覺とを用ひなばさあるべし。古今不徳の君、大臣の威勢をふるふをにくみ、力を用ひて俄に其位をおとさんとす。小知の小臣之をすゝむる者あり。君小臣と心をあはせて變ずる所の政、大臣の無道なるにさのみ變らず。東に滅して西に生ずるのみ。しかのみならず本よ

告子—孟子と議論を上下して屢屢是を窘窮せしめし人

根かたくなりて權を失ひ給はじ。然るを南朝を亡しなば、氣遣なる事なく萬歲ならんと思ひ給ひしは、無學不知の故なり、南帝も御和睦にて歸洛し給はゞ、無きが如くおしこめられ給ふべき事は眼前の事なるに、同心まし〳〵しは苦々敷事なり。

一 心友問。告子曰。性無レ善無二不善一と。又先儒曰。無レ善無レ惡心之躰と。此二説は其かはりなきが如し。孟子は性善なりといへり。心の本躰は無レ聲無レ臭といへる時は、性善ともいひがたかるべきか。三説の異る所、性善の無聲無臭にかなふ處の道理いかん。云。告子が性無レ善無二不善一といへる主意は非なり。生これを性といふの心と同じ。氣の靈覺を見て理の靈明を不レ知が故なり。無レ善無レ惡心之躰といへるは、又告子が旨には異なり。心の躰は虛靈不昧なるものなれば、只惡なきのみならず、善といふ物も亦なし。しかれども性は心の本然なり。性の感通する路を見れば皆善にして惡なし。惡といふもの人欲の私よりおこりて、性の感通にしたがはざるよりなるものなり。性のまゝにして人欲の害するなければ其事みな善なり。孟子の性善

南朝を廢し―後龜山帝の御讓位南北合一を云ふ

日にして漢の高祖に降りし年まで、わづかに十六年にして秦亡びたり。秦の始皇は多くの大敵を亡し、周の世をとりたる程の大武勇大力量の人なりしかども、外に氣遣なるものなき樣にせしばかりにて、程なく亡たり。高祖は領知とては一尺の地も持せず、獨夫の牢人なり。しかれども大秦の萬々歳と期したる天下を亡したり。高祖は賢人君子の徳もなかりしかども、外に諸侯を多く立置き、内に大臣を備へおきて、四百年の天下を子孫に傳へたり。出て敵國外患なき者は國恒に亡び、憂患ある者は生き、安樂なる者は死するの格言少しもたがはず。大身なるのみならず、小身といへどもこの道理にはたがはざるなり。足利家の天下をとりしも、南帝おはします間は、よく愼みて家次弟に盛大になり、内堅固なりしが、南朝を廢してより。政道におこたり驕奢生じ、一家まで心はなれて、天下の權を失ひたり。もし其時の大樹老臣知あり學あらば、南帝をば馳走して成りとも、立て置き奉りなば、北朝の公家は徳を愼みたまひ、將軍家は政道を重んじ、公家も古風を不レ失、足利家も彌々

文あり

秦始皇ー名は政六國を討滅して帝業を建てたり

而死㆓於安樂㆒法家は位祿重く作法正しく、繼躰の君道に志す時は師となり、無道なる時は、諫をきかざれども其法を變ぜざるの大臣なり。代々の守になり、國と共に存亡するなり。位祿かろくして叶べからず。拂士は君正しければ助て善をなさしめ、君正しからざればいさめたゞすの賢士なり。敵國外患は必ずしも戰國の時にあらず、我おこたりあらば其よわみつひえに乘て災をなすべきものなり。左樣の者外にあれば、作法をつゝしみ政をよくする故に、其國長久なり。彼も其善政に感じて歸服するはまことの心服なり。其政よければ心服して外のまもりとなり、惡しければ氣遣にしてつゝしみとなる者は、我とりたてならぬ代々の諸侯なればなり。天下の主のためには是程重寶なる者はなし。凡情は如㆑此のものを無くなさば、心安くてよかるべしと思へども、君子の心はしからず。故に先王外に諸侯を立て置き給へり。秦の始皇、諸侯大臣なくば、萬々歲吾子孫天下の主たるべきとて、天下に諸侯一人も無くせしかども、天下を一統せし年より、二世胡亥三年、三世子嬰四十六

雨乞―巻九を参照せよ

孟子云々―告子の下篇に下の本

盡していのる事を命じ給へり。さればむなしく民の財をつひやさずして、祈れば必ず降る事あり。問。今時の民のわけもなき雨ごひにも、時として降る事あるは何ぞや。云。其しわざは雨ふるべき道理なけれども、其憂情眞實なり。又不ㇾ知して雨ふるべき所に於てする者あればなり。是等の神理いかで今の僧尼の知る所ならんや。其上多くは渡世のための凡僧なれば、濟度利生の慈悲心もあるべき樣なし。故に貴人に近付といへども、民のつひえいやましに成りて、下を苦しむる其一となれり。まことに論ずるに足らず。

一　朋友問。もろこし日本共に、天下を奪ふ者は諸侯大名なり。あらそふ者は高家の一門なり。君を殺しないがしろにする者は大臣なり。縱ひ暴君ありとも亂世にはまさるべし。其君なくなりて後はよかるべし。諸侯に大身なく、又は有りとも取立の人ばかりにし、一門に高家をおかず、大臣に位祿なき樣にせば久しかるべきか。云。孟子の曰はく、「入則無ニ法家拂士一。出則無ニ敵國外患一者國恒亡。」然後知ㇾ生ニ於憂患一

十二月は今の十月なり。輿梁は車馬を通ずべき橋なり。農功すでに畢りて民の力を用ふべし。時もまさに寒沍ならんとす。橋梁あるときは民徒渉の憂なし。今民間の道路には、水に橋なく舟なき所多し。遊民みづから舟橋を作りて錢を取りて人をわたす。貧なる婦女童子はわたる事を得ず。たま〳〵民の自力にて橋をわたすとはいへども、かちの者さへ渡るに危し。佛法の制にも過ぎたる今の堂塔の十分一を損せば、天下の舟橋時になるべし。佛法は慈悲を本とすといへども、古の賢君の政道の一事にも及ばざる事は何ぞや。又旱に當りて雨ごひをするも、民の自力を以て多くのつひえをなし、其はてはせめとられぬ。如此事を貴人に申す僧だになき事は何ぞや。云。雨ごひは降るべき道理ありて祈る時はふり、其あてゝする道理なければ降らず。民は其わきまへもなく、祈りだにすれば降る事と心得て、多くの財用を損して祈れども降らざる事多し。まことに餘義なき事なり。古は旱に雨をいのり、長雨に晴をいのる事は、大君國主郡主の任とし給ふ所なり。しかる故に其降るべき道を

貧賤威武—孟子滕文公下篇

徒杠—かち橋なり徒歩して渡るべき橋の稱

たかにして君子の風ある人も、役人とする時は其事調らず。其上生付たる氣質の德までむなしくなれり。故にあたらざる事に使ふ時は、あたらよき人をそこなふものなり。生付きず多き人といへども、一器量ある者は、其得たる事に使ふ時はよし。不德の人に使ひやうにて德出來る道理あり。問。富貴に素しては富貴を行ひ、貧賤に素しては貧賤を行ふ。是大力量の人はよく處すべきが、大賢以上の人ならでは叶ひがたかるべきか。云。これ才のよくする所にあらず。德を知る人は皆よく處すべし。それ有德の君子は富貴も淫する事あたはず、貧賤も移す事あたはず、威武も屈する事あたはず。かくの如くにして後、其位に素して行ひ、其外をねがはざるべし、德を知る人これを行ふべし。才覺ありといふとも及ぶ所にあらず。

一　或學者問うて云。今の佛者は貴人の師なり。しかも出家は下をへて民の困苦を知れり。何ぞ貴人に說く佛の濟度利生の道に叶はざるや。歲の十一月に徒杠成る。周の十一月今の九月なり。徒杠はかちよりゆく者のわたる橋なり、十二月に輿梁成る。

鼎足を折る―鼎は國の重器なり鼎足を折るは爲政上に過失多きを謂ふ

興らんとする時は、微賤の中に勇知の人生る。故に古は賢を求むることを野においてせり。問。たとひ其身微賤なりとも、德すでに君子ならば、民の父母たる心あるべし。何ぞ招き給はずとも進んで道をおこさゞるや。云。其位其任なければ其心おこらず。大舜はじめ庶人たりし時は、たゞ庶人の業を事とし給ふのみにして、天下の治亂に心なし。國君は一國の民の父母なり。天下に及ぶ心なし。大君は天下の民の父母なり。其大臣は大君の心を以てこゝろとして、天下の民を惠むべき道を盡すのみ。夫大舜の知は貴賤廣狹をえらばず、居としてあたらずといふ事なく、行くとして行はずといふ事なし。大賢以下の人には知に大小あり。才知ひろくして天下の任にあたるべき人を、一國に用ひては却つてつかへとゞこほりて、功ならざる者あり。又天下に用ひては鼎あしを折れども、小國に用ひては可なる人あり。人を知て有才を用ふる事は、君子治國平天下の先務なり。後世は才の用ふべき所をつまびらかにせず、人のほむる者なれば役儀を命ずるあり。士の頭と登し、上に置てはゆ

の平なる事を欲せずと云ふことなしといへども、其治平の根を絶つ事を知らず。其本をきはめたづぬるに不仁なり。民を見る事己が赤子を保んずるが如くなるの慈心なき故なり。人々我子水火のなかに苦まば、これをすくはざる間は、いねても席を安んぜじ。食するとも味を甘んぜじ。多くの子ども己一人の力にして水火の難をすくふ事あたはざる時は、これを助くる術を得たる人有りといはゞ、年來のあたがたきなりとも、必ず往て手をつかね膝をかゞめても我子のすくひを求めん。况や賢者はあたにあらず。自ら之をにくみていみへだてたるのみ。堯は舜を得ざるを以て己が憂とし、舜は禹と皐陶とを得ざるを以て己が憂とし給へり。一人の君子を求るは萬民の苦みをすくはんとなり。問。今も役人なければ、何國にても人をえらび尋ねとはずと云ふ事なし。云。同位同類においてたづぬる故に有がたし。天地の理物みな盛衰あり。富貴は久くつたはらず。其時代に位高く祿重き人の子孫は既に衰へんとす。故に好人生れがたし　積善の家はしらず、大かたは靈明の末おとろへて又

人を得る＝善人を得て之に政治を執らしむるの謂なり

これ恥の心の厚きと薄きとなり。をさなき時物はぢせざる子は、成人の後宣王の如くなるものなり。庶人にしては可なり。士君子となるべからず。宣王は天質朴實にして、直を以て告てかくす事なきといふ者にはあらず。之は又一等の人なり。其位にもあらぬ大言して人を欺くが惡き事はいふに及ばず。欲惡ありながら蓋藏してよき者ぶりし驕吝なる者は、いかで堯舜の道に入るべきや。之又いふに不レ足。

一學友問。何をか治國平天下の要とせん。云。國天下の爲に人を得るを要とす。孟子すでに是をいへり。人に分つに財を以てするを惠と云ふ。世人是を仁なりとし德なりとす。受る者大に悅べり。人に敎ふるに善を以てするを忠と云ふ。世人是をそねみそしり、敎へらるゝ者は悅びず。甚しきは怒れり。人に金銀財用をあたふるは小惠なり。しかれども其人悅び世のほまれ大なり。人に善道を敎ふるは忠なれば、惠よりも大なり。しかれども敎訓せらるゝ者、たからの十が一も悅びず。又世俗のそしりを得ることあり。いかにしてか國天下の爲に人を得んや。人みな國の治り天下

鈍刀云々—骨に及ばずの義にて事物の根本的ならざる喩

き人なるが故なり。懺悔をよしとするは戎狄の風なり。戎人は仁義を不レ知、たゞ輪廻のみを恐れて執著なからん事を欲す。故に善惡を懺悔して後寂滅をねがはんとするものなり。戎狄の學にしては可なり。仁義の學においては不可なり。仁義の性明かなる者は恥の心あつし。恥の心深き者は、心に悔悟りて非を改め善にうつるものなり。欲惡の凡心をにくみて、言はんと欲すれどもいはれず。隱すにはあらず。恥の心あればなり。懺悔せざれども改めうつるを以てよしとす。懺悔する者はいさぎよきに似たれども、其當意ばかりにて終に惡を改めず。善にうつらざるものなり。これとわざに鈍刀骨をきらずといへるが如し。小人の刑罰を恐れて惡をなさゞるが如し。佛者の懺悔して惡を改め道に入るものは輪廻といふ見解ある故なり。物恥して人前へ出かね、ものいひかね赤面がちなる子は、成人にしたがひて才德長ず、かならず一器量あり。幼少の子も、人見ず、人おめせずよくものいひ人前へ出る事やすき子は、成人にしたがひて才知なし。大かた平人なるものなりて利發なるとほむれども、

齊の宣王—孟子梁惠王の上篇に見ゆ

崇—地名

せるなければなり。もし取るべき所なくて善の行ふべき時あれば、胸中より發出するなり。其人にありては小善にして益すくなきも、舜の取用ひ給へば大に成りて國家天下に益あり。たとへばこゝにみがかざる玉を持ちたるが如し。不知者は石とのみ思へり。玉人これを取りてみがく時は、玉となりて寶となるが如し。大善は天下の人の知を用ふるより大なるはなし。

一心友問。孟子に齊の宣王の善を爲に足れりと云へるものは、楊氏の說を朱子も取り用ひられたる如く、天質朴實にして好勇好貨好色世俗之樂といへる如き、直を以て告げてかくさざるなり。心にもあらぬ大言を爲して人を欺く者は、與に堯舜の道に入るべからずと書せる道理至極せり。しかるに貴老、これを以て道に入るべからざる所としたまふは何ぞや。云。孟子の宣王に善を爲に足れりといへるは、牛を見て羊を不見、小を以て大にかふるの仁心を以てなり。崇において初めて宣王にまみえ退いて去るべき志ありたるは、貨を好み色を好むなどいへる、恥の心すう

といへるは少しき事なり。

一心友問。大舜は善與人同、舍己從人といへり。大舜は神聖なり。人は平人多し賢なりとも舜の德には十が一にも及ぶべからず。善も又舜の善は大にして人の善は小なるべし。大德小德に下り、大善を捨てゝ小善を取るものは何ぞや。云。大舜の心は空々如たり。天の蒼々昭々たるが如し。鏡の虛明にして一物なきがよく萬象をうつすが如し。心中惡なきのみならず、善も又なし。小善もなく大善もなし。人に一善あれば一技の花の鏡にうつりたるが如し。其美を好せずといふ事なし。本鏡中に花なき故によく花をうつす。舜の心に善を有し給はざる故に、よく人の善を受いれ給ふ。天下の善を許容して、其時所位にあたれるを取りて、みづからも用ひ國家にも行ひ給へり。他より是を見れば、舜の大德にして常人の小善をも好し取り用ひ給ふは、無我にして己を捨てゝ人に從ふものゝ如し。自己に行ふべき大善あるを捨てゝ人の小善にしたがひ、善を少しきにするにはあらず。舜の御心にもと一善の有

賢を賢とす—論語學而篇に子夏曰く賢を賢とし色に易へよと

を知りて是を改むる事をたのしめり。これ萬歳の師たる所なり。人情の大にかたき所なり。予を始めて仁義の學に志あり。一人の不辜を殺して天下を得る事もせじと思へる事は實なり。義に當りては一命をもかろんぜんと思へども、自己の過を聞く事を願ふこと、病で藥を求むるが如くなるの心なし。過を告しらする人あれば過分なりと口にはいへども、中心より發る悅にあらず。故に人も告る事をたのしまず。多くは知らざるのみ。天下の通病なり。甚しき者は過を云ふを聞いては怒りあたとし、或はかざれり。德を好む事色を好むが如くならざるの證據なり。子路は賢を賢として色にかへたる人なり。後世道學に名を得たる人多しといへども、子路の過を聞いて喜べる心には及びがたかるべし。衞につかへたる如きの過はかろき事なり。事へざるほどの事は予がごとき者もつとめ行ふべし。其難を見てのがるゝ心なく、大なる武勇のほまれありて後死を安くせし事は又かたし。後世の勇者といへども、義をかねざる者は及ぶべからず。子路の行ひし事は皆かたき事なり。過

包荒―柳下恵人となり和なり人を拒む事をせざりき

子路―仲由の字なり孔子三愛弟子の一人

だ凡情をだにも免れずして、學のみ至極を云ふは、我心に於て不レ忍。予又後世の師たるべき者にあらず。一日も凡情を免れて君子の心を得ん事は、終身の悦なり。君子の心地に進まんには、予が實に羨み慕ふ人を師とし友とせんにはしかじ。予が實に羨み慕ひて其心を心とせまほしきは伯夷なり。故に常に心の師とす。人は人と交るべし。木石禽獸とをるべからず。故に廣く衆と遊んで包荒なるべきは、柳下恵を學ぶに如くはなし。孟子は後世の爲に中行不易の則を云へり。予は自己の徳をなさんが爲に益を取るのみ。古人も方は汝の身に有りと云へり。心を磨かんが爲に師をとる事は、己が位によつて自らえらぶべき所なり。先覺は醫師の如し。己の病を治するに便ある人を求るのみ。未だ時と淸和とを思ふに暇あらず。

一心友問。子路は曾子も畏れし人なり。又万歳の師なりと謂へり。しかるに衞の難に死す。死せるは可なり。事へたるは不可なり。孔門の賢者には不足なるが如し。云。子路の過ある時に之を告しらする人あれば、中心より實によろこべり。自己の非

集義和書　卷第十二

○義論之五

孟子云々―程子曰く孟子は大賢亞聖の次なりと又曰く學は已に至處に到ると

一心友問。孟子は大賢なり。德未だ聖人に及ばざる所ありと雖も、學は已に至處に至りぬ。故に道德仁義を云へる事は萬歲の師たり。聖人又おこり給ふ共かへざる所なり。然るに貴老孟子の言に隨ひ給はざる所あるが如し。伯夷は隘なり。柳下惠は不恭なり。隘と不恭とには君子は不レ由といへり。貴老は動ば伯夷を師とし柳下惠を學び給へり。孔子の聖の時なるをば師とし鑑とし給はざるは何ぞや。云。孟子は天下萬歲の師なり。故に中道を揭げ出して人に的を示し給へり。淸といひ和と云ふ、其人にありては可なり。師としよる時はつひえあり故に君子は不レ由といへり。予も中道の的を願はざるにはあらず。是は終に歸著すべき所の地なり。然れども予未

問。しからば日本にも、儒道ひろくならば吉利支丹ほろびんか。云。尤もその理にて侍れども、いまの儒道には儒宗なし。各〻異見を立て流を立て、いひがちの樣なり。いづれの儒學も此國の水土にあひがたく、その時にかなひがたし。吉利支丹の亡びざるさきに、まづ他の害あるべきか。

吉利支丹改—耶蘇敎信徒を檢査せし事

ては何とすべきや。

一心友問。今の武士のよきと申すは、弓馬兵法をたしなみ、晝夜是にかゝり居れり。武藝も世の中の用に立事はなし。事ある時の心がけと云ふばかりなり。兵器は凶器なり。しかれば武士も遊民ならずや。云。日本は小國にて金銀多し。異國より望むといへども、武國故にとり得ず。武士の武藝をたしなむは國の警固なれば、遊民とは云ひがたし。武士ながら武道武藝のたしなみなきは遊民なるべし。問、吉利支丹あらためも、異國の敵をふせぎ給ふ事と承はれり。弓刀もいらず、人心をなびけてとるべき謀と申し侍れば、むづかしからんか。云。しかり。北狄は外邪なれば治し易し。吉利支丹は内病なれば治しがたし。此内病の生ずる根本は、人心のまよひと庶人の困窮によれり。迷ひとけ困窮やまば根を絶つべし。佛法の後生のすゝめにたよりて、夫よりまさる法を作りてみちびくなれば、畢竟佛教は吉利支丹の先達なり。中夏は制禁なければもすゝむる事能はず。聖賢の國にて迷ひうすければなり。

三度なり。後世四時に成りて五度となれり。其ほか五節句朔望の拜は、備へて不レ祭とて潔齋はせず。たゞ生ける時親の所へ禮に行くにおなじ。或は君の賜物、あるひは遠來の珍物、あるひは初物等をそなへ、他行のいとまごひ、歸りて又告る如き事は、子の心入次第にて數なかるべし。年に一度の忌日の外は皆吉禮なり。是神道の義なり。毎月忌日なれば時ならず。吉凶相まじはりて神道をけがすに近し。禮にあらず。故に君子は不レ用。生けるにはつかふるに禮を以てし、死せるにも事ふるに禮を以てする義なり。上古は年に一度の忌日の祭もなかりしと見えたり。三年の喪の中ばかり凶禮にて、喪を除いてはすべて吉禮の神道なれば、忌日の祭はなき道理なり。後世孝子の厚情より、一年に一度の月日は、親の死に逢ひたる事を思出して、終身の喪の心なれば、昔は無くとも、義を以て起して苦しからじとて始めたる事なるべし。今時終を知らぬ忌日をも祭るは道理なき事なり。問。貴老出家に齋米つかはし給ふことは何ぞや。云。坊主は在家を賴んで居る者なり。家々よりやしなはずし

事以禮―論語爲政篇に生けるには之に事ふるに禮を以てし死せるには之を葬むるに禮を以てし之を祭るに禮を以てすと

在家―佛者より見て在俗の人を云ふ

時米―齋米なり

はいたましき事多かるべし。しかれども法は今よりはよかるべし。問。儒法には年に一度忌日の精進あり。毎月精進といふ事は佛法より出たるにや。云。佛法にも本はなき事なりと云へり。むかしは出家の作法よかりし故に、坊主になる者すくなくて、年に一度の精進にて僧のとき米足れり。後世は佛法渡世に成りて、法すたれ戒やぶれ難行なき故に、坊主澤山になりて時米たらず。親の事なれば毎月おもひ出してよかるべしなど云ひて、斯くなりたると謂へり。其死せる時の月日こそ終身の喪有るべけれ、其時にてもなきに毎月精進すべき理なし。故に君子は不レ用。しかれども祭をせざる人は俗にしたがつて可なり。問。一年に一度はおろそかなりと言へる者有り。いかん。云。忌日は終身の喪とて、親死したる其時月の日は、終にあへるが如く思ふなり。四時の祭は吉禮なり。孝子の心に親を死せりとせず、生ける時もてなすが如し。然れども神として祭れば潔齋して、我身をも神明にする道理なり。神はしばしばすればけがるゝ事あれば、むかしは潔齋して祭る事は、春秋と忌日と

佛心宗—禪宗の一名自心に佛心を傳ふるの義

おされつべし。問。貴老の學、はゞかりなくして人の志に應じ給はゞ、今は天下にひろまり侍らんに、なげかしき事なり。云。しからず。すみやかに成るものは堅固ならず。俄にひろまるものは長久ならず。民九十月に麥をまきて、わづかに生ずれば、はなはだ寒におさへられ、雪霜にうづまれ、是によりて根を深くすれば、春雨に長じ卯月の日に實をむすびて、豐熟するものなり。予が學も、おさへあるは麥の寒氣雪霜なれば、後世おこることあらんか。たゞその德なき事を恥るなり。達磨の佛心宗世にひろまる事をにくみて毒害せられしも、其身死して道は後世ひとり盛なり。異學といへども其德あればなり。

一心友問。儒道おこらば佛法はほろび侍らんか。云。道を興す人は君子ならん。君子は力をもつて物の興廢をなすべからず。我道おこらば佛法も昔にかへりてよくなり、坊主すくなくなるべし。なげかしき事は、佛者無道にして盛なれば、天道乘隆の理にて、亂世に逢うて大半亡ぶべきか。すくなく成りて又久しかるべし。亂世の亡び

遠慮なし―論語衛靈公篇に出づ

祖師―達磨大師なり

一．學者問。心學おこりてより儒學實におもむき、諸儒のおもひ入かはりたり。たゞ儒のみならず。近年禪學のはやり侍ることも、心學に目をさまし、敎へやうよく成りたる故なり。さて儒學は日々におとろへ、禪學はいよ〳〵ひろごり侍り。しかれば心學は禪のさきがけとなれり。遠き慮りなしとそしり侍る者有り。いかん。云。しかるにあらず。世は次第に文明になれり。唐にても初は佛流わかれてひろまりしかども、他は次第におとろへてたゞ禪學のみ殘れり。日本も後は左樣になり行なん。それ人は易簡なる事により易し。一向宗ほど易簡なる立法なければ、是に歸する者多し。淨土宗日蓮宗も、後は一向の易簡に習ひてひろくなりぬ。近年文明にしたがつて地獄極樂等の說を信ずる事うすし。是より後はいよ〳〵さあるべし。禪宗はむづかしき事なく易簡にをしへて、しかも悟りとて、さのみ後生の地獄にかゝはらず。これ文明の時にあへり。今の禪は愚夫愚婦のよらんことを欲して妙を云ふ。これ利心なり。祖師の傳來にそむけり。この事なくはいよ〳〵盛になりて、他宗は皆

輪廻―靈魂が多くの肉體中に轉轉して無始無終に生死の境を廻る事

といへども、死を畏るゝより悟を求む。聖學の徒死生を晝夜とす。常なれば畏るべき所なし、故に死をいはず。問。形跡いかゞ見るべきや。云。心迹は形と影との如し。わかつべからず。佛氏剃髪人倫を棄つるは輪廻を恐るればなり。天道輪廻なし。しかるを輪廻といへるはまどへり。むかし鬼物を見たるといふ者有り。これ眼病なり。そののち見たる者なけれども、傳へて恐るゝは眼病を傳ふるなり。白石夜衣を見てばけものとし、氣絶えたる者あればこの傳なり。其惑に狐狸の乘ずるもあり。むかし釋迦輪廻を見たるは心の眼病なり。後世の佛者此心病を傳へて輪廻ありと思へり。又白石夜衣の狐狸ありて、其信をます事有る故に、出家してまぬかれん事を願へり。眞實道心の出家もし輪廻なき理を知らば、一日も出家に住すべからず。たまく〜儒學して輪廻にまどはざる坊主ありといへども、あるひは渡世のため、あるひは其家の名聞などにひかれて、學力すくなければ、心ならず終るもありと見えたり。

江漢云々―孟子滕文公の上篇に此語あり

吾道をあかさんが爲なれば、佛をもまなぶべしや。云。彼と爭はんが爲に學びば非なり。其上儒佛の辨を好むは、道を見ること大ならざる故なり。「江漢以濯レ之。秋陽以暴レ之。皜々乎不レ可レ尙」といへり。玉の寶たる事を知らば、石をつもて是を亂るべからずとも云へり。縱ひ佛學すること佛者にまさるとも彼を非とせば彼佛を不レ知といはん。彼佛を知るといはゞ、則ち吾子佛者ならん。佛者に儒學弘くしたる者あれども、其道にあらざれば心を用ふる事くはしからずして、理を見る事あらじ。今儒者佛學を盡すことも又同じかるべし。自己だにまどはずば可なり。人に說べからず。我佛學せざれども、形容行跡を見て其心を知れり、しばらく吾子が爲に之をいはん。佛學流多しといへども、天台と禪とすぐれたり。天台は高妙なり。佛學のくはしきこと禪にまされり。しかれども心に惑あり。禪は學あらけれども、近く心法に付て要を得たり。惑なきが如くなれども、實はまどへり。問。まどふ所はいかん。云。佛氏の學は死を畏るゝによれり。故に之を云ひてやまず。禪さとれり

侯の干城とあり

故者―故友なるべし

氣にをかされて死するは不義なり。常に無禮なるは人道にあらず。戰場にて死する者何ぞ火氣あらん。只死すべき義ある故に死するなり。君子の義、死は理を盡し禮を盡して、義の必然に死するなり。

一舊友に告げて云。貴殿外に好人のとなへあり。身の分際よりはへりくだりて禮義うやうやし。音信往來等のなすべき事をかゝず、人あひよく侍れば、好人といへるも尤もなり。然るに家人族人は凶人なりと思へり。此凶德數年を經て外人も知るべし一の心病あるゆゑに、百善變じて凶德となれり。貴殿の故者は表裡せり。外人ほめざれども家人族人吉人なりとおもへり。此人外相はあしけれども、一の德ある故に百惡變じて吉となれり。外より見るは行なり。内より見るは心なり。行よからねども心のよきは、天道鬼神の福する所なり。故者は日々に吉におもむき、貴殿は日日に凶に入るべし。

一學友問。儒佛の辨に至りて、佛學にくはしからざる故に、彼佛を知らずといへり。

干城―詩經に赳えたる武夫は王

天にしたがひて無事なり。無欲にして靜なり。問。しからば今の世間知は有道の代には用ふべからざるか。云。德治の代には、子路の勇子貢の辯も用ふる所なしといへり。況や今の世間知をや。

一舊友に告げて云。貴殿常に巖牆の本に立てり。正命にしたがはずして身を亡さんか。云。何といふ事ぞや。云。貴殿人に對して無禮なり。又怒火の氣あり。これ身を亡ぼすべき巖牆にあらずや。今までは幸にしてまぬかれたり。この後無禮をとがむる人あらば兵刃に及ぶ事あらん。勝ても負ても犬死なり。云。喧嘩といへども、けなげに人をきりて切腹せんは犬死にあらじ。云。貴殿はまだ犬死の理を知らず。怒火の爲にをかされ、犬のかみあふが如くなれば、是を犬死といふなり。かみ勝ちたるとても犬にあらずと言ひがたし。古人も喧嘩は其中にて道理なる方勝もの多しといへり。貴殿無禮にして火氣あるは、常に無理をたくはへたり。勝事を必とすべからず。夫武士は君の干城なり。自然の用に備へられたり。その祿を受けて私欲の火

連城玉―卞和が楚王に献じたる玉後趙王の有となる秦の昭王十五城を以て易へんと請ふ故に名づく

周子―周敦頤が事

何ぞや。云。世間善をする事を不レ知者は、碁なりともうつは悪事を思はんには勝れり。いはんや詩聯句をや。昨日の人は善をなすべき人なり。しかるに一人の聯句者詩作となりて志を失はん事惜しからずや。

一 舊友問。世間知うとく事に逢うて赤面おほし。何とぞ處する道侍るべきや。云。周子云。巧なるは凶なり、拙は吉なりと。世間知は巧に近し、是凶なり。吾子これに拙きは吉なり。又云。巧なるは賊なり、拙きは俗なりと。世間知なきは自然に徳に近し。吾子徳をすてゝ賊をうらやめるはまどひなり。問。有徳の人時に不レ逢して愚を守り、性命を亂世に全くする事はさもあるべし。いにしへの聖賢人情時變に達し給へるは、拙きとは謂ひがたからんか。云。人情時變に達せるは有徳の才なり生れ付才ありて道を知らざれば、名聞利害に入りて世間知と成るなり。世間知は眞知くらければ、人情時變は知らざるものなり。有徳の人皆才あるにはあらず。才なけれども有徳は眞知あきらかなり。己を知り人を知り、人の才をも己が才の如し。

大に益を得てよろこぶものなり。人感じ鬼神たすく。君子は外聞を思ふ人にあらざれども、外聞是よりよきはなし。

一學友問。程子の云。人安重なる時は學堅固なりと。しかれば我等ごとき重からぬ生付にては入德有るまじき歟。云。形の靜なるをもつて安重をいふは非なり。心は活潑流行の躰なり。水のながれて息まざるが如し。息まざる處常なり。安重その中に有り。山はその躰しづかなりといへども草木を生じてやまず、山澤氣を通じて出泉あり。流行靜中にあり。かるがゆゑに安重は動靜によらず。心定りて無欲なる時は自然に安重なり。

一學友問。學んで志を立てん事いかん。云。志は義理に志すなり。人の不レ知をもつて義を破る事なき、これ學の初めなり。

一心友問。先日人、詩の聯句をばすべきやと問ひ侍れば、可なりと宣へり。昨日は五七字の上に一生の精神をついやす、連城の玉を持ちて雀になげうつが如しと宣ふは

藤樹先生—中江藤樹

にがむ—兇咀するの義

一　心友問。むかしより名を得たる博學の儒ありといへども、道を興すにたらず。藤樹先生は博學の聞えなけれども、聖學興起の端をひらけるは何ぞや。云。萬里の海は一夫に飲ましむる事あたはず、三尺の泉は三軍の渇をやむるに足れるといへるものなり。

一　朋友問。人みな外聞を專とす。君子もこの心ありや。云。有り。君子の外聞は義理をかゝざる是なり。小人の外聞は義理をかく事を恥とせず。たゞ外樣のやうすよきを好めり。これ童女の外聞なり。たとへば貧賤の中に親類あるを外聞あしゝと思ひてかへりみざるは、我身本より富家にていやしからぬとの外聞なるべし。君子よりこれを見れば仁なく義なし。外聞あしき事なり。富貴の家をば鬼常ににがむといへるも、かやうのたのもし氣なき事にて人のうらみを得ればなり。先祖の積善の餘慶にて富貴になる事なり。親類はみな先祖の子孫なり。貧賤の者を先すくふべし。取あぐる事ならざる者ならば、常に念比に音信すべし。貧賤のものは少しの助けにて

放桀―湯桀を放ち武王紂を誅するの事古來其説頗る多し

らその道を伸るなり。屈するにあらず。平人よりいはゞ、みづから高ぶるの私心を屈して賢を尊ぶの天理を伸るとやいはん。箕子も獨夫の奴となりて天子に臣たらず。天子を來すも天理を伸るなり。武王も天子と成りて獨夫のとらはれ人に禮を厚くし給ふも、みづからの天理を樂むなり。その實は一なり。

一　心友問。湯桀を放ちて德に恥るの言あり。臣として君をうつの名は湯の聖德の疵なれば、恥づること有りや。云。しからず。湯の聖德堯舜のごとくならば、桀恥ぢて惡をなす事はなはだしからじ。しからば放に至るべからず。德堯舜に及ばずして恥づる事うすく惡をなす事甚しくして天命つき、獨夫となりて天の罰をいたせるは、湯の德に恥づる所なり。問。武王もおなじ事なるに、德に恥るの言なきは何ぞや。云。武王德に恥づるの心有りと雖も、湯の鑑遠からざれば其言なし。文王いまさば紂をうつに至るべからず。武王の德の文王に及ばずして、紂が惡甚しくなりたるは德に恥づる所なり。

洪範ー洪範九疇は尚書の篇名也武王箕子を訪ふ時箕子之を陳す

箕子云々ー箕子囚を釋かれて朝鮮に封ぜらる武王臣たらざるを明かにするなり

は意誠なり。如レ此なる時は心廣く體胖なり。浩然の氣天地の間にふさがる。万物皆わが身に備れり。天地太虛己にあらずと云ふことなし。

一心友問。箕子周に臣たらじとて、又洪範を武王に傳ふる事は何ぞや。云。洪範は天の禹王にあたへ給へるなり。殷の紂罪窮りて獨夫となる。かるがゆゑに天又天下をもつて武王にあたふ。洪範は聖主の天下を治むる大法なり。天の天下をあたふる人に傳ふべし。何ぞ私の遺恨をもつてこれを廢せんや。平氏三種の神器をいだきて海に入りしごとき無道をよしと謂ふべきや。天下古今のいたむ所なり。箕子周に臣たらずして朝鮮に至る事は、周を非とするにあらず。殷の世臣なれば、その身一人の義を立つるなり。問。王訪二于箕子一とある時は、武王みづから屈して箕子に就いてたづねたまふなり。箕子を召とも、箕子志を屈して至らざらん事を知りたまへばなり。朝鮮に封じて賓とし給ふも、臣たらじの志を遂げしめたまふなり。是實に忠恕の道なるか。云。しかり。武王は箕子の志に隨ひて違ひ給はざるも、みづか

思無邪―論語爲政篇に詩三百一言以て之を蔽へば曰く思ひ邪無しと。

にして遂がたかるべし。云。人前には人前の則あり、獨居には獨居の則あり。何ぞことを一にせんや。その上獨を愼むは獨知を愼むの心なり。古は文法易簡なり。一字を以て二字の心をかねたる例おほし。中と云ひて庸其中にあり。獨と云ひて知其中にあり。獨しる所は人前獨居のへだてなし。人前といへども我心の獨おもふ事は人さらにしる事なし。吾心の獨知る所を愼む時は、外の窮屈なることなし。思無邪、無自欺、誠意、これみな愼獨の義なり。心上に一念發すれば、善もかならず自ら知り惡も必ず自ら知るは知なり。知は心の神明にして本善惡なし。故によく善惡を照す。口に五味なくしてよく五味をわきまへ、目に五色なくしてよく五色をわかち、耳に五聲なくしてよく五音を聞くが如し。この故に獨知をもつて主人公として是を愼しむは、尊徳性の義なり。それ思は心の官なり。然れども天理自然の心より出たる思ならずして、人欲の私によつて發する思は邪なり。此兩端を獨知に照して私欲の思なきを無邪といふ。是また愼獨の意なり。獨知を愼しみて不自欺時

非禮を見聞といへども不見不聞が如し。堯舜は天下を有ちてもあづかりたまはず。況や外より來るものをや。

一學友問。俗に心學といへば、變りたることにて常の學にあらずと思へり。又心學の心まづ字を新の字と思へる者もあり。聖人の學は心學なりともいひ日新盛德ともいへば、いづれにても義理はよく通ずるを、あしくいひなし侍り。云。學ならば學、道ならば道なるべし。儒道といひ心學といひ、上に名をくはふれば病あり。道は天地神明の道なり。大虛天地唐日本、共に一貫にして二つあらず。學は是をまなぶのみなり。心を離れて學あるべき樣なけれども、世の學者見所違ひて心を外にする者ある故に、心の學を加へぬれば、道理なきにあらざれども、德のおとろへたるが故なり。

一心友問。獨を愼むとは、獨居の時も人前の如く作法正しくする事にて侍るなり。一たびは張り一度は弛すは文武の道と聞侍り。人前と獨居と同じ樣にては甚だ窮屈

日新盛德―大學に日日に新と云ひ盛德至善を道ふと謂へる類を指す

一張一弛―禮記に一張一弛は文武之道也とあり

螻蟻云々―説苑に呑舟の魚も蕩して水を失へば螻蟻に制せらる其居を離るればなりと

を尊ぶ時はもちひらるべし。國家天下道なくて事物の末による時は用ひらるべからず。才にもまた大小あり。小目の網をくゞる小魚は盆山の水にやしなふべし。鯉魚は出泉の池に放ち、呑舟の大魚は大海の不測にあそぶべし。鯉魚を盆中に入るゝときは、躍りいでて生をとげず。呑舟の魚を池に放たば、却つて螻蟻のために制せられん。故に廣才の人には國家の大難をはらはしめ、天下の大患を解治せしむべし。廣才を小事に用ふる時は、小人のために妨げられ、小才を大事に用ふる時は、鼎の足を折るのみならず、亂のはしともなるべし。

一　心友問。非レ禮視聽言動する事なかれの義いかゞ。答へて曰。禮は天理なり。人欲の私曲盡きて、天理流行するを非禮視聽言動せずと云ふ。問。言と動とは己より發する事なればさも侍るべし。視聽は人より向ふものなり。惡人の朝に不レ立、惡人と不レ言のはげしき行なくては免かれがたからんか。云。鹿を逐ふ者は山を見ずといへり。鹿に心の專なれば、山をば見ても見ざるが如し。己が心天理に專なれば、

甲州流—小幡景憲の祖述せる武田氏の軍法

手行—手法の誤か

せめはたりしへたぐるものとのみ思ひて、一向愛すべきものとも知らず、奢りやはらかになり、武勇を失うて滅さるゝに至りては手間もいらず。問。義經正成軍法いづれかまさり侍るや。云。正成も義經にならふといへり。是心を義經に取りて時處位に應ぜし人なり。楠の時と今とは世中の時勢大にかはれり。正成の上手をはたらきし跡を似せて、將の器量もなく勝負の利もしらずは大負をすべし。問。甲州流越後流信州流などと申し侍るは如何。云。三家の中にて將のすぐれたるは景虎なり。功者は信州甲州に有りと見えたり。しかれども近代の軍法はせり合の手行なり。小事を知るにはよかるべし。義經正成義貞の後は實の合戰はなし。武道の衰へたる故なり。問。何をか今の時處位とせんや。云。將の器量有りて勝負の利をしる人、古今の時變を考へて當るべき處なり。かねていふべからず。

一 朋友問。君子は大受すべくして小受すべからずとは何ぞや。云。大體にしたがふものを大人とし、小體にしたがふを小人とす。君子は大人なり。天下國家道有りて德

近臣―武内宿禰等を指せるか

勇をも失ふ者あり。それ日本は仁國なり。かるがゆゑに古より勇者おほし。日本の弓矢神とあがめ奉る八幡宮は應神天皇なり。この御代には近臣いづれも武勇すぐれたり。然るにその君臣の子孫たる人々も武おとろへて、事あれば地下に命ぜられしなり。この故に平清盛受領の五位より武功をもつて進み、大相國に至り、終に天下の權威を取りたり。かくの如く武偏すぐれたる平氏も、わづかに二十年の間に武勇おとろへて、木曾義仲源義經にたやすく亡ぼされたり。源氏關東より起りて京都の平氏を討亡してより後は、北條家に至るまで、關東武者は剛強にして、上方武者は柔かなる樣に慢りかろしめたれども、楠正成は上方の柔なる中より出て、しかも小勢なれども關東の大勢を挫き、世人みな鬼神の樣に思へり。しかれば王代武家始終人のかはり有るにあらず。東西强弱違ふにあらず。そのはじめは質素の風有りて人民を愛しつる故に武勇の譽あり。これ仁者はかならず勇あるにあらずや。其終は奢りて用たらざれば人民を愛する事あたはず。後々は習と成りて、民をば

淵明―晉の陶潛詩酒を嗜み菊を愛して終に出仕せず

に見己に慢じて遯を好むも有り。是をもつて小人は否なり。問。道不レ行天下亂世ならば、何國にか遯れ去るべきや。云。知をくらまし德をかくし、凡人の業をなして市井の中に遯れ去るあり。これもまた遯尾して災なきものなるべし。晉の淵明は酒に隱れたりといへり。實は酒に溺れず、只一生外見を酒呑の用にたゞずとなりて終れり。遯るゝ所なくしてのがるゝものは、おほくは貧賤をかくれ家とす。

一心友問。古人の語に「謀從衆則合二天心一」と云へり。世俗の心は流俗の弊後來の習おほし。是に從つては天心に合ふべしとも覺えず。云。衆の從ふ所のものは必ず至當あり。謀といふ時は、理もなき流俗の習に從ふにあらざる事明なり。

一朋友問。仁者は必ず勇あり。勇者は必ずしも仁あらずと聞く。寔に勇武の譽有りて不仁なる者あり。北狄の弓馬を得て死をおそれざるも、人倫にとほき所あり。又仁愛にして勇なき人あり。かならず勇ありと聞くときは、疑ひなき事あたはず。云。驕奢なるものは仁心仁聞有りて臆病にもなけれども、終には不仁に流れやすし。且

與らず—論語泰伯篇に巍々乎たり舜禹の天下を有つや與からずとあり

女上なり。恒はすでに夫婦と成りたる故に、男上にして女下なり。古は天子といへども賢士を賓とす。賓の初は君先だつて禮をもつて之をまねく、いまだ臣とせざるなり。その才德を見て天位をともにし給ひ、士もまた共に天祿を受くる時は君臣となるなり。易の卦爻五を君の位として、五の上に九六を置くは、賢士を賓とするの象なり。蠱の上九に曰はく。不事王侯高尚其事。觀の六四に云。觀國之光利用賓于王。古は賢德の人あれば、人君これを賓とし敬し給ふ故に、士の王朝仕進するを賓といふといへり、如此ならざれば共になす事あるに足らず。

一　心友問。遯の九五に云。嘉遯貞吉也と。九五は君の位なり。遯は君の事にあらず、如何。云。大舜は天下を有てども與らず。これ遯の至れるなり、問。好遯、君子吉也、小人否、とは何といふことぞや。云。君子は義を見て遯る。義の遯るべきときは好遯す。伯夷兄弟國を譲りて海に遯れ、又君臣の義を行ひて首陽に飢ゑたる類なり。小人は世間むづかしきとて、便利によつて遯を好み、或は仁愛の心うすく、人を非

咸—易經の下第一の卦名

によりて辭したるものか。たとひ才知器量有りとも、狂者は大意を見て高大高明に過ぎたり。堯を以て代官とし、天下を平治せしめ、山水田舍の間にあそぶ事、何の樂みか是にしかんや。人の代官をせじと思へるか。二子の心此二の内なるべし。問。䷙天は至大なり。如何してか山中につゝみたくはふるや。云。道は天よりも大なり、人の身の中にをさめかくすは、又山天の象なり。

一學友問。進みて賢をかくさずと聞侍れば、其心に利欲だになくは、禮あらずとも貴人に說くべき事なるか。云。咸は男下にして女上なり。男上に女下にしてこそ男女尊卑の禮儀も正しかるべきに、尊卑違つて女を取り吉といへるは、男の女に下るは陽の陰に先だつの義なり。親迎の道理なり。君の先だつて賢にくだる時は天下治まり。男先だつて夫婦和す。賢人は下に有りといへども、臣より先だつて道をもつて上に得らるべき義なし。女は男にしたがふものといへども、男の禮儀をもつて求めざるには、往いてしたがふ道なし。咸はいまだ夫婦とならざるの初なり。故に男下

家食—家居して徒食するなり

狂見—清節を守る事狂に近き程なるを謂ふ

の義なり。道徳學術を内に積んで、聖王賢君の時にあひ、禮有りて召給ふには、出て天祿を受くべし。ゆゑに不家食吉也といへり。吉とは俗の禍福吉凶の吉にはあらず。吉善の義なり。内に積たくはふる所の學術道徳をもつて時に施し、天下の艱險を救ふは天下の吉善なり。道躰は其大外なく其小内なし。天地の大なるも道徳の中の一物なり。かくの如くなる道理を人の心中にたくはふるは大畜なり。聖主賢相の故には、天下みな其利を利とし其樂をたのしめり。故に利と云ふも利欲の利にあらず。利欲の利は己を利するに心あるが故に吉といふべからず。聖賢の利は物を利するなれば天徳なり。聖人の心は四海一家のごとく中國一人のごとし。我身に天下を利するの道徳有りて、時至り進むる人あるは、雨露のめぐみによりて生ずべきものゝ開發するがごとし。何の心かあらんや。許由子陵は衆人をぬけ出てゆたかに凡心をはなれ清明なる所は聖人と違ふ事なし。許由子陵みづから我をみたる時、朝に立ちて用ひらるべき才なき故に、庶人と成りて獨道をたのしまんが爲に、狂見

三苗―支那古代南支那に占據せし民族

子陵―嚴光字は子陵諫議大夫に拜せられしも辭して就かざりき

後治化大ならじ。天地位し萬物育するに至らず。是故に堯舜の神武にして天下の兵を擧げて三苗を誅し給ふは、何の危き事かあらん。剛にして剛を用ひば、決し去りうちほろぼすこと易からん。しかるに悠々として心服を待ち給ひ、來服せざるが爲に軍をかへし、文德を修めて終に來らし給へり。兵を以てし力を用ひて服する事を欲し給はず。是夬の剛にして柔を決すること健にして悅び決し去つて和ぐ所なり。君子の小人を退け去ること、かれを斷亡すにあらず。和して導き、敎へてその非を改めしむべし。小人の道消する時は、決し去らずしてなきが如し。

一心友問て云。許由は帝堯の召に從はず、子陵は三公を辭す。古今これを賢なりとす。天下道なき時に隱るゝは常の事なり。帝堯は聖人なり、光武は賢君なり。何ぞ召に應ぜざるや。又世の賢なりとする所は、富貴を辭し山水を樂むの淸心を尊ぶなり。大舜の辭せずして出給ふは何ぞや。聖賢中狂の分とのみ聞いてその理を知らず。答云。大舜の堯の召に應じて、出て天祿を受け給ふは、易に所謂「大畜不₂家食₁吉也」

敬以云々ー易経に出でたる字面

重れば死するより外のことなし。そのごとく國家天下も亂のきざし惡の源を見て、はやく備をもうけ其源をたち、其きざしを轉ずれば、眞の無事に成りて長久なるものなり。夫主將は仁と威とを身にをさめて德とす。故に紀綱ゆるまらず。儉と禮と時を以てうごきて、吝ならず奢らず。故に人心正しく成りて風俗美なり。

一心友問。敬以直レ内義以方レ外、と見え侍れば、聖人も敬の工夫を用ひ給ひたるか。云。獨を愼むときは、仰いで天に愧ず俯して人に愧ず。これ內の直きなり。事物において好む事もなく惡むこともなく、義と共に從ふは、外の方なるなり。

一心友問。䷪は上六の一陰、位なく權勢なし。九五は剛にして位あり權勢あり。決し去るにおいて何の危き事かあらん。しかるに不レ利即レ戎利レ有レ攸レ往と。まことに功利の徒のまはり遠きと云ふもことわりなり。德を知る者にあらずは處する事あたはじ。云。しかり剛にして剛を用ひば、一柔の微なる、決し去ること易かるべし。しかれども剛にして剛を用ふるは既に過たり。寬仁にあらず。故に決し去りて

小魚云々―老子に出づ小魚は腸鱗等を去らず國を治むるも亦煩なるべからざるを云ふなり

一　心友問て云。人いへることあり。大國を治むるは小魚を煮るがごとし。いろはざるがよきなり。かきまぜとやかくすれば、くだけてあしく、何事も其まゝにておけば無事にてよきを、しひてよくせんとする故に、かへりて悪事出來るなり。「うちまかするに世こそをさまれ」と云ふ前句に、「よきにのみなさんとするやあしからん」と付けたるを、古來名句とするなり。おもしろくおもひ侍り。答云。しかり。小鮮をいろはずして煮るが如く、政刑のさかしき事なく德ををさめて、いつともなく人心を正しくし風俗を美しくするは上知の事なり。德なくてよき事のみ好み行へば、人情にさかり時所位にあはずして、その善事の一倍もあしき事になるものなり。藥を不レ用して、日を經ぬればおのづからいゆる病に、下手醫者の藥を用ひて大煩となすが如し。しかれども左樣に一偏にもいはれず、いろはずしておきて國天下の治まるものならば、それ程やすき事はなし。誰も天下國家をばをさむべし。はやく藥を用ひ灸をすればいゆる病人に、藥を用ひたるはあしきとて打棄ておき、日をへて病

恥心―孟子に所謂人は恥無かるべからずの義なり

者多し。しかるに世間の人は次第に劣りゆく事は、心得がたき事にて侍り。答云。しかり。田にううる稲も、晩稲ほど取る實おほし。今時の子供の利根なるは稲の早稲のごとし。おとなに成るほど知恵の取る實すくなし。其上平人の利發といふ物は大方鈍なる物なり。わらはべの爪くはへして赤面し、人前にてものいひかぬるは、知あきらかにして恥の心ある故なり。人に存するものは恥心よりよきはなし。恥の心明かなるものは、學問しては君子の地位にもいたり、たとひ無學にても平生は人がらよく、軍陣にては武勇のはたらき有るものなり。昔のわらはべどもには爪くはへする者多かりし故に、成人に隨ひて一役の用に立つものありき。今のわらはべは人をめせず、人前にても利發にものいひ立るふるまひよし。この故に成人する程用人に選ぶべき人すくなし。人の親たる者德を知らざれば、恥心ある子をば叱りおどして恥心を亡し、恥心なき子をばほめ愛していよ〱ほこらしむ。賢才は日々におとろへ、驕吝は日々に長ずる所なり。悲むべし。

天下の故―天下の事物形勢等

德の者は、わづかに惡名など樣の難あり。本より凡人の品をまぬかれざる故に、箒るゝ事もおそし。然れども我心に無き事ならば云ふといふとも預らず。

一心友問て云。不偏不倚過不及なきを中といへり。帝堯の執中の心法、斯の如きのみか。答云。不偏不倚は未發の中をいへり。其未發に當りては、其心至虛にして偏倚する所なし。故に中といふ。無過不及は已發の中をいへり。此心をもつて萬物の變に應ず。往として中にあらずと云ふ事なし。故に過不及なきなり。中也者天下之大本なりといへり。中は天地人の根本と云ふ義なり。他にもとむべからず。是にまさりたる中の解はなし。中をうちと讀む。うちは物の主なり。禁中をうちと申し奉るも此義なり。心をもうちと云ふ。然れば中は心の別名なり。心といへば空にして手を下しがたし。心の德をかゝげ出して中と名付給へり。夫中は思ふ事もなく爲る事もなし。寂然不動にして、感じて天下の故に通ずるものなり。

一心友問て云。今の世の幼少の子は大方知藝能あるが如し。昔はきかざりし秀でたる

おほせ―負すなり被せかけて

陽虎―孔子匡の難は陽虎に肖たりしより起れり

そしらるゝ事は何ぞや。答云。人のほむるは我を勞するなり。そしるは我を安んずるなり。我病者にして躰氣乏し。勞せん事かなひがたし。安んずる事當れり。かるがゆゑにそしりは我を助くるなり。知りてほむると云ふも、愚に德有りてしたしまるゝにあらず、氣象のあひかなひたる人ならん。萬人に一人の知人だに我を勞すること甚し。そしる人は我にかはりて我病氣をことわるなり。其そしるあまたの人にほめられなば、今までながらへても有らじ。且德をもそこなはれんか。そしりは愚が過を格し浮氣をしづめ身の養生をなさしむるなり。きく事をいとはず。ほむるは愚が過をまし浮氣を生じ氣力をへらさしむ、きかん事を願はず。問。夫はさもあれ、貴老の名をかりて不善をなし、且貴老におほせ申す事多し。思ひよらざる惡名をとり給ふ事は、道德の疵ともなるべきか。云。尤も知らぬ惡をおほせられて名をけがさるゝは、無實の難題なり。譬をとるはおそれ有れども、聖人をだに陽虎にまがひたり。大德の人は難も大にして、又霽るゝ事もすみやかなり。愚が如き不

古歌―兼好が木曾に隠れし時の歌、但初句「ここもまた」

にて、天命に應ずべき道徳を立てざる故に、終に亡に至るものなり。これを大學にも、賢を見てもあぐる事あたはず、あげても用ふる事能はずといへり。

一 朋友云。我國に先生の名を聞きて道に志し、來りてしたがひ學びんことを願ふ者あり。いかゞ申しつかはすべきや。答云。古歌に

住めばまたうき世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがなな

其人の心に、そこに行て學問せば、とや有らんかくや有らんとおもしろかるべき事を心にむかへて慕はるゝなるべし。來りて見給はゞ、一としてその如くなる事はあらじ。學術も其心に好まるゝ所は、いかやうのすぢなるをも知らず。愚が學只今の如くならば人にも知られじ。昔あやまりて名を得たり。其のひが事を人は好む者有り。人道は珍しきことなし。必ず來學を止らるべし。

一 心友問。貴老の御事を知りてほむる人はすくなく、不レ知してそしる人は多し。聖人の道を學ぶは、名を求むるにはあらざれども、人の名の質ならずや。然るに却りて

は仁を主としたまへば孝弟は賓となりりぬ。官祿をすてゝ親をたすくる時にあたつて、親を助くるは君の本心よろこべり。家をかへりみずして君につかふまつるべき時に當つて君に事ふるは、親の本心の悅びなり。一方悅びて一方うらみばこそ輕重とも云ふべけれ、道にしたがふ時は雙方の悅なり。まよひの君とまよひの親は酒氣の常の心を失ふが如し。論ずるに足らず。

一或問。たえなんとする家には善人生れ、おとろへんとする國には賢臣出ると申すこと有り。いかなる故にてはんべるや。答云。この理あり。天道の仁なり。家のたえなんとするは積惡のゆゑなり。末にあたりて善人の生るゝ事は、道德を修めて其積惡を消し、子孫を再興せしめんとの命なり。しかるに善は善なれども、惡に勝つべき道德なければ、遂に絶ゆるものなり。又衰へんとする國に賢臣のあげらるゝ事は、運命すでに危きざし有り。是によつて賢を思ふの心あり。天道其おとろへをひるがへさしめんが爲に賢才をあたへ給へども、たゞに善をえらび善を令したるばかり

時中—義と仁と時宜によりて相違あるべければ時に從ひて中を失はざるべしとなり

愼みの格法に成りて、窮屈にして心は主なきがごとし。獨とよみて知の心をふくむべし。

一　朋友問。君と親とはいづれか重き。答。時中を重しとす。君子は主と親との輕重をいはず。たとへば君にしたがつて軍陣におもむかんに、父母妻子を敵にとらはれたりとて、日比の君臣の義を變じて敵の臣とは成るべからず。此時は父母妻子一族よりも君一人を重しと謂はんか、さにはあらず。たゞ義を重しとするなり。父母の本心も又亡ぶるを安んじて生るを恥とす。父母の形は亡ぶといへども性命亡びず。又父たる者不慮の難にあひて殺されんとせば、たとひ子たる者重位重祿をうけて君につかふるとも、捨てゝ父を引つれのがれかくるべし。此時は君よりも親を重しといはんか、さにはあらず。仁を重しとするなり。たゞ君親のみしかるにあらず。五常の性といへども、仁を主として義禮智信を賓とする事有り。信を主として仁義禮智を賓とする事あり。孝經には孝を主として敎へたまへば仁義も賓となりぬ。論語に

り。道に大小なし。天地の外天地の內、異なることなし。且大虛と云ふは、三千大千世界といふよりも大なり。大虛と云ふも道躰なり。道の外大虛あるにあらず。

一　心友問て云。君子と小人とに向ふ時、心と行と二つになり、人前獨居又內外有り。是を一にせんとすれば心すくみ氣鬱するが如し、又親しき友といへども隔心をなす樣なり。隔心あれば善を告げても聞入れ侍らず、和して一躰の思ひをなせば、我をもいさめ人もきゝ入れ侍り、然れども我が心において流するが如く取しめなきが如し。いかゞ受用し侍るべきや。答云。君子と小人と人前と獨居との境界を立てて云ふことも、時により事により人によりて有るやうあれども、受用の端的にはあらず。その四の境界をたてず、たゞ自己一念獨知に向つて愼み給ふべし。大學の愼獨の獨の字の下に知の字を付て見給へ。古は言語易簡なり。獨と云うておのづから獨知の心あり。ひとりとよめば人前の事は云ふに及ばざれども、身のひとりと心得侍れば、

端的—正眞なり朱子語類等に見ゆ

三千大千世界―須彌山、日月、四天下、六欲梵天までを一世界としその千倍を小千世界その千倍を中千世界その千倍を大千世界大千世界三千を三千大千世界とす

ましたりと雖も、未だ徳を好むの人を見ず。粗學の自滿のつひえは一二にあらず。

一學者問て云。或人のいへるには、有無の見の有にはあらず。道躰に有無中道あり儒は道躰の有なり。今の有躰ををしへおこなふが故なり。尤も自然の妙なきにはあらず。無と中道をうらとせるなり。老子は無を本とし有中をうらとせり。釋氏は有と説き無と説き中道と説き、また中にもあらずと説くは、畢竟中を本として無有をうらとせりと。いかむ。曰。儒は尤も今日形色の上に有といへども、形色の主たるものは無なり。頑無にはあらず。形色なきの道なり。その無は神明不測にして、其大外なく其小内なし。東西南北上下中央なし。虚靈不昧なるものなり。是道躰なり。ゆゑに中といふ。形色の主は無なり。無の徳は中なり。物あれば則あり。形色は天性なり。惟聖人にして可レ踐レ形。又問云。或人のいへるには、三千大千世界と云ひて、此天地の外無量の世界あり。わづかに天地人をもつて道を立てゝ教をなす。狹きに似たり。云。是いまだ形色の見を離れず。物の大を以て目をおどろかすものな

道だてする學者は、凡情の勝心をもまぬかれず。利欲の根をだにたゝず。不仁をもつて力量にまがひ、古人の跡を見て變通を知らず。得るかたには禮法を守り、又得るかたには美風をみだる。常人の君子の大義をとらざる事をそしり、凡女にも貞女の節を守らしめんとす。羊に虎の皮をきするを以て道を興さんとす。之に遠き時はおそれ、之に近き時はあなどる。大道の罪人なり。たとひ虎の質有りとも、羊の皮を著て群をみだるべからず。たとひ光有りとも、やはらぎて塵に同じかるべし、之に遠ければ望むこと有り。之に近ければ恥ること有り。君子の學は忠信を主とす。文は時に中すべし。

一　朋友問て云。江西の學によつて天下皆道の行はると云ふ事を知れり。儒佛共に目を付加へたるは大なる功なり、答て云。尤も少しは益もあるべけれども害も亦多し。しかと經傳をも辨へず、道の大意をもしらで、管見を是とし異見を立てゝ聖學といひ、愚人をみちびく者出來ぬ。江西以前には此弊なかりしなり。天下の人目をさ

羊質虎皮―楊子法言に見ゆ實なきに虚飾するなり

江西の學―中江藤樹先生の學風を指す

三年云々―論語子路篇の語

子路云々―孔子家語に出づ

大場―公開の場所

は、人倫を明かにし禮を尊んで禽獸をさる事遠からしめんとなり。其上大節を守るは君子の義なり。小節を守るは小人の事なり。小人は小節を取りて禽獸に遠ざかり、君子は大節を守りて小人に異なり。政は小人の人情風俗を本とす。俄にして人情を憂へしむる時は大道とげず。故に聖人も、三年にして成ることあらん。世にして仁あらんと宣へり。養子入聟等は、今日本の風俗と成りて人情の安んずる處なり。君子たる者は人の非を誚らず、天をもつて獨立つべし。天下の風俗と習とは、下にある者の任にあらず。縱ひ明君上に出給ふとも、俄に法を立て給ふべからず。徳化のひろまるにしたがつて漸を以つてうつりかはるべし。問。子路孔子の命によつて射をみる者を退けられし時も、人の後たる者を恥しめられし事は如何。曰。之聖賢のしわざにあらじ。孟子曰く。仲尼は甚しき事をし給はざる人なりと。道理は道理にても大場にて人に恥辱を與ふる樣なる不仁なる事は、今日本にてだに少し心ある者はせず。況や孔門においてをや。家語には後人の附會の事有り。悉く信ずべからず。當世

大君の國郡を封じ給ふも同じ理なり。一人をもつて國郡を始めしむ。國郡を以て一人にあたへ其身を樂しましむるにあらず。先君の其國に養ひおきたる者は、一人として退き去ることあたはず。用に立つも不ㇾ立も、おしなべて治め養ふは國郡の主の任なり。國郡主なければ相亂れて生をたもたざるが故なり。今家も亦しかり。子孫なくして絕えたるは、誰にても兄弟多き者の、いまだ家なく其役儀をつとむべき者を撰みて位祿をあたへ、其家内の男女を養はしむべし。諸侯と成りて其國の位祿を受くれば、其國の老若を養ふが如し。其者同姓ならば直に祭祀をつぐべし。他姓ならば往々同姓を求めて我後の役者とせん。同姓其器なくは、我力を以て祭祀を絕たざるはかりごとをなすべし。源平藤橘等の姓はひろし。くはしく尋ねば、同姓の無き事あらじ。同姓を養子とするは古の法なり。周人の百世といへもど婚姻不通の法も、同姓の親みをひろめて人の後をたゞじとなり。もし同姓なくば他姓といふとも可なり。人は皆天地の孫なり。同姓にあらざるはなし。しばらく末をわかつもの

る事、深淵薄氷に過ぎたり。視聽言動思ともに天理にしたがふ時は心廣く躰胖なり。人欲に陷る時は心いたみ身くるしめり。學而時習レ之。天理人欲の苦樂をよくおぼえ、戒愼恐懼を以て心の生意を發出し、天眞の悅を得るを、明かなるより誠有りといふ。有事無事共に存養省察して放心せず。これを敬と云ふ。何ぞ氣象に泥まん。何ぞ陽氣の健なるをたのまん。間思雜慮は意必固我の欲より生じ、頑空は其はじめ物を逐ふの念より發して、その跡茫然たり。存養省察の功疎かにて念の起る所を不レ知。既に物を逐ひ放心して後におぼゆ。相火燃えて滅えがたく、空々の本躰に歸りがたし。如レ此ものを敬せずといふなり。敬を立てんと思はゞ、よく惑を辨へてみづから明かにし心法精くして、念慮の微をさとるに有り。

一心友問て云。當世學者の論に、養子と云ふ事はなき義なりといへり。然ればとてたちまち家たえ、家内の者どもを流浪させせんも不便なる事なり。是に就きても世中の人學問をきらへる者多し。聖人の法といへども、心に於てしのびざるが如し。答云。

敬なり。易に云ふ。天行健。君子以自強不レ息。敬の受用是より深切なるはなし。敬は心の本躰にあり。性の德なり。故に聖人は無心にして敬存せり。誠より明なるの性なり。此故に欽明と云ふ。思皆あやありて閒思雜慮なし。無事の時は空々として幽深玄遠なり。昭々として神明不測なり。寢る時は靜專なり。よくおこりたる火を灰中に埋むが如く。冬陽氣を地中に包み蓄ふるが如し。常人の寢て尸の如くなる事なし。晦に嚮うて入りて宴息するなり。故に時として敬せずと云ふ事なし。天地の大德を生と云ひ、人の本然を仁と云ふ。天地に法りてみづから強めてやまず、生々の流行に合しておくれざるは敬なり。夫孝天之經也、地之義也、人之行也。經義行は一貫なり。其息まざる所の景象を敬と云ふ。卽ち本躰卽ち工夫なり。問。手を下す所はいかゞ。云。自反愼獨是敬の手を下す工夫なり。常人は昧によつて敬を知らず。明かなれば自然に敬有り。深淵に臨み薄氷を履む時、身のおちいる道理明なる故に必ず愼むなり。多欲利害の天眞をそこなひ、長生不死の眞身をおとしいる

深淵薄氷―詩經に見えたり。

欽明文思—書經の堯典に見ゆ

集義和書　卷第十一

○義論之四

一　心友問て云。敬を立つるの受用手に不レ入が故に、やゝもすれば離れやすし。敬存する時は心氣健なるが如し。然れども或時は一物あるが如く、心氣すくみたるが如し。或は頑空となり或は間思雜慮あり。皆是を放心といふべきか。覺ゆる事遲して歸る事速ならず。答云。敬は天地人三極の要道なり。天の流行して息ず、日月のかはるがはる明かに、寒暑來往して物を生ずる事間斷なき處は敬なり。地の山澤氣を通じて流水不レ舍風雷雲雨を起して物をなすこと怠らざる物は敬なり。天地は無欲なり。故に敬やむ時なし。瞬の程なりとも敬なくば天地も崩れつべし。是故に敬は本然固有の德なり。外より附たる物にあらず。堯の德を稱美して欽明文思といふ。欽は

民は云々—論語泰伯篇に出づ

制あるべきか。問。閔子の三年の喪終りても哀情止まざるを、君子なるかなと宣ひしは尤もなり。子夏のやう〳〵つとめて樂めるをも君子なるかなとありし事を、子貢の疑ひ問はれしに、孔聖の答へ給ひしは、大方通じ侍れども、上下淺深の位は遙なるやうに覺え侍り。云。閔子は氣質美にして又學力ふかし。つとめずして成し給へるなり。子夏は天質及ばず、學力ばかりを以てつとめて至れり。然らば閔子の質あらば閔子には及ぶことあらん。子夏の質にして子夏には及びがたからん。世中の人を見るに、聰明の質は篤行に不足なり。篤實の質は才知に不足なり。顏子閔子は二つながら兼ねたる氣質なり。其上聖學あれば大賢人なり。知もくらく行もよからずして又學を不レ知者を愚不肖と云ふなり。此愚不肖も聖主賢君の德化を蒙れば皆善人と成る者なり。是を民をばよらしむべし、しらしむる事能はずと謂ふなり。

祥祭—喪服中の祭を云ふ

禮は後なる云々—論語八佾篇に見ゆ

に應じて作爲なきなり。是法のはじめなり。後世に生れて情うすき者、古の人はおさへてだに三年の喪ありしに、せめてつとめて成とも三年には及ばで叶はざる義なりと思ひて企てなしたり。中古の薄きは今の厚きにも勝れり。世中事すくなく、欲にして情うすし。孔子の時にも平人に三年の喪をつとむる者は稀なりき。孔門にも七十二賢の下には多くは有るべからず。三年の喪に、朝に祥祭の禮を行ひて夕に歌うたひし者を子路の笑はれしを、孔子聞召て、由が人を責むる事やまず、三年の喪は久しと宣へり。世中のならはし人情のくだりたる勢を見給ひて、餘義なき所を知り給へばなり。成がたき事をつとめしむるを以て聖作の始めとせば、是僞を敎ふるなり。何ぞ天に繼で極を立給ひ、忠質を本とし禮は後なるの主意ならんや。今の人情精力にては、日本王代の服期の法可ならんか。それも少し道行はれずしては立がたかるべし。今の俗に增し加へん事は、人々の氣質と學力とに有るべし。たとひ道行はるゝとも、もろこしの法の如くには成るべからず。日本の水土によるの

書簡―第四巻を參照せよ
閔子―閔損なり字は子騫

聲無臭とは謂ふべし。

一 心友問。書簡に先王の制し給ふ喪服の數は、過るをおさへて立て給ひし法なりとある所、心得がたく侍り。むかし閔子三年の喪をはりて孔子に見えられしに、夫子琴をさづけ給へば、少ししらべて聲をなす事あたはず、涙を押へて申されけるは、哀情いまだ盡きざれども、先王の禮あれば敢てすごさずと云ひて退きけり。子夏三年の喪終りて孔子に見えられしに、夫子琴を授け給へば しらべて聲を發して樂めり。哀情早く盡きたれども、先王の禮あればつとめて及びたりと云ひて退けり。斯の如くなれば孔聖も或はおさへ給ひき。過るをおさへてとばかりは申しがたかるべきか。答曰。愚は上古のはじまりを謂ひしなり。それ先王の天に繼いで極を立て給ふ事、誠を本とし給ふべきか。つとめを本とし給ふべきか。自然に從ひ給ふべきか。制作を先にし給ふべきか。たゞ誠を本とし給ふべし。誠を本として自然に應じ、時に從つてつとめをなし、制作おはしますべし。過るをおさふるは誠を立つるなり。自然

泥愬人—愬は塑の誤か、泥人形

一心友問。異端には空と云ひ無と云ふ。聖學はたゞ實のみか。答。空則實なり。形色あるものは常なし、常なき物は眞の實にあらず。形色なきものは常なり、常なるものを實といふ。異學はいまだ無をきはめ得ず、聖學は無を盡したるものなり。上天の事は聲もなく臭もなし。至れり。是故に好人は心靜にして色見えず。福來りても甚よろこびず。禍來りても甚憂へず。呼吸の息いたゞきより踵に至れり。綿々とながく續けるのみなり。泥愬人とも云ふべし。槁木死灰と云ふとも害あらじ。異學の有といふも眞の有にあらず。無と云ふも眞の無にあらざる物あり。義理のみにして欲なき者は生れぬ先も同じ。欲のみ知りて義理を知らざる者は禽獸なり。欲と云ふは此形の心の生樂なり。欲の義にしたがつて動くを道と云ふ。琵琶箏を以てたとへん。其形は有なり。其虛中は無なり。糸をかけて用をなすは道なり。天地萬物有無不レ離して道存せり。故に有形はみな無に歸す。無中の神を性命と云ふ。性命にしたがふを道と云ふ。有無は自然の形體なり。君子はたゞに無と言はず、無形無色無

あしたに—論語里仁篇の語

の心位は高きことにて侍り。云。何道何學と云ひて、又其者に氣質あり。氣質の有るは大道にあらず。佛學の事は知らず。聖學は人道なり。一人の私すべきにあらず。そしる人はみづから己をそしるなり。何ぞ道に私して不平の氣あらんや。己が非をそしらば省察すべし。道をそしらば默すべし。默すべくして默せざるは其心の正にあらず。君子は己に益なく人に益なきの言は發せず。

一心友問。書を讀まざる者も、志有らば善人までには至るべしと承はれり。年寄り侍れば、今より文學すべきやうも無し。殘念なる事なり。曰。壯年なる人の善信美大聖神に志ざさず、是にて足れりとせんは、至誠無息の天眞にあらず。年老たる人の殘り多しと云ふも亦あやまりなり。人の人たる道を知りて、神人死生疑ひなきは大なる悅ならずや。是をあしたに道を聞いて夕に死すとも可なりと謂へり。是より後一日も進み給はんは幸なり。貴殿もすでに善人の數なり。信美の位に至らずとも、不息の性存せば、何の恨むる事かあらん。

公儀—政府

思へり。惡しき者には飽く故に、短命なる者あれども知らず。たま〳〵長命なれば疎みて心にかゝるなり。又好人は神氣靈なり。靈なる人は病者にも成りやすく、命みじかき理もあり。靈草名木の植ゑがたきが如し。惡人は神氣不靈なり。不靈なる者は無病にも有り、命ながき理もあり。名もなき雜木雜草は棄てゝも生長しやすし質しぶときが故なり。惡をなせども、未だ惡人の地位に入りはまらずしてなせば、名も立ちやすく身も亡びやすし。惡人の地位に入りきりて自らも恥ぢざる者は、大方の惡行ありても人知らず。公儀の大法をだにをかさゞれば、亂行のみにても一生送るものなり。如レ此者には神罰もおそし。利根なる人には神罰もはやし。內虛なる者はひゞき早くして鳴る事すみやかなり。內滿てる者は叩きても響かざるが如し。吉凶の應も亦かくの如し。

一　心友問。隨分の悟道修行の僧といへども、佛法をそしれば忿戾の氣あらはれ、かたの如くの心學者といへども、儒を譏れば不平の色見え侍り。をかせどもはからざる

美人短命―顔回が夭死せる類を云へり

通ふべきか。佛者といへども學問修行のなすべき業あれば、一日も身の安き事はなし。況や人道に於てをや。

一朋友問。昔はかはりたる人有りしと聞く、今は無きとは何ぞや。云。人も萬物も常なるものゝ勝れたるはよし。かはりたるは悪しゝ。今は人々何にても變りたる事のみ好み侍る故に、人にも萬物にも變りたる物多し。變りたる物は天下國家の害になるばかりなり。人心は靈なるもの故に、人心に好む事は今まで無き物も生ずるなり。むかしは椿もひとへの紅白二色ならでは無かりしに、人の好みもてあつかひてより百花も出來たり。近年又五月つゝじを好めば、色々の花出來ぬ。人道に德を好みなば、善人賢者餘多出來なん。貴殿の變りものと宣ふは、古のすぐれたる人の事なるべし。

一朋友問。人のにくむ者は命ながく、人の惜む者は命みじかき事は何ぞや。曰。よき人には飽かざる故に、長命なる者あれども知らず。たま〳〵短命なる人有れば惜く

朦々—茫然として爲す事もなく氣を腐らするなり

人々と打寄りて、晝夜となく遊ぶを以て學問の事とす。主人なくて如此ならば、彌安樂ならんと思へり。此人々ねがひを遂げて一二變せば、心身共に異端と成る者あらん。或は壯年或は無病の者は事業なくして居がたし。或は老人或は病者なれば、妻子のあたりならでは居がたし。近比江州に士民有り。富有にして田地多し。然るに氏筋なき事を憂ひて、名ある地士に名字をもらひ、村中を招きよせ、其由を披露せり。今までは朝夕に鋤鍬を取りて田畠に出、宿にては繩俵までも手がけ、色々にいとま無かりしに、士に成りてはかゝる賤しき業をばせざるなりと思ひ、座にあがり半日ばかり默然として居り、大あくびして云ひけるは、扨々成るまじきものを士に成りたり。朦々たんく\として士はあしき者なりと云へり。我は今の學者の便利を好み、志を遂げて後、此田夫の悔あらん事をなげくなり。年わかき人の用もなき奉公せんよりは、退いて氣力ある間に文武の道藝にも達せんなど思へるは又さも有るべき事なり。古の八歳より三十歳まで道藝にのみかゝり居たる風にも

とめて家業にうとからぬ樣にし給へ。學文の名を去つて作法正しくば、親類知音も皆貴殿に化し給はん。親父も初めて學術の益を見知り給ふべし。宿にて一人書を見給ふばかりは、誰かとがむる人あらん。親類知音の交もみな問學會合の座と成るべし。其閒暇をもつて文を學び、文をもつて友を會し給はゞ親父もさまたげ給はじ。學友も多くは武士なれば、共に武藝を學び、武藝の間に議論講明し給へ。武士の所作をすて五倫の親を離れて年月を空しくし給はゞ可ならんや。他人は嘲り笑ふべし。父の淺からぬ慈愛なればこそ勘當し給ふなるべし。

一心友問て云。暇なくして心術の受用すゝみがたし。祿を辭し官を去りて靜に成りて志をはげまさば、上達の功もしるしあるべきか。答云。聖賢の學いとまありて後修むる事を聞かず。たとひ初めいとまある身にて學びたりとも、出て仕へて學ぶ所を試み行はんとこそ思ふべきに、官祿を去り退いて受用すべきとは何事ぞや。遊民をねがふか。今の學者の風を聞けば、會合をしげくして議論を好み、氣方のあひたる

棄恩云々―佛經の語即ち異端の學なり

二になるが如し。學友の交には和あれども、世間の交には和なし。右のしたしきも疎くなれり。親類知音みな離れて、同志とのみ晝夜の會をなせり。わきより見て徒黨と云ふとも、言譯しがたからん。其年中の所作を見れば、武士の家に生れながら武藝をもつとめず、弓馬合戰の道の心がけもなし。先以て君に不忠なり。一門したしまず朋友信あらず。父の嫌へる所至極なり。貴殿には道理なく親父には道理ありて勘當ならば、親にも不孝なり。何をもつてか人倫とし、何を以てか聖學とせん。後の異見は棄恩入無爲。眞實報恩者に似たり。名は聖學にして實は異學なり。異學は人倫を離れて別にたてたる法なり。人道をひくしとし聖人を非としたる者なれば、各別の事なり。人道に居て聖學をする者の實を異學に合する事は、似て非なるものなり。聖門の罪人ならずや。一向に五倫を離れ五等を出たる者ならば、貴殿などの行も可ならんが、五倫に居て五典十義を學び、武士にして五等を行はんとならば、速かに虚をすてゝ實をとり、父命にしたがつて會合議論をやめ、武藝をつ

耳より―好きやうにの義本は聞きたく思ふ事

なり。性命の父母につかふるを大孝と聞く。たとひ父命に逆ふとも無㆓是非㆒ことなり。道を學んで好人と成るより大なる孝はあるべからず。たとひ父は勘當するとも、我に非義なき上は苦しからざる事なり。人と生れて此時節をむなしく過さん事はあさましき事なり」と。此兩義にまどひ侍り。十が六は後の義を耳よりに思ひ侍れども、何とやらん寢覺にはこゝろよからぬ折々も侍り。答曰。我は始の義に從ひ侍らん。大舜の性命の父母につかへ給ひて、父母の心にかなひ給はぬといふ事は、父母大惡人にして惡をすればなり。今貴殿の親父には惡人の名なし。其人がら平人なり。貴殿の實を見るに、學問のかざりをのぞきて見れば、實の人がら平人なり。その上親父には人情時變の知識あり。貴殿には此知識なし。貴殿は學術を以て親父にまされりと思ひ給ふべけれど、學術に於ても害ある事は見れども益ある事を見ず。尤も小人の不作法惡事をなすに較べては、益ありとも云ふべきか。君子の學は心と行と二あらず。心正しければ行正し。心和すれば行もやはらげり。貴殿の心術は心と行と

方とすれば追ふ跡より來れり。間思雜慮も亦斯の如し。只眞の主意不レ立、心裏に小人の根あるが故に、飯の上の蠅を逐ふに似たり。小人の根は間思雜慮をわかし出すの泉源なり。天理人欲幷不レ立。忠信を主とし天理存するの主意たらば、小人の根去りて天根かたかるべし。然らば間思雜慮何ぞ憂ふるにたらんや。假令暫く來るとも、童の時の遊びを夢みるが如し。心にとまらざるの影なれば、工夫を用ひずといへどもとげず、退治せんと思はずとも心源を澄しをるべし。たとへば太陽東に出で給へば、狐狸かくれ失せて跡なきが如し。明德は心の太陽なり。明德明かなる時は、百戒千愼用ふべき所なし。只天然無心の敬のみ存して暫くも離るべからず。

一學者問て云。父なる者學術を大に嫌ひ侍り。一人の友の云ふ「父の心に逆ふは僻事なり。學問も孝弟を行はんが爲なれば、父にそむきて學問すべき樣なし。心に義不義の道理だに明かならば、外學問に依ると依らざるとは、時の宜にしたがふべし。學友の會に出づる事なかれ」と。又一人の友のいへるは、「父の學術をきらへるは愚痴

先學―先覺に同じ

主を立て―目標を設くるなり

心存しがたし。此妄念去るとも、跡より來りて退治成りがたし。答云。溫和慈愛恭敬惺々も亦氣象なり。發して節にあたる時は和といふべし。此八字の名付べき所もなき大本を中と云ふ。思ふ事もなく爲す事もなく、寂然不動にして感じて通ずるものなり。先學の此八字を下す事は、初學の受用すべき樣を不レ知者の爲にしばらく言へるなり、其氣象をとめて本心とせば、影をとめて形とするなり。又伏犧氏より孔孟に至りても、靜坐を云へる事を聞かず。君子は有事無事共に靜ならざる時なし。心無欲なるが故に常に靜なり。靜坐すべきの心なくして時あつて坐する事あり。心ありて靜坐するは自然の無爲にあらず。先學の浮氣躁念の者の爲に、しばらく靜坐を言へる事もありしなり。主意を知らでなべて用ふるならば、病なき者に藥をあたへて病を發するが如き事あらん。間思雜慮を去る事は、主意にありて工夫にあらず。今の學者の主をたてゝ去らんとするは、其主と思ふも眞の主にあらず。氣によつて作せるなり。闇夜に狐狸をかり退けんとて松明をとぼすが如し。狐狸はくらきを味

初昏—七八時の交四ツ時は十時

惺々—惺は靜に通ず又敏悪の義

は休すべし。天下の教なき事久し。晩に驚いて道を尋ぬれば、古には准へがたし。先學に就きて惑をわきまへ、心術を求むべし。然るとも朝飯後日中晩炊の後、或は夜ならば、春夏冬は初昏まで、秋は四ツ時までも苦しかるまじきか。每日每夜と云ふ事はあるべからず。聞ける所をば是を習ひ是を行ふべし。我近頃會のしげくして益なき事をおぼゆる故に、文才ある人には書を讀ましむ。文才なき人には書簡議論の集をあたへ、惑をわきまへ心法に基くの便とす。其に折々の會は益あるべし。

一　學者の云。先日我友格致の心法を聽く、甚親切なりと、是故に來りたり。答云。先日愚が心法の受用格致に發したるならん。今日は吾心空々たり。言はむ所を不レ知。人のたゞくに應じ、我心の時により、感ずる所、異る事あり。或は至善の語によつて發する時もあり。愼獨の義に發する時もあり。皆自然なり。今作爲して言はゞ親切の請あるべからず。記憶の學にあらざれば、定めて言はん所をおぼえず。

一　學者問て云。靜坐しても事をなしても、閒思雜慮多くして、溫和慈愛恭敬惺々の本

り。正神の常にはあらず。

一學者有り問て云。我國の同志夜なく\會をなして靜坐し議論す。益を得る事不レ可レ過レ之。答曰。君子は無欲を以て靜とす。行住坐臥共に靜坐なり。何ぞ別に靜と云ふものをなさんや、心思義理を專にする時は、言ふ事皆議論なり。何ぞ別に議論と云ふものを作らんや。其上夜なく\の會合には、其亭主の家内の者どもの勞するのみならず、客の家内の者も亦主人の歸るを待ちて不レ寢。夏は蚊虫にくらはれ、冬は寒氣にいたむ。十人よれば十家の者を苦勞せしむ。凡男女百人の難儀なり。陰陽晝夜の動息を誤るのみならず、晝は常の飮食あり、夜は不時の飮食あり。人の產をやぶるに至るべし。人の產をやぶる時は苦しむ者數を知らず。つひには民の迷惑と成りぬ。下男下女等には臨時の食をも與へざれば、學者の下人と成りては無學者の者よりも苦しむべし。佛氏の徒五倫を離れ五等を出て、學にのみかゝより居る者は、夫を常とすれば各別の事なり。五倫に居て五等を行ふものは各勤あり。晝は動いて夜

匡の難—孔子陽虎と誤認せられたる時の難

陳蔡の厄—二國の大夫等が孔子の楚に用ゐられんとするを阻みし時の事

ば、誰にても苦しからず。問。神明の罸利生と申す事は、慥成る道理おはしますや。云。たしかなる事にて侍る。然れども正神の罸利生と邪神の罸利生とのかはり有り。神明の德は不測なり。故に約束の如く目に見ゆる事はなし。伊勢太神宮は靈神にておはします故に、人々の心におほゆる利生おはします事なれば、斯の如く諸人參り侍る事なれども、是ぞあらたなる事とて、約束のやうに目に見ゆる事はなし。又無きにもあらざれども、正神の奇特には跡なし。天道の感應も又かくの如し。孔子匡と云ふ所にて、人たがへにて殺されんとし給ひし時、大風起りて取廻したるものどもを吹倒したりしかば、驚きてよく見ければ、心掛くる者にては無し。其時匡の者ども辭して退きたり。是天道の助なり。又陳蔡兩國の間に圍れ給ひて、七日食をたち給ひぬ。此時は米も降らず。凡人の神の神たる理を知らざる者は、此時にも米やふらんと思ふべし。降らざる所が眞の天道神明の理なり。異端の神通力はかやうの時にも米を降らする如き事多し。多くは方便說なり。若し有りても邪神の幻術な

參宮云々—此件前に出てたり

神は非禮をうけず。義禮を待ちて祭祀すべし。又正直の心眞實の情有りて後禱るべし。故に心ありて遠ざくるにはあらず。鬼神の鬼神たる所を知る者は、誠敬の至りておのづから遠ざかるなり。遠ざかると云うて一向につかへざるにはあらず。凡人は鬼神の名をのみ知つて德を不知。是故に身の盛服心の潔齋をもとゝのへずして、みだりに狎れ近付ものなり。問。其鬼にあらずして祭るは諂ふなりとは何と云ふ事ぞ。云。義もなくて猥りに勸請の宮社、多くは皆其鬼にあらざるなり。眞實正直の心より神明の德を尊びしたひ奉るにてはなく、欲心僞巧の者ども、神明の奇恠を云ひてみだりに取り立てたる所へまゐりて福を祈るは皆諂へるなり。問。庶人は其親ならでは祭らずと承るに、伊勢參宮し、其外至尊の神々へ參り侍る事はいかゞ。云。天をば天子ならでは祭り給はず。然れども、もろこしにても平人の天に祈りて其感ありし事あり。祭は其人ならでは成しがたき事なり。或は德をしたひて參り、或は親の爲君の爲などにて、誠の心より禱ると云ふことは、祭とは違ひたる事なれ

中江氏—藤樹先生を云ふ

鬼神云々—論語雍也篇に出づ

笑ふ者あり。眞なるか。答云。眞なり。細工のしならひには削そこなひ多く、馬の乘習には度々落つるが如し。聖賢傳受の心法の師なくて、中江氏初めてさま〴〵に心をねりて試られき。心法の受用にたより有るべき事は、まづ取りて受用してたすけとせり。二つの事全くよしとは思はれざりしかど、志のきどくなる所あるは誦經の威儀なり。凡習の過惡をこまかに記したるものは感應篇なり。爰を以てしばらく用ひられたり。紙捻して一日の過をむすび、善をなしたる事もありき。皆細工初にて、事はよからざりしかども志はよかりしかば、悔ゆべからす。されど人倫において如レ此の事あるべからず。志は殊勝なれども異端の流に紛ふ故に、我は不レ用なり。故に三經の初に威儀有りしをもこれを削りたり。聖賢の神を祭祀すること義あり禮有り。

一　心友問。敬二鬼神一而遠レ之とは何と云ふことぞ。答曰。鬼神の德を知るときは敬禮の心厚し。身の潔齋心の純一よくとゝのほらざれば、つかふまつる事かなはず。其上

感應篇——太上感應篇、道教に基きたる訓誡の書

して行ふ、其外を願はず。自らかへりみ獨を愼むのみなり。詩はうらみつべしとは、和光同塵の心を以つて、奥より端へ出でたるが如し。人は人と伴ふべし、禽獸木石と友たるべからず。うらみずとがめずとて、見所をたて心をはげしくする時は和を失へり。衆人愛敬の德によつて詩を作り歌をよむ。うらむべき事をうらみ風すべき事を風す。たゞ言葉にて云へば、事がましく和をさまたぐる事あり。詩歌にのぶれば言ふ者罪なく聞く者戒むるに足れるの德あり。高明獨立の地位あれども、くだつて俗に同じくす。淸淨明白の心思をやはらげて世と共に進退す。とがむれども怒らず、怨むれども悖らず、をさなき子を愛しては、わらはべの言をなすが如し。是を奥よりはしへ出でて詩を作り歌をよむと云ふ。凡人のうらみに異り、無心溫和の至は、たゞにうらむるも親みとなるべし、作りてなすにあらず。心は神明不測なり、所にしたがつて變化す。自然の妙なり。

一 朋友問て云。江西の學者感應篇をよみ、又誦經の威儀を勤めたりときく。世人是を

君子云々―論語憲問篇

位に素す―中庸に出づ

ものは君子なり。大道をしらで藝によつて道を見るものは、是を至極とおもへり。聖賢傳受の心法を聞きても、我道の外にあらずと思ふなり。追ㇾ術者以二小道一自溺と云へり。外にむかひ空を走りて心裡に入ることなし。いづれの藝も上手に至りては道の一端に合同せずと云ふことなければなり。小人の藝者にしては可なり。士君子の事にしては大に害あり。文學に達して經傳の上において道を見る者も亦同じ。それ大道は五典十義を明かにし、心を正し身を修め、五等の人倫の外に出でざるものなり。佛者は五倫を離れ、道者は五等を出でたり。いづれも道のおもかげをば言へり。是故に是を異端といふ。孔孟以後の儒者と云ふものも又異端多し。五等の外に出でたるが如し。

一心友問。君子は天をもうらみず人をもとがめずと云へり。然るに又詩はうらみつべしと云へるはいかゞ。答云。天をもうらみず人をもとがめざる者は、富貴貧賤悦樂憂患、すべて人生の順逆みな命有り、己にあらずと云ふ事なし。是故に其位に素

牆に鬩ぐ―詩經小雅に兄弟牆に鬩げども外其の侮を禦ぐと

攻乎異端―論語爲政篇

諸己一而不レ願亦勿レ施二於人一。」是能く近く譬をとるなり。斧の柄をきるに、則ち手に持ちたる柄を手本とするとなれば甚近し。然れども人作にて二物なれば猶遠し。忠恕の道は是よりも近き事あり。人を以て人を治むるは二人のやうなれども、心の天理は天下一貫なり。己が好む所の義理は人も好み、惡む所の不義は人もにくむが故なり。中心を忠とす。中は天下の大本なり。天理自然の眞を中と云ふ。如心を恕とす。天理自然の眞心の如く受用して違はざるを云ふ。故に天理一源の眞を推して人に及ぼす時は、中國本朝といへども違ふことなし。後來の習心私心私欲を以て交るときは、兄弟といへども牆に鬩ぐの憂あり。此故に能く近く譬を取りて忠恕の道を受用する時は、仁の方是より切なるはなし。

一心友問。攻二乎異端一斯害也已。孔聖の時いまだ道家佛家の學者なし。何をか異端と宣へるや。答云。六藝も亦異端なり。藝にあそぶ時はよし。一藝に專よる時は害有り。一藝といへども道のおもかげ無きことはあらず。道德ををさめて藝に遊ぶ

得志云々—孟子に出づ

所を愼みなば、いづれの時にか不善をなし不義をなさんや。義と共に隨つて好惡の欲なき時は天理常に存す。敬是より大なるはなし。只敬は一のみ。外にむかひ內にむかふの別有り、君子小人の別るゝ所なり。

一心友問。夫仁者、己欲立而立人、己欲達而達人とは何と云ふ事ぞや。云。仁者は己あることなし。凡夫の立身と云ふは、己一人の爲にして人の害ある事を察せず、己が欲心を達するのみなり。己ある事を知りて人ある事を知らず。この故に幸を得ても民望を失へり。君子は万物一體道器一貫の身を立て道を達す。故に時に逢うて志を得る時は兼て天下をよくす。時に不逢して志を得ざる時は獨其身をよくす。然れども人を立て人を達するの道德は渾然として備れり。夫國天下の困窮する事は、君子先困窮して達せざればなり。問。能近取譬とは如何。曰。中庸に曰く「子曰。道不遠人。人之爲道而遠人。不可以爲道。詩曰。伐柯伐柯。其則不遠。執柯以伐柯。睨而視之猶爲遠。故君子以人治人。改而止。忠恕違道不遠。施

慎獨―中庸第一章に見ゆ

は、其良知にもこゝろよからざる事なり。しかれば其業にゐて其つとめなき者をよしとは言ひがたし。たゞ天性の我分ほどの所に身をおくべき事なり。我友によき人がらなる人あり、いつも此人をあげて士の手本とす。勇力ありて武藝に達し、武士の中にもまれなる士なり。又納言大臣としても備はれる所有り。心いさぎよく風けだかく、諸士の上に置かでかなはざる人なり。道を好み德をしたひて怠る事なし。無事にしてしづかなる人なり。

一心友問。敬を不失とすれども、何の心もなく居る事多し。云。何心もなきは人心の常なり。敬といひ戒愼恐懼といふは主意なり、常に心に之を持するにあらず。敬は心の德なり、須臾も離るべからず。只主意の向ふ所異るを以て君子といひ小人といふ。外に向つて人の見聞する所のみを愼み、内心に恥ぢざるを離るゝと云ふ、則ち凡夫なり。君子は主意とする所内に有り。天地神明を師友として、人の見聞及ばざる地、一念獨知の所において戒懼す。是を愼獨と云ふ。己が心に恥ぢてひとり知る

史儒—史學を以て目的とする學者、道を以て任ずる者にあらず

右筆—祐筆、書記

者ある事なし。戸ざさざれども盗なし。それ如レ此なる時は刑政用ふる所なし。衣裳をたれて天下治れり。これ禮樂の質なり。爰に初めて學校の政孝弟忠信の敎をなすべし。儉約の義至れり盡せり。

一 朋友曰。吾知れる人文學を好めり。常の武士のやうに剛毅にもなく、文書のみを事とし靜なる體なり。學者のしるしと奇特に思ひ侍り。答て云。剛毅ならず、靜なるは尤もよき事なり。然れども文書のみ事とすと聞く所はいかゞあらん。公家か史儒か出家などにしては好かるべし。武士たる上は自らそのつとめあり。孔子も書をのみ事とはし給はざりき。士大夫なりし故に、文武共にかねて射御の道をも得給へり。文道をばすきて武藝は不得手なるかきらひならば、其不得手もきらひも天性の生付なれば不レ苦なり。公家には筋なくては叶ふまじければ、文學者か右筆か、又は武家にても武藝のいらざる奉公もあれば、其中を撰ぶか、扨は農工商になりとも下るべき事なり。文武を兼ねずして不レ叶、平ざむらひの位に居ながら、一向つとめざる

たつとびず―貴ばず

より榮利をしたはず。皆聖人の一端なり。老子の云ふ。學道日損すと。道は天理なり學を習ひて明にするの義なり。天理にしたがひ習ひて人倫を明かにする時は、人欲日々に損亡す。よく道を學ぶ者は、大事化して小事となり、小事は無事となる。多は日々に約に歸し、奢は日々に儉に歸す。是皆日々に損するの義なり。損し盡すの至は、我心大虚と成りて一物なし。是故に思ふ事もなく爲ることもなし。思ふ事みな文理なるを思ふ事無しと云ふ。なす事みな禮儀なるをする事なしと云ふ。たゞ人欲いまだ盡きざるが故に、おもひは文理を失うて妄念となり、わざは禮儀にたがひて驕吝となる。問。儉約の一事いかにしてか陰陽を調和するに至るべきや。陰陽調和せば風雨も民の願にしたがはんか。云。儉約の本は無欲なり。上無欲なれば事すくなし。無事をたのしむ者は財をたつとびず。財をたつとびざれば集むる事なし。財おのづから天下に散じて民もたからとせず。寶とせざれば相爭ふことなし。井を掘りて水のみ田を耕やして食す。五穀のみ年々多く生じて水火の如し。人に不仁の

知者云々―論語子罕篇に見ゆ

老子云々―學を爲むれば日に益し道を爲むれば日に損すとある本文に據る

り。慈愛惻隱は人の情なり。無欲無爲は人の本なり。天は其心万物にあまねきが故に無心なり。仁は万物をもつて一體とする故に無欲なり。動くに公をもつてす。故に無爲なり。仁者の樂は山なりとは、仁者の心をかたどるに山の如し、無欲なるが故に靜なり。知者の樂は水なりとは、知者の心をかたどるに水の如し、源ふかきものは流遠し。深きとは神化のあつきを云ふ。知者は無事なる所を行ふ。流水の物たる、內明かにして外順なり。大知は愚なるが如し。泥土のためにしばし濁るも、行うては終にすめり。誠のおほふべからざるなり。知者は惑はず、勇者は懼れず、仁者は憂へず。知は明の至なり、勇は義の德なり、仁は生の精なり。此故に仁者はいのちながし。

一心友問。むかし漢に黃老の道を好みて淸靜の化行はれたりと。然らば異端も亦用ふるに益あるか。答云。陰陽を和調することは實に儉節にあり。孔子曰以約失之者すくなしと。愚もまた黃老の學者なり。淸靜にして欲すくなからん事をねがふ。本

集義和書　巻第十

○義論之三

一心友歎いて云。後世道は行はれざらんか。答云。此遠方の小國に生れながら、聖神の道德を學びて異端におちず、死生一貫貧富一致の理を極め、天地萬物疑なき事は、人生の幸何事か是にしかん。理に大小なし、家も又一大虚なり。我において天地位し萬物育せり。心善のみにして惡なくば、今の世に生れても堯舜の民なり。万物一體の情は人の上を歎かでも叶はず。然れども強て歎くは非なり。命を不知なり。

一舊友問。日本は武國なり、しかるに仁國と云ふは何ぞや。云。仁國なるが故に武なり。仁者は必ず勇なるの理明かならずや。北狄は勇國なり。然れども不仁にして禽獸に近し。勇者は必ずしも仁あらずの至言まことならずや。夫仁は人なり、心の德な

仁者は勇―論語憲問篇に仁者は必ず勇あり勇者は必ずしも仁あらずと

何ぞや。答云。心法は問學のあらきくはしきにはよらず。たゞ心の向ふ所異なり。心内に向ふ時は一言にしても精微を盡すべし。心外に向ふものは、千言萬語の親切なる講習をなすとも、たゞ説話のみにして精微に入る事あたはず。心は本の凡心なり、何ぞ名利をまぬかれんや。問。心いかゞして内に向ふべきや。云。是言ひがたし。吾子の心初より内に向へり。他の學者の心を見て分明なるべし。内に向ひたる人に學ぶ時は、學者の心自然に内にむかふ。外に向ひたる人に學ぶ時は、學者の心自然に外に向ひ去る。親切の心術ともに外に向ふ事を不レ知。是意を以て意を傳ふ。言語の及ぶ所にあらず。

轡ずまひ—銜を引き援かして出でまじと爭ふ也

一心友問。天下國家事なきこと能はず。上に居て無爲にして治まること有りがたかるべし。人世みな爲す事あり。いかなるをか無爲と云ふべき。答云。世人、馬の人次第なるを無爲なる馬なりと云へり。此言暗に理に當れり。それ馬を使ふものは人なり。人を使ふものは天なり。人の理にしたがつて動き私意をまじへざるは是無爲なり。事の多少動靜にかゝはらず、出て勞すべき時に勞せずして閑居するは無爲にあらず。隱居してひとり其身をよくすべき時に當りて、出て世間を渡るも無爲にあらず。皆名利を主として私意に起るものなり。馬の馬屋を出す時は轡ずまひをして不レ出、又馬屋へ引こむ時は、をどりはねて不レ入が如し。是をくせ馬といふ、無爲にあらず。人も天理の自然に從つて或は勞し或は休す。其間に私心を入れざるは無爲なり。君たる人の時所位に隨つて無事を行ひたまひ、天下國家淨清なるを無爲にして治るといふ。

一心友問。議論講明、甚親切に道理くはしけれども、其心術躬行に名利の交りあるは

落ちず、言ふ所實學ならば、信じて見る人みな實におもむくべし。天下古今の文學する人擧げて數へがたしと雖も、實をふみ行ふ人稀なり。心は實なるも心法を不知故に、道學の日用に便なき事久し。和書たりと云ふとも、人生日月の受用に益あり、齊家治國の情に便あらば侮るべからず。此心を得て後經傳を見ば、書皆我心の註解となりて、先後する所を知るべし。

一心友問。柳下惠の和にも淸ありや。答云。淸あり。たゞ天質のつとめずしてなす所和にあり。無作法不行儀の中に居て、汝は汝をせよ我は我をせん、汝安ぞよく我をけがさんや。是涅にすれども緇まざるの聖なり。淸是よりよきは無し。問。しからば伯夷叔齊にも又和ありや。云。和あり。たゞ天質淸に多きのみ。無欲無我にして人と爭ふことなきは和にあらずや。孟子に惡をにくむの心を推すと云へる所を惡しく見て、伯夷を淸に過ぎたる人の樣に思へり。孟子は其心根の淸を察し窮めて言へるなり。常の行跡にあるにあらず。

伯夷の淸—孟子萬章篇に伯夷は聖の淸なる者なりと

其心—書中の精神なり

にたよりあらんは、時にとりて益すくなからず。此心を得て後聖經を見る時は、聖經の文理皆内に向つて、心法始て得べし。眞に聖人にまみゆる如くの餘情あり。聖經にあらざれば賢傳といへども及びがたし。況や假名書は奥義を述ぶべからず。文をふみと讀むも含むの義なり、中のくを略してふみと云ふ。みむは五音通ず。和の言葉には此例多し。和字の書には道理を述ぶべし。道理を含み難し。故に三十一字の詠歌につらねて心を含めり。これ吾國の風の妙なり。縦ひ大和言葉の假名書も、此心を得たらんには、などかふくむ道理なかるべき。初より漢書をば深く取りて見、和書をば淺く思ひて見る故に、漢文にかはらぬ和書あるも、其心空しくうづもれぬ。漢土の人といへども、經傳の文理をもてあそびて道を知らざる者多し。書中の含むところ心法に益なし。又眞を悦んで修身の學をすると思へるも、法に落ちて心法を不知人多し。如此のたぐひの人のかきたる書は、漢文の書も見るに足らず。縦ひ和字の假名書にして含む神妙なしと云ふとも、徳を知りて文に馳せず道を見て法に

事を恐れしなり。日本の武道にも盛衰あり。今はいにしへに及びがたし。

一心友問。至理を書くといへども、假名書なれば世人輕く思ひ侍り。文字ある人は猶以て見るに足らずとす。其假名書を漢字の文になほせば唐の書にことなる事なし。然れども道德を知れる人の書きたる假名書を、道德を知らざる人なほし侍れば、假名書よりは心劣れり。劣てりも、まさる假名書よりは、人の思入よく侍るべきか。

答云。それ道は聲もなく臭も無くして存せり。思に及びがたし。思は言に述べがたし。言は書に盡しがたし。漢字の文章にふくめる深理は、和字の假名書にうつしがたし。然りといへども學者聖經賢傳の吾心の註釋なる道理を失ひ、心を外にして經傳を見る時は、經傳本となり吾心末と成りぬ。故に經傳の文の高く深きをもてあそび、其理を口に述ぶるばかりにて心を失へり。文の奧義も口耳の學となりて齊家治國の用をなさゞる事久し。是正心修身の實學にあらざればなり。假名書の直に理を發明して人心の惑を解き、人情時變に通じて心思を内に向はしめ、齊家治國の用

源平云々—一の谷の合戰、源平盛衰記を見るべし

ては始に近し。いにしへの車戰の法後世復しがたし。上古の服牛乘馬といへる所に歸りたるものなり。故に今の六藝を云ふ時は御は乘馬なり。日本にて義經義貞正成までの馬戰は、もろこし上代の車戰の如し。車戰は上手なれば大に利あり。中野などにて俄なる時には城廓ともなり陣屋とも成るなり。下手なれば騎馬に劣れり。日本の馬戰も上手なれば勝利あり、下手にては成りがたし。この故に近代はおり立ちたる鎗軍になりて馬軍はまれなり。義經は、打物の達者つよ馬の手利を十二人すぐりて、前後左右に立てゝ數萬の敵をかけなびけ、堅きをくだく事をなせり。義貞正成是を學びて、義貞八十六人正成は二十一人ありしとなり。殘る所の兵も相つづきたる達者多し。二將共に數千の敵にかけあひ、中を割り駈けやぶり、必死に入りて一生を全くせり。源平の戰に、平家方より惡七兵衛景淸越中の次郎兵衛などいふ、一人當千の大勇力の兵二十一騎まで木戸を開いて出しかども、熊谷父子がよき馬に乘りて達者のきこえ有りければ、かけ合する事能はずして、皆當倒されん

五湖―湖は胡なろん匈奴、鮮卑、羯、氐、羌

伊尹―殷の湯王を助けて天下を平定せし人

傅說―殷の高宗を輔けたる名臣

りにのみ心ありて、定見なき者如此。

一心友問。貴老六藝を解して、御は馬術なりと書き給へるをそしる者あり。御は車を御する術なり。日本の乘馬の術にあらずと云へり。云。初學の人とても御の車法たる事を不知者なし。日本にて六藝を云ふ時は御は乘馬に當れり。其上易經にも服牛乘馬とあり、馬術の始は乘馬なり。車は後世文備りたる時の制なり。もろこしといへども五湖亂華以來。惟知鞍馬爲便利。雖萬乘之尊。猶執鞭上馬といへる時は今は乘馬なり。物必ず盛衰あり。車御は盛なる時の法なり。「古人乘車。車中不内顧。不親指。不遠視。行則鳴環佩。在車則聞和鸞。式則視馬尾。自然有箇君子大人氣象」といへり。禮の盛なる時に生れたる君子の事なり。もし如此にて必ず大人とすといはゞ、舜の野人たる時は聖人とすべからざるか、伊尹有辛の野に耕し、傅說傭夫のわざをせし時、何ぞ此體あらん。夫物の始は質素なり。盛なる時は文備れり。衰に及んで事略す。始と衰と其事業各別なれども、物盛なれば必ず衰ふ。衰へ

すりきり—耗盡
吾子—我
柿山伏—能狂言の題目

か。又知れる者に借銀ある者あり。此者無欲よりすりきりたるにもあらず、人を救ひて不足にもあらず、借銀なき昔より人の患難をも惠まず、下々の困窮をもかへりみず、百姓の飢寒をも救はず、親類知音の落魄をも見過し、無理なる事にも下人に物をわきまへさせ、様々きたなく不仁なるしわざのみ有りて、禮義のつとめは仕侍らねども、借銀あるばかりにて、おして器用人の數に入り、外人の譏りうらみを得ざるが如し。如此なれば、右の借銀なくよく施しめぐみ禮儀のつとめいたし侍りし者も退屈して、年來の謹みもゆるくなり、人なみに借銀出來侍り。借銀すればそしり恨み共にまぬかれて心安し。たゞ此かたに益多しと人毎に思ひ侍れば、かく世の中にすりきり多く成り行き侍るなるべし。對へて云。此故にかの勇を尊ぶなり。大勇力の人ならでは、世俗非道のそしりに引かれずして獨立しがたく、仁善をとぐる事成りがたき者なり。吾子柿山伏の狂言を見ずや。鳴くべき理なけれども、人なかんと云へばなき、飛ぶべき様なけれども。人飛ばんと云へば飛ぶ。只人のほめそし

一犬云々ー潜夫論に一犬影に吠えて百犬聲に吠ゆとあり

子路云々ー論語子罕篇の語

一犬虚を吠ゆれば、今は萬犬聲を吠ゆ。聲を吠ゆるものは理を知らねば實なりと思へり。

一　學友問。子路はやぶれたる衣服を著し、美服を著したる者と立ちならびても不レ恥を以て名を得たり。しかるに五六十年以前までも、内所貧乏なる者もおもて向をばつとめ、借銀有りてもなき躰をし、めいらぬ顔をするを以て男氣とし武士とし侍りき。今は勝手宜しき者も不自由成る躰をし、借銀なき者も有りと云ふ。内所にては美服を著すれども、公界へは古き物を著する様なり。子路のほまれ用ふるに足らず。古今風俗のうつりかはれるなり。今借銀ある者には益多し、無き者には損多し。予が友に有餘は無けれども借銀はなし。此者少したくはへたらば富有にも成るべき者なれども、人の難義をすくひ下々をめぐみ、摠じてほどこす事を好み侍れば、有餘あるべき様なし。しかれども借銀なきが故に世俗よりおしてしはきと名付、たくはへも有るやうに申し侍り。此者おごらず不作法ならず、費なき所より、しはきと云へる

ずるに足らざる事を知るべし。幻術を以て水無き所に水の出たる樣に人の目に見する事はあり、まことの水にはあらず。まことの深き水を舟なく車にて渡すと云ふ道理はなき事なり。されば空海も正法に奇特なしと云へり。正法とは道理なり。道理にもれたる事はみな邪法なり。少し出たる水のにごりて深く見えたるが、しひてわたるべき程の事ゆゑ渡りたるなるべし。天のいかりにて雷の甚しきを、菅公のたよりとて、叡山の僧を召して祈らせられたる事は有るべし。問。天神の御手跡とて佛經世に多し。佛學博くし給へば、又聖廟とは申しがたからんか。云。其時はいまだ聖佛のわかちも無き世にて侍り。いづれとなく只博く物を知るを以て學問とせり。たゞ其人の德業を見て聖者と知り佛者と知るばかりなり。菅公は五倫の道正しく、其取行ひ給ひし事は皆天下太平の正道なり。されは聖廟と云はんに疑ひ有るべからず。讀み難き書の點迄も菅公付け給へり。聰明の人にておはしましき。天神の御手跡と云ふには僞多く侍り。空海の經と申すにさへ誰とも知れぬ筆多し。むかし

て雲雨をおこす故に、郡をさかひ村をよぎて、山神の氣のいたる所かぎりあり。龍雨は雨の變にてたまさかなる事なり。是をかぎりありて遠くゆかず、龍雨の變を知らで、雨はみな龍のわざと思へるは理を知らざればなり。是を以て兩僧の術いつはりなる事を知るべし。自然に旱し又雨ふりたるを、兩僧の行力ゆゑと云ひて附け增したる說なり。民間のをどりにさへ、日でりに雨降ることあれば、空海祈りて降りたる事も有るべし。又守敏と空海とたがひに調伏して祈りけるに、雙方の佛神の射る矢空中になりやまずといへり。空海の書きおける書を見れば佛學のみならず儒學もあり。さほどの我慢邪心は有るべからず。其上佛神と云ふもの邪知我慢の者にくをみし、たて分れて合戰すること有るべきや。空海を餘りほむるとて大惡人とすること知らず。菅公を譽むるとて、あたら忠臣に疵を付くる事を不知。其時坊主の夢に見たる事ともいへり。やけ妻戶を證據とせば、何故燒けたるやらん知るべからず。みさかりに出て深き川水を左右へわけて通りたると云へる事、是ひとつにて他の信

みさかり―水勢の盛なるを謂ふ

小弁—小弁の詩に就いては孟子告子上篇を參照すべし

守敏云々—此事源平盛衰記等に見えたり

は少しもなし。然れども孝子の怨忠臣の怨、と云ふことあり。平人の不ㇾ知所なり、小弁の詩は孝子の怨なり。孝子の心ならでは知られぬ義ありと古人も云へり。菅公の怨も忠臣の怨なるべし。忠臣ならでは知られぬ心あり。雷となり祟をなし給ひたると云ふ事は、菅公の靈にあらず。天道其忠臣の誠を感じ給ひて、とがめ給ひしものなり。周公の忠をあらはさんとて大風吹きし類なり。問。叡山にいたりて、文學の師なりし人をたのみ給へるに、承引なかりしかば、怒りて柘榴を口に含み、吐きかけ給ひしかば、燃上りて妻戸燒けたり。其妻戸後まで有りたると申し侍れば、公の宣ふ如くにては有るまじきと覺え侍り。云。これ空海と守敏との古事の類なり。空海と守敏と威勢を爭ひて、守敏天下の龍神を捕へてわづかなる水瓶の内におしこめ置いて大旱させしに、空海北天竺無熱地の龍神、獨守敏にしたがはざりしを請じて、雨降らせしと云へるたぐひなり。夫春雨五月雨は氣化を以て降る雨なり。六七月は氣化の雨まれなり。夕立を以て田畠草木を養ふものなり。夕立といふは山澤氣を通じ

誰も信じて許したりと聞く。己が人を味方に靡けつる信をたがへじとて、俄なる時に一命をかろんじ、自ら人質と成ることは成りがたき行なり。斯く仁義共に有りし人なる故に、天下すみやかに手に入りたり。後に不行儀無道に成り給ひし事は凡心にて道を知り給はざる故に、天下太平に成りて愼みの心もおこたり、且凡情のたのしみ思ふまゝに得たれば亂たるなるべし。玄宗も初は堯舜の治をもかへさんと思ひ給ひて、孝經の序までも書き給ひし程の事なれども、後は情欲に亂れ給へり。是故に聖人も人心惟危と宣ひしなり。

一學者問。北野を聖廟と申し侍れども、聖賢に怨怒の心はあるまじき事なるに、怨靈となり祟をなし、火氣甚しく執著深き人を、いかでか神とし崇め申す事にて侍るや。曰、是世の傳誤なり。菅公の怨靈となり祟をなし給ひたるにはあらず。配所の詩に云。

去年今夜侍二淸凉一。秋思詩篇獨斷レ腸。恩賜御衣今在レ此。捧持毎日拜二餘香一。

此詩を吟じ給へ。誠に忠心ふかく感慨多きこと、其人を見奉るがごとし。怨怒の心

宇留馬―今の美濃國山縣郡鵜沼

弓矢を紙にまきて持たしむるか、如何やうにもなるべき事なり。弓矢は八幡太神宮ののり移りおはします神器とも云へり。武神の舍なり。尊信の誠明かならば、今の時所なりとも、自ら持ちても目に立たぬ事あるべし。世界は我心の誠より成りて我世界となるものなり。

一　心友問て云。秀吉公無道にして天下すみやかに手に入りたる事はいかゞ。答て云、秀吉公も初のほどは悪しからざりしなり。濃州宇留馬の城主大澤次郎左衛門尉を、信長公の味方となして同道ありしに、信長公大澤が剛なるに恐れて、又心を變じなばむづかしからん、此度殺すべしと宣へり。秀吉しひてなだめ給へども許容なし。其時秀吉宿所に歸り給ひて大澤をよびよせ、貴殿の身の上に心もとなき事あり、我を人質に取りて急ぎ退れよとて、大澤に身をまかせられたり。大澤心は剛なりしかども、情無かりしかば、心得たりとて、よのつねの人質の如くに脇指を抜き、秀吉公の心もとに推しあて其夜退たり。是より後敵味方のあつかひにも、秀吉と云へば

ね給へ。一心だによくばと人ごとに云ふ事なれども、死すべき所にては女も身をなげ、長袖も身を果し侍り。射手一人にては所により敵百人は防ぐべし。天下の武士只一心よ鎗よとばかりいはゞ、日本の弓矢よわくなるべし。太平記の時分にも此きざしありし故にや、楠正成も射手を褒美して矢をすゝめられし事見えたり。今も志あらん士は、名將を憂へしむべからず。

一心友問。先度弓を小者に持たせたる者を戒め給ひしこと道理至極ながら、今時は武士の他行に手づから持ちがたし。一僕の小身者は弓立もことぐ〲し。しかれば弓の稽古もやむに近し。如何し侍らんや。曰。先度は武士の弓矢を尊ぶの大義と心がけの道を申し侍り。まことに今の門をならべ甍建ちつゞきたる隣ありきには、手づから持ち侍るとも何のやくもなく、かへりて人の目に立つことあらん。小者一人に弓立も過ぎ侍らん。か樣の事にも時處位あり。弓矢を尊ぶ心の誠だにあらば、はきかへの草履木履持たせず、自らはきたるばかりにて、出ざまに手を洗はしむるか、

打物—太刀薙刀等の武器の稱

外なるちがひあり。弓矢取の恥辱にあらずや。不心懸のいたす所なり。古の人は隣ありきにも弓矢を手に持ち、木の葉にても見かけて間を積り、矢を放ち、其はづれあたりを見て間をふみ、度かさなれば間をもつもり損はず。矢の散らざる事も的前にひとし。武士と生れて弓馬をならはざるは武士にあらず。習ふといへども用をなさゞるは本意にあらず。云。弓を射ず馬によくのらざれども皆武士は立ち侍り、左様にむづかしき事ならば誰か嗜み侍らん。昔も辨慶などは打物取つて武勇の譽れをあらはし侍りき。曰。辨慶弓を知らぬにはあらず。たゞ打物に得たる故なり。武士たる者は武藝には一遍わたり侍れども得たる事を先とす。今は鎗をにぎり武偏だにすればよしと思へども、それは理運の事なり。夫ばかりにては武士の野人といふ者なり。知行を給はりて優々として居る事なれば、多藝をも心がけてこそ、せめて御恩をも報ずべけれ。しからば慰みの樣にせずとも用をなすべき事なり。武官に居て其所作におこたるは、貴殿の良知には心よきか、快からざるか、内に向つて心に尋

尅―尅は勝の義五行の運行にて水は火に尅つを云ふ

さし矢的前―矢數を多くせんとする矢をさし矢射場に於ける射を的前と云ふ

木のためには子なり母なり。木に水をふくまば、火氣自からやはらぎて雨降るべし。大原野の神前にて樂を奏せよ」と仰あり。果して大に雨降れり。問。然らば神前にあらずとも、家々にても同じ事ならんか。云。しからず、是を天にすゝむる神なくては降らず。又双調の青海波は以前にうつしたるともいへり。それはいづれにてもあれ、雨ごひに用ひ給ふ道理においては同じ事なり。中夏にても雨ごひには樂を用ひたり。

一心友弓を一僕に持たせて野を行けるに逢ひぬ。告げて云。夫武士の別名をば弓取といへり。然るに何ぞみづから持ち給はざるや。一僕は草履をも持つなるに、弓とひとつに持たする事は敬なきなり。武具には弓矢より尊きはなし。弓立に立てては持たしむるとも、直には持たすべからず。古は大將軍だに弓を人には持たせ給はず。公家の大將中少將も武官なれば弓矢は身をはなち給はず。其上さし矢的前等の間相知れ、こぶしの定りたるには射手なる人も、山野にして行あひに射る時は、ことの

盤渉調―十二律の一

りたる事を聞かず。扨かりをさむればしへたけ絞りとれり。勢大にちがひてもの云はねばこそあれ、何程かうらめしく情無き事ならん。昔は晴を祈り雨を祈る事は、その所の奉行代官國郡の主の任なりき。今は百姓どもの心ばかりなれば、雨を祈る事のみ知りて晴を祈る義をば知らず。長雨にて田畠の作物くさりぬれども、徒に日を送るなり。問。明者ありて雨ごひせば如何あらん。云。雨乞して雨降るべき道理あるものは音樂に如くはなし。天正の比大に日でりす。諸寺諸社のいのりを盡しても雨降らず。其時勅定に、「樂は五行の精神をうつして五音をそなへ、年の十二月に配して十二律を有せり。四時土用の調あり。天地神明に感ずること正しく速かなり。盤渉調は冬のしらべにて水の調子なり。此調子を吹きたてば天地の水氣をもよほすべし。然れども斯くてりつゞきたる時水の聲をなすとも、火氣の大なるにおされて水氣生ずる事得がたし。盤渉調の青海波を双調にうつして奏せよ。双調は春のしらべなり、木氣の音なり。木は火の母なり、水の子なり。火水は剋すれども、

主と成りて天理流行す。空々如たり。故に呼吸の息はいたゞきよりくびすに至り、躰ゆるやかに色温なり。是靜坐の至りなり。心に妄ある時は息喉よりかへる。心誠なる時は臍の本より出づ。養生の術も亦こゝにあり、是故に養生家には呼吸の息をかぞふる事あり。内に主を立つれば心散らず。精神内に守りて氣血順流するの初學とす。

一朋友問うて云。雨乞とてわけも無きをどりなどしても、自然に雨降ることは降合はせたる物か。答云。然り。世間の雨乞は、神納受し給ふべき事にては無けれども、其しわざの善惡にはよらで、たゞ民の心根に感じて雨降を給ふ事有るなり。耕へすより刈りをさめ米とするまでの、民の辛苦萬事の費あげて數へがたし。しかのみならず、日でりと云へば雨ごひを催せり。三輪の大明神へ日でりに雨乞のをどりをかけ奉るに、三十餘鄕の入用は金二千兩にも及びたると云ふ物語を聞きぬ。何國にも年々の苦勞を顧みざるのみならず、日照りの雨乞にだに、給人より少しのたすけ有

三輪明神―大和國のを本社とし諸國に在り大己貴尊を祀る

忠質文—夏は忠殷は質周は文

閑居云々—論語爲政篇に見ゆ

一心友問。今の時にして先王の道を用ひば、忠質文のうちいづれを用ひ給ふべきや。云。愚が知らざる所なり。賢君おこり給はゞ忠を用ひ給ふべきか。問。今は文過ぎぬれば質に依り度く思ひ侍り。云。今は奢といふ者にて文にもあらず、質も亦文の下地なり。只忠は誠のみなり。誠立たば僞去るべし。奢と飾とは多くは僞なり。此ならひ除いて後質にゆくべし。世をへて文あらはれんか。問。賢君おこり給はゞ、善惡邪正のあらはなるを改め給ふべきか。云。理屈によつては改め給ふべからず。人情に應じ時處に隨つて改め給ふべし。初めて大道を興さんと思ふ者は法を先にすべからず、伏犧氏はかうぶりなく衣裳なし、宮殿なく禮度品節なし。其神聖たるに疵あらず。

一心友問うて云、聖賢も又靜坐ありや。答へて云、靜坐あり。孔子閑居し給ふ時は、申々如たり夭々如たり。心主なき時は必ず散ず。故に忠信を主とす。これを意を誠にすとも云ふ。人欲の妄は間思雜慮と成りぬ。僞なり。其意を誠にする時は、忠信

曾點―孔子に對し沂に浴し舞雩に風せんと云ひし人

悟道の見た似たれども、意を以てむかへて己が受用のいたるに對應して見ればさもなし。予天下の事物の理を窮めんとも心がけず、修身の餘のいとまを以て文を學び心の通ぜざる所惑ひある事をわきまへぬる間に、道の大意心に浮びぬ。それより後天下の理において疑ひなし。儒佛によらず、天下の學者來りてもいかゞと思ふ心もなし。聖學においては淺き事なれども、大意を見れば貫通とも云ふべきか。問。しからば貴老は程朱にも劣り給ふまじきか。云。然らず。程朱剛強仁厚明敏の質にして、此大意を知り給へば則ち賢人なり。愚が質柔弱輕薄魯鈍なり。たま〳〵大意を知るといへども、氣質の害をなす事すくなからず。入徳の功を勉めて日久しからざれば、凡を離るゝ事かたし。人は一度によくすれば己は百度にするのかはりなり。剛强明敏の人といふとも、大意を知るの後こゝに止まるべからず。問。曾點の大意を見ると、貴老の大意を得ると同じきや。曰。又高下淺深あり。見は大かた相似ても、質を以て大に違ひある事なり。たゞ徳に入るの後氣質の煩なし。

當下―即時其時に

意に同じ。問。如此なれば朱子の説に近し。陽明物を以て五事とするの説易簡ならずや。曰。五事も又物なり。天下の事物を離れて五事なし。五事を離れて天下なし。五事の非禮といふも我知のくらき所より起れり。我心神明かなる時、何ぞ五事の非禮あらんや。五事の非禮を當下にたゞしをさむるを自反愼獨と云ふ。五事の非禮を終にをさむるを窮理と云ふ。其實は一なり。問。致知は愼獨の工夫にあらずや。曰。愼獨の工夫は誠意なり。自欺むくことなき者は獨を愼むにあらずや。致知はたゞ聖人に至るの的なり。工夫は全く格物にあり。格物は下學なり、致知は上達なり。道の大意を知る時は、天下いまだ窮めざるの理、未だ知らざるの事に逢ても心の惑ふ事なし。鏡の未だ映さざる影うつしたる影のへだて無きが如し。大なるやうなれども、聖學においてはさのみ難き事にあらず。精義不入神用をなす事なし。大意を見るも學知の精義入神たるをり。入徳の功あつからでは聖學の至善にあらず。

一心友問。一旦豁然貫通の語は、異學悟道の習あるに似たり。云。大かたに見れば

間日－瘧は間歇的に發作するものなれば其當日以外は即ち間日なり

非なり。誠にするは意をなくするの工夫なり。誠にする時はおのづから毋レ意に至るなり。意念の不常往來して自欺むくものは、心の靈臺くもり有りて神明照さゞる所あればなり。こゝを以て其知の靈照不昧の全體を致さんとす。然れども空々に明かにすべからず。不常往來の念を打ち拂ひ、生ずる欲をたち去りて、善惡ともに心鏡にとゞめず、空の本體をいたすことは其功すみやかなれども、瘧の間日の如く、水の塵芥を居させたるがごとし。されば氣質變化の期なし。たゞ天下の事物において、吾心の明不明を覺つて實々に功を用ふべし。天下國家も物なり、五倫も物なり。天下の事物において我心の惑ふ所あるは知の不明なり。尤も知レ善知レ惡の良知あれども、善を知りながらせず惡を知りながら不レ去は眞知にあらず。又其知良知にあらずとも言ひがたし。いまだ窮理の功いたらずして、精義入神の實地なければなり。士たる者の盜をなさゞる事は、窮理のいたりて精義神に入りたればなり。如レ此のたぐひ又人々の上にあるべし。知明かなれば間思雜慮もなし。此一ばかりは聖人の毋レ

先后―先後なり

本にて東しらみ程の時分は、佛學の盛んなる事日中の如し。

一　心友問。大學先后の主はいづれの所にて侍るや。曰。正心なり。心を正さんと思へば意を誠にす。誠意の工夫は致知格物なり。國天下を平治せんと思へば家を齊ふ。一家齊うて天下平なり。家をかさねて國とす。國をかさねて天下とす。其齊家の本は身なり。身の主は心なり。一度心正しうして家齊り國治り天下平かなり。問。大學工夫の實地はいづれの所ぞ。曰。誠意なり。是を以て傳の初は誠意を首とす。致知格物は誠意の工夫なり、何ぞ別に格物の傳あらんや。所謂の二字を以て分明なる事なり。

一　心友問。孔子絕〻四毋〻意とあり。しかるに誠意と云ふは何ぞや。曰。毋〻意と云ふは聖人のことなり。意は不常往來の念なり。間思雜慮とも云ふ。聖人には初よりなし。學者たゞに意なからんとせば異學の流となるべきか。心は本空なり。然るに空と觀ずるは圖上に圖を按ずるが如し。心本意なし。たゞに其本來の如くならんとせんは

聖人の聖人たる所の能事は、能くあつめて大成するなり。古今才なきにあらず。集むる人なければ乏し。集むると云ふは、よく問ふ事を好んで人の知を用ふるにあり。天下の知を先立つるものは天下の知に師たり。己が知を先立つるものは人の下なることを辨ふべし。

一 心友問。文未だひらけざる故に、昔は美質の人々も聖學に入り給はざりしと承り侍れども、四書五經すでに渡りて、誰もよく讀みたる事なり。かく明かなる書を置きながら辨へなかりし事なれば、聰明とも申しがたくや侍らん。云。今は既に百千年を經て數人の手にわたり、講明もかさなり、其上に近年は宋朝明朝の書渡りて、明なる時節に生れ出て、勞せずして知りたる事なれば、心やすき樣に思へり。唐にては其國の書なり。其上文字も達者なるだに、孔孟の後千歳不」傳して、宋朝を待ちてわづかに世に知られたり。五穀は種の美なる者なれど、熟せざれば荑稗にも如かざるなれば、聖人の道學も、熟せざれば佛學にも如かざりしこと尤もなり。聖學の日

荑稗―稻に似て非なる稗などの雜草

千金云々—史記趙世家趙簡子周舍を憶ふ條に類語あり

侍らめど、師たるには損多し。唯いつまでも人の弟子にて居るこそ益ある事にて侍れ。言は道德におよべども、師たる時は虚中の本然存しがたし。言は詩歌のあそびに至れども、弟子たる時は溫恭自虚の眞を失はず。愚が學未熟なるが故なり。孺子の歌にもとることとあり。況や神儒佛歌筆の人においてをや。愚が人に異なる事はなし。たゞ人の人たる大事を知りて惑はざるのみ。自滿して人の師たる事を好まず、よく人にくだりて弟子たるに終る所のみ、少し古人に及ぶべきか。それ千金の裘は一狐の腋にあらず、大厦の材は一丘の木にあらず、太平の功は一人の略にあらず。古人云。天下を保つ人の、天下の諸事諸物の我有たる事をば知れども、天下の人の知の我物なる事を知らずして、問ふことを好まず人の知を用ひざるは、古今賤とする所なり。夫耳、目、口、鼻、手、足、の能を用ひて事をなすものは心なり。天下皆我に異なるものある道理を知りて、よく賢知を擧げ才能を用ひて治國平天下をなすは明君良相の德なり。萬物は生を遂げん事をねがふ。集めて春をなすものは天なり。

一文は無文の師—有は無に勝ると云ふ程の義

專ならば、人欲の煩なからん。是を聖人といふとも可なり。聖人の聖人たる骨髓こゝに有ればなり。天質の分量廣きものには天吏たるの天命あり。邪正をわかち善惡を明かにするには、或は筆紙をかり或は言論にわたる事あり。小人の好んで人の過をいひ益なくして是非を論ずるの凡心にはあらず。言はざれば世を救ふ事能はざるが爲なり。孟子の時は上に堯の聖主なく、下に舜の神德なし。これ又分を知るの義なり。

一舊友問。貴老は天下に名を得給ふ人なり、道學においては儒佛みな貴老によりて目をさましたり。しかるに貴老は人に尋ね問ひ給ふ事のみにして、未だ人に教へ給ふ事をきかず、何ぞ神道者、俗儒、歌道者、筆道者、出家までを招きよせ、或は彼にも行きて師とし學び給ふや、道德の大本において窮めざる所ありとや謗り侍らん。云。愚が名は虛なり、何ぞ其虛名をいだきて物知りがほに人の師たる任をになひ侍らんや。一文は無文の師といへば、愚が如き者も虛名に居て人の師とならば、成りもこそし

阮嗣宗―晉書に出づ名は籍靑白眼をなしゝ人なり

孟子は云々―文滕公の下篇に下文の語あり

いて、心の感ずる我身の交はる所、初學は疑ひある事あれども、正心修身の緒餘土苴なれば、好學の人は勞せずして明辨すべし。天下の理を盡すといへば大なる樣なれども、本末先後をしれば難き事にあらず。

一 學友問。阮嗣宗は口に人の過失を論ぜずと云へり。まことに好人なり。大舜は是より大なる事あり。善を人と共にし、人の惡をかくして善をあげ給へば、惡はおのづから消えうせ善は大に成りぬ。人の善をゆるし給へばなり。しかるに孟子は、よくものいひて楊墨をふせぐ者は聖人の徒なりといへり。凡人をだに惡をかくして善を揚げ給ふに、楊墨は少し見所に過不及ありといへども、凡人をぬけ出たる人なり。何ぞ其善を好して其惡をかくさゞるや。云。性は聖凡一躰なれども命に分量あり。よく己が分量を知りて命にしたがふものは聖人の徒なり。天命に天吏の任なき者はよく默しよく拙くて、阮嗣宗が人の過失をいはざるを師とすべし。其上に心術明かにして、金の鍊得てまじはりなく至精の正色なるが如く、心思の存する所天理に

奨學院—在原氏の子弟を教育せる一種の私立學校

冢宰—役人の長なり今の總理大臣の如し

し。山川地理に得たる才あれば、山川池澤をつかさどらしめ給ふ。物の生長の道にさとき人をば農事を掌らしめ給ふ。今の郡代のごとし。よく賞罰をことわるべき人をば仕師の職に置き給ふ。今の所司代のごとし。律呂の理に明かなる人をば樂を掌らしめ給ふ。善惡の道理分明にして直言する人をば諫議大夫とす。進みて忠を盡し退いて過を補ひ、天下政道の損益を知るべき人をば納言として君言を出し納れしむ。陰陽鬼神の理に通じ人情時變に達せる人をば冢宰として百官を總宰らしむ。天下の事は多し。理は窮なし。右は只大事の二三をあげたり。一人して極め知るべからず。力を合せ謀をあつめて、天下の知を用ひて天下の事を盡すべし其不ㇾ知をば不ㇾ知とし知るをば知るとし、われ事を不ㇾ知とも惑はず、人の知るをもうらやまず、吾事に達すれども滿りとせず、功成りてほこらず。耳目手足の各其用を盡して一心の妙に歸するがごとし。天は生じ地は育す。日月のかはる〲明かに四時のたがひに行はるゝが如し。其物をなすに至りては一なり。又天下の事にお

以文會友—論語顏淵篇に曾子曰く君子文を以て友を會し友を以て仁を輔くと

淳和院—俗に源氏の學問所と稱したる所

物致知と云ふ。知は理なり。今の理を窮むと云ふは、書の上にて文に即て講明し、或は空談に議論す。これ物に即て理を窮むるにあらず、文を以て友を會すると云ふものにて、友を以て仁を輔くるには至らず。仁を輔くると云ふは、父子の親君臣の義夫婦の別長幼の序朋友の信において、過るを磨し不足を補ひ、互に過ちを告げて相輔くるものなるに、今の學者は過を聞くことをいとひ、至情を云ふ者をにくめば、即レ物窮二其理一の實を失へり。しからば天下の事々物々の理を窮め、博識多聞なりと云ふとも何の益かあらん。問。天下の物莫レ不レ有レ理。唯於レ理有レ未レ窮。故其知有レ不レ盡也。天下の物とあれば必しも五倫に極まるべからず。公の說の如くにては文理不分明の如し。云。天下の理の重きものは齊家治國平天下なり。其中の一事々々は天の與へたる才知あり。君も其質の得たる所を察し給ひて其職を命じ給ひ、臣もみづからの天を盡すものなり。身を修むるにとく、人を責むるにゆるやかに、知さとく行篤き人を選みて教を掌らしめ給ふ。日本のむかし淳和院弉學院の師あるが如

とす。性命の正に基くものなり。然れども衆人の氣質の濁りかたよるものは、其神靈の照しうすくして失ひやすし、飲食男女は人の大欲存すれば、禮なくしては相爭ふに及ぶが故なり。其禮は人々固有の天理に基きて敎へ給ふが故に、飲食は義ありて求め、時ありて食す。且多きを讓り少きをとる。男女は媒の言をまち、婚姻の禮を備へて後相交はる。且夫婦となりても賓主の如き別道あり。先王先みづからの德を明かにして先じ給ひ、且つ禮を以てとゝのへ給へば、人々固有の天眞感激鼓舞せられ、恥ることありて格るものなり。

一學者問て云。即﹅物窮﹅其理﹅とは、事々物々につきて事々物々の道理を窮め知ると云ふ義か。云。しかり。其事々物々の道理と云ふもの、いかゞ心得給ふ、其意を知らず。愚が見侍るは、物は事なり。事は物の用にして、物は事の躰なり、二にあらず。五倫の物あれば五倫の事あり。五倫の物は君臣父子夫婦兄弟朋友なり。五倫の事は五典十義なり。五倫の物に即て五典十義の理をくはしく窮めて、心に得身に行ふを格

なんたち―汝等

禮は飮食に―邦俗箸の上下よりと云ふ亦相似たり

ども我等は放逸なる中に習ひ來りぬれば、威儀を愼む所より心を用ひずしては、心氣も存じがたくおぼえ侍り。あやまりにて侍るべきや。答云。方はなんたちの身にある事なれば、あやまりにては無し。威儀の愼み事のつとめなどは氣力のなす事なれば、老年病衰の人は叶ひがたし。然れどもつとめは一念獨知の知にあり。寢つ起つおこたりある樣に見えても、病者か老體かにて、氣疲れては休み氣力付ては起きてつとめ、獨知に暫くの間斷なき人あるべし。人めには夙におき夜半に寢て、たとひ及びがたき行ありとも、獨知におこたる人あるべし。それ心を正し身を修むるより、家を齊へ國を修むるに至るまで、誠を立つるより先なるはなし。貴殿氣力強くての勉は過ぐるにあらず、我氣力衰へての勉も亦不及にあらず。誠を立てて時處位にしたがはゞ、ともに伏犧の民たるべし。

一　心友問て云。禮は大なるところより始るべきに、飮食に始ると謂へるは如何。答云。天尊く地卑きは禮の始なり。無言の敎なり。男女是にのつとり、父子君臣是をのり

筌蹄―筌は捕魚の具蹄は捕獸の器

磨磷云々―論語陽貨篇に堅と曰はずや磨して磷りせず白と曰はずや涅して緇まずと

別思慮といへども、ふと覺照に至りたる時道理浮ぶものなり。たとひ人知らずとも、我心に不善あらば德に恥づべし。人先非を知りてそしるとも、吾心に淸く改め去りて今既に無き事ならば、何の後悔かあるべき。悔は非を改むるの筌蹄なり。改めて後心上にとゞむれば、却りて煩をなすなり。

一 心友問て云。志の主本は何とか立て侍るべきや。答云。仁義身にあり。是を用ひて盡きず。不義を憎み惡を恥る者の心にあるを主本とす。磨ども磷かず、涅にすれども緇まず、試に失はんと思ふとも忘るべからず、唯此靈明天を根として朽ちず。然れども心法の受用を知らざる人は、我にありながら我物ならず。問。外により人によるは志の實ならざる故か。己が爲にするの工夫は如何受用し侍るべきや。云。天地の間に己一人生きてありと思ふべし。天を師とし神明を友として見る時、外人によるの心なし。斯の如くなれば內固うして奪ふべからず。外和してとがむべからず。

一 心友問て云、今の時にして德を好み道を行ふ者は、伏犧の時の如しと承りぬ。され

義は重し—孟子告子篇參照

我にあらざる物なし。何をか願ひ何をか求めん。心ほど大事なるものはなし。聖人凡夫同じき所なり。天下を與へんと云ふとも命には換ふべからず。されば天下よりも重きものは我身なり。生きては義理を失ひ死しては名を全くする事には、かならず死す。しかれば命よりも義は重し。問。後悔の心切なる故に精力を勞し、忘るゝ事あたはざることなり。後悔なくては先非を改むべき樣もなし。いかゞ受用し侍るべきや。云。悔は凶より吉におもむくの道なり。然れども強く悔ゆるはかへりて先非の病ぬけざる根なり、公も我も昔ありたる過失の、今は跡かたもなくなりて心氣かはりたる事は、思ひ出ても悔はなし。たゞよその事の如し。思ひ出して頭をかき汗出るは、いまだ其過失の根伏藏して、またも其境あらばなすべきが故なり。其上精神をたもつの道を知らで氣を養ふこと、至寶を保つが如くの受用なき故なり。何ぞ少しのほめそしりを以て此靈寶を煩すべきや。義に當りては國天下といへどもやぶれたるわらぐつを捨つるが如し。是故に君子は覺照あつて思索なし。平人の分

集義和書　巻第九

○議論之二

一心友云。我常に夜寝られず。さるに依つて心氣つかれ、食の味もこゝろよからず。或は風邪にをかされ、種々の病も虚に乘じて入りぬ。心術のつたなき故なるべけれども、其故をしらず。

答云。夜寝られざること疾病のなす所といへども、大方は思慮多くして精神を消すより起るものなり。天下何をか思ひ何をか慮らん。義に隨ひ理に應ぜんのみ。知者は無事なる所を行ふといへり。萬事私よりなすべからず、天を以て動くべし。好む事もなく、にくむ事もなく、止む事を得ずして應ずるを、天を以て動くと云ふ。平人は私の願あり。時を待たざるの動きをなさんとす。是故に思慮多し。天下

候。風を移し俗をかふるには樂よりよきはなし。公家の風俗やがてうつり變りていやしく成り給はん事目前たるべく候。公家中かくの如くなれば、帝王へもおのづからをしへ奉るなり。王者のおはしまして國に益有る事は、いにしへの禮樂おこたらずして俗とことなる故なれば、其實たえて見る所なく俗とひとしからば、終には神統あやふく在しまさんか。是ひとへに秀吉の無道の御馳走より初まれり。改めたまはん帝大樹出おはしまさずは、日本の國も又危かるべきか。神統絶え給はゞ神國とも言ひがたし。戰國の後人道いづくに求め給はんや。人道に禮樂なくは禽獸に近からん。然らば合戰やむ時なかるべし。縱ひしばらく治世ありとも、道なく人心くらくは、終には吉利支丹にとらるべきか。然らば天地すでに破れたるなり。天運いまだ午の會の初にあり。天道は至善なり。無好人の三字は有道の人の言にあらず。たゞのみ思ふばかりなり。

大名縁—公家と大名との縁組を云ふ

りにて、却ては公家のおとろふべき端を始め給ひ候。今天下の御政道あづかり給はず。宮殿の結構はいらざる物なり。實なくして事物過ぐる時は、火災度々至るものなり。然れば終には禁中の靈物も亡びぬべし。道ある人の御馳走ならば、禁中の御位を尊くあふぎ奉り、いにしへの禮樂の絕えぬ様に、御神樂には御神樂の領をつけ、節會御遊等にもそれ〴〵に領をつけ奉り、其事の必ず行はるゝ様にし、宮殿諸道具等は質素にして禮儀の叶ふべきばかりならば、禁中の正實立ちておごりの解怠もなく、火災の憂も有るまじきなり。公家中も衣冠束帶の時は禮儀うや〳〵しく、平常は知行の分に應じておごりなき様に、公家の立ち給ふほどの領を付まゐらせば、公家の公家たる所亂れずして長久なるべし。大名縁など、公家の衰ふべきはしと成る事なり。內縁によつて奢生じ、禮樂をもつとめられず、其子は父方の家督は小身なれば、母方の人の多き方へよりならひ給へり。母方は野人にして愚禮を好み、俗にして婬樂ならでは知らざる故に、程なく婬樂を好み被」出るなり。是ぞ公家亡衰の初にて

後醍醐云々ー建武中興の失敗を指す

秀吉云々ー御所の造營聚落の行幸奏舗等を謂ふ

王とは成り給ふべからん。又此方より返し奉られても末續き申すまじきと申す事は、後醍醐の帝の時さへ、公家は日本の人情時變うとく成り給ひて、歸りたる天下を失ひ給へり。今は猶々うとくなり給ハば、縱ひ返し奉り給ふとも、やがて亂逆出來て本までも危かるべく候。武家の人の帝位に上り給はんと、王の天下をとり給はんとは、共に無分別たるべきなり。然れども一の道あり、將軍家に賢君出おはしまして三十年も用意あり、家を作るごとく地形よりくみ立て、末代までの法をまうけて奉り給はば、人じちも何もいらで、又五百年も風波なく世中ゆたかなるべし。後世にはかくの如きの人出で給ふべきもはかりがたく候。問。永祿天正の比、禁中公家にが〱しく衰微し給へる處に、秀吉の御馳走にて結構に被ㇾ爲ㇾ成たるは奇特の御事なり。云。戰國にて誰心をつけ奉る人もなかりし間、朝夕の御つゞきも成りがたき樣子と承れば、誰にても御馳走不ㇾ仕して不ㇾ叶事なり。秀吉の御馳走は奇特ながらも、道を知り給はざるゆゑ、禁中の御爲日本のための御馳走ならざれば、一旦くつろぎ給ふばか

七重八重—兼明親王の歌、末句「なきぞ悲しき」とあるを正しとす
我等—我々はの義

七重八重花はさけども山吹のみの一つだに無きぞあやしき

其時道灌廿ばかりにておはしき。手を打ち驚き、扨々恥しき事なり。國郡の上に居ながら賤女にもおとれり。昔より士は文武二道とこそ云ふなれ。我等しょおふ狩人によき衣きせて上に置きたるが如しとて、夫より學問をつとめ給ひて、其比の武將には稀なる文筆の達者にて、詩歌は云ふに及ばず、經傳をも學び給ひき。其學問の事は世に知る人多し。問。かならず王者に天下のかへるまじきとは、如何なる道理侍るにや。もと日本の主なれば、本に歸りぬべき事にて候。云。代を重ねて天下をたもつは天の廢する所なりと云へり。然れども王者は天神の御子孫にして地生にあらず。ことに日本において廣大の功德おはしますゆゑ、天下の權勢をば去り給ひてやはらかにして上におはしませば、何時までも日本の主にて在します道理にて侍り。武家もたとひ天威の許し有りとも、自ら王と成りてはむづかしき事なり。臣として攝政などの心にて天下を知り給ふは心易き事なり。何たる無分別の人有りて

太田道灌―太田持資入道して道灌と號す

其邪をせむるの藥なくて不叶。邪氣さりて其跡虚したる時は、人參白朮等の靈藥なくては肥立ちがたし。戰國には武勇のはかりごとにて國を取るといへども、すでに敵なくなり國虚して、戰國のつぐのひ今日の養生なければ永久なりがたし。敵去りて後の養生は文武の道なり、病後の人參の如し。病邪といへども人參を主として攻撃藥をも用ふるごとく、戰國といへども大將は仁義の德なくて不叶事なり。太田道灌は其初荒武者にて、馬を馳せ劍をこゝろむる外無他事、有る時鷹狩に出て、鳥によらん爲に、民の家に立寄りて蓑をかり給ふに、夫は野に出て妻のみあり、山吹の枝をひとつ折來りて御前にさし置いて、とかくの言葉もなくて入りぬ。道灌他の家に至りて蓑を借り給ひき。歸りて其夜人々と物語し給ふ時、今日の狩場にての事を語り給ふ。其中に京の客歌道にたづさはる人の答へしは、其女はゆゑある者の落ぶれたるならんか。夫の蓑をきて出て内に無かりしを、賤の女として、大守に言葉を交し奉らん事恐れありと思ひて、山吹の枝を以て御いらへ申したるなるべし。古歌に、

しますゆゑに、天下治りて後にはかならず將軍家參内をとげられ、諸大名皆あつまり給ひ、束帶衣冠の禮儀を見て、初めて人の則ある事を知り、御遊の躰管絃のゆたか成るを聞いて、初めて太平の思ひをなせり。彼といひ是といひ、己が身をかへりみるにまことのえびすなり。此無道にしては國天下のしりがたき事を知れり。野人よりおこり給へども、天下を知る程の人なるゆゑ、必ず古禮をあふぎ古樂をしたひ禁中をあがめて、君臣の義を天下に敎へ給ひ候。天下の人是を見て、威も力もなき人を日本の主筋とし、斯の如くあがめ奉り、主君となして畏まり給へるは、まことに道ある君なり。我等いかで國郡を給はりながら忠を存ぜざらむやと、むかし賊心ありし者も、忽ちひるがへして普代の思ひをなせり。爰をもつて世の太平すみやかなり。禁中おはしまさでは爭で此德あらんや。こゝを以て日本國の爲とは申すなり。

今川良俊云ふ、「文道を知らでは武道終になるべからず」と。此良俊は武家の世となりて此かたの文武二道の人なり。世の兵亂は人の病氣のごとし。邪氣甚しき時は、

普代—譜代

今川良俊—良俊は了俊の誤、名は貞世足利氏初世の名臣著書多し

禁中—天皇

て公家の天下にかへる事も可レ有か。云。中々かへるまじく候。此方より與へ給ふとも末つゞき申すまじく候。昔は武家より御氣遣も有るべき事なるが、今は何の御用心もなき御事なり。是を以ていよ〳〵位を位に立てゝ尊敬し給ふが日本の爲にて、又將軍家御冥加のためなり。問。日本の國の爲とは如何なる道理候や。御冥加の儀は尤もに候。云。もろこしよりも日本をば君子國とほめたり。其故は、もろこしの外には日本ほど禮樂の道正しく風流なる國は東西南北になき事なり。それは禁中おはします故にて候。清盛賴朝よりこのかたは、武人大君と成りて武勇のつよき人天下をとれり。武は野人に近き程達者に成り申し候。武家といへども久しく治りぬれば次第に上臈になり、おごり生じやはらかになりて、心ばかりは猛けれども武勇の達者は劣れり。大方は心もつれ申す事にて、其おとろへざまには野人出でて天下を取れり。この故に國主と雖も、田夫を去ることいくばくも無く候。公家なくて幾度もかはりなば、二三百年の内には天竺南蠻にかはらぬあらえびすと成り侍るべし。禁中おは

眉目―名譽と云ふ義面目に同じ

前車云々―說苑の善說篇に出づ

いたか―尋大

故なり。かはりたる代の初には傍輩たる事近し。よつて士の禮儀正し。富貴年々にまさり奢り長じぬれば、將軍の士はむかしの公家のごとく、國々の士は地下よりもくだれり。大名も我家來程の人におされ、家中の諸士は頭のあがるべき樣なし。是いきどほりの本なり。將軍家の諸士は御威光なりと不禮をつくすを以て眉目と思へり。勢におさるゝ程こそあれ、天道は滿てるを缺くなれば、少しほころび立ちぬれば、諸士のいきどほり時を得て、臣たらんとおもふ者すくなし。前車のくつがへるいはれを知る者まれなり。問。今時公家は小身にて官位高く、人に無禮をなし給へり。むかしの名殘あらため給はず、其非を悟らざるにて在しますや。云。しからず。むかしは奢りによつて權威を失ひ給ひつれども、それは其時の事なり。今は位ばかりにて持ちたる公家にておはしませば、わざともいたかなるがよく候。今にして人にくだり給はゞ、公家は絕え侍るべし。むかし權威ありし時ならば謙り給ふがよし。今は少しも下らぬがよく候。武家よりも隨分敬ひたまふが禮儀にて候。問。時有り

凡人云々—平安朝中期藤氏專權の頃を謂へるなり

本にては必然の理なり。問。かくの如く故ある帝王の天下、何として武家にはわたり侍りきや。云。謙德を失ひ給ひし故に、天下の權威を失ひ給へるなり。むかしは日本國中一國のごとく、今の樣なる國郡の大名なかりしなり。都より代官として受領をつかはし給ふ國々は農兵なり。其後王德おとろへ、國々に我まゝなる者出來て王命を用ひざれば、征伐につかはされし人則ち其國を治め、子孫はおのづから國主のごとくなれり。國々にては歷々大名なる者を、官位なければ凡人と稱し、官位卑ければ地下といひて輕しめあなどらるれば、その心に王城をものうき事に思ひうとめり。故に王臣たらん事を願はず。其打節武臣の大家棟梁を取りぬる人あれば、則ちしたがひて主君とし、士の禮儀有る事をよろこびぬ。是王者の武臣に威をうばはれ給ひし根本なり。もと武家公家と分るゝはひがごとなり。昔はなき事なり。是も奢り故出來たるなり。問。武家の天下と成りてよりこのかた五百餘年の間に、天道命を改め給ふ事六七度なり。代のみじかかりし事は何ぞや。云。それも謙德を失ひ給ひし

大荒―天地草創の時

あらん限―日本の土地の續く限り所謂天地と共に無窮ならんとなり

に六の國あり、西に七の國あり、北に八の國有り、東に九の國あり。是を四海といふ。南を蠻と云ふ、虫にかたどれり。西を戎と云ふ、いぬにかたどれり。北を狄と云ふ、けものにかたどれり。東を夷と云ふ、人にかたどれり。四海の内にてすぐれたり。九夷の内にて朝鮮琉球日本すぐれたりとす。三國の内にては又日本をすぐれたりとす。然ば中夏の外四海の内には日本に及ぶべき國なし。是天照皇神武帝の御德によれり。大荒の時日本の地生の人は禽獸に近し。然る所に天照皇の神聖の德を以て、此國の人の靈質によりて敎をなし給ひてより、初めて人道明かなり。天照皇は地生におはしまさず、神武帝其御子孫にして天統をつぎ給へり。氏系圖を云ふ事も、王孫のたゞ人と成りて國土の姓に異なるが故なり。然れども一度たゞ人となりぬれば天統をつがず地生にひとしきゆゑに、天下をとりても帝王の號を得る事不叶、三種の神器を身にそへ奉りて天津日嗣をふまん事は、天照皇の恐多く、且天威の許さぬ所あり。日本のあらん限はかくの如くなるべし。他の國にはなき例なれども、日

鵬―莊子逍遙遊篇に見ゆ絕群の大鳥の名

の禍亂何によつておこらんや。外に邪氣のをかすなく、內に七情の相勝なし。疾病いづくよりならんや。大舜の孝以て天下を知り給ふ。至德の化如レ此。中國の民の其風を望むは言ふに及ばず、東夷西戎南蠻北狄の、耳にもきかず通路なき國々までも、此時に至りて無事をたのしまずと云ふ事なし。堯舜は人倫の至りといふ是なり。如レ此の至治は、孝を以てせずして何をもつてかせん。堯舜の道の豐に高きこと明辨せずして明かなり。彼異端の諸家は大鵬の側の蟬と鶺鴒のごとし。日を同うして語るべからず。孝經に四段の敎あり、天に四時のあるが如し。第一段は條理なり、第二段は極功なり、春夏の道に配す。第三段は反覆して心法を發明し給ふ、第四段は變を說き給ふ。秋冬の義に配す、

一 或問。他の國にては、誰にても天下を取りては王となるものなるに、日本にては、かく天子の御筋一統にして、天下を取る人も臣と稱し、將軍にして天下を知り給ふは、如何なるいはれにて在しますや。云。中夏は大地の中國にして四海の中にあり。南

沈魂滯魄―死者其志を得ず魂魄此世に留まれるを謂ふ

舜の御代たるべきか。曰。孟宗ごときの數子はたゞ天質の美なり。いまだ性命の學に委しからず。爰を以て其親に事ふる所も又情欲の父母なり。雪中に笋を求むるは性命の父母に事ふるの心にあらず。舜はもとめ給はじ。只性命の父母に事へて後、孝をもつて天下を治むべし。みづから心を盡し性命明かなる時、初めて父母の性命に事ふることを得べし。愛敬盡レ於レ事レ親。而德教加レ於ニ百姓一刑ニ於四海一といふものなり。如レ此なれば天下皆正人となる。天下正人となる時は、天下の人の悅ぶ心を得て其父母につかへ給ふなり。先祖天地大虛共に其悅ぶ心をうけ給ふ。此時に至りて天地の氣初て至極の和あり。鳳凰麒麟も此大和の氣中に生じ。神龍靈龜も海中に生ず。風雨民の願ひに應じ、五穀大にみのり、草木生長して留滯なし。鳥獸魚蟲みな其生を遂げ、山鬼の魑魅魍魎皆吉神に化し。蛇蝎みな龍に隨ひ、虎狼深山に遁れかくる。出ればかならず弓矢にあたる。天下の沈魂滯魄一時に消えて跡なし。惡鬼邪氣よるべき所なければ、こと〴〵く亡びて殘なし。天災地妖生ずべき所なし。人爲

孟宗―楚國先賢傳に見ゆ

扨庶人の一等と云ふは、農が本にて工商は農を助るものなり。工とは工匠ばかりにあらず。鍛冶白銀や塗師屋小細工師、すべて何にても職をする者を云ふ。商はあき人にて、居ながらあきなひするも、國々ありきて有る所の物を無き所へ通ずるも、手に所作なくて、金銀をもつて世を渡る分は、おしなべて商なり。まづ人の初は農なり。農の秀たる者に、誰とり立つるとなく、すべて物の談合をし指圖をうくれば事調りぬる故に、其人の農事をば寄合せてつとめ、惣の裁判のために撰びのけたるが士の初なり。在々所々ありて後、又秀たるものに惣の士が談合し、ひきまはされて諸侯出來ぬ。又諸侯の内にて大に秀たる有り。其徳四方へきこえ、おの〳〵不レ及所は此人より道理出る故に、寄合てつがねとし天子と仰ぎたるものなり。扨士の中より公卿大夫と云ふものを立て、農のうちより工商を出して、天下の萬事備り、天地の五行に配して、五倫五等出來たるなり。

一學友問。孝を以て天下を治むといへり。しからば孟宗の至孝なるも、天子とせば堯

大學小學のつかさを命じ給ふことなれば、初より人に敎へんとて、學問する人もなく、人に敎ふる家とてもなき道理なり。士といふものは小身にて德行の廣き者なれば、上下通用の位にて、上は天子諸侯卿大夫の師と成り、下は農工商を敎へて治むるものにて、秀れば諸侯公卿ともなり、くだれば庶人ともなり。才德ありながら隱居して、庶人と同じく居るを處士といへり。大道を任じて志大なるものは士なり。公卿諸侯の本地なる故に、賢なれば公卿諸侯もくだつて、士を敬し給ひぬ。德と年と位との三を天下の達尊といふ。朝廷にして上下の禮のある所にては位を尊び、常の交には年を尊び、世をたすけ人に長たるの道においては德を尊ぶ。公侯は士の賢をうやまひ給ひ、士は公侯の位をうやまひ、たがひに相敬するの義なり。志同じく心を友とする時は双方の尊卑相忘るゝ義もあり。道を知らざる人は、我本地を忘れて一旦の浮べる富貴に奢りて士を慢れり。然れば才德あるものは隱れて不出。中人以下の者はいやめになり心から下輩に成りて、天下によき士出來ざるものなり。

三達尊―孟子に見ゆ

いやめ―憂へ顏を云ふ

それ者—其道を傳ふる者の義

り。國々の町奉行は大かた下士より出でぬ。中士にして兼ぬるものあり。少しづつの物奉行は、多くは下士より出づるあり。それよりも低きは庶人の官にあるの類もあり。中小姓と云ふには、大身の子も小身の子もあれば下士の内なり。步士は庶人の官にあるたぐひなり。物よみ醫者などは、町よりおこりたるは庶人の官にあるたぐひとも云ふべし。町醫者は庶人の內、工商のたぐひたるべし。禰宜などは、庶人の官にあるたぐひなり。又神職に高官もあり。天文道樂道醫業などは、代々其家ありてなすもよし。心を用ひてくはしきが故なり。しかればとて家と成りて人のするを防ぐはひがごとなり。尤もたゞ人にても其道に得たる人出來れば、其家へ敎ふることあり。たゞ道學のことばかり、史官物よみの外には、それ者といふもの其家と云ふものは無き理なり。其ゆゑは五等の人倫のあまねく學んで、人々の業において受用することなり。人幼年には學び壯年には行ひ老いて敎ふるは古今の常なり。誰道者とあることはなく、親は子の師たるが如し。其同じき人の內を以て、上より

士師—獄官

卿大夫は小身なれども、人の臣として君の命をつたへ國政にあづかる故に、天子の老諸侯の老共に大臣とも老臣ともいふは、行事のかはりなきゆゑなり。一國にても、諸侯は其國に君として役儀なければ人君の行あり。臣なれども天子も客の禮をもつて待ち給へり。今日本にても諸大名の參府の送迎には、老中を御使としておもくもてなさるゝと同前なり。日本王代のむかし、上代と中世と時勢のかはりしを考へられず、此禮を行はれざりし故に、天下を失ひ給ひしなり。聖人の掟に少しも違ふことあれば長久ならざるものなり。士一等とは其内ごとにしなぐ〵多しといへども、德行の同じき故なり。番頭幷に一人立の歷々を上士と云ふべし。物頭、與頭、組付にても千石以上の人は中士の品なるべし。千石以下の平士は下士なるべし。所司代は武官なり、中夏の士師なり。代官は農に兵ありし昔は上士の役儀たるべし。日本の今は兵が農をはなれし故に下士の役となり、或は庶人の官にあるものゝ役とも成りぬ。江戸大阪の町奉行は中士の位にて、威勢は今の上士よりもおもきものな

終には云々―一種の虚飾具となるとなり

附庸―諸侯に附屬する小國を謂ふ

者と云ふ者出來る時は、はや五等の人は道を離るゝ處あり。終には道學へそなへ物と成りて天下國家の用をなさず。其後道者佛者とて人倫の外に道を說いて渡世する者多く爭ひ興りたるは尤もなり。孔子此萠を見給ひし故に、五等の孝を發明し給ふなり。萬歲道學の鑑なり、此鑑に違ふ人は堯舜の徒にあらざる事明けし。問。五等は數くなき事にて侍れば、古とても五等ばかりにては用達すまじき事と思はれ侍り。曰。大綱は五等なれども。其一等々々に類ひ多し。天子ばかり只一人にておはします、日本の今にては又大樹一人なり。諸侯一等と雖も、公侯伯子男の五品あり。外に又附庸の國あり。日本にても名こそ違ひたれ此品有り。四五十萬石の以上は公侯のごとく、三十萬石の少し上下は伯のごとく、十五萬石の上下は子男の如く、十萬石以下は附庸のごとし。是諸侯一等の内の品あり。卿大夫一等とは、其德行役儀の道理同じき故に、大小高下おしなべて一等といへり。其内の品をいへば、天子の公卿大夫は、公卿は公侯になぞらへ、大夫は伯になぞらへ、元士は子男になぞらふ。諸侯の

き萠有り。孔門の學者は皆人々の本産あり。多くは日本の地士と云ふが如くにて、古風の田地の家督あり。學は正心修身の志にて學ぶものなり。出てつかふる人も國用のつとめあり。役儀なく本産なくして、道を說いて人に養はるゝ者はなかりしかども、堯舜三王の盛なりし時とはかはりて、何となく五等の人倫ばかりの樣にはなき勢あり。孔子の時を得給はずして天下を周流し給ふも、古になき風なり。聖人にして時の變を行ひ給へども、後世の人これを似せて一二變する時は、五等の人倫の外に、道學をもつて家を建て產業とする者出來る勢なり。孔子は方々にて小官をも辭せずして役儀をつとめ給ひき。孟子に至りては、はや師とあがめられて方々の馳走あり。官祿なく產業なし。德の衰へたるなり。然れども孟子は大賢にて、孔子に繼立ちて天運の變を行ひし人なれば、其身においては云ふべきやうなし。後世に至りて、孟子の德なき人孟子の風にならふ時は、まさしく道學を說いて產業とするになれり。たとひ其人私欲のけがれなく道を行ふとても、五等の人倫を離れて道

井手―井堰を本義とすれども此處には汎く用水路を云へり

て大學の心法を受用し給へば、愚なるも明かに柔なるも剛く、此身ながら神化變通して大賢の位に至り給へば、天下の事において何事も聖人にたがふ事なし。

一 心友問二孝經之大綱一。答曰孝經の心法は、正レ心修レ身、天命の分を安んじて、人々處る所の位に隨て道を行ふなり。天の人を生ずる事物あれば則あり。天子の富貴にはおのづから天子の則あり。公侯伯子男おのく則あり。卿大夫士其道あり。農工商其務あり。其行ふ所の大小は各別なれども、孝の心法はかはりなし。大河の水の流れて所に隨て象をなすが如し。方々にて田地の爲に井手をつくれば、其井手ほどに流るゝが如し。ひきゝに就いて晝夜をとゞめず、外溫にして內明かなるの性はかはるなし。君子の象なり。小人の心法は外を照して內昏し。人の非をかぞへて己が不善を改めず。燈臺のもとくらきが如し。天下の人みな內明かにして己が不足を知り、外溫にして人の非をとがめず。天下の人みな我に勝る所ある事を知るは、孝の象のごとく相たすけて天下平なるべし。孔子の時すでに異端のおこるべ

れり。あやまりて瓜の根をたつ。曾皙怒つて大杖をあげて曾子を打つ。曾子たえて地に伏たり。狂者なればすてゝ家に入りぬ。しばらく有りて曾子よみがへれり。父の心許なく思ひ給はむ事をはかりて、曾皙の前に跪づき、「さきに不敬の罪あり、大人力を用ひて教へ給ふ」と云ひて我方に歸り、琴を彈じ詩を詠じて、父に痛みなき事を知らしめたり。聞人涙を流し感じあへり。門人悦んで夫子に告たり。孔子聞し召して、「吾道の學者にあらず、門に至る事なかれ」と。侍者驚きて其故を問ふ。孔子曰。「我人に孝を教ふるに、大舜を師とせずと云ふことなし。舜は父の小杖を持ちてうつ時は、うたれて退き給ふ。大杖を持ちて追ふ時は、其あたりに近付給はず。父をして人を殺すの罪にいたらしめじとなり。今曾子幸によみがへりたればこそあれ、若其まゝに死にたらば、曾皙は孝子を殺すの罪をまぬかれじ。何ぞ大杖を見て早く退かざるや。心を用ひざるの甚しきなり」と。門人曾子に告げたり。曾子趨りて其罪を謝す。曾子は生得孝行なり。しかれども氣質魯鈍木訥なる所ありき。聖師につかへ

曾子—曾子名は參父に事へて至孝なり後聖門道統の傳を得たる人

凡夫もうち見たる所は判ちがたし。明者の目には黑白の如く判るべき事なれども、大不孝か大惡人にてだにあらねば、夏山の綠は、夏木冬木のわかちしらぬ目には、たゞ青山とばかり見るなり。大難にあひ大變に逢ひては、凡人と君子とのわかち大にちがひあり。孝子の數にいへる聖賢は、いづれも遭ふ所の境界常ならぬ所ありし故にて侍り。問。人の行は孝より大なるはなしと云へり。しかるに孝行は聖賢にも劣らずして、聖賢の品には洩れたる人侍るはいかゞ。曰。それは氣質の美にて侍り。いまだ大道を見ずして入德の學は知らざれども、氣質に木氣の精を多く受けて生れぬれば、木氣の神は仁なるが故に、慈孝懇切にして、俗に小心とも謂ふものにて孝行なるものなり。其方の氣質にあつき程、又他の靈明うすければ、孝行なる程にとて擧げ用ひては、國家の政道などには不才なるが多く侍り。此人賢聖の師に逢ひて心法を受用せらるれば、それは又常の人にちがひ、各別入德の功はやく、他の不足なる所も增す事やすく侍り。曾子の如き是なり。むかし、曾子父のために瓜をくさぎ

王子も時の弊によつて自反愼獨の功に重し。窮理の學なきにあらず。愚自反愼獨の功の、内に向つて受用と成る事は、陽明の良智の發起に取り、惑を辨ふるの事は、朱子窮理の學に據り侍り。朱王の世學者のまどひ異なり、地を易へば同じかるべし。窮理とて事々物々の理と空に言ひては人のうたがひあり、たゞ學者の心の惑ある所の事物によつて其理を窮むるなり。されば是は初學の時の事なり。大意心に知得すれば、いまだ不辨不知のこと、千萬の事物前に來るといへども、惑ふべき事なし。異學の一代心を盡す悟りといふものは、聖學においては力をもいれず心をも勞せずして、遊びながら得ることとなり。

一 學友問云。同じく聖賢にて侍れば、何れも孝行ならざる事はあるまじきに、大舜文王曾子閔子の數人ばかり孝子の數に入り侍る事はいかゞ。答云。歳寒くして松柏の凋におくるゝことを知り侍りぬ。平生無事の時には、聖賢の善行殊にめづらしく云ふべき樣なし。聖賢の道を行ひ給ふは、人の無病の時と同じ理にて常なり。其時は

空に—抽象的に

閔子—閔子名は損字は子騫至孝あり家求に出づ

顔子治國—論語衛靈公篇に顔淵邦を爲むるを問ふ子の曰く夏の時を行ひ殷の輅に乘り周の冕を服し云々と

一片の浮雲の大虚を過るが如し。それだに平人にありては擧ぐべきほどの善なれども、顔子においては自然の躰にあらざる故に、其善念を須臾もとゞめず、遠からずして復するなり。問。心上だに如ㇾ此ならば、視聽言動の末の事を告げ給ふ事はいかが。答。顔子高明廣遠の事においては聖人に同じ、今さら告げ給ふべきにあらず。平人より聖人に至るものは、本を務むるに急なり。末の事には心もつかず、殘りある事あり。仁は天地万物をもつて一體とす、殘すべきものなし。是によつて末の事を告げ給へり。顔子治國の論において、輅冕等を以てこたへ給ふ所にて知るべし。問。先生の論は陽明子の傳に似たり。朱子王子格致においては黑白の違ある事はいかゞ。答。愚は朱子にも取らず陽明にも取らず、たゞ古の聖人に取りて用ひ侍るなり。道統の傳の由り來ること朱王共に同じ。其言は時によつて發するなるべし。其眞においては符節を合せたるが如し。又朱王までも各別にあらず。朱子は時の弊を矯むべきがために、理を窮め惑を辨ふるの上に重し。自反愼獨の功なきにあらず

信美大聖神―人品の五等

孔曾の傳の心を述べて經一章とし給ふ時、格物致知といへり。問。視聽言動を云ひて、肝要の思を殘し給ふことはいかゞ。答。四時と云ひて土用をいはず、元亨利貞と云ひて誠をいはず、仁義禮智と云ひて信をいはず。四に應じてはなれざるものは、いはずして其内に有り。視聽言動の四のもの、思を主とせずと云ふことなし。其上顏子には思の格は不レ用ことあり。中人以下の學は、善を思ひ善を行ひて惡を思ひ惡をなすにかふるなり。心思躬行ともに善のみにして惡なきを善人と云ふ。凡俗を出づるの初なり。是より信美大聖神にすゝむべし。顏子は既に大人なり。惡念の靈臺に往來せざるのみならず、善念も亦往來せず。何の思の格あらんや。しかれども三月仁に違はざるの語あり。春夏秋冬みな三月にして相易ふるものなれば、三月といへば一年中の事なり。年月日時を經て終に仁に違ふ事なし。然れども三月違はずと云ふものは、たまさかに暫くの間善念の萠あることあり。思ふ事もなくする事もなく、寂然不動にして感じて通ずる聖人の心地には、少し及ばざる事あり。然れどもたゞ

執中―書經に咨爾舜天の曆數爾が躬に在り允に其中を執れ云々とあるを謂ふ

かり給ふ事なし。若しいかり給へば、天理存し人欲亡び、善人あらはれ惡人退き、雷雨の動くがごとし。惡人おそれて其逆心の肝を消すなり。怒のみにもあらず、悲哀といへども吾人にありて聖人に近きことあり。五百歳千歳昔の事、漢大倭となく、ものの哀なる事を聞き、又は道理の至極を聞いては、涙しきりにしてとゞむべからず。一體の心眞實惻怛の情におこるといへども、本心の靈臺において少しも損益なし。平人の心はかへりて常よりも惡念妄思至らずして善に近きことあり。私欲の交りなきが故なり。

一　學友問。格物致知の心法は、古昔の經にもなく、孔聖の語にも見え侍らず。子思初めて發明し給ひたるか。答曰。易の六十四卦、其位に應じて格致の心法あらずと云ふことなし。易簡明白にいづれへも通へる樣に、初めてかゝげ出し給ひし事は、堯の舜に傳へ給ふ執レ中の心法なり。孔子の顏子に傳へ給ふ非禮視聽言動すること勿れと、是みな格物致知の義なり。曾子の一貫を忠恕とやはらげ給ふごとく、子思又

長田云々—長田忠致が己を頼り來りたる舊主義朝を殺したる事

氣いる—氣の苛苛と苛立つを云ふ

ども、其分にては今日の受用と成りがたくして、只聖賢の噂ばかりなり。今日吾人にありても、聖人の怒に同じきことあり。むかし物語を聞きても、長田が義朝をたばかり鎌田を殺したる所にては、誰もにくき心生じいかり發して、其時に居ましかば、一刀切りたく思ふなり。又今の時にても、他に不義無道なるものあれば、怒りにくむ心生じぬ。しかれども此怒は、性命の正にもとづきて私欲のまじはりなき故に、たゞ氣の廣大剛強になりたるばかりにて、相火のたかぶりなく、内心常よりも清明なり。是一は各我等ごときといへども、聖人の心地に近く侍るなり。是を怒にうつらずと云ふ。聖人は今日の交接といへども私欲まじはりなく、萬事みな性命の上より發する故に如此。吾人は他人の上には如此明かなれども、身の交接する所においては私欲まじはり、故に其怒る所は道理にても、相火たかぶり内心ふすほりくらく成る故に、氣いれてしどまり、言語ついでをあやまり、平復の時後悔おほし。是を怒にうつるといへり。文王一たびいかり給ひて天下の民安し。聖人はい

怒を遷さず　論語に顔子は怒を遷さず過を貳びせずとあり

すゝまずして後々には退屈せり、惑を辨へて眞智照りぬれば、今日の凡位をぬける故に、只今晝夜におとづるゝ間思雜慮の妄は、一度に十も二十も亡失す。色々の妄はみな昧き所にあつまる事なり。太陽東に出で給へば、夜中に出でありきつる狐狸、蚊虫のたぐひまで、皆何方へ行くやらん無きが如し。こゝに歩士あらんに、歩行の者にて其風の卑俗なるを悟り、神妙にせんと思はゞ苦勞にして、やゝもせば舊習出でぬべし。馬に乘るほどの身上に成りては、ものと歩行の者の風俗は思はず知らずなくならん。我身の人がら如何と省みて、能くみづからの凡位を知り、時々に惑をわきまへ、心法の受用間斷なければ、段々に其位をぬけて、終に德に入り君子の地位に及ぶものなり。是を氣質變化ともいへり。問云。怒を遷さずとは、こゝの者にいかれども、其氣かしこの者に加へず。平人は一人に怒りては終日其氣とけず。顏子のいかりは其不義其惡逆にありて、人にあらざるゆゑに其怒の氣うつさず、鑑の美を照し惡を照すごとく、去りて跡なきにて侍るや。答。尤も其通りにては侍れ

盤上雪—禪家の公案に亦之あり

て過を二度せざるの工夫は、ひそかに人に聞侍り。心なくして道にはなるゝを過といひ、心ありて過を遂ぐるを惡といふ。思はずしらず心上に一念道をはなれぬるを過とす。既に是を知れば少しも心思にとゞめおかず速にかちさること、たとへば大なる爐火の中へ一點の雪をちらすが如し。火の上までおとしつけず、火氣を以て消しさるなり。少しにても道をはなるゝの念慮をしりて不レ去ば、過をふたたびするなり。二度すれば惡に近し。吾人いまだ氣質を變化せず、其平人の位をぬけざる間は、其心地の位ほどなる間思雜慮は、晝夜に幾度もきざす事なり。たとひ百度萠すとも、よく一念獨知の上におぼえさとりて速かにかちさり、知りて後暫くも滯留なきを受用とす。これを遠からずして復すともいふべし。

一問。聖學の心法此外はあるべからず。如レ此間斷なく受用せば、終に君子の地位にも企て及びなんか。答云。これは尊德性の工夫なり。こゝにばかりとゞまり居て、惑をわきまふる學問なくしては今日の常人の位をぬけがたし。然るゆゑに右の工夫も

するにあらず。心の妙にて自然と斯く變化するなり。其中おのづから本末淺深の天則あり。兄につかふる事父につかふるが如し。弟をめぐむこと子を愛するが如し。兄の惠と弟の悌とを合せて長幼有序といふ。朋友は眞實無妄の天道を父母としたる兄弟なれば、實なきものは朋友にあらず。是をもつて朋友有信といふなり。一人の人あり、子に逢ひては父とよばれ、父においては子といひ、君の前には臣と名付、家臣は又君と稱するが如し。畢竟一人の人なれども、逢ふにしたがつて名かはれり。本心の一德なれども、位によりて神通變化して其義極りなし。

一學士ありて問うて云ふ。顏子の如くあやまちをふたゝびせざる事は、大賢の心地ならではなるまじき事なり。何とぞ受用の道も侍るべきや。答て曰はく。まことに甲にあやまつ事を乙にまたせざる事は、後世の學者の及び難き所なり。亞聖の地位にては事々左樣にもあるべき事なり。吾人と雖も外ざまに心得ちがひたる過は、大に悔いさとりて其非を知りたる以後は、二度せざる事あり。自己今日の受用におい

孩提―二三歳の幼兒の義

のなし、其親を敬するの心は、天下において慢りかろしむべきものなし。愛敬親につかふる一心の上に盡して、天地同根萬物一體の性命明かなり。よく一日も私欲亡びて天理存する時は、其大をたづぬるに外なく、其小を見るに內なし。纔に初めて仁をいふべし。義は孝の勇なり。禮は孝の品節なり。智は孝の神明なり。信は孝の實なり。赤子孩提の時、孝の理初めて親を愛するに發出す。花の纔にほころびんとする如し。其長ずるに及んで子の心に親を尊ぶの敬生ず。花の淸香のごとし。此愛敬の德親に初めてあらはるゝ故に、本分の名をあらためず。親につかふる道を孝と云ふ。母につかへては愛あらはれ敬存す。子においては愛事を用ひて敬內に伏す。是を父の慈と云ふ。父の慈と子の孝とを合せて父子有ㇾ親といふ。此孝德君につかへては敬外にして愛內なり。臣においては愛敬ならび伏して威嚴備はり仁政行はる。君の仁と臣の忠とを合せて君臣有ㇾ義といふ。妻においては愛みちびき敬存す。夫に於ては敬事を用ひて愛存す。夫の和義と妻の貞順を合せて夫婦有ㇾ別といふ。心ありて如ㇾ此

六子―歲時。日月星辰の六物をいふ歟

愛敬原―振假名本に從へり

な孝より生ぜり。春夏秋冬風雷雨露、孝にあらざるはなし。仁義禮智は孝の條理なり。五典十義は孝の時なり。神理の含蓄のところを孝とす。言語を以て名付いふべからず。しひて象を取りて孝といふ。孝の字老子の二を合せて作れり。文字の傍偏となす時には、畫をはぶきしなり。天地未だひらけざる大虛の時には、理を老とし氣を子とす。天地すでに開けては、天を老とし地を子とす。乾坤を老とし六子を子とす。日を老とし月を子とす。易の字日月を合せて作れり。日月老子其義一なり。易と孝經とへだてなき道理なり。山を老とし川を子とす。中國を老とし東夷南蠻西戎北狄を子とす。君を老とし臣を子とす。夫を老とし婦を子とす。德性の感通においても、仁は老なり愛は子なり。此理を以て萬事萬物に推してみれば、孝の理なくして生ずるものなし。此神理の我が心に有するものを取つて受用とすれば愛敬なり。上より見くだせば老夫の幼子を携へたる體にして愛の象なり。下より見あぐれば子の老を戴きたる體にして敬の象なり。其親を愛するの心は天下においてにくむべきも

中和云々ー中庸第一章に此の文出でたり

近くして旨遠きものは善言なりとは、孝經のたぐひなり。易は天地によつて道德を發明し給ふ故に、其語勢幽遠なり。孝經は人倫において道德を敎へ給ふ故に、其語勢親切なり。爰をもつてよく易をみる者は、近く身に取つて親切に受用し、幽遠の事となさず。よく孝經を學ぶものは、詞の近きによつて幽深玄遠の旨をうしなはず、中和をいたして天地位し萬物育するの極功、神聖の能事こゝにある事を知れり。孝經は句毎に心をとゞむべからず。尤もとゞむべき所もあれども、先は大抵に見樣あり。易は勿論大意あれども、句ごとに窮りなき道理あり。畢竟易をば近く見、孝經をば高く見るを習とす。いかんとなれば、易は天道なり、近く人道に合すべし。孝經は人道なり、遠く天道に合すべし。程子の云はく。「易因二爻象一論二變化一。因二變化一論レ神。因レ神論レ人。因レ人論二德行一。大體通二論易道一、而終レ於二默而成一レ之不レ言而信存上乎二德行一」このの故に易は畢竟人の德行を成すに歸するなり。人の德行は孝より大なるはなし。

一　心友問二孝之心法一。答曰。孝は天地未畫の前になり、大虛の神道なり。天地人萬物み

集義和書　卷第八

○義論之一

一心友問。論語の教は仁を主とし、大學の教は知を主とする事は何ぞや。答へて曰はく。論語は聖人いまして直に教給ふ故に、仁を主とし給ふ。仁は德の本なればなり。大學は聖人既に去り給ひ、後聖世に出で給ふことありがたかるべき前知あるにより て、知を主とし給へり。智は德の神明にして、性の先見するものなり。天下の惑を辨て人倫を明かにする書なれば、知を主宰として自反愼獨の實體とす。聖人いまさざる時問學する人は、大學を入德の門とし論語を入德の室とす。

一心友問。貴老易と孝經とを並べ給へり。易は玄妙深遠廣大高明なる書なり。孝經は童子の始てならひまなぶ書の樣にいへり、されば疑ひなき事あたはず。答へて云ふ。言

おしで―一種の印章の稱

とゝのひがたし☱☲の卦を見たまへば、君子の道長じ小人の道亡びなんとす、明夬の意あり。是において文字を作りて善悪邪正を明にし、符節を作りて眞僞をたゞしたまひしかば、小人の邪曲かくるゝ處なくして決し去る。書は文字を云ふ。契はおしでなどの類なり。是文明の始なり。君子澤の天にのぼる象を見たまひて、祿をほどこし下に及ぼさんとす。上に恩澤ある時は、必ず下みな是にうるほふものなり。恩澤の下にくだることは、仁者を富ましめて國郡の上に置くにあり。澤の天にのぼるは、民の父母たるべき仁者の君位にあがり、恩澤の下にくだる象なり。水は下るものなれば、天にのぼる時は必ず下にくだる義なり。此時必ず小人のさまたげあり。故に明夬の義ありて、明かに邪曲をたゞし決し去るなり。

禮云々ー禮記に滅國を興し絶世を繼ぐと云へる類

に生時は人に事ふる禮をなし、死時は鬼に事ふる禮をなすなり。時處位の至善を不レ知して、有無の分に過ぎて葬をなすを以て、厚きに過ぐると心得たるは愚なり。愚者は何ぞ大事に當るに足るべきや。夫禮は繼ぐべき事をなし、傳ふべき事をなすと孔子ものたまへり。今の學者の厚きに過ぐると云ふものは、後世に傳ふべからず子孫繼ぐべからず。變に通ぜざれば民人禮法に退屈す。少しきの哀情の誠までも、事の調ひがたきに失してうすくなるなり。孔子、喪はをさめんよりは戚めと宣ひし聖言には大にたがへり。其本を不レ知して末にかゝはるが故なり。終には西戎の佛法をひき入れて、中國の道おとろへたるも此なづみによつてなり。

一 上古結レ縄而治。後世聖人。易レ之以二書契一百官以治。萬民以察。蓋取二諸夬一。

上世は人淳に事簡なりしかば、國家天下の政事において、大なる事には大縄を結ひておきてとし、小しきなる事には小縄を結ひて定をなしたり。是にて事たりぬ。後世は風俗次第に薄く事繁くなりて、欺き詐ること興りたる故に、縄の政事にては事

は今まで住みたる古屋なれば、うちすてても可なり。親の住みたる跡とて、其上にかくの如くす。是を以て其時には厚きに過ぎたると云へり。後世は其本の心と時とを考へず、次第に念を入れすぎかざりを加へて、分限に過ぎてなりがたき事をつくすを以て、厚きに過ぐると心得たり。大なるあやまりなり。又生を養ふは大事に當るに不レ足、死を送りて大事に當るに足ると云ふも、葬の厚きを云ふにはあらず。凡夫の心は眼前ばかりにて、無レ聲無レ臭の理を不レ知ゆゑに、何も無きところに怠惰する者なり、生ける親を目の前にて疏にする者はまれなり。大方はよく養ふものなれば、其生付よくて少しき人に過ぎたるとても大事には當りがたし。其至誠の徳はいまだ見えざるなり。親死して其鬼神に事ふること、誠あり敬あり、幽明一貫なる人ならば君子と云ふものなり。しからば國家天下の大事を頼みあづけてもたしかならんとなり。三日三月期三年などの作法は、皆鬼神に事ふる次第なり。親の精神躰をはなれて氣色みえず音聲きこえざる故に、別をかなしめども、實は死生不二なり。故

神女—神女は即ち織女なり

ける間の養とし、死せる時は我身をうりて葬をなせり。全躰の精神親に奉じて私の願なし。人のなりがたき孝なり。故に至誠神を感ぜしめて、天道神女をあたへ身をうけしむ。これ其志を好したまへばなり。然れども其行においては情欲の父母に事ふるに近し。貧ならば貧ほどに葬をなさばこそ、親の心もこゝろよかるべけれ。身をうりて葬るは分の義に過ぎたり。葬に身をうりたるにて、先祖より田地家財等を、こと〴〵く平生親の養の爲に賣り盡しだる處みえたり。是又親の性命明ならば大にいたましき事なり。たゞ今日情欲の父母を樂ましめるのみなり。これ厚きに過ぐと云ふの、主意と時とをわきまへざればなり。古者始めて棺を作りたる時は、山林多かりしかば、目前の木を伐りてうちわり、箱にさし、死者を入れたるばかりなり。何の造作もなき事なりき。それをだに厚きに過ぐると云ひしは、其時までは質直にして道理のまゝなりしかば、死者は土に歸することわりにて、其まゝ地に葬しに、箱に入るゝは厚きに過ぐるとの義なり。親の親たるは鬼神なり。空しきから

大舜云々―此の事亦孟子に見えたり

まひ、禮はおごりて備へんよりは、儉にして敬のあるをよしとす。喪は事物を修めとゝのへんよりは、哀戚の情あるをよしとすと宣へり。君子の天下を以て其親に儉せざることは、大舜の父、若無道をなしたる時、これを助けんが爲ならば、天下を捨てたまふ事やぶれたるわらぐつを棄つるが如くかろくしたまひて、負ひてのがれたまはんとの主意なり。天下をだに親の爲にはすつること易し。況んや其外の物をや。然れども親の養の爲、葬の爲とて、家の有無をはからず産業をやぶり家人を苦しめ、祭祀を絶つをもかへりみずと云ふにはあらず。古人性命の父母に事へたる者あり、情欲の父母に事ふる者あり。それ董永が至孝はまことに凡情の及び難き處なり。凡夫は幼少なる時ばかり父母をしたふ。成人にしたがひて妻子を愛し財寶を求め、君に事へて位祿を願ひ、朋友に外聞を思ひより、種々の名利胸中によこたはりて、父母を思ふ心日々にうすし。生を養ふも死を送るも、愛敬と外聞と共に相交れり。然るに董永は親の養をゆたかにせんが爲に、妻を迎へず一家の産を盡して生

張南軒―張栻字は敬夫宋の人
都氏―明の都穆の事か穆は金薤琳琅集の著者
董永―身を賣りし事搜神記に見ゆ十訓抄にも出でたり
悉く書を―孟子盡心下篇に見ゆ
孔子の語―論語八佾篇に見ゆ

一或問。南軒張氏曰。君子不以天下倹其親。於此而過无害也。丹陽都氏曰。臼杵棺槨。所以使民養生送死無憾。所以依於人者。過厚也。然養生不足以當大事。故取小過之義而已。送死足以當大事。故取大過之義焉。

かくの如くなれば、不及ところをも調へて葬を厚くすべき義なり。董永が身を賣りて、一生人のやつことなりて親を厚く葬りたるは、まことに天下を以て其親に倹せざるなり。大事に當るに足るべきか。云ふ。書には主意あり時あり、爲にすることあり。言のみを信ずる者はつひえありて益すくなし。ことごとくに書を信ぜは書なきにはしかじと云へり。其上言には聖賢といへども不同ものあり。泥むときは相難じ相爭ふに至るべし。同じきものは仁義なり。夫葬祭は家の有無にかなふと云へり。生ける時も飲食、衣服、宮室、器物皆有無に從ふ者なり、何ぞ死のみ有無にかなはしめざるべきや。小過大過は卦のかさなりを見て象をとれり、小大の文字にかかるにあらず。故に孔子も禮の法にかゝはりて、誠のうすくならん事をかなしみた

如し。この精神を明には人といひ幽には鬼神と云ふ。君子の心は人鬼幽明一貫にしてへだてなし。是故に死に事ふること生に事ふるが如くするなり。我身の死したるからは谷淵に投げすてんとも可なり。莊子、「我死なば野にすてよ、天地を以て棺椁とせん」と云ひしも此心なり。然れども上古には生るゝ時も屋なかりしかば、死しても棺なし。後世は生ける時屋あり。然るゆゑに死して則ち土に入ること、理の常とは云ひながら、孝子の心において不レ忍ところあり。空しきからといへども、今まで父母としつかへたる人の形なれば、おろそかにはもてなしがたし。生きて屋室あれば、死しても棺あるべき義なり。是又生に事ふるが如きの心なり。空きからまでをも衣服せしめ、棺椁を作りて厚くするは、孝子の心の厚きに過ぐる大過の義なり。又☱☴の象を見たまへば、澤を上にし木を下にす。☴は木なり。又入るなり。澤は土なり、木を土に入るゝの義なり。是によりて棺椁の制はじまりぬ。又☱は悦なり。親のからまでを木にいれて土に帰す。孝子の心安堵するは悦の義なり。

不封不樹—土を盛るを封とす土を加へて塚上に植樹するなり

大に莊にして、禽獸と異ること遠し、亦大莊の義なり。

一古之葬者。厚衣ㇾ之以ㇾ薪。葬二之中野一。不ㇾ封不ㇾ樹。喪期無ㇾ數。後世聖人。易ㇾ之以二棺椁一。蓋取二諸大過一。

上世は棺椁もなく、つかをつき木を植ゑ石を立つることもなく、亦喪に居ることもなし。人死すれば廣野の人なき處におくり、其上に薪を積みて覆ひたるばかりなり。程なく朽失せて跡なし。精氣物となり遊魂變をなすことわりにて、人死すれば魂氣はもとより天にゆき、魄躰は土に歸する常の理にしたがへるのみ。別をなげく事も、哀情のかぎり程なげくのみなり。生死は陰陽晝夜の道にして、天理の自然なれば惡むべからず。たゞ別を悲しめるのみ。其哀情は人によりて厚薄多少あり。上世の人はかざる心なき故に、我心の誠ほどにつくせり。故に喪の期數なかりしなり。夫死に事ふること生に事ふるが如くする本意は、むなしき骸を云ふにあらず。吾も精神こそ吾なれ、親も精神こそ親なれ、精神去る時は、形は住みあらしたる古屋の

どやなどの樣にして居たるときこえたり。上古の柴の菴是なり。古歌に、

ひきよせてむすべは柴のいほりにて解くればもとの野原なりけり

と詠しも、むかしを聞傳へていへるか。亦山中に住居する者は、冬は岩のほらなど片かげにかたよりて、今の岩屋などの樣にして住み、夏は木の枝のよき處に、又木竹をならべ、床のごとくして、上をおほひ、鳥の巢のやうにして木の上に住みたり。上古の人は無病なりし故に、穴居しても濕氣あたらず。野處巢居しても風雨にもいたまざれども、次第に世の中自由になり、氣血よわく病氣生じて、穴居しては濕氣をいたみ、野處しては風雨にをかさる。故に其時の聖人民居をなさんと思ひ給ひ☱卦の象を見たまへば、雷雨うごいてみちみつれども、乾は下に安んじ、上の二陰雙べわかれてくだる時は、下の一陽これをたもつ。是において一陽を棟にかたどりてさしあげ、上の二陰をやねにかたどりて双べふきくだし、乾の三陽の、下にすくやかに立ちたるを柱にかたどり、始めて宮室の製を作りたまふ。是において人居

いなぐろ―稲倉にて稲などを假に収納する小舍の義か

も木をけづりて作れるは、弓矢にたよりよき木ありたるなるべし。萬事物の始は質素なる物なり。夫そむいて用をなす事は弓矢のみにあらず。睽は乖異の義なり。「天地睽而其事同也。男女睽而其志通也」と云へり。亦「上火下澤睽、君子以同而異」と云へり。君子の俗に交ること、形同じく心異なり。是睽の卦の火澤、體を合せて性同じからざるが如し。

一 上古穴居而野處。後世聖人易之以宮室。上棟下宇。以待風雨。蓋取諸大莊。上世は人の家屋なし。冬は穴に棲めり。今山の南日向よき所に石をたゝみあげ、外に土をおき、塚のやうにして中虚なるものあり。是日本上古の穴居なるべし。上世は人の氣血健にして力強かりしと見えたり。俗には昔氷の雨降りたる時、此つか穴に入りたるなどいへども、其始確ならず。只穴居とみえたり。夏は野處すと云へり、しば土の上に茅などを敷て居たるなるべし。柴木の長きを四方よりひきよせて、上をゆひ中を虚にし、中の柴をかりぬき、上には茅などをかけ、今のいなぐろ雉子

辻がため―幕政時代に市民の群集する時は警固を諸方に設けて辻々を固めしめたり

まがりたる方へ不レ張して、そりたるかたより引かへして張る。みなそむいて用をなすの義なり。重門撃柝は小盗暴人などの防なり。大賊或は東夷南蠻西戎北狄などの中國をみだらん爲に來り、又は諸侯の叛逆などには、弓矢の備なくては防ぎがたし。弓矢の武具ありても、威なき時は恐るゝことなし。武具を備へ武事をならはし、武備嚴重にして威ある時は、四方是をのぞんで恐れ、をかすべきの心おこらず。文事あるものは必す武備あり。文事は仁政を行ひて士民をなで安んずるの事なり。禮樂制度其中にあり。武備は文事の美をとげん爲に國天下の警固なり。今神事の大祭には辻がためのあるが如し。聖人は德仁愛にして神武の威あり。其上に文武の業車の兩輪の如く備りておこたりなし。故に天下の人恐れて愛す。夷蠻戎狄も仁政をしたひ、威武を恐れて來服す。是を四海一家の如く中國一人の如しと云ふ。又禽獸には人よりもたけく力つよき物多し。兵器なき時は、禽獸人家にまじはり害することあり。禽獸をとほざけ惡をおどすには、弓矢の德に若くものはなし。作り初には弓

をかけ、其上に土をかけ火をたきて、蒸して食とす。是上古鍋釜なき時の模様なるべし。又小過はすこしきなるものすぐるなり。小は陰にとる。中に二陽ばかり有りて、上下みな陰なり。陰の多きを以て小きなるもの過ると云ふ。陰は小人にとる。陽は君子にとる。食道は小人多からではなりがたし。小人内外にみちて食を作つて君子を養ふの理なり。此小人は庶人をさす。君子は在位有徳かねて云ふなり。

一 弦レ木爲レ弧。剡レ木爲レ矢。弧矢之利。以威二天下一。蓋取二諸睽一。

睽はそむくなり。乖く者をば威を以て服すべし。弓は武器の始なり。䷥卦の象、上は離火下は澤水なり。火は動いてのぼり、水は動いて下る。是そむいて和せざるの象なり。然れども睽いて用をなすの道理あり。こゝにおいて弓矢を作りたまふ。木をたわめ弦をかけて弓とし。木をけづりて其さきを利くし、はづをつけて矢とす。曲れるを躰とし、直きを用とす。躰用相乖くの理なり。又先へやらんとて吾前へひく。是又そむきて用をなすなり。木はまがりて弦はすぐなり。弓は立矢は横なり。

耒耜―耜は鋤の金屬の部分耒は其の柄を云ふ

上世は人稀にして五穀を作り出すこと少し。多くは木の實魚などを食とせしかども次第に人多くなり、五穀を作ることも多かりし故に、それ〴〵の器なくては、民川多く費えて養生の道全からず。五穀の皮粃をとるにやすかるべき器を作んと思ひ給ひ、䷚卦の象を見たまへば、上うごき下とゞまる。上動くの震は木なり。下止まるの艮は土なり。震木上にうごき艮土下にとゞまるは、杵臼米を治むるの象なり。是によつて地をほりかたくして五穀を入れ、木をけづり、土に入るところをふとくしてうすつかしむれは、皮ぬけ正味あらはれて万民養生の利を得たり。耒耜は耕稼の始なり。臼杵は脱粟の始なり。後世に至りて木をゑりくほめて臼とし、又土をねりなどして作れり。又米はもみを脱するすり臼を作りたり。次第に五穀多くなるが故に、人用の速かなるやうを求めたるなり。今もやき米むし米などは、粟を取るもぬかを取るも異ることなし。臼にてつきはやく食となす。是上古臼杵の模様なるべし。軍中にてかり田とて、田よりいねをかり來りて其まゝ食とするも同じ。むしろ

人民みな其處を得其宜きを得て悦ぶ。豫は喜悦豫樂の時なり。人悦豫する時は怠惰のつひえあり。怠惰して備なき時は必ず難生ず。其上四方道路ひらけては、邊境の禮儀を不知者、或は暴人なども至ることあらんが故に、かねて門をかさね柝をうつて備をなす時は憂なし。門は外の暴客をふせぎ、柝は内の怠惰を戒む。上世は門戸は風雨をふせぐばかりにて戸ざす事はなかりしなり。此時に至りて始めて屋の戸を閉ぢ、外に門をまうけたり。☷の卦、中のとほりあきたるは大路の如し。䷏の卦の内卦の外三陽ふさがりたるは、門をまうけて内安く靜なるの象なり。又外卦の二陰を重門の象にとり。下の一陽を擊柝にとりたるとも云へり。外卦は震なり。震は動なり。一陽内外の間において動くは、柝を擊て戒むるの義なり。雷出地ふるふは、天の春夏悦豫の時において戒むるの理なり。君子治世の時において、武備をひそかにまうけたまふも此義なり。

一 斷木爲杵。堀地爲臼。臼杵之利。萬民以濟。蓋取諸小過。

至りて始めて牛をつかひて重きをひかせ、馬にのりて遠きに行く。みな其天然によつて其性を遂げしむるなり。䷐卦の象、上よろこび下うごく。人牛馬にのる時は、物勞して人安んず。是下動いて上悦ぶなり。又☳は剛なり。☱は柔なり。剛來りて柔にくだる時は䷐となる。牛馬は力つよし。然れども人にしたがひつかはるゝは、是剛の柔にくだるの義なり。後世の聖人隨卦の象と義とを見て天下を利したまふ。それ人は萬物の靈にして知ある故に、人よりも剛なるものみなしたがふなり。舟楫を作るは、植物の材に隨つて河海通ず。服レ牛乘レ馬は、動物の性に隨つて道路通ず。牛の性は順なり故に是をつかふ。馬の性は健なり故に是に乘る。牛にも乘り馬をもつかふことありといへども、第一の處によつて云へり。ともに遠きをいたして天下を利するなり。

一　重門撃レ柝。以待ニ暴客一。蓋取ニ諸豫一

豫はあらかじめ備ふるの義なり。舟車馬牛の利出來て、天下みちひらけ通ず。故に

羈靮轡ー羈はたづな靮はむなかひ轡はくつわ邦俗轡字を誤讀せり今俗に從ふ

りがたき事なりと思へり。今の世にも時處位に叶ひたる眞の禮行はれば、上下貴賤ともに安堵して、心ひろく體ゆるやかなる樣に思ふべし。儉約の戒なくしても、厚き風俗となり長久なるべし。

一 刳レ木爲レ舟。剡レ木爲レ楫。舟楫之利。以濟二不通一。致レ遠以利二天下一。蓋取二諸渙一。

䷺の卦、巽の木坎水の上にあり。又巽は風なり。木水上に浮んで風ふく時は行くべし。車馬の不レ及處に至る。聖人是によつて木の中をゑり、虚にして舟となし、楫を作りて舟をゆかしむ。帆と櫓と其中にあり。日中に市をなして交易すといへども歩行なりがたく車馬の及びがたき不通の所には、舟を作りて川澤湖水海岸を渡し、物をのせて有無を通ぜしむ。第一は如レ此の不通の地にも、教化の及んで道を知らしむべきためなり。

一 服レ牛乘レ馬。引レ重致レ遠。以利二天下一。蓋取二諸隨一。

上古には牛いまだ鼻をとほさず、馬いまだ羈靮轡をつけざる故に用をなさず。是に

行義高く云々―自他を責むる事極めて嚴に毫も假借せざるを謂ふ

なればーなければの誤か

說命―書經の篇名

和を吉とすー論語に所謂禮の用は和を貴と爲すの義

忌みて淫樂をせず。知らざれば正樂をもせず、行義高く和なく、萬事法度强く、俗語の石にて手をつめたる樣なれば、諸人氣をつめて或は病者煩人多し。士民ともにうとみて、其代のかはりには必ず氣をのべんことを待ち、世繼の君も先代のかたきに懲り、諸人も疎みていさむる事なれば、上下ともに鬱氣をはらして大にゆるむことあり。其正きと云ふもかたきばかりにて和なきは、禮樂かねざる故なり。正樂は清風和氣あり。上たる人是を好むときは心ゆたかにして、下たる者是をなす時は欲すくなし。君臣父子夫婦兄弟朋友和樂す。或は時の興に乘じて糸竹を奏し、或は一人しらべて靜に樂しむものなれば、恭儉にして驕奢なし。五倫和睦するのみ。これ黃帝堯舜の衣裳をたれて天下治まるなり。禮も亦後世のごとく煩しき事にはあらず。說命にも禮煩則亂といへり。禮は恭儉にして事すくなく和あるを以て吉とす。無道の世には禮なき故に、貴賤ともに苦勞する事を不レ知。また學者は跡のみ見て眞の禮を知らざるゆゑに、格法をとめて禮なりといへり。故に世俗より儒道の禮はな

樂只君子—詩經に見ゆ

知りたまふにより、國天下治り無事にして人民生樂をなすべきの時に至りては、天地の律呂をうつして雅樂を作り、正しき處において樂みたまへば、下みな是に化して雅樂を好めり。或は糸竹の調をもてあそび、或はうたひ舞ひなどすれども、雅樂の風は淡にして甚面白きこともなく、又あく事もなし。是に深き者は道德を助け、淺き者も不ㇾ知不ㇾ識眞樂に遊びて風俗美なり。惣じて君子ならでは眞の樂みは知らざるものなり。樂まずしては國天下をゆたかに治むることはならざるなり。故に樂める君子は民の父母なりといへり。亦古人云ふ。「有ㇾ德則樂、樂則能久。詩云、樂只君子、邦家之基」なりと云へり。天下の人上の樂を以て人々の樂としてよろこべり。後世は上たる人の樂はみな下々の困窮となれり。道德より出ると人欲より出るとのたがひなり。天下の人心、正樂なき時は必ず淫樂おこるものなり。天子諸侯公卿大夫淫樂を好む時は、人欲日々に盛になりて奢生じ、士貧く民困窮す。天下みな淫樂を好みて、人心邪になり風俗みだる、終に亂世となる。生付正しき君は是を

生樂—生きたる以上娛樂なき能はざるを謂ふ

の役々によき人をそなへ、よき教をなして後、上たる人は無爲にして琴瑟を樂みたまひ、小事は無事になり大事は小事となるやうに、下知法度ゆる〳〵として位したまへば、天下太平にして貴賤上下共にゆたかなるものなり。天を見れば日月星辰の四象ばかりにて、晝夜四時行はれ萬物生ず。地をみれば水火土石の四靈ばかりにて、雨露霜雪風雷時にいたりて、萬物育す。上に日月星辰かゝり、下に水火土石つらなる。衣裳をたれたる象なり。黃帝堯舜衣裳をたれて、無爲にして天下治まりしは、天地と德を合せたまふ故なり。夫生とし生けるものには必ず生樂あり。正きことに樂まざれば邪なる樂み出來るものなり。無道の時凡夫の樂とすることは或は心を亂り、或は身命を縮め、病を生じ、或は氣隨になり、或は家財を失ひ、或は奢り或は吝り、或は家を亡し、或は人を損し、下を虐するに及ぶの樂み多し。これを俗樂と云ふなり。欲のこのむことなる故に樂の樣なれども流れ蕩けて心くらくなり、或はさかだちもとりなどして、却つて大なる苦となれり。聖人は此人情を

なり。たとひ一二年程かゝる事なりとも、我家を過るときは、内に入りて五三日の休息はあるべきことなり。夫までこそ有らずとも、入りて妻子家内の安否を見たまふほどの事はあるべき事なれども、天下に水あふれて人の居所不レ定ことを憂ひたまふ事、我子どもの多く流浪する如く思ひ給ひて、しばらくも御心にいとまなかりし故なり。八年の間、冬となく夏となく水をわたりたまひし故に、御手足には胼あかゞりありと云へり。其時何のいとまありてか琴瑟を調べんや。其後水みな海に切おとし、人民居を安んじ五穀みのりし時は、天下みな楽を得たり。此時またいまだ心もとなきとて國をめぐり、代官を下し諸役人を召よせ、朝夕念を入れすぐるときは人民其事につかはれて耕作のいとまなく、事忙しくして父母妻子ゆる〳〵と養ふ事もならざる樣になるべし。然る時は色々の惡事も出來、僞も生じ、風俗あしくなりて、洪水の難には越えぬべし。洪水は人身の憂なり。風俗のよからざるは心の憂なり。人民の難のぞいてゆたかなる時は、肝要の事ばかりを善して、それ〴〵

茅茨云々ー墨子韓非子等に見ゆ堯の德を稱したるなり

飽滿せり。天下みな耕して食し織りて著、工商はかへて食すいとまなけれども、せはせはしき事なく、貧なれども衣食乏しからざるは、政道大なる德なり。上一人よく民を子の如くするの仁心厚く、無欲にして恭儉ならではならざることなり。帝堯四海の主にして、茅茨きらず桷柱丹ぬらず、黑木作りかやぶきなるはよき教なり。日本にても、いにしへは此の如くなりと見えて、天照皇の御宮殿はかやぶきなり。しかるに後世、もろこし秦の始皇が惡政なりし咸陽宮の一殿を移して大内裏を作られたるは、大なるあやまりなり。王威のおとろへたる事尤もなり。問ふ。天下の廣きを子とし惠みたまはゞ、琴瑟をもてあそびたまふのいとまはあるまじきかと。云ふ。時なり。禹の水を治めたまひし時は、婦をめとり給ひて僅に四日なりしに、帝のみことのりをうけて出たまひ、天下をめぐりて外に八年居たまへり。八年の間に二三度まで我門を通りても門内へ入りたまはず。御子生れてなきたまふを聞きたまひても、門に入りて見たまはず、子ともしたまはざるが如し。八年は程久しきこと

日南云々―列子に出でたり列子の本義は献芹の悦にはあらず

帝徳云々―堯の時の撃壌歌なり

に歸服してたがはざれば、天下の事ならずと云ふことなきは、地氣ののぼるに取る。坤の道なり。「臨下以簡、御衆以寛」これ乾坤易簡の徳にとるなり。日本にても王代の昔は易簡なり。仲哀天皇應神天皇、みづから大將となりて九州までくだりたまひ甲冑を枕とし山野を家としたまひたるにて、易簡なる事知れたり。遠國の山賤までも天子を大切に思ひ奉りて、何にてもよき物あれば王にさゝげんとて都へ上れり、日南北向の暄を王にさゝげんと思ひし昔物語をおろかなる事に云ひて笑へども。王化の至り感ずるに堪へたり。天氣くだりくだる事、名もなき一草一木も造化のめぐみに漏るゝ事なきが如く、奥山の賤男賤女までも王德の仁政にあづからずと云ふ事なし。上の下を見たまふ事、子の如くなる故に、下の上を見奉る事父母の如し。仁政とて人ごとに物をたまはるにはあらず。井を掘りて水のみ、田をたがやして食す。帝德の恩は何かあるやといへる、信の仁政なり。無道の代には、たがやせども食を得ず、婦は織れども衣を得ず。却つてたがやさず織らず、民をめぐまざる者衣食に

十二章—日、月、星辰、山、龍、華蟲、宗彝、火、粉米、黼黻、絺繡

すむ。日月の照臨し流行するが如く、恐れて愛し日々に善に化して不レ知。易の理を以て見れば、萬事きはまりて行ひがたく爲しがたくなる時は必ず變ず。明王賢君は其時運と共に變通して可レ行可レ爲易レ知易レ從政教あり。世の中きはまる時は多事多物にして煩しくなるものなり。此を變通し宜くするは易簡の善なり。易簡なる時は長久なり。易簡は卽ち天地の德なり。民の父母たるの道なり。故に天の福ありて吉なり。民皆其利を利とす。黃帝堯舜の三聖は、頭は冠を著し身に十二章の衣裳を服し、日々南面の位にましく〳〵て、琴瑟を調べ樂み給ふばかりなり。しかれども君子は其心をつくして下をめぐみ、小人は其力を盡して上にしたがひ。君は首の如く臣は手足の如し。諸侯は弟の如く民は子の如し。無事を行ひ無爲にして成る。これ德治の至なり。天不レ言、而四時行、百物生。天氣くだり地氣のぼりて和するのみ。天氣くだらず地氣のぼらざる時は、四時不レ行、萬物不レ生。上の心下にくだり人情時變をくはしく知りて、惠のあまねきは天氣のくだるに取る。乾の道なり。下の心上

五典十義―前に出づ

れども平かなり、噬嗑の道至れり。

一神農氏沒。黄帝堯舜氏作。通其變使民不倦。神而化之。使民宜之。易窮則變。變則通。通則久。是以自天祐之。吉無不利。黄帝堯舜。垂衣裳而天下治。蓋取諸乾坤。

神農より黄帝までの間五百餘歳、又黄帝より堯舜まで三百餘歳なり。天下古今の躰を見れば、大方五百年には大變し、五十年には小變す。其變に通じて時によろしからざれば、人民退屈しおこたるものなり。それより色々の惡事も生じ、風俗の亂となるものなり。黄帝堯舜の時は、伏犧神農の時と、天下の人情時變大にかはれり。故に其變に通じて時位の宜きをなさしめたまへば、人民善を爲すに進みて退屈せざりしなり。天地人を一貫にして萬古一日なるものは誠のみ。古今かはりなきものは五典十義なり。禮式法度は時處位によつて變通して定まらず。神而化之とは、聖人は過化存神の妙あり神明の德ある故に、威さゞれども天下怖れ、賞せざれども人民す

日中にとる。震は動なり、市にとれり。上明に下動くは噬嗑の義なり。又上明に下動は有道の世の象なり、上道ありて明かなれば、進めざれども天下善をなし、戒めざれども惡をなさず。上の好みたまふは仁義禮智信の德なり。惡みたまふは不仁不義不禮不智不信の凶德なりと、人皆心に通じ知る故なり。其上闇き處ならでは惡をなさず。盜賊も夜を好み、不義をなす人も夜を悅び、狐狸蚊鼠の類まで、夜を得て出づるが如し。天下道くらければ、種々の小人惡人出づるものなり。聖主賢君の政は何の勞する事もなし。たゞ道明かにして上に位しまたふばかりなり。日月の天にかかりて、天下の人其處を得て用をなすが如し。不動は、人々其所作をつとめて動くなり。いそがはしき動にはあらず。人は動物といへるも此心なり。上明なれば天下の人皆眞實にしてかざりなくへつらひなし。名利なく便利なし。故に夙におき夜半にいねて善をなして不已。無用の世事なき故に靜にして樂めり。善を爲すと云ふは、人々なすべき事をなして名利のまじはりなきを云ふ。如此なれば天下は治めざ

しまりたるには却りて劣れり。都せばく通路自由ならずは、たとひ欲ありて財用を集るとも剛惡だになくば、奢りて無欲なるよりは久しかるべし。

一日中爲レ市。致二天下之民一。聚二天下之貨一。交易而退、各得二其所一。蓋取二諸噬嗑一。

聖人天下の民を見給ふに、有餘あり不足あり。生を養ふの道全からず。䷔の象を見給ふに、口中に物あり、くひあはするときは味ありて生の養となる。又卦の德を見たまへば上明に下動く。是によりて日中に市をなし、天下國々所々において人をあつめ、有るところの物を以て無きところの物にかへて、各其生を養ふことを得せしめ給ふ。五穀ある者は魚なし。魚ある者は五穀なし。交易する時はたがひに用を達す。農業を事とする者は、鍬鎌を造るにいとまなし。鍬鎌を造る者は耕作をかぬる事あたはず。故に農人は易ふるに五穀を以てし、鍛冶は農具を造りて、たがひに交易して各其所を得たり。萬物皆此レ如。又農人職人自ら來りて易ふるにいとまなし。商人これを買取りて相通ず、䷔は上を離にし下を震にす。離は明なり、

大原八瀬—京都の近郊
たかせ—高瀬船の路なり角倉了以の開鑿せる高瀬川を上下する特殊の船

舞音信、奉行の用にもたゝさる事に金銀をつかひて、取りたるよりも十倍百倍の費出來る者なり。又其奉行へ出入の者にこと〴〵くまひなひすれば、一人取たる十億百倍つひえる理りなり。是によりて奢日々に長ずれば、諸國の士民の膏澤一所につきて、天下困窮する者なり。吾京にて、大原八瀬の薪を賣るにて是をさとれり。八瀬大原の山内の恰好には民家すくなし。この故に賣る所も今出川のあたり、西は室町邊までの間をうるなり。それも此薪ばかりをたのむにあらず。伏見よりたかせにて上る木をも買ひおきて焚く上なれば、多事にあらず。この故に昔より今に至りて八瀬大原の柴薪つづく事なり。もし八瀬大原の在所を多くして、京へうる所ひろくば、山つき木賣なくならん事、數十年の内なるべし。上無欲なれども天下のはやく衰微し亡ぶる事は、天下の主の都ひろくして奢長じ、諸國の潤澤を早くかわかす故なり。是益にはあらで䷖なり。天下の潤澤をも剝ぎ盡し、みづからの潤澤をもはぎ盡しぬるは四海困窮なり。無欲にてよき樣なれども、道を知らざれば、有欲にして

五穀あまりあり。是において四時の理に配して、大身小身共に我一年の財用を四にし、三分を以て其年の用を達し、一分をたくはへとす。是天の春生じ夏長じ秋みのり冬一時の造化は藏しをさめ、來歳の陽生をたくはふるに合す。如ㇾ此する時は九年にして三年の用あまり。三十年にして十年のたくはへあり。是を以て不時の用にそなふるなり。たとひいかなる大旱大風洪水火災の變にあひても民不ㇾ餒。夷狄の難ありとても軍用乏しきことなし。天下の爲のたくはへなれば、多しといへども一人の富といはず。君子は心を洗ひ、小人は其樂みを樂みて外の願ひなし。益の道至れり。問ふ。むかし天下の奉行職、諸侯より金銀多くとりたる時代は天下もゆたかに、不ㇾ取時代はかへりて天下困窮せし事あり。しかれば上無欲にして財散じ、有欲にて財あつまるともいひがたきか。云ふ。道なき代の風俗は、奉行職の欲と無欲と取ると不ㇾ取とは、欲ありて取りたるかたはまされり。如何となれば、其人にさゝぐるは莫大なる事にあらず。奉行の取らざるは事の外むづかしき事なり。何をか馳走にとて振

十年の奢—禮記王制篇に見ゆ

らざれば語り難し。後世は禮儀の則時處位に不叶。奢欲の源をふさがず。當然の式なくして奢をおさへ儉をなさしめんとす。大海を手にてふせぐたとへの如し。問ふ。其禮儀の則の當然なる式はいかゞ。云ふ。予其位にあらず、亦時にあらず。知と云ふとも云ふべからず。問ふ。今質朴無欲の風俗とならば、農人はよかるべし。然れども數十年の奢とかざりによりて職を立てたる工商は、幾萬人と云ふ數を不知。男女妻子共にうゑに及ぶべし。たとひ古者の美風なりとも、數多の者困窮に及びなば仁政とは云ひがたかるべきか。云ふ。是を以て時處位の至善あり。一人も困窮に及ぶ者はなきやうあり。問ふ。左樣の事には、上のたくはへ多からではなりがたかるべきか。云ふ。仁者は上を損し下に益す。故に不富と云ふは身の爲の財用なきを云ふ。益の時は天下に財用みち〳〵て多きものなり。財用と云ふは金銀錢等の事にはあらず。金銀多きときは却て天下困窮するものなり。眞の財用と云ふは、五穀の多きと薪材木麻綿等、民生日用の物を云ふなり、益の道十年に及びて行はるゝ時は

上を損し下も益すの政あり。上無欲にして物を蓄へあつめ給はざれば、財用おのづから下に散じて、下の心上にあつまり服するものなり。人心の歸服するは益是より大なるはなし。是施さずして上を損し下を益すにあらずや。無欲にしてかざりなきを質素と云ふ。上古の風俗なり。如_此なれば治めざるに平かなり。此時には天氣順にして、五穀の多きこと水火のごとし、故に民不仁なる者なく、うゑに及ぶ者なし。人々無欲にして足ることを知れり。亂いづくよりして起り、盜賊いづれの所にか出んや。心法治道ともに無欲より先なるはなし。無欲なるときは心靜にして靈明生ず。仁義禮知信の性自然に照すものなり。此心法を知りて用ひる人はすくなし。民の如きはあまねく敎へて知らしむること不_能。たゞ政を以て不_{知不}識無欲になることとあり。後世は文明の運にて文章あらはる。文章はかざりに近し。器物に至るまで多くなりぬ。かざり過る時は欲生じ奢長ず。こゝにおいて禮儀の則あつて、不_過不_奢欲をふさぐものなり。是を名づけて式と云ふ。此式や時處位あり。其人にあ

り。天地人ならび益あるものは耕作の業なり。ゆゑに民は國の本なりと云ふ。古者は木をけづりて耜鍬に作りしかども、後世は人の力もおとり木の性よわくなりたる故に、柄ばかり木にて作り、金鐵をきたひて作りかへたり。國天下の平治して長久の政をなす道理も、此䷩の卦にて明に見えたり。☰の三陽を一陽損して☴の卦となり、☷の三陰を一陽益して☳の卦となる。此風雷の二卦をかさねて、天下國家を利益する仁政の象を見たり。いかんとなれば上を損して下を益すが故なり。或問ふ。上を損して下を益すを益とするは何ぞや。云ふ。上おごり下苦しむ時は亂れ亡ぶ。損これより大なるはなし、上質素に下豐なる時は國治り天下平なり。益これより大なるはなし。問。上は一人にして下は衆多なり。上の財用普くほどこしすくふに不レ足、又儉約のおきては、何の世にも下したがはずと見えたり。聖代にはいかんして能くほどこし、いかんして儉約の法を立て給へるや。云ふ。仁者は不レ富として、聖賢の君は猶以て財用豐ならず。施しすくふこと能はず、只ほどこさずして

神農氏ー伏犧氏後の帝王人身牛首

河海にしては魚をとる事を教へ給へり。是☲卦の象を以て作り給ひぬ。離は麗なり。離を目とし其徳を麗とす。これ網の兩目相續いて、物の此につくの義なり。

一 包犧氏沒神農氏作。斲レ木爲レ耜。揉レ木爲レ耒。耒耨之利以教二天下一。蓋取二諸益一。

伏犧と神農との間一萬七千七百八十七年なり。其間女媧氏より無懷氏まで十五代は知れて其外は知られず。有徳の君のみ言ひ傳へたるか、神農氏木をけづり、其さきを利くして耜となし、木をたわめて耒とし柄をなし、是を以てくさぎりて土をおこし、種まき植うる事を教へたまへり。是☴☳卦の象を見て作りたまひぬ。震巽の二躰みな木なり。益の象にとる。風雷は相助けてはげますものなり。耒耜の二木相助けて土を起す是なり。耜は上より入りて下土をうごかしおこす。風はいり雷はうごく、上入り下動くは益の徳にとれり。故に雷風おこりて雲ゆき雨ほどこす處を見たまひて、農具を作りて耕作を教へ給ふに、耒耜を始とす。天下の益は耕作の事より大なるはなし。耒耜を本とす。益の義なり。故に天施し地生ず。「與レ時偕行」といへ

きざして、人心にまどひ出來しかば、伏犧是をかなしみたまひて、敎へんと思ひ給ふ心あり。依てみづから天地を師とし、天の日月星辰の象、地の風雷水火の時によろしき處を見たまひ、春夏秋冬の時にたがはず、山澤氣を通ずるの神を知り變を察し、天理自然の文章鳥獸の羽毛のあやにもあらはれて、至誠無息の感ずる處を知り給ふ。近くは我身にも取り、遠くは萬物にも採つて、始めて八卦を作りたまふ。此八卦の象をみる人、ふかくみれば天地神明の德に通じ、精く察すれば萬物のことわり、皆此中にあり。此時までは文字も書物もなかりしなり。此八卦文字、經書の始なり。かさぬるに八を以てして六十四卦となる。こゝにおいて天地萬物の理こと〲く備れり。古者は此六十四卦を見て、心をみがき身を修め家を齊へ國を治め天下を平にす。治亂共に通ぜずと云ふことなし。

一 作二結繩一而爲二網罟一。以佃以漁。蓋取二諸離一。

葛かつらの様なる物を取て糸とし、縄とし結て網をなし、山野にしては鳥獸をとり。

網罟—共にあみなり
佃漁—佃は田獵漁は河海の漁猟

包犠—即伏犠三皇中最初の帝王蛇身人首なりき。此句繋辭下傳に出づ

集義和書　巻第七

○始物解

易に云はく、古者包犠氏之王天下也。仰則觀象於天。俯則觀法於地。觀鳥獸之文與地之宜。近取諸身。遠取諸物。於是始作八卦。以通神明之德。以類萬物之情。

伏犠は天地を父母とし天地の造化を助けて、天について天下に王たりし神聖なり。天地ひらけて聖人と云ふ名の傳はりしは伏犠を始とす。伏犠以前にも聖德の人は多かるべけれども、人に教へんと思ふ心はおこらざるなり。いかんとなれば、人に惑ひなければ明知もあらはれず。不孝子なければ孝子の名なく、不忠臣なければ忠臣の名もなかりしなり。是故に伏犠よりさきの聖人は、渾然として知られざることわりなり。伏犠の時は、天地開闢より程久しく、人も次第に多くなり、物欲も少しづつ

獣に近きは大なる恥なり。

或問。心は靈覺の名なり。人物ともに靈覺あり。心の虚靈知覺は一なり。理氣の知覺二あるが如く聞ゆるは如何。

曰はく、靈覺の本は理なり。理の靈覺は至りて明に、至りて速なり。故に感とのみいひて知覺とは云ひ難し。至りて神靈なるが故なり。聖人は人の神明なり。平人は聖人の未だひらけざるなり、禽獣魚蟲草木は、氣にごりて質偏なる故に靈覺鈍し。故に末になりて氣質の靈覺のみなり。本理の照は及ばず人の靈覺全し。故に生を知り死を知る。死生二あらず。獣は生を不レ知、死を不レ知、死と共に亡ぶ。獣は氣質の知覺あつき故に、死を悲む事を知るのみ。鳥は獣よりも知覺薄し。いたみて哀鳴すれども、死を恐るゝ心はなし。大鳥は獣に近きもあり。魚は感のみありて知覺なし。其中大魚は鳥獣の知覺の如くなるもあるべし。こゝの感は氣の感なり。理の感に異なり。草木は感もなし、質の生のみなり。次第に知覺の薄きを以て不二の二を見るべし。

詩人云々ー詩經の鄘風に鼠を相るに禮あり人にして禮無からんや人にして禮無くんば胡ぞ遄く死せざるとあるによれり

後顯れず。形象聲臭だになければ、亦滅すると云ふ事もなきを、不生不滅といへるなるべし。

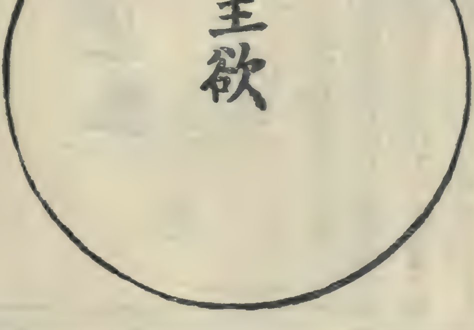
○のみにして□なきを禽獸とするものは、禽獸は形氣の欲のみを以て心とす。故に○中に主欲の二字を書す。理の知覺なければ虛生浪死とて、生るゝも辨なく死するもくちうせするばかりなり。禽獸とても□○を離るゝ事はならざれども、濁りて暗き故に理の靈覺は見えず。故になきが如し。

或問。鴈の長幼の序ありて行を亂らざるは、□照しあるに似たり。

曰はく、陽鳥にて火氣を多く受けて生れたるものなり。火氣の神は禮なり。故に自然に然り。禮を知りてなすに非ず。故に其他の事は皆鳥なり。人は禮を知りながら無禮なるは禽獸にも劣れり。されば詩人も、人として禮なくば何ぞ早く死せざるといへり。人たる者は無欲の性を固有して無欲の理を知りながら、欲のみを心とするは禽獸に異ならず。禽獸は禽獸と生れたるものなれば罪なし。人は人の性ありて禽

に感なり。故に佛氏は大虛を出で陰陽を離るゝと云へり。大虛外なし。越え出づべき所なし、亦輪廻なし。離るべきものなし。只□の寂然不動無欲無爲にして顯れず、あとなきの眞を見て佛性とし、こゝに至りて不生不滅なるを成佛とし、陰陽生々の氣をはなれて再び生れず。子孫なきを以て出離生死とするなるべし。造化は無盡藏にして無中より生ず。生ずる者は消えず。行くものはかへらず。輪廻と云ふ事なし。無始無終とは云ふべし。不生不滅とは云ふべからず。□の前

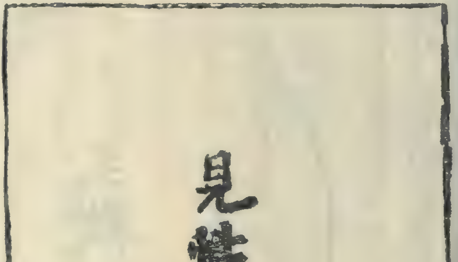
禽獸



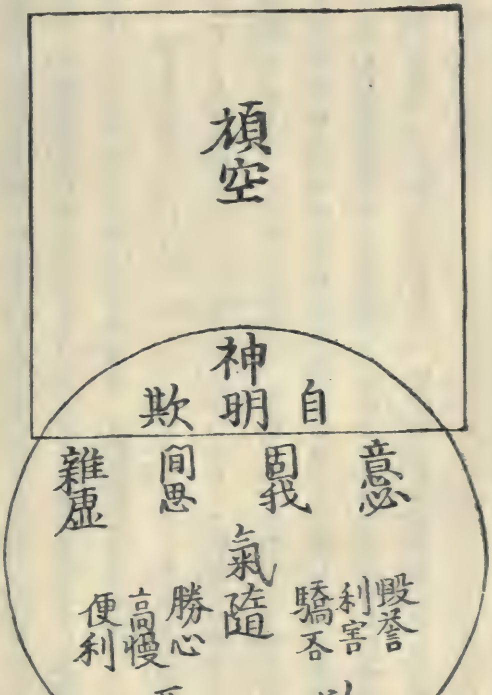
見性—自己本來の佛性を悟了する事

にして用をなさゞる事を示す。□○は理氣なり。理氣は或る時は共にあり、離るべからず。離るゝ時は□も實理ならず。○も眞氣ならず、□中に見性を書するものは、異端といへども寂然不動無欲無爲の性を見たる事は一なり。□は無の至極なり、聖學には其無をよく窮めたる故に惑なし。異學には無をいへども無を窮め盡さゞる故に、悟たるところに則ち惑あり。造化の神理を見そこなひて、天地をも輪廻と見たり。故に曰はく儒學には天道と云ひて大なる事にすれども、天地の道とも

悟道



凡心



吝なるものは驕る者をそしると雖も、共に凡心の惑なる事を不レ知甚しき者は欲悪の二つにおちいる、故に下に、□の○を離れて高きを悟道とするものは、見所のみ

禹云々―禹は鯀の子舜に擧げられて水を治むるに外に居る事十三年なりき

意必固我―論語に子四を絕つ意なく必なく固なく我なしと聖人の心中朗明にして一點の私意なきを謂ふなり

に欲なり。夏の禹の洪水の時にあたつて外に八年、三度其門を過ぎて入り給はざるも無爲の至なり。〇の下に視善聽善言善行善を書する者は、人は動く物なり、行を以て性とするの義なり。善をなさゞれば徳を積む事なし、善と云うて事を作爲するにはあらず。六藝に遊ぶも善をするなり。今日將になすべき事をするは皆善なり。凡心の圖も、⊖をなして神明を書する事、君子の圖に同じきものは、人と生れたる者は、聖人凡夫共に天性に於てかはりなし。善を知り惡を知るの神明あらずと云ふ事なし。人々不義を憎み惡を愧るの良知是なり。只愼獨と自欺のたがひより、千里の過と成りて、君子小人の名あり。然れども一念自反して惑を辨へ獨を愼み、過を改めて善にうつる時は、凡夫も君子となるべし。故に神明のみ同じく書するものなり。小人は自ら欺きて氣に隨ふ。故に心の體空なる時も眞空ならず。故に口中に頑空を書す。念慮動く時は妄なり。故に意必固我間思雜慮を〇中に書す。左右の十二字は凡心の常を書す、重きものを擧るのみ。驕るものは吝なる者をそしり

無色無聲無臭を書するものは、未發の本然を云ふなり。靜虚無欲は中の德なり。寂然不動して感ずる物は中の神理なり。故にみな□の内に書す。神明⊖の間に書するものは、知は心の神明なり。もと寂然不レ動の理なりといへども、五德の中に先感ずるものなり。天下の萬事をつかさどりて照さずと云ふ事なし、動いてあらはれず、有無の間なるが故なり。無聲無臭の本然においては手を下すべき樣なし。聖人の敎をまうけたまひ學者の問學を好んで、理を窮め德に入るの門なり。故に心の神明を⊖の間に書し、愼レ獨を以て心法の要とす。〇の内に和の字及び動直無爲遂通二天下之故一を書するものは、發して節に當るの義なり。寂然不動、感ずるの本立ちて遂二通天下之故一なり。靜虚なるが故に動直なり。無欲なるが故に無爲なり。無爲と云ひて何事をもなさゞるには非ず。人欲の私なく天理にてしたがつて不レ得レ已して應ずる時は、終日爲る事ありても無レ爲なり。同じ文字にても、利貞の利と利欲の利と、黑白のかはりあるが如し。天德にありては物を利する故に道なり。凡人は己を利する故

は土なり。土は定位なし。故に外に書するのみ。
心法の圖に、口の内に中の字を書するものは、中は天下の大本なればなり。上に無形

心法

小父母―造化の大父母に對して通常の父母をいふ

長幼の序あり。況や小父母の兄弟は骨肉の恩あれば、兄は父にかはりて弟妹を教へ導き愛養するを良と云ひ、弟は兄を父の如く思ひて、能く從ひ仕るを悌と云ふ。朋友は眞實無妄の天道を父母として、異レ親同レ氣の兄弟なれば、眞實の心を以て相交るを信の道と云ふなり。天の元亨利貞と人の仁義禮智とは、同レ躰異レ名なり。天の五行と人の五倫とは、同レ氣異レ形なり。天地は元亨利貞の理に隨ひて四時行はるる時は、天地位し万物育す、人は仁義禮智の性にしたがつて五倫明かなる時は、家齊り國治り天下平なり。父母の子をうめるは春生ずるが如し。故に左に書す。兄弟長幼相つらなるは夏長ずるが如し。故に前に書す。君臣は極を立つるの大義なり。君臣相かなつて國治り天下平なり。天地の化育をたすけて物をなせり。秋實るがごとし、故に右に書す。夫婦は人倫の初なり。天地ひらけて後男女あり。男女ありて後夫婦あり。夫婦ありて後父子あり兄弟あり朋友あり君臣あり。故に五倫皆夫婦の内にこもれり。天の冬を以てかくすが如し。故に背に書す、朋友は五行に配して

七情―喜怒哀樂愛惡欲

文王云々―孟子梁惠の下篇に文王一び怒つて天下の民を安んずとあり

大父母―造化大父は祖父なりされど此處には伯叔父母を謂へるに似たり小父母も亦兄弟姉妹の義に用ゐしが如し

ね、怒は惡をかね、樂は欲をかぬ。心正しき時は七情節にあたる。故に聖人の喜怒哀樂は四時に配す。文王一度怒り給ひて天下の民安きものは、冬の寒氣つよくして來歳豊年なるが如し。亦天人合一の圖に五倫の五典十義を書するものは、天に五行ありて人に五倫あり。五行の神は元亨利貞誠なり。五倫の眞は、仁義禮智信なり。故に。父子の親は仁なり。君臣の義は則ち義なり。夫婦の別は知なり。長幼の序は禮なり。朋友の信は則ち信なり。父母の子を愛し養育し人となすを慈と云ひ、子の父母を愛敬し安ずるを孝と云ひ、君の臣をあはれみ各其利を利とし其樂みを樂み其生をとぐる樣に政教をなし給ふを仁と云ひ、臣下の身命を君に奉り二心なく眞實を盡すを忠と云ふ。夫の婦をあはれみ、夫の家に心を止て安座する樣にし、能く敎へ導くを義と云ひ、婦のよく夫に從ひ、地に二の天なき如く、我夫の外に天下に夫なき貞の道を守り、かりそめにもうしろぐらき事なきを聽と云ふ。兄弟は天倫の親にて同氣同親なれば、連れる枝の如し。大父母の次第を以て年長ぜるだに、位等しき時は

故に、古今たとへとするなり。惣じてたとへと云ふものは一端の形容なり。全體不測の神靈はたとふべき樣なし。鏡に扇なりとも一物うつし置きて、是をのけざる時は他の物うつらず。智も空々として一物なき時は能く萬事に應ず。知識のたくはへあるときは眞知自然の照にあらず。知者は無事なる處を行ふとて、知者の國天下の政をなし事をとるは、易簡にて何のむづかしき事もなく、水の流るゝ如くなり。知に是非はなけれども、物の是非身の善惡を別つものは知なる故に、是非の心を知の端と云ふなり。信は至誠無息の天理にして、仁義禮智みな信あり。故に四端みな眞實無妄なり。天道に元亨利貞を云ひて誠を不言が如し。四時皆土用あるが如し。誠は天の道なり。誠を思ふは人の道なり。故に信を中に書す。仁義禮知も無方の神理なれども、おなじく水火木金土の神なる故に、天地の方位に配して書す。四端も又四時に配して書す。喜怒哀樂を四隅に書するものは天の時に象る。喜は春の色なり、哀は秋の聲なり。樂は夏の象なり、怒は冬の氣なり。喜は愛を兼哀は懼をか

の利徳にして神武の勇あり。天下のことに感じては善惡邪正を斷制す。天の秋を以てみのる物は成實し、葉落つるものは黃ばみおち、虛實わかるゝに合す。羞惡の心は我に惡あれば恥しく思ひ、人に不義あるときはにくむ心を生ず。この恥の心深き者は、よく過を改め善にうつり、賢人君子の地位にも至り易し。無學の野人といへども、死すべき所にては死し、主君の難に當つては命を輕んじ、名を後世に擧る者あるは、此羞惡の心ある故なり。故に義の端と云ふ。智は天理の貞德にして心の神明なり。空々として衆理を妙にす。天下のことに感じては是非善惡の鑑となる。天の冬を以てかくし、天氣清明にして來歳春夏秋の根となるに合す。智の本體に是非善惡と云ふものありて分つにあらず。一物なくして虛明神靈なる故に、萬事萬物の形あらはれ情わかるゝなり。鏡の虛明にして一物なき故に物の形を寫すが如し。鏡は虛明なるのみにて神靈なき故に、物をうつすばかりなり。智は神明なる故に能く天下の事を司り物を成すなり。然れども鏡より外には智の象になすべき物なき

赤子云々―孟子公孫丑篇の上に今人孺子の將に井に入らんとするを見ては皆怵惕惻隱の心あり云々

主君の位―位は度なり

是天の元徳春を以て萬物を生ずるに合す。いかなる愚夫愚婦も、赤子の井に入らんとするを見ては、甚いたみかなしめる心生じ走りよりていだき救ふものなり。此時にあたりては、其赤子の父にうれしく思はれんとの心もなく、すくはずは不仁なる者と人にあしくいはれんと思ふ心もなく、其父母を知る不レ知の辨へもなし。此心を人に習ひ知りたるにもあらず、天機にうごいて不レ能レ己、みづからも不レ知處なり。故に是を仁の端と云ふなり。禮は天理の亨徳にして盛大流行の至神なりといへども、天下のことに感ずる時は恭敬辭讓の心となる。上下貴賤の分定まり、位品ありて相爭はず相しのがずして天下太平なり。天下太平なる時は物そなはる。天の夏を以て萬物盛長するに合す。神明の宮社に近付く時は自然に恭敬の心おこり。主君の位をすぐる時は、君ゐまさずといへども敬心生ず。一文不通の賤男賤女も、客あれば馳走したき心あり。飲食菓子に至るまで、多きを與へ少きをとり。よきをゆづりあしきを食するの事あらずと云ふことなし。故に是を禮の端と云ふ。義は天理

かはるが如し。仁義禮智信は天理未發の中なり。故に□に書す。喜怒哀樂は氣の靈覺なり、故に○に書す。惻隱羞惡辭讓是非は仁義禮智の端なりといへども、氣に感じて聲色に現る。故に○に書す。

人道

父慈子孝
君仁臣忠
夫義婦聽
兄良弟悌
朋友交信

仁は天の元德にして生理なり。其本體は無聲無臭なりといへども、感じて天下のことに通ずるときは慈愛惻隱の心となる。天下國家慈愛なくては一日も立ちがたし。

位す。木氣の神を元とす、故に左に書す。火は南方に位す。火氣の神を亨とす、故に前に書す。金は西方に位す。金氣の神を利とす、故に右に書す。水は北方に位す。水氣の神を貞とす、故に背に書す。元理感じ木氣流行して萬物生ずるを春とす。亨理感じ火氣流行して萬物長ずるを夏とす。利理感じ金氣流行して萬物收まるを秋とす。貞理感じ水氣流行して萬物藏るゝを冬とす。土は中央に位す。土氣の神を誠とす。しかれども土用は四季に應ずるが故に四隅に書す。相生ずるの序は木火土金水なり。火は土の母なれば、土は未申を盛位とす。これ天地鬼神の造化をなして無盡藏なる道理なり。

惟此無極の理二五の精妙合して人となり、明德そなはる。是を性と云ふ。性中おのづから仁義禮智信の條理あり。天の元の人にあるを仁と云ひ、天の亨の人にあるを禮と云ひ、天の利の人にあるを義と云ひ、天の貞の人にあるを智と云ひ、天の至誠無息の眞の人にあるを信と云ふ。例へば同じ水の流なれども、所によりて川の名の

誠は天の道—中庸に出づ

集義和書卷第六

○心法圖解

□は寂然不動の象なり。○は流行活動の象なり。□は理を圖し、○は氣を圖す。太虚は理氣のみ。天道は至誠無息なり。故に誠の字を中に書す。誠は天の道なればなり。その中おのづから元亨利貞の條理あり。是を天の四德と云ふ。

四德もと一理にして無方の神なれども、天地開け形象あらはれてのち、木は東方に

今の學者云々―前漢の張禹成帝に對へて曰はく新學小生道を亂り人を誤る宜しく信用することなかるべしと亦下文の義なり

は至誠純厚なり。小人たる者は質直朴素なり。後世の人の疑ふ所の法未だ無かりしばかりなり。其代の非にあらず。其民の罪にあらず。今の學者利害深く僞りをだにもまぬかれず。古の常人にもおよぶべからず。末代の君子たる人は驕奢利欲なり、小人たる者は姦しくして相凌ぎ、相諛ひて相僞れり。いまだ法を立つるにいとまあらず。況んや法は道より出るといへども道にあらざるをや。今の時に當りて大道をおこさんものは、學校の政を先にして、人々固有の道德をしらしめ道理をわきまへしむべし。法は望む人有りとも抑へていまだ出すべからず。誠に專にして無欲に至らしむべし。禮文法度はおこりやすきものなり、抑ふるとも後世必ず備るべし。立ちがたきものは誠なり。至りがたきものは無欲なり。たとひ周法大かた行はるゝといふとも、驕吝相交りて欲あり、多事博文にして誠なくば、周公孔子何ぞこれに與し給はんや。

いまだおかれざれば、父方母方おなじくあひ忌まず。世の中の風俗たること數千歲なり。義において害あらず。上古の聖神だにも、時ありて忌みたまはず。法に泥みて時を知らず大道を知らざる者は、太古の兄弟伯父姪夫婦たりしを甚非なりとおもひて、其時の聖神をば信ぜざらんか、百世といへども同姓娶らざるの周人を是として、其時の聖賢をのみ信ぜんか。先聖の後聖に劣れるにあらず、太古の民の末世の民より愚なるにあらず、後聖の先聖に優れるにあらず、末世の民の太古の民より知有るにあらず。それ法は時をもつて義ありておこれり。法をかりて後に背くは不義なり。日本神代王代武家の代、つひに同姓を忌むの法なし。法なければ從昆弟をめとりて不義といふべき樣なし。後世法をかれば再從昆弟を娶るも不義ならん。法なけれども從昆弟より近きは天理人情ともに忌出來るは無法の法なり。文明の時の人心に通じてしからしむるなり。上代は德厚くして文未だ開けず。末代は德衰へて文明かなり。此病あれば此德あるなり。上古の人は僞りなく利害なし。君子たる人

り。母方は從兄弟の近きといへども、服なければ本のごとく婚姻をなせり。姉妹の子は同姓ならずといへども、親近ければ服有り。かるがゆゑに忌むあり。再從昆弟の外は同姓たりといへども、服なければ婚姻の忌なし。是禮や上古よりはこまやかにして義備れり。末世よりは易簡にして禮缺けず。日本において後世聖主賢君繼ぎおこり給はゞ、此禮を以て至極とし給ふべきか。今の世においては、聖賢の君起り給ふとも、未だ此禮をもたて給はじ。同姓をゆるさば親きに及ばんかとの遠慮は、げにさも有るべき樣に聞ゆれども、往古よりの次第を見ればしからず。日本神代のむかしは、兄弟も夫婦となり給ひき。後世文明なるに隨つて、誰法を立つるともなく鳥獸に遠ざかり道理を知りて、兄弟を忌み伯父姪伯母甥をいみ來れり。今利心ふかき者、家財を他人にゆづらん事ををしみて、弟を聟とする者あるをば、人道にあらず禽獸なりといみ惛めり。法なく敎なけれども、人心の靈にて文明の時至れば、漸々久しうしてかくの如し。先にもいふごとく、從昆弟は他人の交のごとし。法

氣化云々—我諾册二神の如きを謂へり

君子小人の澤—孟子離婁下篇の語

てしかり。初よりしかるにあらず。天地ひらけ氣化によりて生れし人は、天地を父母として兄弟なり。男女有りて後父子あり兄弟有り、此時の人兄弟夫婦となるがごとし。しかるに萬物は明德なく、人は明德有り、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり。故に父子槃を共にせず、相交はらず。鳥獸と異なるの條理を本として、野處穴居の內男女別あるべき道理を知れり。上古の聖人此の明覺の知に基て、兄弟夫婦となるべからざるの禮法出來ぬ。天下兄弟相恥づるの知明かに禮普くしてのち、伯父姪叔母甥も快からざる萠あり。その次の聖人この靈明を本として、伯父姪叔母甥夫婦となるべからざるの禮法を立て給へり、兄弟伯父甥は天倫の親ちかく、長幼の禮深くしてかくのごとし。從昆弟は他人の始の如し。長幼の禮も朋友齒し相讓るがごとし。故に上古には忌なし。後世の聖人五服を叙でて、君子小人の澤五世にして盡くる所を見給へば、父方は再從昆弟までに服有り。いよ〳〵一本の親を厚うし、男女有別の禮を明かにせんがために、服のあるまでは婚姻不通の禮を立て給へ

が一二を用ひて同姓めとらずと過言す。實は如何ともする事なくして時所に隨ふなり。迚も全く用ひられずして時所にしたがはんとならば、何ぞ時、所、位の中を擇ばざるや。何ぞ全からざるの法をもつて衆に悖り、大同の道の行はれんとするめぐみを妨ぐるや。夫れ禮法は漸をもつて起るものなり。其間しふるものあれば、かならず大道を害す。伏犧神農黄帝の大聖、忌み給はざりし事を忌みてなさしめず、三皇の神聖いまだ行ひ給はざりし事を行ひ、これより後は此法に背くをもつて不義無禮とすといへば、先聖を非とするがごとし。謹まざるべけんや。然れども人情時變によつて時のしからしむるなれば、古に違ふにあらず。今の時人情進まず時變未だ至らず。何を以てか伏犧、神農、黄帝、堯、舜、禹を非として周を是とせんや。先に云ふ如く、周法を行はんと欲すとも迚も行はれざる處あり。是より後賢君相繼いで出世し給はゞ、姓を賜り族を別ち給ふべし。數代をへて時至らば、五服の忌を定め服のかゝる分は娶らざる様になるべし。是則ち周以前の列聖の古法なり。之だに漸をもつ

て不㆑及ば、輕薄無實の人となるべし。孟子の曰はく、堯舜を師として誤てる者はあらじ。其上今の學者周の同姓を忌むの法を行ふといへども、周の法にもかなはず。如何となれば、尊氏の世の末より織田家豐臣家に及びて百餘歳このかた、天下の武士の姓氏紛れてしられず。たま〳〵系圖をなすといへども、證據なく傳なくして、文字に依て彼は此ならんといへるばかりなり。戰國久しかりしより今に至りて、數代の間に大形系圖を失へり。又姓氏なき者は心々の氏を名のり、姓氏ある者も我が好ましき氏にかへぬれば、同氏とても同姓にあらず。天下氏系傳へて慥なるは、千人の內纔に十人なるべし。それだに中間娘の孫を養子とし、妹の子を跡に立つればいつのほどにか他姓となりぬ。十人の中にも七八人は慥ならず。公家は昔より動き給はで、慥なる樣なれども、これも藤氏の家に源氏を養子にし給ふ如くなれば、又慥ならず。目のあたりしられたる同氏の中を以て、同姓と名付て忌む事をすれども、周以前の五服の忌にも及ばず。今の勢にては立ちがたし。立たざるをもつて、百

五服―斬衰三年、齊衰二年、大功九月、小功五月、緦麻三月を五等の喪服とす

槇雄ー槇尾の誤、山城國愛宕郡高雄の傍に在り

獵較ー獵を相競ふなり孟子萬章下篇に出づ

比屋云々ー軒を比べたる人々悉くの義

者の一流として、彼一派の者のごとくするのみなり。槇雄の僧は戒を持ち、禪宗は座禪するがごとし。世俗と二になりて孤獨の道となりぬ。異端と相爭はんのみなり。何の時にか道を行はんや。それ慈父は幼童と共に戯れ、不レ知不レ識善を導き、知覺のひらくるに隨ひて、ともにおとなしく成るがごとし。聖人は俗と共にあそぶ。魯人獵較すれば孔子も亦獵較す、衆とともに行ふをもつて大道とす。善なるべき時は衆とともに善なり、時至らざる時は衆とともに愚なり。故に學者俗を離れず、道衆を離れず。徳至り化及び、行はるべき時は天下とともに行はる。衆勸めて悖るものなし。昔堯舜の民は、未だ三百の禮儀を見ず三千の威儀を行はずといへども、渾然として禮儀の本全し。比屋可レ封の善人なり。純厚朴素眞實無妄の風俗なり。周の禮儀備りし時の士民よく及ぶことあたはず。周何ぞ上古の至治をねがはざらんや。時文明に徳衰へたれば、やむことを得ざるの義なり。堯舜周公共に大聖人なり。みな時なり。然れども今の人堯舜を學んで不レ及とも、誠に近き風俗ならん。周を學び

良知良能—孟子盡心上篇に見ゆ

俗貴賤はいまだ聖學の道理をだにも不レ聞、況や法を行はん事はおもひもよらず。縱ひ其中すこし法に心ある者有りとも、彼百人の童蒙の中の一二人にもしかじ。たとひ世俗より學者にしふるとも、學者知あらば許容すべからず。況や世俗の中より願ふ者なきをや。しかのみならず世俗の人いまだ學を不レ聞、いまだ法を不レ行といへども、學者の道を任ずると思ふものよりも人がらよき者あり、天性の德のすぐれたるあり。今の學者は物知りたるばかりにて、彼好人にはおよぶべからず。學者世俗のいまだ知らざる道學を學び、いまだ行はざる禮を行ふことありといへども、數代の習の汚れをも不レ洗、利害をだにも免かれざる有り。意氣甚高くして世俗を見下すといへども、實は平人にも劣れる事あり。毀譽利害根深ければ、格すべきことあれども、至情を告げ難し。世俗みな良知良能あれば、學者の非を見ることこまやかなりし心に竊に慢り輕しめらる。しかのみならず。時處位にあはざる法を持來りて行はんとす。天下千百年のならはしにあらず、神道王法の教にあらず、只唐風の學

九牛云々—極多數中の極少數を喩ふ漢書司馬遷傳に出でたり

うしなひなば、後世かならず時を知らざるの笑はれあらんか。よく幼童を養育するものは、我童蒙に求むるにあらず、童蒙我に求む。今十五以下の童子百餘人を聚め敎ふる者あらん、其中の秀才一二人、知覺はやくひらけたるありて、成人の法を立てんことを望むとも、師たる者知あらば、一二人のために大勢の能はざる事をなすべからず。知覺はやき者には、いよ〳〵内に省み實をつとむることを示すべし。衆童の才長じ知ひらけて、もとめ催す志をむかへて、大人の道を習はすべし。しからば秀才の者も、才にひかれず識に滯らずして實の德をなすべし。衆童はなほ以て明かなるより誠あるべし。若秀才を好して衆童のあたはざることをしひば、秀才は己が人に優れるにほこり、才にはせ知識にひかれて、つひに不祥人とならむ。衆童は學に倦み道を厭ひて、學校の政のやみなむことをねがふべし。其君師さり其時過ぎなば、あとかた無くならむか。今我同志の人々と他家の格法者とは天下の秀才なり。此輩の聖人の法を行はむことを望むことは、九牛が一毛なり。天下の世

きて美惡をわかつ心あり。しかれども未だ義不義を辨へず、善惡是非をしるには及ばず。六七八歳におよびて辭讓の心生ず。故に聖人八歳に至るを待ちて小學に入れ給ふ。しふることとなくて、其固有と時とにしたがふなり。五六百歳このかたの世俗は五六歳の童の時のごとし。先學校の政をもつて是非善惡を辨ふる知をひらきて、恥をしるの義を勸むべし。數十年數百歳を歷て、後の君子を俟ちて禮儀をおこさしむべきなり。伏犧神農の德の周公孔子に劣れるにあらず、周公孔子の知の伏犧神農に優れるにあらず、時とともに行ふなり。只時に中せざるをおとれりとし、時に中するをまされりとすべし。三皇五帝三王周公孔子、共に時を知りて時に中するの知は同じかるべし。德は三皇五帝をすぐれたりといふべし。天地ひらけ人道あらはれて、則ち時に行ふべき禮ならば、何ぞ三皇五帝同姓をめとらざるの法を立てずして周を待つべきやとの學者、時にあらざるの禮をしひつとめて、人情時勢に戾り、たまく道の興るべきめぐみあるに、實をつとめずして末をとり、つひに本末共に

期數—冠、婚、喪、祭、等に就て年月を限定する事

義の端—孟子に見えたる四端を謂ふなり

とす。黄帝の時、禮樂の器現れ文章略見えたりと雖も、未だ期數の定なし。五帝の時、禮儀法度大概ありと雖も易簡にして行ひ易し。人民の情に逆はず、德化により善に勸みて、人の欲するに隨つて制法出來ぬ。夏商を歷て周に及び、文明の運極り、器物飲食大に足り無事至りてなすべき事なし。茲に於て人情を溢れしめざるそが爲に、禮儀の防ぎ多く出來、數期こまやかにかたし。皆時所位に從ひて行ふものなり。今の時器物多く人奢れる事は、周の盛世の豐なるにも越つべし。然れども人民の心の禮儀に習はざる事は伏犧の時の如し。伏犧の民は禮犧を不習といへども、質朴純厚にして情欲うすく利害なし。今の人情欲厚く利害深き事、其習十百年にあらず、根固く染深し。俄に世俗の人情を抑へ急に利害を妨げば、道行はるべからず。今の世の民を教ふることは、幼少のものを導くがごとし。童蒙は養うて神知の開くるを待つべし、世俗は學を先にして禮儀を欲するを待つべし。三四五歲の童は、義の端すこしあらはれて物恥する所あり、知の端すこしひら

五帝ー數說あり下文は孔安國の尚書序に據れり

下の數限なき世俗の、人情を知らず時勢を考へずして、時至り勢よしと思へるは不知なり。今天下の人皆聖人と同姓同德なれども、未だ聖人の學を不聞。貴賤に衰世の俗に習ふ事百千歲なり、何ぞ禮儀を習ふに暇あらんや。古の聖人伏犧氏よりこのかた相繼で起り給ふ。其間近きあり遠きあり。伏犧より神農に至る迄一萬七千七百八十七年、神農より黃帝まで五百十九年。黃帝有熊氏在位百年なり。是迄を三皇と號す。小昊金天氏在位八十四年、黃帝の子なり。顓頊高陽氏在位七十八年、黃帝の孫なり。帝嚳高辛氏少昊の孫なり。在位七十年にして崩ず。子摯位を繼て不德なり。九年にして廢せらる。天下帝摯の弟放勳を尊みて帝とす。此帝堯なり。帝堯陶唐氏在位一百歲なり。帝舜有虞氏在位四十八年なり。是迄を五帝と號す。合せて三百八十九年なり。禹湯武を三王と號す。禹より湯に至るまで四百三十九年なり。湯より武王に至る迄六百四十三年なり。伏犧氏起り給ひしより始て學ありと雖も、未だ禮儀法度なし。神農氏繼ぎおこり給へども、耕作醫術の民を養ふべき事をさき

集義和書　卷第五

○書簡之五

格法―忠實に法則を嚴守する者

一　來書略。同姓を不レ娶の法、未だ日本において掟なき事なれば、從昆弟よりは俗に隨ひて不レ苦と許し給ひ候へども、近年同姓を忌むの義を聞傳へて、其禮を守る者少少出來候。是程までの禮儀を知ることも又大義なり。少しひらけたる知覺を空くして、不レ苦と許し給はんことは本意なきことなり。且從昆弟を許さば叔母姪にもおよびなん。それより後は禽獸に近くなるべし。只此勢に從ひ、儒法としてかたく同姓を忌む禮儀の則を、廣く仕り度き儀に候。

一　返書畧。誠に願ふ處なり。然れども此禮を云ふ者は、貴殿など親み給ふ人十人か二十人か、扨は格法の學者二三十人の外には過ぐべからず。纔に相交はる人を以て、天

三月不違仁―論語雍也篇に子の曰はく回や其心三月仁に違はずと

ひて積んで德となる事に候。經傳を見、弓馬禮樂を學び自己の非をよく知り、過を聞くことを悦び、五倫道ある等の事、みな善を行ふにて候。不義をにくみ惡を恥づるものゝ吾にあるを、天眞と申し候。これを主人公としてなす事は、皆善にて候。これを必ず事とすることありと申し候。

一 克己復禮は、天理人欲ならび不レ立候。禮は理なり己は私なり。私に克ちたる所則ち天理なり。則ち天下我が心の内にあり。尤も平人の己、學者の己、賢人の己、高下淺深各別たるべく候。大方御書付の如くにて候。「三月不レ違レ仁」の語は克己の後たるべし。四時三月にてうつりぬれば年中の事なり。年中たがふ事なしといへども、不レ違と候へばいまだ力いり候。化して聖と成る時は、不レ違の力もいらず、無心にして天理流行いたし候。

三省—論語學而篇に曾子曰はく吾日に三たび吾身を省みる云々

勿正—孟子公孫丑の上篇に必ず事あり正す勿れ心忘るゝ勿れ助け長ずる勿れと

るは、道器一貫義欲一致、天道無心に動に同じきにてあるべく候。口をひらけば則となり、足をあぐれば法となること、其中に御座候。

一　曾子三省、初學の時の事たるべく候。如此人倫日用において篤實に受用ありし故、やがて大賢に至り給へると知らせたる者にて有るべく候。忠は己を盡すなり。我事には誰も心を盡し候。人のためには十分不盡候。人我へだてあるは仁ならず候故に、仁に至るの受用にて候。朋友は眞實無妄の天道を父母としたる兄弟なれば、其誠を思ひて相交るを信と申し候。内外一なるや一ならざるやと省るにて候。傳へたる道理を受用せざるは學者の病にて候。師友に問ひ、學びたる所を日用に試むるや、受用せざるやと省みたまひ候。

一　勿正はしるしをいそがざるなり。勿忘は怠らざるなり。勿助長は才覺を用ふべからざるなり。百姓の農業をつとむる如く、職人の職をつとむる如く、いそがずおこたらず才覺を用ひず、常になすべき事をして自得を待つにて候。入德は善を行

石針―磁石針

入として云々―中庸の語なり

五聲―宮、商、角、徵、羽

十二律―六律六呂の稱

に至りたるにて候。是よりは少の淺深熟未熟は候へども、生知の聖にかはり無く候。孔子の志は吾人にあらば、大方三十にして立つの心地たるべく候。石針の南北をさす如く、義理より外に他念なきにて候。立は天地人とならび立にて候。不惑は學士の天地萬物にまどはざる如き事にては無く候。賢人の心を不動をも越えて、死生順逆一致に候へば、富貴貧賤夷狄患難、入として自得せずといふ事なきにて候。知天命は知行するの知の意にて、天命を吾ものとするなり。陰陽五行も我なすなり。運氣もわれより進退すべき所御座候。他の死生有命、富貴在天等の命を知るにてはなく候。耳したがふは精微を盡す所たるべく候。五十知天命までは、廣大に至る處にて候へば、言語を以て解せられ候、六十耳順よりは、言語文書の及ぶところにあらず候。從容として道に當る。形色は天性なり。形をふむの位たるべく候。耳を以て口鼻眼四躰をかね給ひ候。一身の中にて神明に通ずるものは先耳なり。五聲十二律の精微を盡すも耳にて候。七十にして心の欲するにしたがつて矩を踰えざ

孔子云々—論語爲政篇に子曰はく吾十有五にして學に志し三十にして立ち四十にして惑はず五十にして天命を知り六十にして耳順ふ七十にして心の欲する所に從つて矩を踰えずと

とは、初學より德の力にて候。眞實は明かなる所より生じ候。町人は武士よりは臆病なる者と申し候へども、利を見ること明かに。好む心眞實に候へば、風波をしのぎ遠路をへて、危き難をかへりみず候事は、武士よりもまさり候。君子道を見ること明かに、德を好むこと眞實に候へば、如レ此に候。それより前は、さし當りてはしひてつとむる事もなくて不レ叶候。

一　孔子十有五より七十までの次第の事、他の聖學をする人の受用にとりて申し候はゞ、志レ學は道を學び德に入らんと志し、心内に向つて獨を愼むにて候。三十にして立つは心志堅固に成つて、文武の才德成就したるにて有るべく候。四十にして惑はざるは、守り務むるの力いらずして、心を動かさゞるの位たるべく候。五十にして天命を知るは、天道に順從し運命に出入して、造化を助くる大賢の心地たるべく候。天をもうらみず人をもとがめず、四時に應じて小袖かたびらを用ふるごとく、順逆に好惡なきこと其中にあり。六十にして耳したがふは、大にして化するなり。聖人

ば不レ苦候。拙者若き時、田舍に獨學いたし、聖言を空に覺え、山野歩行の時も、心に思ひ口に吟じ候へば、意味の通じがたきも、ふと道理うかみよろこばしく候ひき。左樣の事にて候や。たゞに事物の不審に心をつくさるゝ事は如何と存じ候。心上意欲の妄をはらひ候事、當然の工夫にては候へども、そればかりにて凡根の亡び候事はなく候。意欲の妄は皆凡心に付きたるまどひにて候。凡心は意念私欲の泉源にて候。其本をたゞずして末ばかりをさめては、終に功なきと申す事にて候。我を他人にして我人がらの位いかんと見候へば、心上の受用は大方よきも、全躰の人がら小人なる者多く候。此凡位をまぬかれて、人がら君子の心地に近く候へば、凡根より出づる意妄はわすれたるが如く、ひとり無く成るものにて候。それより前は、身のあつ火をはらふと申す諺の如く、心上に浮み候意妄は先却くるにて候。惑解け心の位のぼり、凡情をはなれ君子の地位に至り候を、入德と申し候。

一　初學より德の力は及びがたからんとの事、尤もに存じ候。眞實よりおこりてなすこ

器に云々ー孝經盈を捧ぐるが如きの義か謹愼するなり

己氣力ありとも人の從ひがたき事はなさず。世の道學の小道なる事、言はずして知りぬべし。

一　來書畧す。

返書略す。

一　器に水を十分入れて持するたとへの事、人心の危を知りて、怒りにうつらず欲に落いらず。本心の靈明を不ㇾ失事、右のごとくに候はゞ、よき受用たるべく候。しかれども大事と思ふ念を常に存するにてはなく候。常に心とすれば、善ながら本心の靈明をふさぎ候。主意眞實に立ち候へば、常は無心にて、事あればかならず用ひられ候。天下生を好まぬ者はなく候。身を大事に存じ候主意まことに候。故に其念慮はとゞめず候へども、危き所にのぞみては必ず愼み候。

一　事物にうたがひある時、心を盡し工夫被ㇾ成候へば、自得の悅御座候由、人の生付種々候へば、左樣にて心の煩にもならず氣のとゞこほりもなく、益を御覺え候は

道は同なり―德を得義を宜と解する類の一說なり

一再書略。廣くわたり候とは、いか程の書を讀みてよく候や。

返書略。予が廣くと申し候は、無極の理に體して、心を是のみと止めざるを申し候。古へ書のすくなかりし時に却つて聖賢多し。經傳は貴殿の心次第に、孝經大學中庸にてもたりぬべし。論語孟子にても足りぬべし。五經にてもたりぬべし。其中十が七八までも解し殘すとも妨なく候。要は書中にあらず我心にあり。大意を得る時は天下に疑ひなし。何ぞ書の文義を事とし候はんや。

一來書畧。道本大いなり。何ぞ大道と稱し候や。

返書畧。世の道をいふ者すこしきなり。故に大道の名あり。大道とは大同なり。俗と共に進むべし、獨拔んづべからず。衆と共に行ふべし、獨異なるべからず。他人惡事をなさば己のみせざるにてよし、人を咎めそしるべからず。善の行ふべき事あらば己一人なすべし、人に責むべからず。三軍の將の士卒と共にかけひきして、獨夫の勇を用ひざるが如し。衆のしたがふべき氣を見ては先だちてすゝむる事あり。

本行—本然の主要目的

から威あり。家に主人あると主なき家とを見て分明なり。

一來書略。經書を見候に、始中終悉く解せんと仕り候へば、心氣勞して却て塞る樣に覺え候。一經の中、肝要の所を見得て可なるべく候。

返書略。始より終まで句々皆解せんとするは、書を解するにて候へば、心を勞して受用の本意にあらず候。又要を得たりと思ひて、他を疎かにするも弊あり。情性を吟詠し道德を涵養する事は詩のみにあらず候。道理本行は我心なり。經傳は我心の道理を解したる者なり。經傳をよみ得て悅ぶものは、我心の道理を見得たればなり。我心の道理は無窮なり。書中の一章を肝要として止るべからず。又甚解すべからず。甚解する時は、書を本行として我心を失ふの弊あり。吾心の位と學術の進むとにしたがひて、受用の要と思ふ所は時によりかはりあるものに候、故に時に我心に受用の要を得ばよきなり。廣くわたりて道德を涵養し、日新の功を積みて氣質を變化し給ふべし。

心を動さず—孟子公孫丑の上篇に此語あり

のごとしと云へり。速に改むるを尊しとす。善是より大なるはなし。平人より君子に至るの道路なり。たとひ氣質靜重なりとも、内に德業の本たる誠なく、外過を改むるに憚らば、一旦威重なるが如くなりとも、終には恐るべきことなきの實を人皆知るべし。たとひ氣質輕々しくして浮氣に近づくとも、忠信を主とし過を改め善にうつらば、浮氣の煩ひ除きて、天然の淸く明かなる本に歸るべし。人皆是をよみして其誠あるに恥おそるべし。威これより重きはなし。學これより堅きはなし。君子の重きを以て學をかたくし、威を以て外邪をふせぐ事は文武の道なり。恭敬にして禮儀正しきは重にあらずや。死生貧富の間、其心を動さず其志を奪ふべからざるは威にあらずや。氣質の輕重によるべからず。己にしかざる者を友とし親み、今の凡位を安んずるは平人の常なり。賢を師とし善を友として、過を改め義に移るは、日新成德の業なり。只學者の憂は不レ重にあり。不レ重者は内に主なきが故なり。生付の靜なると動とにはよるべからず。心に主あるを重しとす。主ある時はおのづ

己に云々―論語學而篇、前掲君子章の下文

日月の食―孟子公孫丑の下篇に出づ

り。氣質輕く浮氣なる者は、あなどりやすくして威あらず。學ぶ所の道も得心たしかならず、故に學者の人品靜重にして威嚴なるは、たとへば田畠の地福よきがごとし。しかれどもよき種を植ゑざれば、地福の厚きも詮なし。主忠信は美種を植うるなり。己にしかざる者を友とせず。過つては速に改めて憚らず、吝ならざるは、耕作の道をよく勤むるがごとし。

返書略。此章の文義說得がたし。此發明聞えやすきのみ。予が見候は誠の心にあるを忠といひ、事に行ふを信と云ふ。中心を忠とす。天理自然の誠心にありて、空々如たるものなり。所謂未發の中なり。人言を信とす。人の言はかならず實あるべきものなり。僞るものは私欲これを害すればなり。忠は德の本なり。信は業の始なり人身の主なり。故に忠信を主とすといへり。心友を友といひ、面友を朋と云ふ。人を擇び捨つるにあらず。己にしかざる者をも面友として、禮を以て交をなすべし。小人をしたしみ、心友として德をそこなふべからざるのみ。君子の過は日月の食

君子云々——論語
學而篇の語

君臣、夫婦、兄弟、朋友の交は、形より下なるの器なり。父は慈に子は孝にして父子親あるは、形より上なるの道なり。故に五倫の交において、道を行ひ徳をなすは下學上達なり。理を窮め性を盡し、命に至ること其中にあり。五倫を本とせずして、空に理を窮め性を見るは、異學の悟りといふものなり。高しといへども虛見なるが故に、徳に入る業を立つることあたはず。其悟と云ふものも眞ならず。人道を明にせざるが故に造化を不レ知。造化の神理を辨へざるが故に跡のみ見て惑へり。下學せずして上達を求め、上達も亦得ざるものなり。

一來書略。此比末書にて「君子不レ重不レ威」の章の說を得候。君子は學者の稱なり。學問は學んで君子となるの道なれば、學者を指して君子といへり。在位の君子と云ふも同じ理なるべし。古は人の上たる人は皆道德あり。故に在位の人を君子といへり。重と不レ重とは氣質にあり。生付靜にして輕々しからぬ人は、おのづから人の狎れあなどらざる所あれば、威あるが如し。學ぶ所の道も、能く受用して堅固な

返書畧。世中にしわざこそ多かるべきに、人を斬るを事と仕り候は、不仁なる心にて候。其不仁の心に天罰當るにて候。我等もする爲物斬りたる者の子孫絶えたるを、二人まで見及び候。常の武士にて候へば、斬らざるとても誰謗ふる人もなく候。好んで上手をするゆゑにこそ、主人も命ぜられ朋友も頼み申す事に候。しかのみならず能く斬る者あれば、罪の輕き者もきらるゝ樣なるあやまりもある體に候。其上すゑ物によりて、打やうあらみの昔にかはり、當分きるゝ樣にばかり仕り候故、後世まで用に立ち候はすくなかるべく候。古は今のやうに樣物は不ㇾ仕候へども、人々かねよき刀をさし。今に傳へて古身は重寶と成り候。

一來書略。下學上達の義、下人事を學んで上天理に達すと承りて、理通ずるが如くに候へども、受用となり難く候。

返書畧。易に、形より上なる者を道といひ、形より下なる者を器といへり。此語にて上下のこゝろ分明に候。總じて形色ある者は皆器なり。故に五倫も器なり。父子、

あらみ—新刀

下學上達—論語憲問篇の語

達尊―孟子に天下に達尊三あり爵一齒一德一と

する物―罪科ありて斬に處せらるゝ者

く候。師となるうへは如此あるべき道理にて候や。

返書畧。天下に達尊三あり。德と年と位となり。朝廷において、衣冠正しく貴賤の次第を分つべき所にては位ある人を尊び。鄕里の常の交にて、孝弟を專とすべき所にては年を尊び、世を助け民に長たるの德を慕ひ、迷ひ辨へ心法を明かにする所にては德を尊ぶなり。故に古は王公といへども民間の賢者に降りたまへり。しかるに彼一藝の師たる者、自己の分を辨へず、小藝をしらで道德仁義も同じ事の樣に心得たるは味き事なり、貴人も亦あやまり給へり。有德は禮を以て來し、小藝は祿を以て招き給ふべくば、おのづから爭ふ事あるべからず。

一來書畧。世間に、する物斬りたる者の子孫は絕ゆると申し候。罪ありて斬らるゝ者なれば、我が斬らでも人これを斬り候。昔物語に、竹の雪をふるはしめて、其下知したる者にはかゝらで、おとしたる者にかゝりたる事など申し候へども、理窟にて候へば、心得がたく候。

光に云々—老子の和光同塵に出でたり

候。古の心喪とまうすは、身に服を著せざるばかりにて、作法はみな喪の掟と見え申し候。今時心喪をなすと申され候は、尤も志は殊勝にも候へども、しかと仕たる事にてはなく候。大道を心とする者は、たとひ其身は喪を勤むべき道を得たりとも、時の人のなるまじきことなれば、光を和げ塵に同じくして、萬歳を見ること一日のごとく、誠を立て無事を行ひ、業を創め統をたれ、衆と共に進むべし。己ひとり名譽をなすべからず。衆のなすまじき事を行ふ者は、天下の師たるべからず。法に落ちて一流となり、俗とはなれては、いづれの時か道をおこすべきや。後世人の氣體つよく情厚くなりたる時は、予が言を薄しとし、そしる者あるべし。誠に願ふ所なり。只一念獨知の所において、天を師とし神を友とせば、法のごとく勤を以てすぐれたりとせず、やはらぐるを以て惰れりとせず。名をさけ氣勢をしづめて誠を思ひ給はゞ、幸甚たるべし。

一　來書略。今の世多藝小術の者も、師となれば郡國の君と同座し、無禮至極なる者多

律宗—戒律を所依とする佛敎の一宗

かせ奉公人—束縛を受くる奉公人の義歟

一來書略。三年の喪は今の人の情には不レ叶と承り候へども、律僧行人などを見候へば、又成るまじき事とも不レ被レ存候。淨土宗日蓮宗などの中に居ては、立てられまじく候へども、律とて別に立て候へば、同じ凡僧ながら戒をも持ち候間、喪も居處衣服飮食に至る迄別に出て仕り候はゞ、とかく三年は勤め過し可レ申候。又心喪とて、外むきはかはらずして心に喪を勤むると申し候へども、是は一向に急度立つるよりも成りがたかるべきと存じ候。

返書畧。律僧行人などは、喪の勤ほどなる事もある躰に候。然れどもそれは後世の極樂へ生れんといふ迷ひに牽かれ、又は渡世のためなどに、みな據所ありてなす事に候。今の百姓の律僧の一食と申す物をあたへ候はゞ、よき振舞と可レ存候。坊主には大方貧しき者なり候へば、しひて苦勞とは存じまじく候。又不婬戒などは、律僧ならでも、かせ奉公人などは大方無二是非一つとめ候。拙者も氣根よき時分は、名聞まじりに三年の喪は勤むべきと存じ候ひき。いかにも貴殿の氣ざしにては成り可レ申

盛にして精神つよき者は、厚味を忌むのみならず。蔬食といへども腹にみたしめず、夏涼しくせず、冬暖にせず、著て安からず、寢てやすからず。これは古の人の氣血健に筋骨つよく、無病にして、精神盛なりしかば、聖人其人の位に依りて制し給へる法なり。今の世の人此法のごとくつとめば、生を滅さんこと眼前なり。生を養ふ時は喜怒の情發し易く、生樂の念動き易し。常の食を食し常の衣を著し常の居を安んじて、不ﾚ怒不ﾚ笑不ﾚ樂事は、聖人、大賢、さては天質の美にあらずしては、いかで成るべきや。このゆゑに古の人喪にはかならず法あり。法なくては勤むることあたはず。今の人其法は身の位に不ﾚ叶。又法を不ﾚ立しては行はるべからず。しかればは俗にしたがひ給はんより外は有るまじく候。世俗定法の五旬の忌の間も、元氣をそこなはざるためならば、藥を服用する如く思ひ、折々干魚などを用ひらるべし。貴殿年寄り給ふとても、いまだ五十にて候へば七十の人の如くにも成るまじく、又壯年無病の人の樣にも成るまじく候。其間御料簡あるべく候。

相火—情慾

一來書畧。喪の中魚鳥を食せざること、生類を忌むの義ならば、佛家の流に似たり。祭禮に肉を用ふる時は、又生類を忌むにてもなく候。拙者若く無病なりし時は、年中蔬食水飲しても何とも不レ存候ひき。近年は年寄り病者に成り候故か、五日生魚を食せざれは氣力乏しく、十日食せざれば腹中あしく成り候。か樣にては、三年の喪はいふに及ばず。三月も成り申すまじく候。何とも辨へがたく候。

返書畧。喪に一の主意あり。憂のうちなればすべて靜にして事にあづからず。肉食の味を求むるも、樂びの類なれば食せず。蔬食して命を養ふのみなり。只酒肉を忌むのみならず、五辛其外何にても相火を助け精を增すべき物を食せず、腎水堅く閉て人道の感をいださじとなり。蔬食味なければ腹にみたず、力なければ杖つきて起居す。喜怒ともに發することを不レ得。これ皆壯年の者生樂をふせがんがためなり。故に老いて小兒のごとくなる者は、肉を食し酒を飲む。たゞ喪服の身にあるのみなり。病人も又しかり。これを食して樂みとせず。只生を養ふばかりなり。氣血

終を愼む―論語學而篇に曾子曰はく終を愼み遠きを追へば民の德厚きに歸す

伏犧神農の代には、三年の喪なく哀情數なし。心地光明にして飾なかりき。仁勇無欲は伏犧氏の時に生れて、必ず尊びらるべし。禮の格法一事を以て儒者の道を盡せりと思ひ、凡情の名利伏藏するものは、堯の代にいれらるべからず。貴殿此格法者のそしりに逢うて、天性の德を廢せんと思ふは大に不可なり。それ喪は終を愼むなり。祭は遠きを追ふなり。民の德厚きに歸す。尤も人道の重んずる所なり。然れども喪祭ともに時處位をはかるべし。只心の誠を盡すのみ。格法に拘りて不ㇾ叶をしひ、不ㇾ能をかざらば、必ず其本をそこなふべし。格法の儒者の世に功ある事すくなからず。予が如きものも恩德にかゝれり。しかれども心法にうときが故に、自己の凡情を不ㇾ知。又行ふこと日本の水土に叶はず、人情にあたらず。儒法をおこすといへども、つひに又儒法を破る事を知らず。貴殿三年の喪の法はあたはずとも、心情の誠は盡し給ふべし。追ㇾ遠の祭も、又なるべきほどの事を行ひて、自己の誠を盡し給ふべし。

格法にたへざる
し式作法を行ひ
得ざる

ず。これ哀情餘ありといへども、氣根弱く堪忍の精なきゆゑなり。況や哀情の薄き者、つとめてなすべきや。たとひ少しは哀情ありても、氣躰弱く病める時は、養生よりおのづから薄くなりゆくものなり。又人の氣質品々あり。生付の得たる方には、つとめも人に異なり。禮儀の法は得たれども、利心深き者あり。仁愛ありて人を惠み財ををしまぬ者も、禮法には疎かなるものあり。勇武あれども不仁なる者あり。才覺にして眞實薄き者あり。如此の人々、己が生付の得たる所に自滿して、足らざる所をわきまへず、互に相助くる事あたはざるのみならず、却つて相爭ひ相敵とす、貴殿は勇なれども、仁を好んで人を愛し給ひ、利心すくなし。仁と無欲と勇とは、道德において長ぜるところなり。禮の格法にたへざることは、流俗の習にして、天下みなしかり。貴殿一人の罪にあらず。一の不足を以て三の德を廢すべきことは、上世といふともあるべからず。況や末代においてをや。貴殿の德を以て上代に生れ給はゞ、必ず禮にも厚かるべし。それ太古には禮の格法なし。只誠に專なり。

返書略。古人は欲薄く情厚く、世事すくなく、氣力つよく無病なりし故に、三年の喪をつとめられ候。いまだ三年を不足と思ひし人あり。又少しはつとめて及びたる人もあり。後世の人は世間多事にして、欲の爲に心を奪はれ、情薄く氣力弱し。このゆゑに勤めてなりがたく、企ても及びがたし。大國だにもしかり。況や日本は小國にて、人の魂魄の精うすく、堪忍の力弱し。聖人おこり給ふとも、日本の今の人には、しひて三年の喪をなさしめ給はじ。世のならはしのくだれること千載に及びぬれば、今の世に生れては、道を悦び法を行はんと思ふ志ありとも、氣力叶ひがたかるべし。賢君繼ぎ起り給ひ、世事次第にすくなく、人の利欲年々薄く、禮儀あつき風俗と成りて豊ならば、風雨時をたがへず、寒暑節を不レ失して、物の生長かたく成りなば、人の形躰も健になりて、人情厚くなるべし。然らば喪のつとめのみならず。萬事の行業厚くなりて、其世の一年は今の百日よりも勤めやすかるべし。今の世愛子に別れて、五年七年歎き暮し、病氣になる者も、平生の事は喪の躰なら

誠は天の道—中庸に誠は天の道なり之を誠にするは人の道なりと

興せば珍らしかるべく候。

一 來書畧。「主二忠信一」の語、諸儒の說を聞き候といへども、文義に依りて理を云ふ所はきこえたる樣に候へども、今日の受用に取りては、しかと得心仕りがたく候。

返書略。大學の傳に誠レ意といへるは、則ち主二忠信一の工夫なり。主二忠信一は本躰の工夫なり。誠意は工夫の本躰なり。主二忠信一は未發の時に誠を養ふなり。誠意は已發の時に誠を存するなり。誠は天の道なり。誠を思ふは人の道なり。誠を思ふ心眞實なれば、誠則ち主となりて、思念をからずして存せり。是主二忠信一なり。又先儒の說に、眞心に發するこれを忠といひ、實理を盡すこれを信といふといへり。此解おもしろく覺え候。

一 來書略。親の喪をつとむるは、學者の大義と承り候へども、行ふこと成りがたく候。少し道を悅び候甲斐もなく、恥しく存じ候間、一向に學をやめ申すべきと存じ候へども、之も又御恩空くするにて候へば、何とも辨へがたく候。

釋奠—儒家にて古聖賢を祀る儀式

の類にてあるべく候や。

返書略。古來日本に用ひらるゝ禮樂、官位、衣服の制にいたるまで、そのかみ遣唐使、もろこしより習ひ來りし聖代の遺法なれば、これすなはち儒法なり。喪祭の事は古は神道の法ありき。中比佛法に移りて神道絕えたり。社家に少し殘れる事ありといへども、平人はとり用ひがたき樣にいひならはして、世人よるべき所を知らず。予は年來神道により行ふべき喪祭の法だにあらば、用ひたく候へども、成りがたきよしに候へば、無二是非一候。扨は儒法と佛法と、古より人々の心のより次第に用ひ來り候。佛法は釋迦より初めて火葬にしたる事なれば、こと〴〵く火葬なるべく候へども、貴人と社家とは大方土葬にして、髮をも不レ剃者あり。是又儒法なり。上代にも神儒佛まじへ用ひられ候故に、東照神君も、神儒佛三ながら用ふと宣ひ候。然れば上代、武家共に用ひ來れり。何ぞ作ると可レ申や。中絕して見なれざるゆゑに、夏の虫氷を疑ふにて候。古は日本にも盛んになりし學校の敎へ、釋奠の祭なども、中

くづをる—弱り果つるを云ふ

くゝりつきて—一致して

ば其流にそしられ、本なき惡名をかうぶれり。行ふ時は身くづをれ、武士のつとめもならざる樣なれば、實は不忠にも陷るなり。道は五倫の道なり。就中忠孝を學ぶといへども、忠孝の實はなきに似たり。道に志なきにはあらずと云へり。是非なき事に候。今の時大に志ある人は、たとひ其身根氣つよく愛情ふかくして、三年の喪をつとむべき者なりとも、人の師父兄となりて子弟をみちびくべきならば、己ひとり高く行ひ去りて、人の續きがたき事はすべからず。くゝりつきて衆と共に行ふべし。武將の道も同じ。一人ぬけがけして高名するは獨夫の勇なり。人に將たる者は、總軍勢のかけひきすべき程をかんがへて進退す。己が馬の速きが爲に、ひとり往かず。俗に異なる者は一流となりて俗をなさず、天地の化育を助くべからず、終に小道となれり。異端と是非を相爭へり。道の行はれざる事常にこゝにあり。俗にぬきんづべきは、民の父母たるの德のみ。

一來書畧。天子にあらざれば禮樂を不レ作と候へば、儒法の喪祭をおこすも、禮を作る

至治の澤─結構に治まる御世の御陰

めぐみ─芽生

人の罪にあらず。人情時變を不レ知してしひる者の過なり。物極れば必ず變ずる道理なれば、百年の後は人の氣根もまし、形體つよくなり、世中質素の風にかへりて、情も少しあつく、道德の學も興起し、至治の澤をかうむる時いたりなば、予がいひ置きし事をすくなしといひ、薄しとしてそしる者あらん。今だに誠を大事と思はざる學者は、法によりて非とする者あり。然りといへども道のおこらんとするめぐみの時に當りて、誠を亡し僞をなさむ事は、予が心にをいてしのびず。予いまだ凡情をまぬかれずといへども、狂見ありて大意を見る故に、世のそしりにひかれず獨立てり。他の學者は狂見なければ、そしりをもやぶり得ず、氣躰よわく情叶はざれば、法をも行ふこと不レ能名聞ふかき者は、身を亡し。淺き者は學ともに廢せり。まことに惜むべし。故に世に器量あり實義ある人は、多くは聖人の道を尊ぶといへども、大難あるによりさけて寄らず。其人々の言信ずるにはあらざれども、表むき佛法によりて宗旨をたて、常の武士なれば難なし。學者と成る時は、其法を行はざれ

今も儒道の法を立て、しひてつとめさせ候はゞ、是にかはり申す間敷候。まことに僞の初め亂の端とも可㆑成候。

返書略。聖人の言は何れの時處位にもよく應じ候へども、採用ひやうあしきによりて害になる事に候。喪の事は、死を以て生をほろぼさずとある一言にて、行ひやすき道理明白に候。病者か、無㆓氣力㆒か、情うすく習ひたるか、如㆑此たぐひの人に、法のごとくつとめさせ候はゞ、たちまち親の死を以て子の生を亡し可㆑申候。近世は人の生付氣根よわく、體やはらかに成り來り候。たゞ人のみならず、竹木金石も又おなじ。無心の物だに運氣につれては斯くのごとし。況や人においてをや。今の人の氣體よわく情うすくなりたるには、世間の定法の五十日の忌精進にて相應に候。もし氣根つよく、志、學力共にありて、其上に心喪を加へんと思ふ人あらば、又五十日も祝言等の席へ出ざるほどの事にて可なり。神前の服は日本の古法の如くなるべし。是より上のつとめをしひ候はゞ、學者といふとも堪へざる者多かるべし。其

死を以て―死者に厚うせんが爲に生者傷ましむべからずとなり

三年の喪―周代の喪制なり

を得て明睿の照す所あり。これを覺照と申し候。分別は自然に出て自得し、藝は從容として其品たかしともいへり。詩歌に至るまで巧なるは本意にあらずと承り候。又「世事は其事になれ、藝は其術を知らざれば、鏡前に白布を張りたるが如し。」といへり。不知をば不知とし、知れるをば知れりとす。眞知其中にあり。知者はまどはざるのみ。

一　來書略。聖人の言は、何れの國何れの人にもよく相叶ひ候と承り候。然れども喪祭の禮儀などは、今の時、處、位、に行ひ難き事多く候。三年の喪はとりわき成し申す間敷候。學者の我と思ひ立ちてつとめ候だに名實かはり申し候。とぐる事は十に一二と見え候。それだに其人の得たる事か、境界のしからしむる樣なる事ばかりに候。若上より法に定められ候はゞ僞の端となり、罪人多く出來可申候。往年聖人の法を少々國に行はれし人御座候へば、國人悲びて、「孔子と云ひし人はいかなる惡人にてか、かゝる迷惑なる事を作り置きて人を苦しめられ候」と申したる由に候。

佛法大地也。衆行雖レ區同專レ之。是以善導和尚。擧レ目不レ見二女人一。此行狀之趣。過本律制一。淨業之類。不レ順レ之者。惣失二如來之遺敎一。別背二祖師之舊跡一。旁無レ據者歟。日蓮坊云。十七出家後不レ帶二妻子一。不レ食レ肉。權宗人尙可レ然。況正法行人哉。」二祖如レ此に候へば、末流の坊主とは大に異なり。法然坊は學力戒行共に優たる體に候。「日蓮不レ帶二妻子一」と書き候所は尤も奇特に候。持つ程ならば妻子とて可レ持候。かくれたる事は有る間敷候。然れども出家となり候上は、戒なくては出家にあらず候との事に候。世間の坊主の說法は、己が破戒無慙のいひわけと見え申し候。渡世の事に候へば、とかくの批判に不レ可レ及候。

一來書略。思に思索、覺照のたがひある由承り候。委く承りたく候。

返書略。古人心をくるしめ力をきはむるは、鑿にいたり易しといへり。是思索の事にて候。心の本然ふさがりて至理てらさず候。藝は其術の功を積んで後に成り、世俗の分別は理窟より出たる分別と見え候。寬裕溫厚にして涵し養ふときは、心本然

松栢云々—論語子罕篇の語

法然—僧源空が事淨土宗を創む

日蓮—日蓮宗の開祖

え、町人なればよき町人、百姓なればよき百姓と見え申し候。よき學者と申し候には風ありくせあり。其類に於てはほめ候ても、其法なく其習なき所へ出で候へば、却て人の目にたて耳を驚かし候。其故は、よき學者と申すには外の飾は多く候。其飾を除けて見候へば、實はかはる事なく候。只實義ある人のみ、松栢の凋めるにおくるゝたのもしき所御座候。とりわき武士たる人の肝要にて候。

一來書略。淨土宗、日蓮宗申し候は、大乘の學者は戒を保つに及ばず、たとひ惡をなしても彌陀を頼み妙法を唱れば、成佛疑なしと云ひ。善行をするをば雜行の人なり地獄に落つべしと說き候。尤も本願寺宗同前に候。法然坊日蓮法師など、斯樣の筋なき事を云ひて、一宗を弘め候を、能く弘めさせ給ひたる事に候。今は數百歲のならはしとも可レ申候。初めに斯樣の事にておこりたるは不審に存じ候。

返書略。法然坊制禁敎示の書を見侍れば曰はく「可ニ停止一。於ニ念佛門一號レ無ニ戒行一專勸ニ婬酒食肉一。適守ニ律儀一者。名ニ雜行人一。憑ニ彌陀本願一者。說レ勿レ恐レ造レ惡。事戒是

誠より明―中庸に出づ

大學の道―大學に「大學之道在明明德在親民在止至善」

びて問學によるは、これを明かにする受用にて候。知明かになりぬれば、止めんとすれども不已の勇力自然に生じ候。私欲の煩もくらき所にある事に候。明かなる時は、天理流行して一體の仁あらはれ候。明かに知り候へば則ち親切の志立ち候。之を明かなるより誠あると申し候。誠より明かなるは聖人にて候。これを明かにする功を受用せずして、たゞに志の親切ならん事を願はれ候は、舟なくて海をわたらんとするが如くにて候。故に大學の道は、明德を明かにすることを先にし候。親民至善は、みな明德の工夫受用にて候。

一 來書略。よき學者に成り申し度きと心懸候へども、志の薄き故にや、おこたりがちにて空しく光陰を送り候事、無念に存じ候。

返書略。よき學者に成り給ひ候事は無用の事に候。本より武士にて候へば、よき士になり給ひ候樣に晝夜心がけられ尤もに候。たゞ名字なしによき人と申すがまことの人にて候。まことの人は、公家なればよき公家と見え、武家なればよき武士と見

不義云々―論語述而篇の語

一　道にたがひて譽を求め、義に背きて利を求め、士は媚と手だてを以て祿を得ん事を思ひ、庶人は人の目をくらまして利を得るなり。之を不義にして富み且つ貴きは浮べる雲の如しといへり。終に子孫を亡すに至れども不レ察。

一　小人は己あることを知りて人あることを不レ知。己に利あれば、人そこなふ事をも顧ず。近きは身を亡し、遠きは家を亡す。自滿して才覺なりと思へる所のものこれなり。愚これより甚しきはなし。

一　來書略。志は退くとも不レ覺候。隨分つとめ勵まし候へども、氣質柔弱なる故に進みがたく候。志の親切ならざる故とも被レ存候。

返書略。つとめられ候處は、氣の力のみをはげますにて候。たとひ强力ありて一旦つとめすくやかに進み候もと、德の力ならざれば、根に入りて入德の益にはならず候。氣力は時ありて衰へ候。又根に不明なる所あればくじき易く候。德の力は明かなる所より出候へば、氣質の强柔によらず候。知仁勇ある時は共にあり。德性を尊

形の欲―精神を棄てゝ專ら物質的欲求を恣にするなり

一　名聞深ければ誠すくなし。利欲厚ければ義を不ㇾ知。

一　己より富貴なるを羨み、或は嫉み、己より貧賤なるを侮り、或はしのぎ、才知藝能の己にまされる者ありても、益をとる事なく、己に從ふ者を親しむ。人に問ふごとを恥ぢて一生無知なり。

一　物ごとに實義には叶はざれども、當世の人のほむる事なれば之をなし、實義に叶ひぬる事も、人誇れば之をやむ。眼前の名を求むる者は利なり。名利の人之を小人といふ。形の欲に從ひて道を知らざればなり。

一　人の己をほむるを聞いては、實に過ぎたる事にても悦びほこり、己を誇るを聞いては、有ることとなれば驚き、無きことなれば怒る。過を飾り非を遂げて改むる事を不ㇾ知。人みな其人がらを知り、其心根の邪を知りてとなふれども、己獨善くかくして知られずと思へり。欲する所を必として、諫を防ぎて納れず。

一　人の非を見るを以て己が知有りと思へり。人々自滿せざる者なし。

衣を云々―昔の左思が詩句
天空云々…古今詩話に此句見ゆ
世事に出入して―世俗の小事に拘泥して

一　志を持するには伯夷を師とすべし。衣を千仞の岡にふるひ、足を萬里の流に濯ふが如くなるべし。衆をいだくことは柳下惠を學ぶべし。天空うして鳥の飛ぶにまかせ、海ひろくして魚のをどるにしたがふが如くなるべし。

一　人見てよしとすれども、神の見る事よからざる事をばせず。人見て悪しとすれども、天のみること、よき事をば之をなすべし。一僕の罪輕きを殺して郡國を得る事もせず。何ぞ不義に與し亂に從はんや。

小人

一　心利害に落入りて暗昧なり。世事に出入して何となくいそがはし。

一　心思の外に向つて人前を愼むのみ。或は頑空、或は妄慮。

一　順を好み逆をいとひ、生を愛し死をにくみて、願のみ多し。

　順は富貴悦樂の類なり。逆は貧賤患難の類なり。

一　愛しては生きなん事を欲し、悪んでは死せん事を欲す。總て命を不レ知。

何をか好み何をか憎まん。義とともに從ひて安し。

一　知者の心、留滯なき事流水の如し。穴に滿ち、低きにつきて、終に四海に達す。意をおこし才覺を好まず。萬事不㆑得㆑已して應ず。無事を行つて無爲なり。

一　知者は物を以て物を觀る。己に等からん事を欲せず。故に周して比せず。小人は我を以て物を觀る。己に等からん事を欲す。故に比して周せず。

一　君子の意思は内に向ふ。己知るところを愼んで、人に知られん事をもとめず。天地神明とまじはる。其人がら光風霽月の如し。

一　心地虛中なれば、有する事なし。故に問ふ事を好めり。優れるを愛し、劣れるをめぐむ。富貴をうらやまず、貧賤をあなどらず。富貴は人の役なり、上に居るのみ。貧賤は易簡なり、下に居るのみ。富貴にして役せざれば亂れ、貧賤にして易簡ならざればやぶる。貴富なるときは貴富を行ひ、貧賤なる時は貧賤を行ひ、すべて天命を樂みて吾あづからず。

周、比―論語爲政篇に君子は周して比せず小人は比して周せず

貴富を行ふ―中庸の貧賤に素しては貧賤に行ふの義

士は賢を希ふ—周敦頤曰く聖は天を希ひ賢は聖を希ひ士は賢を希ふと

はるべき道を知るを問學と申し候。人倫日用の上において、よく心を用ひ手をくだし給はゞ、必ず疑ひ出來可レ申候。

一　來書略。士は賢をこひねがふと承り候間、いにしへの賢人の行跡を似せ候へども及びがたく候。たま〳〵少し學び得たる樣にても、心根は凡夫にて候。外君子にして内小人とや可レ申候。いかゞ受用可レ仕候や。

返書略。予近比いにしへの賢人君子の心を察し、自己に備はれるところを見て、學舍の壁に書付おき、小人をはなれて君子となるべき一の助にいたし候を、則ち寫し致二進覽一候。

君子

一　仁者の心動きなきこと大山の如し。無欲なるが故によく靜なり。

一　仁者は太虚を心とす。天地、萬物、山川、河海皆吾有なり、春夏秋冬、幽明、晝夜、風雷、雨露、霜雪皆我行なり。順逆は人生の陰陽なり。死生は晝夜の道なり。

て子之に惑はされて位を讓る

先覺—孟子に出づ、人に先だち道理を覺る者

に國を讓りて亂れたるが如し。子之は小人なれば、うけまじき人情時勢を知らで受けたり。故に亂に及べり。小人の言はいかで人情時變に叶ひ候はんや。

一　來書略。貴老は道學を以て天下に名を得給ふ人なり。しかるに一向の初學の者の樣に、博學の者に逢ふては、字をたづね故事を問ひ給ふとて、人不審申し候。

返書略。予本より文學なく候。然れども字は字書にたづね、故事は史書などに尋ね候はゞ事すみ可レ申候へども、左樣に勞して物知だてする事は、何の益なき事に候。幸に博識の人候はゞ、たづぬべき道理に候。世人予を以て、おして道學の先覺とせられ候。予に先覺と成るべき德なく候。たゞよく人にくだりて不レ知事を尋ぬる事のみ、少し人の先覺たるに足りぬべく候。

一　來書略。先日たまく參會仕り候へども、何の尋ね問ひ可レ申たくはへもなく別れ申したる事、殘念に存じ候。

返書略。疑ひなき故にて候。實に受用する者は行はれざる事あり。是をたづねて行

己を立てゝ人の善を取らざるを愚と申し候。善を積んで徳となり、善人の名をなす時は、人にとりたる事を言ふ者なし。爭を積て不善の名をなす時は、己が損なり。人に取らざる事をほむる者なし。大舜は問ふ事を好んで、人の知を用ひ、人の善を擧げ給へり。天下古今の師とする所にして大聖人なり。桀紂は人の知を嫉みて用ひず、人の善をふせぎていれず、己一人才知ありと思へり。しかれども天下古今のそしる所にして大惡人なり。かくの如く善惡の道理分明なれども、凡情の習にて、桀紂が行にならふ者は多く、大舜の德を學ぶ者はすくなし。思はざるの甚しきなり。又人の言を用ひてよからずと申し候は、己にしたがひ媚びる者の、告げ知らする小知の理屈などにて、事はよきに似たれども、人情時勢に合はざる事どもなれば、用ひて却つてあしき事となり候。賢知の者は己に從はず媚びず、まされる名のある故に、爭の心ありてふせげり。小人の言を取つて賢知の言をふせがば、何を以てか善かるべき。燕王か堯舜の子に讓らずして、賢に讓り給ひし善名を羨みて、子之

知―知恵

桀紂云々―紂紀に智は以て諫を拒ぐに足り言は以て非を飾るに足るの類を謂ふ

燕王云々―易王噲在位十年にし

今川の書―「今川了俊子息仲秋に對して制止の條々」といへるものを指すなるべし

集義和書　卷第四

書簡之四

一　來書略。いにしへは人に取りて善をなし、人の知をあつめ用ふるを以て大知とす。今は、人の善をとる者をば人のまねをするとてそしり、人の知を用ふればおろかなりとあなどり申し候。又たま〳〵貴人の人の言を取り用ひ給ふもありといへども、善なるさたもなく、却つて惡しき事ども候。いにしへの道は今用ひがたきと見え申し候。但し何とぞ受用のいたし樣もあること候や。承り度く候。

返書略。昔今川の書をだに、病に利ある良藥として諸國にも取り用ひたり。人々我といふもの有る故に、善なれども人の云ひたる事は用ひざるの爭ひあり。聖人には常の師なしとて、善を師とし給へり。古は人の善を擇んで之を取り用ふるを知とし、

を本理といたし候。上古の人は本理にまかせ候。後生の人は情によりて死體ををさめ候。父子、夫婦等の死體ををさむるは、己が情をつくすにて候。己が身においては、跡にのこる者の情と時處の勢にまかせ置き候へば、遺言に不レ及事に候。又遺言せずして不レ叶事も有るべく候。

一 來書略。古今鬼神有無の說、きはまりがたく候。

返書略。聖人神明不測と宣ひ候。明白なる道理にて候へども、不測の理に達せざればにや、愚者は有とし知者は無とす。言論の及ぶところにあらず。よく知る者は默識心通すべく候。

一體流行—普遍的

存養省察—天理を存養し自己の心中を省察するなり

事たるべく候。時の勢ひ次第に可レ被レ成候。

一　人に對して隔心ある事は、一體流行の仁にあらず候。我を以て人を見候へば、不二相叶一事のみにて、いよ〳〵へだたり候。人を以て人を見候へば、此人は元來如レ此と思ひてとがめもなく候。一體の本然同じき親みをさへ不レ失候へば、五倫ともにむつまじく候。天下我に同じき人のみならば、一家も立ちがたかるべく候。同じからぬ人寄合て萬事調ひ候。不二相叶一は皆我にまさる處なり。却て好すべく候。

一　存養省察は同じ工夫にて候。存養は靜中の省察。省察は動中の存養に候。ともに愼獨の受用なり。天理の眞樂其中に御座候。

一　我死體も親の遺體なれは、遺言しておろかにせざる道理との事、尤も類をおし義のくはしきに至り候へば、左樣にも被レ申候へども、少し穿鑿に落入りてくはし過ぎ候。太虛、天地、先祖、父母、己、子孫、生脈絡一貫にて候へば、子孫とても先祖の遺體なれば、己が私の子にあらず候。生脈つきて死體となりたる時は、土に合する

板垣信形―武田信玄の家臣

にて候。内に向ひたる師友と學問仕り候へば、吾知らず心術内に向ひ候。外に向ひたる學者を師友といたし候へば、志は實にても心術は外に向ひ候。是を以心傳心とも可レ申候。書にむかひ義論講明の時は、かはりなき樣に候へども、國家の事五倫の交り世俗にまじはりては、學び候處用に立ちがたく候。跡になづみて用ひ候へば、そこなひ出來候。是みな外に向ひたる故にて候。

一 さし當りなすべき事は義理にて候へば、善をするの一にて候。書を見るをのみ學問として、つとめを缺くは、本心を失ひたるにて候。

一 板垣信形事、信形にしては奇特に候。是を道とは被レ申間敷候。なみの武士にて一役つとめ候者は、其役だに仕り候へば、君の善惡にはかまひ不レ申候。筋目ある臣は、或は諫め或は其身を正しく行ひ、知をくらまして時を待つかの二たるべく候。

一 位牌も本は神主を似せて仕りたる者に候。いける親の髮をそり、法體と成りたる同じ事に候。法體とて親を拜せざる事なく候。心の誠をだに存し候はゞ、神主も同じ

にいにしへ神道の法として、三年ふさがり金神鬼門を忌む事出來候。此分の堪忍にても、日本國の山林を養育し家財をやぶらざる事大なり。むかしは人のいまざりし事も、法度出來て後は之を忌むなり。法を犯すは不義なれば之を罰する物なり。況や日本の水土によりて立てられたる神道の法なれば犯しては神罰あるべく候。神道の本は義理なれば、義理有りては苦しからじ。たゞに欲するにまかせてやぶるべからず。此國に生れながら此國の神道をおし、或は年來惡心惡行など有りし者、神罰いたるべき時節に、金神鬼門の方を犯して災害に逢ふも有るべく候。年來不屆の者なれば、小過によりて罪に行はるゝ事、人道にも有るが如し。人の罪すべき惡人を罰せざれば、鬼これを罰する者ありと、古人も被申候。

一　來書略す。

返書略す。

一　內に向ふと外に向ふとの義理、言語を以て申しわけがたく候。たゞ心術のおもむき

國容—通常の服装して

鬼門—家の東北隅を云ふ此方角に鬼星あり

金神—陰陽家にて祀る神、其所在方角を愼しむ

一返書略。教なく禮式なき故に、左樣の人何方にも多く候。介者は拜せずとて、軍中にて甲冑しては拜せざるを禮と仕り候。「古者。國容不レ入レ軍。軍容不レ入レ國。軍容入レ國。則民德廢。」と御座候。左樣の無禮人を拜せず、言葉ばかりをかけて過ぐるがくせになりて、常の人にも互ひに其通りに成り候。しかれば國の禮儀みだれ候て、人の德すたれ候。治國に禮儀みだれ候へば、軍令は尙以て行はれず候。亡國の基にて候。是故に、治國は敎へて禮儀ある事を尊び候なり。

一來書略、鬼門金神へ屋を出し。屋うつりする事を忌み候事は、道理有るまじき事の樣に覺え候。世間にやぶる人も有レ之候へども、主人妻子などにたゝりたるも多く候。あしき方ならば家內不レ殘たゝるべきに、家主妻子をとがめ候は、鬼も心ある樣に御座候。此理分明ならず候。

返書略。日本は福地なる故に、田畠多く人多し。山澤これに應じがたく候。人々欲するまゝに屋作し木を伐らば、山林ほどなくあれて人民立ちがたく候はんか。此故

尺璧云々―淮南子原道訓に聖人は尺の璧を重んぜずして寸の陰を重んずと

下に衰ふ。忽然として萬物と遷化す、尺璧を輕くして寸陰を重んずる者は、既に時に及ばざらむ事を恐れてなり、

一　來書略。天下を取るといへるは俗語にて候や。聞きにくく候。有つといへばおだやかに候は如何。

返書略。德を以て天下を知を有つといひ、力を以て天下に主たるを取ると申し候。王代は有ち武家は取るにて有るべく候。然れども兵書に云はく、「無レ取二於民一者。取レ民者也。無レ取二於國一者。取レ國者也。無レ取二於天下一者。取二天下一者也。無レ取レ民者。民利レ之。無レ取レ國者。國利レ之。無レ取二天下一者。天下利レ之。」といへり。この意にて候へば、取るの字も苦しからざるか。

一　來書略。爰元に、此方より禮すれども禮せざる者有レ之候。今は心得て誰も禮不レ仕候。言葉ばかりをかくるか、彼が如く笑つて過ぎ候。かやうの者には如何可レ仕候や。

齊王—宣王

孝子愛日—楊子法言の語

年の蓄なきは國其國にあらざるの至言明かなり、又大王の色を好み給ふにはあらず。もし好み給ふにしても、大王の時のごとく婚姻の禮を明かにし。事物を輕くして男女時を不レ失、三十の男はかならず婦をむかへ、二十の女はかならず嫁する樣ならば、王道において尤も重き事なり。今齊王色を好まるゝとも大王のごとくならば、王道にさまたげなしとなり。

一來書略。孝子は日を愛するの道理承り度く候。

返書略、孝子は父母の命を愛せずといふ事なく候。父母己をたのしましむる時はたのしみ、つとめしむる時はつとむ。今日の日は天命なり。天地は大父母なり。君子は父母天地へだてなく候。天道既に今日の日を命じて、或は勤勞せしめ或は遊樂せしむ。故に日として愛せずといふ事なし。凡人は貧賤なる時は憂苦し、富貴なる時は逸樂す。ともに日を空うして愛することを不レ知。目前の利を心として千載の功をわする。君子は貧賤なる時は勤學し、富貴なる時は人を愛す。月日上に遊びて形體

貨を好む—孟子梁惠王下篇に見ゆ

たるなるべし。大舜は如ㇾ此の叡慮ありと、竊に告げ給ふ事もあるべし。

一 來書略。大王は仁人なり。しかるに貨を好み色を好むといへるは如何。

返書略。是も孟子の語勢なり。國に三年の蓄なければ國其國にあらずとて、後世の人の己がために貨をたくはふるとは違ひて、國人のために積置るゝ事にて候。一國の一年の藏入を四に分て、三を以て萬事を達し、一を殘して兵事水旱の用に備へ候。天道の四時も冬一時を不ㇾ用して貯となるが如し。三年積みて一年の餘あり。九年積みて三年の餘あり。籾にて置き干飯にして置き、あまり久しきは段々に入れかへなど仕り候。如ㇾ此なれば異國の兵亂ありても、内堅固にして危き事なし。水旱の運に逢ひても、人をそこなはず盜賊おこらず。國人のために貨を好みて、みづからの爲に好むにあらず。後世には貯ふれどもみづからの爲のたくはへなれば、多くても飢饉の用には不ㇾ立。大明の韃靼にとられしも、國に三年の蓄なかりし故、飢饉に逢ふて盜賊起り、それよりやがて兵亂に成りて、つひにとられたり。國に三

不告而娶―孟子萬章上篇に出づ

返書略。孟子の語勢を知り給はざる故にて候。孟子の語勢は本の虚實をとはず。それにしても此道理と滯なく道徳を發明し給ひたるものなり。いかに質素の時なればとて、天子の二女をつかはし聟にし給ひし人に、藏をぬらし井を掘らしむる事やあるべき。我とひとしく賤しき者を殺してだに、助けておくといふ事は無き理なり。たゞ類をおして義の精きに至り、若如レ此ありても如レ此と、至極いひつめたる論なり。不レ告して娶るの論は、若後世不心得なる親ありて、告げて同心すまじき者あらば、子孫相續は孝の第一なれば、不レ告して娶りても苦しからじ、告の禮を不レ用事は小節なり。子孫を嗣ぎ人の大倫を立つるは大義なればなり。舜の本より情欲の父母につかへ給はずして性命の父母につかへ給ひし事、孟子に至りて明かなり。瞽瞍の本心は、告げて必ず娶るの本心なり。天子の命なれば、愚痴なる事をいはせらるべきにも有らねども、愚なるを知りながら、通ぜざる事を云ひ聞せて同心なき時、おしてやぶるも舜の爲に心よからざれば、一向初めより不レ告して娶れと詔あり

其心にもなき作善念は、夜の夢とは成るまじく候。只終日の實事のかげならでは見え申すまじく候。誰も晝夜の理に惑ひうたがふ者はなく候。目さめておき、ねぶたくて寢候。何の心もなく候。生死は終身の晝夜にして、晝夜は今日の生死にて候。生死の理も晝夜を思ふごとく常に明かに候へば、臨終とても無₂別儀₁候。薪つきて火滅するがごとく。寢所に入りて心よく寢ね候が如く、何の思念もなく、只明白なる心ばかりに候。

一　再書略。晝夜の道に通じて知ると候へば、生涯の心がけもまた鬼神の境界と可₂成候や。

返書略。生きて五倫の道ある者は死して五行に配す。本死を以ていふべからず。明には五倫あり。幽には五行あり。明も造物者と友たり。幽も造物者と友たり。生には人心あり。死には人心なし。人の字に心をつけ候へば明白なる事に候。

一　來書略。大舜の故事をのべ給ふこと、孟子の書に異なるは、如何したる事にて候や。

作善念―善を行はんとする望

五倫―君臣、父子、夫婦、長幼、朋友

五行―木、火、土、金、水

一偏に—一概に

の天地の中にあるは、人の腹中に心のあるが如しと仰せられ候。心は内外なし。腹中に有ると一偏に云ふべからざるか。

返書略。天地人を作りて、又人を以て主とす。其天の作る所の理、すなはち人の性命なり。人性もと無極なり。天地を入れて大なりとせず。故に人は天地の德、神明の舍ともいへり。心の臟の虛中、おのづから一太極あり。又腹中にありと云ふも害あらず。心に内外なき事は本よりの義なり。

一來書略。臨終の一念とて、命終る時の心持を大事とする事は、さも有るべき事にて候や。

返書略。細工は流々とやらん申し候間、其理こそ候はめ。それも造化を輪廻と見て、生れかはるの見より生じたる事なるべく候。緩々と死なばこそ其一念も可〻存候へ、思ひがけぬ事にてふと死に候はゞ、何として左樣の事成り候はんや。其上晝の心がけは夜の夢と成り候。晝一日惡事を思ひ惡事をなして、寢ざまに善事を思ひ候とも、

常の産—孟子に見ゆ定まれる財源

車に乘て云々—理に於て有るべからざればなり

返書略。たゞ世俗につきて夢といへり。是夢にあらず。聖人の心には正思あり前知あり。周公を夢見給ふは夜の正思なり。兩楹の間に祭らるゝは夜の前知なり。今日吾人といへども、聖人に同じく夢なき事あり。士たるものは、常の産なけれども常の心あり。盗せざるの心は死に至るまで變せず。學問せざれども幼少より其義を精く習ひ來りたる故なり。しかるゆゑに盗をしたるといふ夢は終に見ず。此一は聖人と同じ。閒思もなく夢もなし。致知のしるしなり。昔より物を格すの功なり。下下の盗をしてはあらはれん事を恐れてせざるばかりにて、恥の心うすき者は、時ならず欲する念慮も有るべし。しからば夢にも盗をしておはれなどし、又捕へられたるなどとある夢も見るべし。常に思はぬ事をも夢には見るなれども、大かた其類に觸たる事を見るなり。車に乘て鼠穴を通りたると云ふ夢は、見たる者なしとなり。

一　來書略。人の身の心中にあるは、魚の水中にあるが如し。此心より此身生れ、又身の主と成ると承り候。たとへば車をつくる者の、車を作りて乘るがごとし。然るに人

威ある事に候。貴殿今より火の仁は成るまじく候間、水の仁にしてよく〳〵德を積み給ふべく候。

一 來書略。雷は何方へおち候はんも難計候へば、誰もおそるゝは尤もと存じ候。いかゞ。

返書略。雷聲をおそるゝ者は惡氣と惡人となり。貴殿惡人ならずして惡人の徒と成り給ふ事は、まどひある故に候。雷聲は物の留滯を通ずる物なる故に、雷を聞ては氣血流行し、相當の灸をし藥を服用したるよりも心地よきものに候。いまだ鳴る事のつよからざるををしみ候なり。たとへば盜賊いましめのために、夜廻りを出し辻番をおかれ候事は、常人のためには悅にて候。しかるに盜賊は其いましめを聞ては肝をけし候。たゞ平生心に惡ある故に、雷聲を聞ておそるゝにて候。

一 來書略。聖人に夢なしと申し候へども、孔聖周公を夢みるの語あり、兩楹の間に祭らるゝの夢あり。

周公夢―論語述而篇に子の曰はく吾復夢に周公を見ず

さま〳〵したま　たまの誤か

水は柔なる物故に、人々心やすく思ひ、近付て溺死する者おほく候。貴殿の病は柔和過たるにて候。柔和過たるは人のほむるものにてよき樣に候へども、其門に不孝子いで其國に不忠臣いで候。嚴なる主親は、無理を云ひても子も臣も怨みざる物にて候。さま〳〵少しのなさけありても、天より降りたる樣に喜び候、柔和なる主親は、道理ありても子も臣もうらみ申し候。いか程なさけ恩賞ありても、其當座ばかりにて、過分なりとも思はざる物にて候。親の柔和なるは其子のならひあしく、主君の柔和なるは家中の風俗あしきものに候。水の仁は母のごとく、火の仁は父のごとし。貴殿は母の仁にして御子息あしく成り給ひ候。今に至りてはげしくせられ候はゞ、いよ〳〵戻りてよきことは有るまじく候。國家の政道を取りても、貴殿のごとくなる奉行の下には、罪人おほくて人多く死するものに候。又君子なれば、いか程柔和にても子も臣も恐るゝ物に候。神武の德おはします故なり。水も大淵の青みかへりて底知れざるには、おそれてほとりに立ちがたく、やはらかなれども大に

うつけ―痴者

心根―心奥の底

餘なくば無用に候。我等の流にせらるべく候とて、親類知音中用ありて來るか、物語などして時分までゐるかゝれば、平生の麁飯を振舞催して、寄合時もなら茶粥雜水の外は不仕候。奇特なる親類知音のまじはりなりとて、心ある者は感じ申すとかたり候き。

一 來書略。拙者せがれ、御存知の如くうつけにてはなく候へども、世間の習に入りて、氣隨我まゝにして道德を好まず、諸藝も根に不入、かへりて父の非をかぞへ、諸同志の非をいひ、利口にして其身の行跡あしく、まことの奢れる子の不可用にて候。いかゞ仕りてよく候はんや。

返書略。一朝一夕の故にあらず候。貴殿の年來の養ゆゑにて候へば、御子息の罪にあらず候。總じて父と君とは、心根に仁ありて常は嚴なるがよく候。人生は水火の二にあらざれば一日もたちがたく候。水火の仁ほど大なる事はなく候へども、火は嚴なるものなれば人おそれて用心仕り候故に、心と火に近付て死する者はなく候。

來かゝりの云々ー常に來往する懇意の人々が寄合ならばの義

欲なれば身代もつゞき世間の務もよく成る事に候。奢は陽の欲、しはきは陰の欲なり。無欲をつくるは名根の欲なり。三共に大欲心にて候。君子の無欲といふは、禮儀にしたがひて私なき事なり。如レ此の正人あらば、今の世とても惡くは申す間敷候。たとひ無心得なる者ありて惡しく申すとも、あづからざる事に候。天道を我心の證據人とせらるべく候。此以前遠國の人語られ候。在所に奇特なる者あり。知行五百石の身上に候。親類知音に申す樣、我等は下手にて候やらん、公役軍役をつとめ、人馬をもち奉公を仕り候へば、やう〳〵事たり候。相番中おもてむきの交りはかゝれず候。其上に親類知音中、折節の振舞をもしてあそび候へば、其分不足に候。さ候へば町人の物を借りてやらざる樣に成り候。しかれば親類知音中寄合て、町人の物を取りて飮食するにて候。親類知音の心安き中は、か樣の事をも打とけいひて遠慮有るまじき事に候。各は上手にて有餘あらば振舞給ふべし、何方へも參るべく候。此方にても來かゝりの常住が催して寄合候はゞ、なら茶など可レ仕候。各も有

ず。親類知音相番のかた〴〵と交りをかゝず、屋作をかろくし衣服をつくろはず、諸道具をはぶき、飲食をうすくし、費をやめて有餘を存し、親類知音のおちめをすくひ、家人百姓をあはれみ、晝夜文武の務に暇なく、世上の品々のあそびは不レ知がごとく、忘れたるがごとくなる人あらば、世中には正人あり、類を以て來り友なふべし。用をも節せず、不時の備へをもせず、わざとたくはへぬ樣にし、仁にも義にもあらずしてゆゑなくつかひ施すを、無欲と申し候はんや。それは名根より生じて、欲心のいひわけにこしらへたるものなり。欲心ある故に、人の吝嗇といふべきかとて、淸白だてをするにて候。眞實無欲の人には、淸白もなき物にて候。眞實に無欲なれば、人が吝嗇なりといふべきかとの氣遣もなく候故に、心もつかず、家屋の美を好まざれば、おのづから儉約なり。衣服諸道具飲食の好なければ自然と輕し。無欲無心の儉約なれば、我も勞せず人もとがめず。淡淸の好人といふべきなり。貴殿は、無欲ならば身代も續き艱く、世間の務もいかゞ有るべきと思はれ候へども、無

三綱―君は臣の綱・父は子の綱・夫は妻の綱
五常―仁・義・禮・智・信

をして、傍輩の人々と一ぺんわたり給ふべく候や。左様に仕り候人は有るまじく候。若き内に藝を稽古するには、其師の所へ行き此方へ招きなどして、一藝つゞきはむるにて候。今は左様にする人々も稀に候。只我心に叶ひたる人々と五人七人うちよりうちより往來してかたられ候。其五七人の内、弓にすきて弓をもてあそばるゝもあり。鎗太刀鐵砲馬思ひ〳〵に候。扨は謠か、茶の湯か、酒か、連歌か、文學か、人ごとか、夫よりくだれるは、樣々のいやしき事も、又は奢もありと見え候。大身は大勢も寄合、小身は座敷もなく使ふ人もなければ、五人七人に過ぐべからず。其中間の人吝嗇とか清白なるとか名をつけ云へば、かけもかまはぬ世間の人も聞傳へて申すにて候。互に一かまへ〳〵に候へば、一ぺんにわたるといふ事はなく候。ここに三綱五常の道を修めて、其身の作法正しく、家内の男女をよくをさめ、人馬軍役に應じてたしなみ、知行の百姓をもつよからずゆるからず、末長く立つべき樣にし、ひろき事すぐれたる事はなくとも、文武の藝にもくらからず、世間の奢にひかれ

人爵には命分あり、願ふべからず。天爵には分數なし、心の位なればふせぐものなし。心のたのしびは奪ふものなければ、人鬼ともに安し。吾人只顏子の徒とならん事を願ふべし。桀紂が徒たらん事を願ふべからず。

一來書略。無欲のよき事は誰も存じ候へども、出家道心者などは無欲も立てられ候べし。世間に交り居候ては、左樣には成りがたき事にて候。又奢はあしきと存じながら、人のする事をせざれば、吝嗇と云ひてそしり申し候。人竝に仕ては、欲有りて、と り蓄へも仕らではかなはず候。いかゞ仕るべきことにて候や。

返書略。貴殿無欲を何と心得られ候や。天理をとめて人欲とし、人欲をとめて天理とするのあやまり有るべきと存じ候。物を蓄へてつかはざるを欲とし、蓄へずして有次第につかひ、無くなれば何事をもせずして居るを無欲と思ひ給ひ候や。其ふたつは、しはきと正體なしとにて候。又人のする事をせざればあしく申すとの事は、數奇者には茶の湯をして見せ、謠ずきにはうたひの會をし、馬ずきには馬あつかひ

無逸―逸は樂をすること

良心―孟子告子上篇に見ゆ本然の善心の稱

人爵天爵―孟子告子上篇の語、仁義忠信は天爵公卿大夫は人爵なり

寒をいたむこと賤のぬのこにおとれり。おほくは病苦にたえず。或は夭死す。よく思はゞ願ふべからず。人は動物なり。上天子より下士民に至るまで、無逸をつとめとするは人の道なり。むかし許由は賢人なり。其身は農夫にして彼に同じ。堯の天下を辭して耳を洗ひしは、其心のたのしび四海の富貴にこえたり。德なきの富貴は浮べる雲のごとし。天爵は萬歲尊し。又人いへる事あり。桀紂は中國の主なれば四海の尊位なり。其富天地の間にならびなし。顏子は無位無官にして、衣やぶれ食たえ〲なり。しかも三十餘にして天年かぎりあり。人生の福是よりうすきはなし。しかれどもこゝに人ありて、桀紂に似たりといへば腹立せり。尊きこと天子たり。富四海の內をたもてり、かゝる至極の人に似たるとて腹立せるものは、人々惡を恥ぢ善を好むの良心あればなり。又顏子に似たりといへば、中心悅ぶといへども、恥ぢおそれて謙退す。天子諸侯の富貴といへども其言葉にあたりがたし。人爵は其世ばかりにして、權の露のごとし。天爵のとこしなへに尊きにはならぶべからず。

返書略。貧しくはれあども乏しき事はなく候。人々分を安んじて願なければ、身は勞して心は樂めり。堯舜の民は康寧の福あるとは此理にて候。むかし田夫あり。毎日北に向つて禮拜し、「清福を給ふ」といへり。其妻笑つて曰はく、「軒には草茂り、床には稿の席をしき、身にはあらきぬのこを著て、雜穀を食とす。夫は田畠に勞し、婦は食事にいとまなし。餘力あれば紡績織紝す。春より冬に至り、旦より夜に及ぶ、是を清福といはゞ誰か福なからむ」。夫が曰はく、「是皆賤男賤女のことなり。我身上臈のおちぶれにもあらず、もとより賤の子にして、賤の家に居、賤の衣を著し、賤の食を食し、賤の業をいとなむは、天理の常なり。好事もなきにはしかず。思ひがけぬ幸は其願にあらず。身に病なく家に災なし、達者にして暇なきは清福にあらずや」と。人いへる事あり。流水は常に生て、たまり水は程なく死ぬ。柱には虫入るも、鋤の柄には虫いらず。俗樂の遊は憂又したがふ。水くさり柱むしばむの苦しみほどなければ、美味あれども彼田夫の麁飯にもおとり。軽く暖なる衣あれども、

五色―青・黄・赤・白・黒
五味―辛・酸・鹹・苦・甘
五聲―宮・商・角・徴・羽

其上に天下の主の第一に乏しく思しめさるゝは、賢才の人のすくなきなり。堯舜も之を憂とし給へり。是を以て同じく聖人なれども、孔子は人の師なれば、知を明かにして先達し給ひ、堯舜は人の君なれば、知をくらまして天下の賢才をまねき給へり。寶は貧に生じ、知は謙に明かなる理を知らで、我知に自慢し、足れりと思へば、天下の才知みなうづもるゝ事なり。空々として謙退なればこそ、善政もおこり、美風も後世に残る事なるに、下聞を恥とし天下の知を不レ用時は、物の本體は虚靈なるの道理にあらず。其恥にあらざるを恥ぢて恥心亡び、不善の名を得るものなり。それ天地の大なる、萬物を造化し出す所は太虚無一物の理なり。目は五色をはなれて五色を辨へ、口は五味なくしてよく五味をあぢはひ、耳は五聲なくして五音を知り、心鏡空々として萬物に應ず。萬の物はみな無より生じ候へば、貧は世界の福神といふ俗語は、まことに人心の靈にて候。

一　再書略。しからば堯舜の民も貧乏をまぬかれず候や。

吉・凶・軍・賓・嘉ー軍の五禮と云ふ

一來書畧、俗に貧は世界の福の神と申し候は、いかなる道理にて候や。
返書畧。世の中の人殘らず富み候はゞ、天地も其まゝ盡き候なん。貧賤なればこそ、五穀諸菜を作り、衣服を織出し、材木薪をきり、鹽をやき魚をとり、諸物をあきなひ仕り候へば、六月の炎暑をいとはず、極月の雪霜を踏んで鹽薪野菜などを賣り候事、富み候はゞ仕るべく候や。農工商も貧よりおこりて、世の中たち申し候。たゞ農工商のみしかるにあらず。士といへども貧を常として學問諸藝を勵み才德達し候なり。生れながら榮耀なる者は、多くは不才不德にして、國家の用にたちがたく候。只士農工商のみならず、國天下の大臣國郡の主と雖も、吉、凶、軍、賓、嘉の禮用を備へ、國土水旱の蓄をなし、君につかふまつるの役義なれば、富足る事あるべからず。上は天下の主といへども、來を薄くして徃を厚くし、天下の人民の生を養ひ、死に喪して恨みなからしめ、且異國の不意に備へ、天運の凶年飢饉をあらかじめ待ち給へば、天下の財物のおほきも、天下の人のために御覽ずれば飽足る事なし。

風諫―露骨に言はず聽く者をして自然に悟了せしむる事

一再書略。釋迦はえびすの聖人か。是も時によりて感ずる法なるか。

返書畧。神聖中行の道理にはあらず。中國に來りて孔子に學びば、よく聖人となるべき分量あり。仁心廣く厚き所あり。知勇も氣質に備はりて見えたり。其生國はすぐれて愚痴に、大に欲ふかく、至つて不仁なり、極熱の國なる故に、死せる肉を置きがたし。いけながら持ありき、切て賣る事なり。仁心深き者是を制する方を知らでは、殺生戒をなしたるもことわりなり。日本は仁國なり。此國に生れたらば、佛法をおこすべきの感慨もあるまじく候。若又釋迦、達磨を只今出して、今の佛者などを見せば、何者とも心得がたかるべく候。佛祖の流と申し候はゞ、大に歎きかなしびて、其破却かぎりあるまじく候。我等は佛者ならざる故に、遠慮おほくおもふ樣にも申さず候。我子を教戒する者は至情をのべ、人の子を教戒する者は風諫するが如くにて候。釋迦、達磨に我等の佛を難ずる語を聞せ候はゞ、いまだ世情をはなれず道に專ならざる故に遠慮おほきとて、心にあひ申すまじく候。

龍馬云々―易繫辭に河圖を出すとあり龍馬河中より文を負うて出でたる故事

心の感ある道理候。孔子の時には、迹ある事をもたづね學ぶ心の理御座候。上世は大虚を祖とし天地を父母とすること近し。聖人生れて其名殘らず、まどひなければ明者かくれ、不孝子なければ孝子をおどろかず、不臣なければ忠臣知れず、政刑なくして大道行はれ、敎學なくして人みな善なり。後世にいたりて性情わかれ物欲生じぬ。人初めてまどひあり。此時に當りて伏義氏出給へり。惻然として感慨あり。敎なきことあたはず。時に天道龍馬を命じて、文を以て其志を助け給へり。書畫敎學のはじめなり。伏義氏以前は物欲きざさず情性に合する故に、人に病疾なし。後世有欲多事のきざし出來てこのかた病人あり。醫藥の術、耕作農政なきことあたはず。天道、靈草美種を降して神農氏の業を助け給へり。是皆神聖廣大の知の緒餘なり。時によりて發するのみ。伏義、神農は春のごとし。周公、孔子は夏のごとし。其摸樣はかはりあれども、同じく天理の神化なるがごとし。易は無極の理なれば、孔子のみにかぎらず、伏義といへども是のみと思ひ給ふ事はなき道理にて候。

章云々―孔子易を讀んで韋編三たび絶ゆるに至る

一　來書略。三皇、五帝、三王、周公、孔子は同じく聖人と承り候。伏羲は文字も教學もなき時に出給ひて、初めて畫をなし。天下後世道學の淵源をひらき給へり。然るに孔子は末代に跡あることを學び給ひながら、韋の三度きるゝまで、朝夕手をたたずして、いまだ易を得たりと思ひ給はず。神農は草根をなめて初めて醫藥をつくり給ふ。然るに孔子は末代醫術あまねき時に生れ給へども、藥に達せざるの語あり。かくのごとく大にちがひたる位を同じとは、いかなる事候や。

返書略。時にて候。孔子を伏羲、神農の時におき候へば、易を作り醫をはじめ給ひ候。伏羲、神農を孔子の時に置き候へば、又孔子の如くにて候。

一　再書略。しからば佛説に似たる所候。わざとまうけて神通、方便をなすが如くに候や。

返書略。少しも心はなく候。三皇の時においては、空々として跡なき事もおこり候。空々として跡なき事をだに作りはじむる人の、又跡にしたがひて愚人とひとしく候

いかさま—成程と云ふに同じ

攸好德—攸は所なり德を好む人

所多く候。無極の躰なり。其含む所は言外に候へば、我と經書を見て聖人の心をくみ申し候。則ち聖人に對し奉るが如くなる事候。其心には深きあり淺きあり、其品いひつくしがたく候へども、いかさまに書を見る人は、後までも學におこたりなく候。たゞに物語にて心術のみ聞き候人は、一旦はすゝみ候へども、言外の理を不レ知候へば、心ならず年を經てたゆむものにて候。中人以上の人は、少し心傳を聞ては、やがて天地を師とし、造化において學ぶ所あるは、書にも及ばず、道を行ひ德に入り候なり。中人以上にても、書を讀みたるばかりにて心傳を不レ聞人は、聖學に入りがたく候。上知は心傳を不レ聞して、書を見てもすぐに德を知り候なり。故に攸好德の幸福ある人は、次第を歴て德を知るも御座候。尤も此人は書によりて聖人に對面仕り候。書を讀み給はでも、人の主人としては仁君といはれ、人の臣としては忠臣とよばれ、いづれによき士となりて、善人の品に入り候ほどの事はなり申すべく候。必ず名を後世にあぐべく候。

斗方なく—手段方略を失するなり

聞たるまゝにありき候へども、不分明候。時、所、位の至善をはかるべき様なく候。不自由にしても、自ら見てありくと、見ずしてありくとは、見てありくはまさり可申候。軍法を知らでも、勇知ある大將は、おのづから勝負の利に通じ候故に、敵に逢て勝ことを致し候。軍法知りても、勝負の利くらき大將は、敵に逢て斗方なく候。勝負の利よき人軍法を知り候はゞ、名將たるべく候。軍法知らでは名將とは成りがたく候。才と學との道理同じ事に候、古今のためし明白なる事に候。

一 來書略。經書を讀み候はでも學問なり候と承り候。左様に候はゞつとめて見申し度候。書を讀まずして不叶事に候はゞ、老學といひ暇なく候へば、成がたき事に候。

返書略。聖賢を直に師としては、書を讀までも道を知り徳に入ること成り申し候。今の時聖賢の師なく候へば、中人より以下の人は、書をまなび候はでは道を知ること成りがたく候。しかれどもよく心傳を得たる人に聞き候はゞ、善人とは成り申すべく候。扨はよき士と申すほどの人がらには及ぶ事にて候。聖人の言語にはふくむ

をるは、蛇の非にて候へば、叢に驅りやり、行かざるをば打殺して可なり。なほも愚民疑ひあらば、御くじをとりて神慮を御うかゞひ有るべく候。訴訟は此方に道理あれば、幾度も申すものにて候間、もし一二度にて御同心なく候はゞ、神の御同心被レ成まで、幾度も御くじをとりてうかがはるべく候。かならず御同心有るべく候。其外かくの如きたぐひの神慮に叶はざる事を神慮として、人の尊きを以て禽獸にかふる樣なる事多く候。

一來書略。「無學行レ政、如レ無二燈夜行一」といへり。しかるに貴老、學者の政は心得がたしと宣ひ、又其筋目ある人か其備りある人よしと承り候は、心得がたく候。

返書略。政の才ある人を本才と申し候。其人に學あれば國天下平治仕り候。本才ありても學なければ、やみの夜にともし火なくして行くが如くにて候。然れどもありきつけたる道なる故ありき候。されど前後左右を見ひらきて自由のはたらきはならず候。又才知なくして學ある人の政をするは、盲者の晝ありくが如くにて候。

驕は云々—易の謙の卦に天道は盈を虧きて謙に益すと

がら道を知らず。勇氣によりて失ありといへども、大功ありて賞をうけず、人情のあはれむ所なり。賴朝卿福分ありて天下をとるといへども、不仁にして寛宥の心なし。人情のにくむ所なり。賴朝、判官にかぎるべからず。驕は天道の虧く所、地道の亡す所、人道のにくむ所なり。謙は天道のます所、地道のめぐむ所、人道の好む所なり。

一　來書略。我等の在所に、蛇を神の使者なりと云ひて、手ざすこともせず候。さまざま氣の毒なる事どもに候。其上害も出來候。されども其通にしたがひ候はんか。やぶり候はんか、分別定めがたく候。

返書略。神慮にしたがひて非法を改めらるべく候。神は形なき故に、時にあたりて何になりとも乘りうつり給ひ候。蛇を使者と定むべきにあらず。且蛇は叢に棲むものなれば、人居にまじはるは非道にて候。神明は非道を戒め給ふべく候。蛇の棲む深草に、用心もなく行きて害にあふは、人の非なり。人のすむべきあたりに蛇の

たる事は無情に似たり。傳聞く貴老道德の勤にすさみ給ふと。道を厭ひて愚を疎み給ふか。愚を見おとして道をおこたり給ふか。道學を益なしとして道德を好む者までをしりぞけ給はゞ、是非に及ばず。若し愚を不肖なりとして道學に遠ざかり給はば、あやまちなり。故者の至情を思ひ給はゞ、何ぞ愚が過をさとし給はざるや。さとして從がふまじくば、愚を捨てゝ道德を尊信し給ふべき事は、本のごとくたるべし。何ぞ人によりて道の信不信あらん。聖人の門にあそぶ人ならば、天下の聖學をする人、皆惡人不正なりとも、吾が聖學に於て疑ひなかるべし。たゞ己が定見いかむとみるべきなり。人によりて信をまし、信をおとし給はむは、道をみるの人にあらず。

一來書略。世に判官贔屓と申し候は、いかなる事にて候や。

返書略。君子に三のにくみあり。其功にほこり賞を受くる事おほき者をにくみ、富貴にして驕る者をにくみ、上に居て下をめぐまざる者をにくむ、判官義經は、其人

土用―一期十八日にて一年四期あり
八專―壬子より癸亥まで十二日間一年六度あり

にあたり、仕合あしきことわりにて候。

一　再書略。愚兄事、被仰下候通尤もに存じ候。去ながら愚兄は姑息の愛なりとも御座候。作法あしく不仁無道にて、下をなやまし民を苦め候人に、子孫も榮え仕合よきあり。又きはめてよき人も仕合悪しく候事はいかゞ。

一　返書略。人の氣質に、天地神明の福善禍淫を受る事、晩きあり早きあり。しかのみならず先祖の造化の功を助けたるあり、妨げたるあり。運氣の勢ひ餘寒殘暑あるが如し。先は聰明の人には、善に福早く惡に禍速なり。愚不肖には善惡に禍福おそし。平生物の合點の遲速にても知られ候なり。先祖の造化の神工を助けたる勢ひ未だやまざるには、子孫あしけれども仕合よし。先祖の造化を妨げたるは子孫よけれども、其逆命の勢ひ未だ避けがたし。打身頭痛の病ある人は、土用、八專、雨氣を感ずるが如し。之より下つかた樣々のことわり候、推して知らるべく候。

一　舊友に與へし書に曰はく、故者には其故たる事を不失といへり。久しく音問を絕

水籠―水牢なるべし水を堪へたる牢屋

一來書略。愚兄御存知のごとく、作法正しく慈悲にも候へども、子孫おとろへ仕合あしく候は、いか成る故にて有るべく候や。

返書略。人見てよからざれども、天の見ることよきあり。人見てよけれども、天の見ることよからざるあり。貴兄を見申し候に、愛情もありと見え、行儀は隨分正しく候へども、作法の正しきは生付にて學によらず、愛情も婦人の愛にて、人民を惠むに至らず候。救はずしても苦しからざる者には施こし、下々の難儀をば知り給はざるが如くに候。百姓等をば水籠に入などして、病付たる者どもあり。罪なきのみにあらず、貴兄を養ふものを却て苦しめられ候。其妻子の歎き、不罪の人のいたみ、天地神明をうごかすべく候。知らずといはば、其天職をわすれ天威をつゝしまざるなり。知りてせば不仁なり。大小によらず罪は上一人にかゝり候。今の世の習、下下をば難儀させ、百姓をばいたむるものと思ひて、とがむる人もなく候。只行儀よきと姑息の愛とをみて、人はよしと申し候へども、天の鑑明らかに候。神明の罰

一來書略、身死して後、此心はいかゞなり候や。

返書略。冬に至りては夏の帷子をおもふ心なし。夏に至りては冬の衣服を思ふ心なし。此形あるが故に形の心あり。此身死すればこの形の心なし。

一再書略。しからば顔子の死後も盜跖が死後も同じきか。

返書略。此性此形を生じて、形のために生ぜられず、又形の死するが爲に死せず。惡人の心には今よりして性理をしらず。死後を待つべからず。君子の心は今よりして形色に役せられず。死生を以て二にせず。又死後をまたず。

一來書略。世間に人のほむる人に、さしもなき道を信ずる人はいかゞ。

返書略。それは善きこと好きといふものにて候。定見なき故に本の邪正を深く考へず。心術をかり理をかりて、さもありぬべくいひなせば、はやよき事として信じ候なり。君子もよきこと好きにては候へども、性命に本づきて善を好み候なり。かり物は是に似たるの非なれば、大に戒められ候。

顔子—孔子の門人、顔回

盜跖—孔子と同時代の大盜

かり物—僞なり、思心より出でざる善事なり

をちつかた―遠方

集義和書卷第三

○書簡之三

一 來書略。性、心、氣いかゞ見侍るべきや。

返書略。太虛は理のみなり。云へば只一氣なり。理は氣の德なり。一氣屈伸して陰陽となり。陰陽八卦となり、八卦六十四となる。それよりをちつかた、一理万殊いひ盡すべからず。天地万物の理つくせり。理を主としていへば、氣は理の形なり。動靜は太極の時中なり。吾人の身にとりていへば、流行するものは氣なり。氣の靈明なる所を心といふ。靈明の中に仁義禮智の德あるを性といふ。靈明と云ひて氣中別にあるにあらず。譬へば爐中の火のごとし。虛中なる所に至りて明かによく照せり。明かによく照す所に條理あり。

不忠と云ひなし。直を不直と云ひ、信を不信と云ひ、しかのみならず流罪禁獄死刑に及ぶの逆も、人不レ知の内にあり。泰然として人をも尤めず、天をも怨みず、炎暑に霍亂して死するが如く、極寒に吹雪に遭ひたるが如し。天道の陰陽人道の順逆其義一なり。悅樂は順なり。人の不レ知は逆なり。人生の境樣々ありといへども、順逆の二に洩れず、小人は順にあふては奢り、逆にあふては悲しむ。春秋を常として夏冬なからん事を思ふが如し、君子は順にあうては物をなし。逆にあうては己をなす。春夏にのびて秋冬にをさまるがごとし。富貴福澤は春夏の道なり。貧賤患難は秋冬の義なり。四時は天の禍福にして、禍福は人の陰陽なり。屋の南面は夏涼しくて冬溫かなり。北面は夏熱くして冬寒し。人の南面は我が北面となる。屋を竝べ生をともにして、世にすむものゝ自然の理なり。富貴、福澤、貧賤、憂戚、相ともなふ世の中なり。誰をかうらみ誰をかとがめむ。

尊徳性—禮記に出づ

論語の首章—子の曰く學んで時に之を習ふ亦説しからずや朋有り遠方より來る亦樂しからずや人知らずして慍らず亦君子ならずや

みづから父母につかへ給ふが如くなるはいかゞ。

返書略。これも又時なり。いつもさやうに有るべからず。たま〳〵事なきの折ならん。天子は天下を順にし給ふが親の事なり。諸侯は其國をよく治るが親の事なり。大夫は政事を任じて私なきが親の事なり。士は尊徳性道問學が親の事なり。農は天時をあやまたず地理を精うして、五穀生長するが親の事なり。工は職を上手につとめ、商はよく財を通ずるが親の事なり。其事に當つて其事をつとむるは、皆親につかふまつるの事なり。時としていとまあらば、父母のあたりに侍らでも叶はず。吾身もと親の身なり。吾立身行道、皆親の立身行道なり。千里を隔つといへども父母にはなれず。

一 來書略。論語の首章。文理あらまし通ずといへども、心に滿たざる所あるが如し。

返書略。說は自家の生意なり。境界の順逆によつて損益なし。樂は物と春を同じうす。一躰の義なり。不慍は只に吾徳を人の不知といふのみに非ず。忠臣を

り候。親に孝行をして福を得ずとも害あらじ。神佛に祈りて福を得ざるのみならず其損多く候。今我福神にひがみ給ふ御心ある故幸なきにや」と、顔色をやはらげて云ひければ、其時老親うちうなづきて得心しぬ。それより後僻もやみ、いかり腹だつ事なし。家内のものも仕へ能く成りぬ。

一來書略。庶人の父母には、男女の侍坐して仕ふる者なき故、子たる者夫婦みづから養を取り候。たま〳〵一二人男女の召仕ふべきありといへども、農事を務め食事にかかりなどすれば、近づき仕ふべきいとまなし。其上定りたる祿なき故に、用を節し身をつゝしみて父母をやしなふを以て孝とすと御座候。士大夫より以上の人は定りたる祿あれば、養ふことは云ふに及ばず。また卑妾あれば、朝夕の給仕の心やすき事、子にかはる故に仕ふるにも及ばず。其身の位々に道を行ひぬれば、父母の養ひも備り、父母の心安して氣遣もなし。且祭祀におこたる事なし。是故に職分を務むるを以て孝行とすと承り候。まことにさやうになくて不叶事と存じ候。然るに文王

の敬禮の心も絶はて候。其上聖人の教は、其親を祭りて敬の本を立て候。親の神すなはち天神と一躰にて候。性命より見れば至尊の聖神なり。他に求むべきにあらず。むかし老いひがめる親もちたる者あり。或時子に向ひ言ひけるは、「手足もたゞずしてかく養はるゝは、この家の貧乏神なり。早く死度く思へども、つれなき命なり」と。其時子跪き愼でいへるは、「我家の福神は父君にておはしまし候。つかふまつること誠うすき故に福いたらず。しかれども斯くおはします故にこそ、とかくして妻子をも養ひ候へ。たゞいつまでもおはしますやうにと願ひ候なり」。老親笑ひて云ふ。「用にはたゞずして人を使ふのみならず、色々の好みごとをせり。我ほどの貧乏神はなきに、福神とは何としていふぞ」と。子の曰はく、「昔より今に至る迄、色々の願をたて難行をして神佛に祈るもの多く候へども、福を得たる者一人もなし。親に孝行にて神の福をたまはり、君のめぐみを得たる者は、倭漢共に多く候。しかるに目の前にしるしある家内の福神には福を祈らずして、しるしもなく目にも見えぬ所にいの

洛陽—京都

塔—舍利を藏むるため、供養のため、報恩のため靈域を表する爲等にて建つるもの

此心をだに存養いたし候へば、家ごとに孝子、國皆忠臣と成て天下平なり。所々に勸請なくて不レ叶義と存じ候はいかゞ。

返書略。たとへば洛陽にては賀茂の御社一所にても、人の敬を立つることは足り候べし。昔は數々の勸請なかりし證據ども候。其勸請の習おほく候はゞ、さしも天下の奢をきはめし平清盛、藝州の嚴島をば、疾く都のあたりに勸請して、おびたゞしく美を盡さるべく候へども、はる／＼と西海まで詣でられしこと、清盛には奇特なり。いにしへも原廟を作るとて、大に忌みたる事なり。昔たまさかに原廟を作れるも、靈地を見たてゝ移し、卒爾にはせざるだに非禮おほく候。其後は靈地をも撰ばず、みだりに多ければ、神を汚し威をおとし、敬するとて大なる不敬に至り候ぬ。佛家を以ても御覽候へ、塔は佛舍利のある所を知て、禮拜の心を生ずべきがためなりと申し候へども、むかし山林にある伽藍にたまさかに在るこそ、さもあるべく候。今は町屋と爭ひ建ならべたる塔なれば目なれて、昔たま／＼ありし僧法師

如くなりし、其遺風なり。後世の手本として、茅葺の宮殿の殘り給ふも同じ理にて候。其上神とならせ給ひては、和光同塵の德にて、帝位の其時とは違ひ、國の風俗にて誰もまゐりよき道理にて候。野拙はたゞ其聖神の德をあふぎ奉るばかりなり。太神宮は御治世のみならず、萬歲の後までも生々不息の德明かにおはしまして、日月の照臨し給ふが如し。參りても又おもひ出しても、聖師に對ひたるがごとく、神化のたすけすくなからず。古の聖王は君師と申して、尊き事は君なり、親しきことは師なり。只聖王のみならず、靈山川のほとりに行きても、道機に觸るの益すくなからず。これ又山川の神靈の德に化する故なり。其上祈ると祭ると義ことなり。天をば天子ならでは祭り給はねども、祈るに至りては士庶人も苦しからず。其例もろこしにも多し。

一來書略。先度勸請の宮社を、非禮なりと承り候へども、神道の意はしからずと存じ候。鳥居を入るより、誠敬自然と立て心新なり。社前に至りて拜する所に傳受あり。

在す云々—論語に祭るには在すが如くす神を祭るには神の在すが如しとあり

鼓云々—前出の諫鼓なり

子なれば、我が身則ち神の舍にして、我が精神則ち天神と同じ。仁義禮智は天神の德なり。從つて行は常に天に仕へ奉るなり。其禮を用ひて祀れば福あり。其道にそむきて祭る時は禍至るの義なり。日本は神國なり。むかし禮儀いまだ備らざれども、神明の德威嚴厲なり。在すが如くの敬を存して惡をなさず。神に詣でては利欲も亡び邪術もおこらず。天道にも叶ひ、親にも孝あり君にも忠あり。只時所位の異なるなり。それ天子に直にもの申し奉る人は、公卿侍臣のともがらなり。それより下は次第のつかさ〴〵ありて、可レ奏ことは其つかさに達するなり。況して士民などは、其御門内の白砂を踏む事だにせざるに、帝堯は鼓をかけおかせ給ひて、「農工商によらず直に可二申上一子細あらば、此鼓をうて、吾出て聞む」と詔あり。下にてことゆかずいきどほりある者は、皆直にまゐりて其いきどほりを散ぜしなり。民の心に、たゞ父母にものいふ如く思ひたり。日本の太神宮御治世の其むかし、神聖の德あつく、よく天下を以て子とし給ひ、下民に近くおはしましたる事、堯舜の

君子云々ー孟子に命を知る者は巖牆の下に立たずと

三光ー日、月、星

過ぎられぬ義理にて、助太刀したるにて候へば、撃たれても其人のあやまちにあらず候。是こそ誠の命ある事と可レ申候。死すべき義理なくて、我あやまちにて作り出したるは、喧嘩によらず命にては無く候。義ありて死するはこれ命にて候。是を以て君子は巖墻のもとにたゝず候。

一來書略。祭る事はそれ〲の位にしたがふ事と承り候。天地三光天下の名山大川は、天子これを祭り給ひ、其國の名山大川、國に功ありし人をば、諸侯これを祭り給ひ、聖賢をば其子孫をたてゝ祭らしめ給ふ。大夫士庶人各品あり。しかるに日本にては、上下男女ともに天照皇太神へ參り候。天子の外は國主とても成まじき事にて候に、非禮なるかと存じ候。しかるに貴老其非禮にしたがひ給ふ事は心得ず候。

返書略。もろこし人の、禮あるの外には神を祭らざる事は、利心を以て神を汚す事を禁じ、且邪術をしりぞけたり。しかのみならず、罪を天に得ては祈るに所なき道理をあかし、情欲の親に仕るまどひを解きて、人々の親則ち至神至尊なり。尊神の

定業非業—定まれる業報と非命の死と

は、精力強くして、愼みの苦にならざるか、名根の深くてなすわざか、もしは生れ付て形氣の欲うすき者もあれば、其たぐひなるべく候。形氣おとろへ行にしたがひて、本の志たる道德は無し心は昧し、あぢきなくして後世などに迷ふもあり、愼みおとろへて亂るゝもあり。行過て異風になるもあり。一旦のよきはたのみにならず。月夜のしばし曇たると、闇の夜の晴るとの如し。雲ありともたのむべし。雲なしとも賴むべからず候。

一　來書略。此比爰元にて、友の喧嘩仕出したる所へ行きかゝり。見すぐし難くて助太刀致し候處に、先の者多勢故に、兩人ともに討たれ申し候。本人は定業とも可ㇾ申候、行きかゝりたる者は無ニ是非一事に候。非業の死たるべく候や。

返書畧。定非の事は不ㇾ存候。總じて喧嘩はよき武士はせざることに候。大かた禮儀のたしなみなきか、また怒氣の爲にをかされて仕出す事に候。然れば人爲の禍にて、命とは申されず候。行きかゝりたる人は何心もなく候へども、友の難を見ては

無聲無臭―書經に上天のことは無聲無臭とあり

に候。手本とはならでも、功者なる者は器用なる人を取立て候事も候。

一 來書畧。道に志ある者の、時として飲食男女の欲にうつる事あるは、志の實ならざる故ならんか。又道に志なくても行儀よき者あり。先生いづれをかとり給はむ。

返書畧。心は無聲無臭のものに候へば、見がたき事に候。志ありといふ人も、隱微の地の實不實不レ存候。又志なくて行儀よき人も、隱微の所しるべからず。去ながら父母兄弟妻子を古鄕におきたる人は、一旦他國に遊び候へども、終には古鄕に歸るが如く、隱微の地とかく惡道には行くまじき人の、善に實なる所あらば、道に志ありて、一旦形氣の欲にひかるゝも、終にはもとに歸るべく候。形氣衰ふるにしたがひて、道より外に行く所有まじく候。志の不實と申すにてはなし。實はあれども明のしばし蔽はるゝ所ありてなり。只今飲食男女の欲もうすく行跡よくても、心志の定る所なき人は、父母兄弟妻子のあつまりたる古鄕なくて、只一人身のうきたる如くなり。しからば往々何國にとゞまるべきやらん、はかりがたし。今日のよき

牢人—浪人

ばかりなり。醫者出家などの如くに、師弟の樣子はなく候。只本よりのまじはりにて、志の恩をよろこび思ふのみなり。我等道德の議論をしてあそび候心友も、又かくのごとし。心友なるが故に、たがひに貴賤をば忘るゝ事に候。全く師と不ㇾ存、弟子にても無く候。我等學問仕らざる以前より、常の武士にて奉公致し居り申し候故にこそ、右の如く人々にものがたりも仕り候へ、もし牢人にて學問致し、學問の名を以て奉公に呼び出され候はゞ、罷出申すまじく候。似合敷武士の役儀を勤る奉公ありて、其上には苦しからず候。今時歷々の武士の奉公に出らるゝも同前に候。武藝のあるは其身の嗜にて、世のつねの奉公人にて、其上に志の相叶てかたり候人に、おぼえたる事を敎へらるゝは、苦しからざる事なり。初めより藝能をおもてにしては、歷々の武士は出られず候。一向に物讀と成て出るか、武藝者と成て出る事は、又一道にて候。心法は五等の人倫の内々に用ひる身のたしなみなり。武藝は武士の役儀の嗜にて、其嗜にする人の内にて、勝れたる人の手本となるまで

高をする―高を欲する者の高處に上るを云ふ

して一生をおくるか、扨は出家などの其宗門を繼て寺を持ちなどするは、おのづから師弟の契約なくて不叶事に候。拙者は麁學にて、人に文字讀にてもはか〴〵しく教うべき覺悟なく候へば、何にても人の一生をおくるたよりになるべき事を不存候。少し文武の德に志ありて、聖學の心法を心がけ候へども、自己の入德の功さへおぼえなければ、まして人の德をなし道を達して門人あらん事は、思ひもよらぬ事なり。世に愚がおよばざる才力あり氣質の德ある人々の志の相叶ひたるは、語りて遊び申し候。其人々愚が少し心がけたる心法を尋ねられ候へば、ものがたりいたし候。高をする者の丘陵による如く、美質故に少し聞れても、愚が多年の功に勝り候へば、かた〴〵以て皆益友に候。武士の歴々弓馬の藝を教へらるゝも同じ事に候。先へ學びて功者なる人は、後より習ふ人にをしへられ候。武士は相たがひの事にて候へば、をしへて師ともならず恩ともせず。國のため天下のため武士道のためなれば、器用なる人にはいそぎをしへたてられ候。習ふ人も其恩を感じて忘れざる

江西—近江なる中江藤樹の學風なり

あるべく候や。

返書畧、此人の人がら十が八はよし。二とても惡きにはあらず。たゞ此人の疵なり。其疵ある故に諸人ほめ申し候。善人は其疵は見候へども、玉のきずにして大躰よく候へば、其よき所ばかりほめて疵をばあげず、こゝを以て世擧りてほむることわり尤もに候。しかれども其疵は終に弊あるものなる故、諸人の爲にもそしらるゝ事出來るものなり。はじめより其疵なければ、小人のためにはそしらるゝにて候。全く君子なれば、全く小人のためにはあはざる事多し。其謗は君子の美にして疵にあらず。其人にあらざれば此二の道を知るべからず候。

一　來書略。我等の國には江西の遺風をしたふ者餘多候へば、貴老御弟子の內一人申し入れ度く存じ候。

返書略。拙者には弟子と申す者は一人もなく候。師に成べき藝一としてなき故にて候。醫者の醫業を習ひて一生の身をたつるか、物よみの博學を學て物よみを産業と

穿踰—論語陽貨篇其れ猶穿窬の盗の如きかと

き事と思ひながらも、やむる事あたはずして、日々におごり候事はいかゞ。

返書略。儉約と吝嗇と器用と奢とのわきまへなき故にて候。儉約は我身に無欲にして人にほどこし、吝嗇は我身に欲深くして人にほどこさず。器用は物を求めずたくはへず、あれば人にほどこし無ければ無き分に候。奢はたくはへおかず器用なるやうに見え候へども、其用所は皆我が身の欲のため、榮耀のためにて候。奢て用足らざれば尤人にもほどこさず。しかのみならず家人をくるしめ、百姓をしぼり取、人の物を借てかへさず、商人の物を取て價をやらず、畢竟穿踰に同じき理を知らで、奢は器用なる樣に思ひ、儉約といへば吝嗇と心得候。又吝嗇なる者の儉約の名をかるもある故にて候。

一來書略。同志の中に、世擧りてほむる人御座候。流俗にあはせて然るにはあらず。しかれども本來は、よき人にはよくいはれ惡しき人には惡しくいはるゝこそ、眞のよき人にてあるべく候へ。されど勝れて好きをば、なべてよく申すことわりにても

けとらる―けづるの義にて奪削せらるゝ意か

名將の下に弱兵なき事なれば、大形士は武篇よき者とおぼしめさるべく候。陽氣に我意なるものとても、臆病なる生付にてはなし。たゞ習にて何心なく、其身にはそれをよしと覺えての事にて候。理直なる者にうは氣をしかけぬれば、常ならぬ事故堪忍不レ仕候。其時に思ひがけぬ事にて行あたり、體見苦しく候。又分別だてにて利害おほき者は、常に義理を心がけざる故に、自然の時義理をかき候へば、臆病とも申し候。陰極て陽を生じ陽極て陰を生ずるなれば、平生陽氣なる者は、陣中にては腹立てなすべき所にもあらず。弓矢鐵砲の音にてうかびたる陽氣は皆けとられ、常々臍の本にたくはへたる勇氣のたしなみもなければ、おもひの外常の我意出ざる故、なみ〳〵にても目に立ち申し候。龍といふものは、羽なくて天に昇るほどの陽氣の至極を得たるものにて候へども、平生は至陰の水中にわだかまり居候。是を以て眞實に武勇の心がけある人は常々の養をよく仕る事に候。

一來書略。儉約はよき事なれば、人々用ひたく存じ候へども、なりがたく、奢はあし

おはふ—覆蔽する
左馬助—嘉明
景虎—謙信

すにいたるべきは不便なる事なり、大かたの人見付なば、悦び取て我物とすべし。我等の見たるこそ幸なれとて、拾ひて近里のしかるべき者に預置き、落し主にかへすべき謀あらんこそ、天性の仁愛なるべけれ。明心の靈をふさぐこと、品ことなりといへども、そのおはふ所は一なり。世俗は物欲のちりを以てふさぎ、學者は見識を以てふさぐものなり。其見至所に近きが如くなるも、其傳來のよる所天に出ざるは、終に正道をなす事なし。道の行はれざる事かなしむべし。

一來書略。陽氣に我意なる者は、軍陣にてよからぬと申す說候。又利害かしこき者は、武篇鈍きと申し候。强弱の見樣ある事にて候や。

返書略。加藤左馬助の宣へる由にて承り候。諸士の武篇に目利あり。たゞ理直なる者、大かた武篇よきと心得べしと。又越後の景虎の宣ひしは、武篇のはたらきは武士の常なり。百姓の耕作に同じ。武士は只平生の作法よく、義理正しきを以て上とす。武篇のはたらきばかりを以て知行をおほくあたへ、人の頭とすべからずと。

一跡—資産の全部

取るべし」と、明慧云ふ、「重きにこゝまで持來り給ふや」と。解脱の心は、鬼よ蛇よなどいひて、人を害するものありとはいへども、見たる者なし、金銀に命をとるゝ者は、眼前に數をしらず、誠に大蛇なると云ふ義なり。此類の見解を以て、世俗のまどひを出たるものなり。明慧は金銀も石もかはらも同じく見なして、とかくの見解なし。誠にはるかに高き心地にて候。聖賢の心位と申すともかはりあるまじきと存じ候。

返書略。兩僧の内にては心位の淺深ありといへども、聖學よりみればいづれも見解にて候。心地自然にして物なしとは申しがたかるべし。柳はみどり花は紅と、それぞれに物の輕重は輕重にして置て、我あづからざるぞよく候。金銀と土石と同じく見るといふも、見解を以て作りたるものなり。無物自然の心にて見侍らば、我こそ金銀はいらずとも、世間の人の寶とし、世をわたり人を養ふ物なれば、之をおとしたる者は、主人のものか人の使か其身の一跡か、人によりて身代をやぶり命を亡

土苴―ごみくた

明慧―高辨上人なり北條氏初世頃の僧

解脫―貞慶上人の諡、建保元年寂す

とを辨へず。仙佛のいふ事なれば皆異端の語として忌みさけぬ。彼も聖門のよきことならでは取用ひず。三代の禮樂も浮屠に殘れる事あり。人道にはかへりて戰國の久しかりし間にとり失ひたること多し。されば聖學の至言は皆異端に與へて、儒は土苴を取ぬ。凡て道德の高下淺深を論じ、語の似たるをあはせて同異をいはゞ、盡る期あるべからず。內典、外典の名は佛者より云ふといへども、實は儒者の招く處なり。秦漢より以事、士君子たる人道統の傳を失ひて、執中の心法を知らず。道德甚だ下れり。故に儒者の道は只如斯ものと思へり。されば高明の人は多く佛に入り仙に入る。道家も後は天仙の旨を失ひて地仙に落たり。是も又心法を絕す。只佛者のみ心法をいへり。之によりて佛法を內といひ儒道を外といへり。

一　來書略。此ほどおもしろきむかし物語を承り候。明慧と解脫と同道して路次を過られはべりしに、かたはらに金銀多くおとし置きたり。解脫是を見て、こゝに大蛇ありとてよけて通り、四五町行すぎて又云ふ、「先の物は定めて他人見つけたらば悅びて

先天の圖―先天圖太極圖等は儒家の天理人道を說くに用ふる一種の圖解

返書略。形色あるものは皆無より生じ候へば、有無もと二にあらず。中と云ふは天理の別名なり。有無に對する中にはあらず。堯舜始て易の心法を發明し給ひて中と名付け給へり。則ち天下國家の平治齊とても、中の外無一心無二道。天理の我にありて未發之を中と云ひ、天理の我にありて已に發する是を和と云ふ。修身、齊家、治國、平天下は已發の和なり。則ち中なり。物の天理の至精を得て、至易至簡なるを中と云ふ。則ち和なり。佛氏といへどももと有無を二にせず。色卽是空これなり。聖學といへども有無中を別にせず。形と色とは天性なりと。佛氏といへども、有無の中には留まらず。佛書に云ふ、「心性不動。假立中名。亡泯三千。假立空稱。雖亡而存。假立假號」道者といへども無に偏らず、後世の奢をとどめ僞をひらきて、太古朴素淳厚の風をかへさんと思へり。佛仙共に聖學の徒なり。語も理もいづくより取來らんや。儒には聖學の傳來明言を失ひて、かへりて仙佛にのこりとどまること多し。先天の圖を仙家に得たるにて得心あるべく候。本聖人の門より出たるこ

無懐氏—伏犧氏の後神農氏以前の支那上代帝王の名

中道—中正不偏の道

實相—物の有の儘のすがた

返書略。古今異學の悟道者と申すは、上古の愚夫愚婦なり。上古の凡民には狂病なし。其悟道者には此病あり。先づ地獄極樂とて、なき事を作りたるにまよひ、又さとりとてやう〱地獄極樂のなきといふ事を知りたるなり。無懐氏の民には本よりこのまよひなし。是を以て、さとり得てはじめて昔のたゞ人になると申す事に候。たゞ人なればせめてにて候へども、其上に自滿出來て、人は地獄に迷ふを我は迷はずとおもひぬれば、地獄のなきと云ふ一事を以て、何をもかをも無しとていみ憚かる所なく候。儒佛ともに世中に此無の見はやりものにて候。

一 來書略。佛教を內典といひ儒教を外典と申し候事は、心を內といひ形色を外と申しはべれば佛教は心法なり。儒教は外ざまのしおき法度なりと申す儀にてあるべく候。又儒、道、佛の三教は有、無、中なり。いづれにも靈妙なきにはあらざれども、つかさどる所、儒は有相の上の道なり。道は無相を至極とせり、佛は中道なり、有無中かねて機によりて說くと雖も、畢竟は中道實相に歸著すといへり。いかゞ。

しなど仕候事は、ゆゑもなき世俗のならはしと存じ候。然れども俗にしたがひ可レ申候や。

返書略。秋冬は陰氣内に有りて事を用ひ、陽氣外にある故に、立春の旦より陽氣内に入て事を用ひ、陰氣外に出るのかはりめなり、されども餘寒甚しき故に、大豆をいりて陽氣を助け、屋のすみ〴〵までも陰陽のかはりを慥にしたるものたるべく候。鬼は陰なり。今宵より外に出るなり。神は陽なり。神は福をなす。今宵より内に入て萬物を生ずるなり。鰯は衆を養ふ物にて、仁魚なるに依て、邪氣其香におそるれば、邪氣をはらはむとなり。柊木を加ふる事は、世俗鬼の理を知らでなしたる事か。鰯のごとき理のあるか。いまだ知らず候。

無の見―一切の物を否定する老佛學者の見解

一來書略。今時なま學問する人は、ものをやぶる樣に被レ申候。世中のわけもなき事をやぶるは尤もにて候へども、何をもかをも理屈にておし候へば、神道も王道も立ざる樣に成行き候。無の見と申すあらき異學の風の如し。いかゞ。

漢高祖云々―雍齒を封じたる事を指せり

ものなり。何の苦勞なくたまはるとも、國も天下も所望になく、君子は故なきの利を禍とす。國天下は、道を得て持は大安なり大榮なり。道なくて持つは大危なり大累なり。これ有るは是なきにはしかず。天災人亂及びては、匹夫たらん事を求むれども免れずと云へり。此故に先祖より受來りたる國天下を輕く思ひ、我欲の爲に失ふはひが事なり。聖人の大寶を位といひて、富貴なくては萬民を救ひ助くる事なりがたし。受けきたり候天下ならば、仁政を行ひ、天下を安靜ならしむるを樂みとする儀にて候。義もなくてもとむると、我にあるものを輕くしてすつると、同じく無道の至りに候。夫利欲の人は、天威のおす處にてかなはざればこそ、臣となりてかしこまり候へ、勢ひだにあらば大かた主君をも失ひ申すべく候。是を以て漢の高祖は我頭をねらひたる者を知りながらたておかれ候。人情を知り、且つ天下の歸する所は、人力に及ばざる事を得心ありたる故にて候。

一　來書略。節分の夜、大豆をいり福は内へ鬼は外へといひ、鰯の頭をやきて戸口にさ

氣逸物―かはり者の義か

許由云々―堯が天下を讓らんと云ひしを聞き耳を潁川に洗ひし故事

れ相の極意にて候。

一　來書略。拙者在所に氣逸物なる者あり、知行二百石の身上なりしが、死期にのぞみて其子にいふやう、「天下はまはり持なるぞ、油斷すな」とて相果て候。天下の武士たる者、此心なきはふがひなき樣に申す者あり。然ば無學の人は臣にしても賴みがたく候。勢ひのおよばぬ故にこそしたがひ仕へ候へ。とりはづしては皆主人をも失ひ可レ申候や。

返書略。天下の武士の心は知らず候。惣じて天下は父祖より受來りしならば是非に及ばず。好てのぞましきものにあらず。國郡も又同じ。野拙はおそれながら大樹君を代官とし奉り、治世にゆる〳〵とすみ侍ると存じ候へば、かやうのありがたき事なく、萬萬歲といはひ奉り候。貧は士の常なれば、樂しみこれに過べからず、許由が耳を洗し心も、堯帝を代官として山水をたのしむは、何の官位にか加ふべき。我に天下をゆづらむとは、人の代官をせよとか、二度此事をきかじとて耳をあらひし

狂者—論語に狂者は進取すとあり

大智如愚—蘇東坡の文中に見ゆ

あうてうたふ道理なり。みづからの死生を思ふ事尤も同じと。しかれば生をにくみて死を好むとも可レ申候や。

返書畧。勞安の義二つにあらず。晝夜を以て見給ふべし。夜はいねて安く、晝はおきて勞す。しかれども、夜のやすみ極りぬれば晝の勞を思ひ、晝の勞極りぬれば夜の休を思ふ。死生勞安は時なり。只造物者のなさむまゝなり。私意を立て好惡すべからず。狂者は凡人の生を貪り死をにくむの迷を矯むべきが爲に過言あるものなり、其見所天人陰陽の外に出たり。聖人もとより此心なきにあらず。しかれども中行はくはしきが故に其見を忘れ、狂者はあらき所ありて見を忘れず。大智は愚なるが如し。物あれば則あり。聖人は道と同體なり。天地萬物の則なり。何ぞ見解を立て物理を破らんや。しかれども狂者の心も又よみすべし。

一

來書略。拙者在所に人相を見るものあり。何とぞ本ある事にて候や。

返書略。本ある事にて候。相書に云ふ。「惡乃禍之兆、善乃福之基」とあり。こ

武篇—篇は邊なり武道

の時の用までもなく、身のあやまち近きにあり。貴方の勇氣は小脇指のはやき樣に候。間よき程につめて御さし可被成候。其上勇力にほこるものは損多く候。其善を有すればその善を失ひ、其能に矜れば其功を失ふとは、古人の格言なり。勇だてする者をば人がにくみて、少々の手柄ありてもほめず、かへりていひ消し候。扨何事をぞ構へて越度あらせんとし、又すぐれたる手柄ありても、大身になりがたきものに候。されば常に敵多くてやすき心なく候。むかし三十年、甲冑を枕とし山野を家として、度々高名あるのみならず、武道の事功者なる者ありき。若きともがら打寄ては、此老人を請じまうけ、武道の物語を聞き候處、其人のいへるは、吾は人のいふほどの手柄もなし。わかき時より愛敬ありて、人に愛せられたる者なり。この故に世に高名あり。武篇の極意は愛敬なりといへり。何事も至極にいたれば道に近く候。

一 來書畧。生は天の吾を勞するなり。死は造物者の吾を安ずるなり。狂者の親の喪に

どみ—鈍か曇か冴え〴〵せぬ義

勇は仁云々—論語に「勇にして禮無ければ則ち亂る」と

返書略。まことに刀のきるゝと切れざるとは、かねにて見ゆる事に候。むかしは今の樣にためしものと云ふ事まれなる故に、只自分の目にてかねよき刀を目利して求めさしたると申し傳へしなり。我等もそれに心付て見習ひ候へば、大かたあたり候。かねのきたひよく精神あるが如く、はきとしたるはきれ申し候。かねかたくても精神なく石の如くなるや、鍊たるやうにてもやはらかに鈍きは切れず候。此善惡は少し心づきぬれば見え申し候。又大かたにては見えがたきかねあり。にぶきに似て、どみたるやうにて然はなく、空の曇りたるが如く、淵の深きが如くにて、さえ〴〵ときたひよきところは見えざるあり。是はすぐれたる大きれものにて候。沉勇も又如此。この品々はさしおきて、武士たる者は、皆武勇あるべきことわりの者にて候。刀は皆きるゝ能あるものなり。柄鞘して金銀糸を以てかざり、はやからずおそからず、よきほどにつめてさすものにて候。武は文を以てかざるべき理なれば、勇は仁を以てをさめて、平生は禮儀正しく仁愛ふかきがよく候。刀脇指のはやきは、自然

本を云々―論語學而篇の君子は本を務むの義

德を助くるものなり。文武の道をよく心得て、武士をみちびき民を撫をさめ、其餘力を以て月花にも野ならず、歌をもてあそばれ候はゞ、花も實もある好人たるべく候。賴朝卿の末のおとろへは歌鞠の罪にあらず。其本の不ㇾ立故なり。本たゝざれば武道の心がけに過て亡たる家も、和漢共にあまたあれば、これも武道の罪と可ㇾ申候や。本を捨てゝ跡にて論ぜば、はてしあるべからず候。鞠は親王門跡などのれきれき、武士のやうに鷹がり步行もなりがたく、輿車の御ありきも度々なりがたければ、門內にばかりおはしまして、氣血欝しとゞこほり給ふ欝散に、鞠など御相手だに惡しからずば苦しかるまじきか。それとても學問家業つとめ給ひし上に、御養生の爲ならば然るべし。いづれにても遊びを專として本なきは、あしき事にて候。

一來書略。勇は沈勇がよきと承はり候。されど刀もかねよきはうち見るよりきれぬべく存ぜられ候。人の武勇も强弱如ㇾ此と存じ候。尤も沈勇もあるべく候へども、それは百人に一人にて、大かた見聞の及ぶ所たがはざるかと存じ候。

天下の老若を不便におもふ仁愛の心より、世中の無事を好み、其上に不慮の事出來る時は、身を忘れ家をわすれて大なるはたらきをなし、軍功を立る人あらば、一文不通の無學といふとも、文武二道の士なるべし。世間に文藝を知り武藝を知りたる者を文武二道といふは、至極にあらず。これは文武の二藝といふべし。藝ばかりにて知仁勇の德なくば、二道とは申しがたかるべく候。

頼朝の次―頼家
その次は實朝

一 來書略。歌鞠は武士のわざにあらず。頼朝卿の次は鞠をもてあそびて亡び給ひ、其次は歌を好みて絕え給へり。惣じて武家の弓馬におこたりて歌鞠をもてあそぶは不吉なりと申し候。さもあることにて候や。

返書略。歌道は我國の風俗なれば、少しなりとも心得たき事にて候。されどもいにしへの歌人は、本ありての枝葉に歌をよみたるよしに候。本と云ふは學問の道なり。學問の道に文武あり。文武に德と藝との本末あり。文の德は仁なり。武の德は義なり。仁義の本立て後、弓馬書數禮樂詩歌のあそびあり。弓馬書數禮樂詩歌は文武の

理運と利運―云ふ程の義なり好運にて

名聞利用―我が名譽利益

何事ぞと―何事か起れかしと

かしと願ふは、思慮すくなき事に候。十死一生を知らで理運に高名すべき樣に思ひなば、なりがたき勢を見てはおくれを取る事もあるべきか。其上天下の人、妻子等の嘆き苦しみを思へば、たとひかならず命を全うして、高名をきはむとも、一人の小知行のために萬人をくるしめ、人のなげきをあつめて名聞利用とせん事、心にこゝろよからむか。仁人は國天下を得とても好まざる事なり。兵書に云ふ、「凡兵は過なきの城を攻ず、罪なきの人を殺さず、人を殺して其國郡をとり、貨財を利するは盜なり」といへり。惡人ありて亂もいできよかし高名せん、と思ふは不忠なり。其上富貴、貧賤、盛衰相かはれり。如此のわきまへありて、兵亂をいとふはよき心得なり。其わきまへもなく、武道武藝もきらひにて、やはらかにくらす便利のために無事を好めるは、しなこそかはれ、うは氣に何事ぞとねがふ人に同前たるべく候。よき武士といふは、あくまで勇ありて、武道武藝のこゝろがけ深く、何事ありてもつまづく事なき樣にたしなみ、さて主君を大切に思ひ奉り、自分の妻子より初めて、

集義和書　卷第二

○書簡之二

一來書略。武士たる者は、事あれかし高名して立身せむと思ふを以て、常とおぼえ候。又事なきこそよけれ、兵亂をねがふは無用の事と申す者候へば、武士の心にあらずなど云ひてあざけり候。いづれか是にて候べき。

返書略。いづれも非にて候。文盲にして道學のわきまへもなき武士は、せめて武道一偏の心がけを第一として、只今にも事あらばと油斷せず、高名せんと思ひ、疊の上にて病死するは無念なる事に思ふも可なり。然れども浮氣にてさやうに思ふはひがごとなり。我高名せんと思へば、人も又同じ心あり。死生二に一なり、それまでもなく、弓矢鐵砲の憂あれば、死は十にして生は一なり。高名立身を望みて事あれ

服といふ義にて候はんや。兵服の初は、戎服にかたどりて戎衣と名付く。是によりて戎字をつはものと讀ませたるにや。えびすの服、つはものゝ服、兩義の中、左まへと袖なきとにより候へば、えびすの服の義初たるべく候や。中國の人も、甲冑したる體は戎狄の形に似候。戎衣なるが故に右をうへにするにて可レ有と存じ候。むかし日本の鎧には袖といひて別に肩に付け候。是は矢を防がんが爲盾に用ひたるものに候。近世は鐵砲渡りて、袖のたてゆきうすく候故に、次第に不レ用候。異國の甲胄には本よりなきものにになり。

書經—一たび戎衣して天下大に定まるとあり

返書略。和漢の故事候や、未レ知候。愚見を以て道理を辨へ候へば、十月は純陰の月にて陽なく候。亥の月の亥の日は、いよ〳〵陰の極りなり。陰極りて陽を生ずるものは母なり。生ぜらるゝものは子なり、餅は陽物なり。故に先人身の陽を調へて、天地の氣を助けんとす。陰陽相對する時は、陽を凌げり。君臣とし夫婦としても、君をなみし夫をかろしめ、やゝもすれば陰の爲に陽を破る事あり。ことに微陽は純陰に敵しがたし。子とする時は、養育して生長せしむ。故に陽を亥の子といへるか。日本は東方なれども小國なり。陽の穉なり。是故に別して陽を祝ひそだてんとする心にて有るべきかと存じ候。

一來書略。具足のあはせめは、右を上にいたし候。具足屋に尋ね候へば、古來仕來り候へども、其故を不レ知と申し候。

返書略。「一たび戎衣して天下大に定る」と書經に見え候。甲冑は戎狄の衣服にかたどれり。南西北の人は、衣服左まへにして袖なし。又戎は兵なり。戎衣はつはものゝ

他人のよき程云々人皆善ければ我惡愈々顯著なるを云へり

がちにて、同志の非は見ゆるし候。他人の非を見るは、何の用にも不立して、却てさはりとなる事なり。同志の非をよく見て、互に相助けたき事に候。御同役の人も、貴殿の德次第にて、後には志も出來候べし。不行儀なる人はたのみなく候。此人は作法よく候へば、その身にさしはさむ事もあるまじく候。不行儀なる人は、他人のよきほど我身の惡にさはりぬるゆゑ、いよ／＼忌みにくむものにて候。貴殿の御同役は、學者といへども我身の無學ほどもなきと思はれ候間、此方の德をつみ給ひなば、やはらぎ出來候ひなん。利發にて世情の心得よく候べければ、貴殿だにへだてなく同志と同じくもてなされ候はゞ、同志の人情を知らぬ人よりは、事の相談よろしかるべく候。內々あしく聞てにくむ心ある所へは、いかほどよき道理の書物を御見せ候とも、かひあるまじく候なり。

一　來書略。十月の亥の日を亥の子と申して、餅を作りていはひ申し候事は、何としたるいはれにて候や。

に出でたる昔の儒の如く、一人の役者となりて、異端の徒をまぬかれ給はゞ、幸甚たるべく候。

一 來書略。拙者同役に利發にて作法もよき者候。道に志なき故、何方やらん談合などあひがたく、氣のどくに存じ候。道理を得心すまじき者にてはなく候間、和解の書にても見せ可レ申候や。

返書略。拙者も見及び候。利發なる故に、貴殿、我等など、同志の非をよくみられ候。又わきよりも學者の非を云ふことは多く、少しにてもよきこと有レ之分は、言ひ聞かするものなく候。志ある者は、默して居候より外の事なく候へば、日々ににくむ心はまさりて、中々志は出來申すまじく候。道德の義を得心すまじき人にてはなく候へども、貴殿、我等などよりは知慧おほく候。貴殿、我等も、學者の名あらずば、一向の凡夫よりは勝りたる所もあるべく候へば、親しまるゝ事も候はんづれども、學者の名ある故に、へだてと成り候。同志の友も、世間の人の非をば見

陶淵明―晉の名臣、名は潛

市隱―王康琚の詩に曰く小隱は陵藪に隱れ大隱は朝市に隱る

大樹―將軍の義後漢の名將馮異が故事に基づく

の中において第一重し。貴殿文學に器用にて、他の事にはより所なし。天の與ふる才なれば、文藝を以て祿を受らるゝこと、何の害かあらむ。もし德を知りたる人の文才ある者、貧きがための仕を求めば、史儒にかくるゝ事もあるべし。晉の陶淵明は酒にかくれたりといへり。市隱の類みなしかり。其職よりも身をたかぶるものは、心いやしければなり。其職よりも身をへりくだる者は、德たかきが故なり。今人、德ありて儒者にかくれば、必ず其言ゆづり其身へりくだりて、道をあらはすべし。故に云ふ、「たかぶれば心賤しく、へりくだれば德高し」と。ねがはくは德を好みて儒者にかくれ給へ。今の人久きあやまりを不知して、佛家道家などいふ如く、儒者をも一流の道者なりと思へり。大樹、諸侯、卿、大夫、士庶人の五等の人こそ道者にて候へ。儒者は一人の藝者なり。世人弓馬の藝者を以て武篇者とはせず、武士たる人みな武篇者なるべきが如し。此あやまり漢の代よりこのかたならん。五等の人倫の外に、別に道者あるを以て異端とすれば、儒者佛者共に異端なり。貴殿周官

の道あり。皆士農工商の業あり　亂世久しく、戰國の士禮樂文學にいとまなく、武事にのみかゝり居て、野人に成りたれば、只鄕里にして藝文を敎へたる者の末々のみ、わづかに古の事をも知りたり。此故に聖人の道を說く者を儒といひたり。そのかみの文學の稱なりといへり。然れどもいまだ產業にはおちざりき。聖人の道學を名付けて、儒者の道といふべき道理はなき事なり。世のいひならはしと成りて、さやうに云はざれば、それと人の心得ざる故に、我等を初めて儒道と申すなり。古の人のいへるも斯の如くなるべし。今の儒學といふは、史となるの博學を習ふがごとし。弓を稽古し鐵砲をうち習ひて、奉公に出るがごとくなれば、產業とするも罪にはあらず。戰國よりこのかた、學校の政久しくすたれぬれば、此史儒の文藝者に經傳の文義を聞くべきより外の事なし。武藝者に弓馬兵法を習ひて、武勇を助け武功を立るは武士の事なり、史儒に文を學んで道理を知り、道を行ひ德に入るべきは、五等の人倫なり。故に今の史儒は、其職ひきゝがごとくなれども、其事は諸藝

天空云々―此句古今詩話に見ゆ
原壤―孔子を踞して俟ちし人
素王―孔子なり莊子に云ふ此を以て下に處るは元聖素王の道なりと

飛ぶにまかせ、海廣うして魚のおどるにしたがふが如し。

一　來書略。拙者文學は少し仕り候へども、才德なくて儒者といはれ、かつ祿を受け候こと、恥かしき事にて候。

返書略。今時儒者といはるゝ人の中に、貴殿ほど德を尊び道を思ふ人はすくなかるべく候。儒者の名は三皇、五帝、夏、商の代まではなかりしなり。はじめて周官に出でたり。鄕里において六藝を敎ふる者を儒と云ふと候へば、一人の役者なり。今の儒者といふは史の官の如し。博識を以て業とせり。素王の曰く、「文勝質史」なりと。しかれば今の儒者の德なく道を行はざるは、さのみ罪にもあらず。聖人の道は五倫の人道なれば、天子、諸侯、卿、大夫、士庶人の五等の人學び給ふべき道なり。別に儒者といひて道者あるべき様なし。學問を敎へて產業とすべき人あるべきにあらず。上より人をえらびて士民の師を置き給ふは各別の事なり。此外先覺の後覺をさとし、朋友相助け相敎ふるの義あり。人幼にして學び、壯にして行ひ、老て敎ふる

職人云々―孟子曰く矢人豈函人より不仁ならんやと

許由―堯の讓を受けざりし人
嚴子陵―足を帝腹に加へし人

なり。同じ佛道の中にてだに、各の異見を立て相爭ひ候。別は別にして爭はざれば、いつまでも難なく候。佛者も天地の子なり。我も天地の子なり。皆兄弟にて候へども、或は見る所の異により、或は世にひかるゝ生業によりて、さまぐ\に別れ申し候。儒といひ佛と云ふ見をたつればこそ、たがひの是非もあれ、何れの見をも忘れて、たゞ兄弟たる親みばかりにて交り候へば、あらそふべき事もなく候。こゝに職人の子供兄弟ありて、一人は矢の根鍛冶となり。一人は具足屋となりたるが如し。矢をとゞむべき甲をぬくべきの爭あらば、東西各別の他人なり。本の兄弟の親しみのみ見る時は、職は各別にして爭はあるまじく候。これはすぎはひゆゑとも可申候へども、食物にも兄弟各すききらひある事なれば、味をあらそひ候とも、各の口のひく所は一致にはなるまじく候。たゞ其まゝにして我は我人は人にてよく候。聖賢の御代ならでは、天下一同に徳による事はなく候。然れども猶堯の時に許由あり、光武に嚴子陵あり、孔子に原壤あり、聖人これをしひ給はず。天空にして鳥の

謀を好む—論語述而篇に必ずや事に臨んで懼れ謀を好んで成る者なりと

三教—神、儒、佛

て敵を制し、小勢は奇兵を用ひ、はかりごとを好んで敵をくじき候。然れども正も奇を用ふる所あり。奇も正と成る時あり。吾は義にして敵は不義なり。吾は善にして敵は不善なり。善人に從ふ軍士は皆義士なり。不善人にしたがふ士卒は皆賊なり。惡人のために善人をそこなふべからず。謀を好んで敵をあざむき、味方をそこなはずして敵を亡す事は、明將の常なり。七書といふも、其明將の行ひし跡をいひたるものなり。又は軍の才氣を生付たる者の、道をば知らざれども大將と成りたるか、軍功を立たる者の言もあり。其軍の才は君子に似たる所あれども、其實は天地各別なる事にて候。

一　來書略。佛をそしるは無用の事なり。たゞ己が明德を明にする事をせよとうけたまはり候は、尤至極に存じ候。爭なくて居候はゞ、三敎一致と申すも罪あるまじく候や。

返書略。一致にてもなきものを、一致と虚言可申樣もなく候。其上一致は爭の端

七書―孫子呉子司馬法尉繚子三略六韜李衛公問對

出てつかへられ候。文王も客の禮を以て待ち給ひしと、傳へ承はり候。

一來書略。よき儒者と佛者とをよせて論ぜさせて聞度心御座候。疑ひのある故か邪心ある故にてあるべきと存じ候。

返書略。法論や儒道佛の論などは、氣力のつよきかたか、理のとりまはし小賢こき者勝と見え候。其人の勝負にて、道の勝劣にあらず。聖人の道の諸道にこえてゆたかに高きことは、論議を待たずして分明なることなり、孝經に深からざる故にうたがひ出來候。天地の間に人のあるは、人の腹中に心のあるが如し。天地萬物は人を以て主とし候へば、有形のもの人より尊きはなし。其人の道の外に何事のあるべく候や。

一來書略。七書の中、聖賢の論と云ふはつくりごとにて、多くは功利の徒の言にて候はゞ、何れも用ふべからず候か。

返書略。仁義の心あり仁義の名ありて後用ふべく候。大軍は正兵を本とし、威を以

兩道—文武是なるか夷齊是なるか

を信じ、是によりて心を動かさゞる者あり。聰明の人は、小悟小信を以て小成の功なければ、理學にはさとく候へども、德をつむことはおそき樣に見え候。いかさま學に志すほどの人は、昨日の我にはまさりぬべし。しかれども學流によりて、人品にはかへりて益なく、人にたかぶりにくまるゝばかりなるも有レ之體に候。よく學ぶ者は、人の非を咎むるに暇あらず。日々に己が非をかへりみる事くはしくなり候。

一　來書略。武王、太公、伯夷、叔齊の是非を論ずる者、古今多く候へども、其精義心得がたく候。

返書略。古の事は不レ存候。只今武王、太公、伯夷、叔齊御座候はゞ、拙者は伯夷にしたがつて首陽山に入り申すべし。論議に不レ及候。此兩道を明辨せずとも、聰明のさはりにも成るまじく候。聖賢にかはりはおはしまさねども、時の變によりて其跡たがひ、其心見がたく候。只人道は堯舜を師とせば、あやまる事あるべからず。變にあひ給ふ聖人にては、文王にしくはなく候。文王と伯夷は、本傍輩なりしかど、

天理人欲―此語禮記の樂記に出づ宋學者の盛んに使用したる語

ごみ云々―塵を沈澱せしめたるの義

によりてよき人餘多出來るものにて候、德は人のためにするにあらず。己一人天理を存し人欲を去るなり。人欲を去て天理を存するの工夫は、善をするより大なるはなく候。善といふは別に事をつくりてなすにあらず。人倫日用のなすべき事はみな善なり。君子は義理を主とし、小人は名利を主とす。心には義理を主として、よく心法を受用すると思ふ人あれども、其人がらの全體、小人の位に居てみづから知らず、其位をぬけざるもの古今多し。此所をよく得心し給ひて後、聖賢の書を見給ひ、人にも尋られ候はゞ、皆入德の功と成り候べし。心法は大學、中庸、論語に如くはなく候へども、學者の心のむき樣にて、俗學となり跡となる事に候。心法を受用する人も、人がらの位をぬくる事をしらざれば、一生心術の訓詁にて終るものなり。又學見も大に精しく至りぬれば、大方の凡情はぬくるものにて候へども、それほどに見解の成就する人は稀なる事なり。大方は水のごみをいさせたる樣にて、澄みたると思ふも眞にあらず候。又一等の人あり。生付欲うすく、心おろかにして小理の悟

手筋―問に流派とあるに同じ

よく候や。今時朱學、格法、王學、陸學、心學などとて、色々にわかれて申し候。皆古の儒道にて御座候や。

返書略。學問の手筋の儀、いづれをよしとも、あしゝとも申しがたし。總じてすこし學びて道だてする者は、人道の害に成る事に候。身の愚なるたけをもしらず、至りもせぬ見を立て、とかくいへば、無事の人まで物にくるはせ候。一向に俗儒のへりくだり心得よき者を招きて、經義を聞き給ふべし。其身文武二道の士にてなきと申すばかりにて候。夫武士たる人、學問して物の道理を知り給ひ、其上に武道のつとめよく候はゞ、今の武士則古の士君子たるべく候。

一　來書略。物よみに經義を聞き候とも、心法はいかゞ受用可㆑仕候や。

返書略。聖經賢傳道理正しく候へば、誰よみても同じ事に候。たゞに理を論じ跡を行ひたるばかりにては、心のあかのぬけざる事尤に候。心術を受用すると申す人も、凡情の伏藏かはりなければ、共に功なき事は同じく候。有德の人あれば、其化

朝に云々―論語里仁篇の語

おとな―長老、家宰の稱

一來書略。不幸にして壯年の時文學せず、年已に五十に及び候。小家中なれども用人にて候へば、老學のいとまなく候。朝に道を聞て夕に死するの一語をねがひ申すばかりに候。

返書略。家老たる人の、道を好み德を尊び給はんは、忠功の至にて候。たとひ其身にはつとめずとも、人に道藝を勸むるは、上に立つ人の役にて候。心は耳目手足の能なけれども、よく耳目手足の下知して尊きが如くに候。心のおとなしき人を家老とするなれば、おとなともいひ、若けれども老人の公道ある故に、老とも申し候。老の字の道理にだにかなひ給はゞ、幸甚たるべく候。

一來書略。先度被仰下候、家老たる者、其身は無能無藝にても、人に道藝をなさしむるは、みづから藝能あるに同じとの義、尤至極に存じ候。誠に人の上に立ち候者、いか程多能多藝にて學問ひろく候とも、人の賢をそねみ人の能をそだて侍らずは、かへりて凶人たるべく候。弓馬文筆等の事は心得申し候。道學はいづれの流が

三分が二―史記に曰く皆以て受命の君なりと爲し天下を三分して其二を有つと

きゐて北狄の中國を侵すをはらひ退けしむ。其時はわづかに周一國の諸侯にておはしましき。文王と申すは謚號なり。そのかみは西伯と申したり。西伯の紂王に忠ありしこと、たぐひすくなし。天下の諸侯紂王が惡をにくみて、そむける人三分が二なり。其二は皆西伯に志あり。此時西伯軍をおこし給はゞ、紂をほろぼさん事たなごころの內なり。しかるに西伯は紂王に無二の忠臣なりしかば、大半のそむける諸侯をひきゐて來朝し給へり。紂王は西伯の心を知らざれば、人の思ひつくを怪しみて羑里にとらへ奉りぬ。其後は來朝する諸侯もまれにして、北狄いよ〳〵境をおかせり。其時紂王初めて西伯の功を感じ、ゆるして國にかへすのみならず、西國をまかせ狄人をふせがしめたり。殷の代の末に、文武おとろへ中夏むなしかりしかば、北狄來りおかしゝなり。是によりて周公を征夷將軍として征伐せしめたるなり。此時太公望をあげ給ひ、狄を征するがために軍法を論じ給ひし事もあるべく候。然れども六韜の言語の如き事はあるべからず候。

唐—李唐に非ず支那の義

やはらかなれば、北狄のあなどりおかすも理なり。賢君の代には、文武兼備りぬれば、おごらずおこたらず。上臈もやはらかならず、下臈もかじけず。身無病にして手足つよきがごとし。北狄おそれて臣となりぬる事尤なり。日本も神武帝より應神の御代、其後までも、王者の武威甚強くおはしましゝかど、次第に文過ぎて武おとろへたり。京家の人とて武家のあなどるは其故なり。武家にても少しの間に强弱入かはれる事なり。平清盛は武功を以て經あがりしかども、一門榮耀におごりぬれば、わづかに二十餘年のほどに武勇よわく成り候。まして唐は三百年五百年治りて、其間に文武の業あやまり候へば、劍をも帯せざる風俗になりしも尤なり。其あやまりを以て、聖代の繪をも、劍を帯せずかき候は、あしく候なり。

一來書略。文王を野心あらんかと疑ひながら、又征伐をゆるされたる事は、心得がたく候。

返書略。日本王代の征夷將軍といはんが如し。西國の諸侯のつかさにて、與國をひ

六韜—文武龍虎犬豹の六韜太公望の兵書と傳ふ

かじけ—凍餓憔悴する

に人情にたがふことなしとなり。軍旅に達せる事は、初めはしろしめさざれども、天然と大將軍の器量ある人なる故、用ひ給ひしなり。六韜に記す處の文武太公の論は、皆大なる僞なり。後世事をこのむもの是を作れり。かつ聖賢をかりて、軍者功利の術をかざりたるものなり。若し彼に云へる如きの心あらば、何を以てか聖人とは申すべきや。

一來書略。中華の國、聖代には武威つよく、末代に至りてよわくなりしと申す事は、いかなる故にて候や。

返書略。北狄の中夏を侵すとをかさゞるにてしられ候。聖賢の代には、文明かに武備り候故に、臣と稱して來朝せり。末代は文過て武をこたれり。文の過るといふは奢なり、士以上はおごればやはらかに成りて武威よわし。上驕れば民かじけぬ。上下をこたりて武そなはらず。無事の時は民も女の樣にて心やすきは、使ひよき樣なれども、戰國にのぞみて士の手足とするものは民なり。手足はよわし、身は奢りて

秦火—秦始皇三十四年御して天下の書を燒かしむ

中行—中道を守りて過不及なき事

諫鼓謗木—淮南子に堯敢諫の鼓を置き舜誹謗の木を立ツとあり

事の多少をいふのみ。惑を解くことのおほきを理學といひ、心ををさむることの多きを心術といふ。秦火に經そこねたり。故に漢儒の功は訓詁にあり。其後異端おこりて、世に惑ひおほし。故に宋儒の學は理學にあり。惑ひとけては心にかへる。故に明朝の論は心法にあり。

一 來書略。太公望を微賤よりあげて三公となし給ひし事、不審多く候。周公、召公のごとき中行の君子とも見えがたく候。軍旅の事に長じたる人故にて候や。

返書略。古人いへることあり。老人なり、かつ微賤に居て下の情を知れり。知識ありて時變に達せり。生れながらの上臈は、下の情を知り給ふ事くはしからず、人の云ふにしたがひ、道理のまゝに下知し給ひては、下に至りて可にあたらざる事あり。是を以て帝堯は諫鼓謗木を置き給へり。又賢才の人も、下に居て上臈の風俗を見ず、かつ政道の務を知らざれば、下にて謀りたる事には違ふこと多し。太公も君子に交りて上臈の事をしり、本よりの大臣も、太公によつて下の情に通じ給へば、上下共

先覺—孟子に予は天民の先覺者なりと

道統—流派と云ふに同じ

通書—周敦頤の著書凡そ四十篇あり

と申す者あるべく候へども、これも變化にはあらず候。大かたは先覺後覺共に、本の人がらありと相見え候。いざなふ人の人がらよければ、其國所のよき人、類にふれてあつまり、いざなふ人の人がら平人なれば、平人あつまり候。王朱の學の異同にはよらで、先覺の德と不德によれり。悉く然るにはあらず候へども、これ大略にて候。むかふ人を以て我身の鑑と致し候へば、自の人がらこそ恥かしく候へ。古の人は、門前に人の往來多きを以てあるじの才ある事をしり、來る人の善不善を見て主の德を知ると承り候。

一　再書略。宋朝の理學、明朝の心術と承り候へば、程子朱子は道統にあづからざるが如し。いかが。

返書略。周子の通書などを見侍れば、聖人のはだへあり、明道には顏子の氣象あり。後の賢者のよく及ぶべきにあらず。伊川の器量、朱子の志、みな聖人の一體あり。凡心なき處は同じ。聖門傳受の心法にあらずして何ぞや。我はたゞ其學術を論ずる

見解―本書すべて意見の義に用ひたり

さを存じ候。如レ仰貴殿かたのごとく道を行ふと思召候へども、心中の微は同前に候。又學志ありてなりがたき事をつとむる所は候へども、無學の平人におとりたる事も有レ之候。學は程朱の道にたがひもあるまじく候へども、立處の心志かはりある故と存じ候。學術の外に向ふによりて、自から知ることの不レ明故にてもあるべく候。陽明の流の學者とて、心よりくはしく用ふとは申し候へども、其理を窮ることは見解多く、自反愼獨の功も眞ならざる處相見え候。尤よきもあるべく候。大方は、其愚を知ること明かならず、其位をぬけ候事を知らざれば、名根利根の伏藏は本の凡情たるべし。飯上の蠅を追ふが如くなれ共、心上の受用あるによりて、自からもゆるすにて有るべく候。しかれども、大なる事にあひては亂れ候はんか。氣質變化の學は明白なる道理ながら、大なる志なければ到りがたく候。生付よき人の、世間の習によりて、うはべばかり惡しく成りたる等は、道を聞候へば、一旦の惑ひはすみやかに解けて、本のよき所あらはれ候。かゝる人を氣質變化

一の不義云々―孟子に一不義を行ひ一不辜を殺して天下を得るも皆爲ざるなりと

かね備へたる名將なりといへり。されども近年心學を受用するといふ人を見侍るに、さとりの極にて、氣質變化の學とも覺えず候。

返書略。拙者をも世間には心學者と申すと承り候。初學の時心得そこなひて、自ら招きたることに候へども、心學の名目しかるべからず存じ候。道ならば道。學ならば學にてこそ有るべく候へ。いづれと名を付け、かたよるはよからず候。漢儒の訓詁ありたればこそ、宋朝に理學もおこり候へ。宋朝の發明によりてこそ、明朝に心法をも說き候へ。明朝の論あればこそ、數ならぬ我等ごときも、入德の受用を心がけ候へ。論議は次第にくはしくなりても、德は古人に及びがたし。後世の者、心は本の凡情ながら、文學の力にてたま〳〵先賢未發の解を得ては、古人の凡情なき有德をそしり申す事勿體なき義なり。一の不義を行ひ一の不辜をころして天下を得る事もせざる所は、朱子王子かはりなく候。拙者世俗の習いまだ免かれずといへども、此一事は天地神明にたゞしても古人に恥づべからず。其外の事は、我ながら我身の拙

天地位―中庸に中和を致して天地位し萬物育すとあり

心の微―書經の道心惟微に出づ

も違ふ事なし。呼吸の息は運行に合す。暦數醫術もこゝに取る事あり。天地造化の神理主師を元亨利貞と云ひ、人に有りては仁義禮智と云ふ。故に木神は仁なり、金神は義なり、火神は禮なり。水神は智なり。天地人を三極といふ。形は異なれども、其神は一貫周流へだてなし。理に大小なきが故に、方寸太虚本より同じ。是大舜の君、五尺の身にしてよく其德を明かにし給ひしかば、天地位し萬物育するに至れる所なり。萬物一躰とはいふべし。一性とは云ふべからず。萬物は人のために生じたるものなり。我心則ち太虚なり。天地四海も我心中にあり。人鬼幽明うたがひなし。堯舜の道は人倫を明かにするにあり。故に他の道を學びんことをねがはず。佛法の事は我不ㇾ識。

一來書略。聖人の書を說くことは、朱子にしくはなし。是を以て朱學は則ち聖學なりと云へり。小學、近思錄等の諸書を學びて、かたの如くつとめ行ひ候へども、心の微は本の凡情に候。又心學とて、内よりつとむると云ふもおもしろく候。陽明は文武

太虚―太虚は畢竟大空也陽明學派に太虚説を立つる者多し

返書略。萬物一躰とは、天地萬物みな太虚の一氣より生じたるものなるゆゑに、仁者は一草一木をも其時なく其理なくてはきらず候。況や飛潛動走のものをや。草木にても、強き日でりなどにしぼむを見ては、我心もしほるゝがごとし。雨露の恵を得て、青やかにさかえぬるを見ては、我心もよろこばし。是一躰のしるしなり。しかれども、人は天地の德萬物の靈といひて、すぐれたる所あり。たとへば庭前の梅の根の土中にかくれたるは太虚のごとく、一本の木は天地のごとく、枝は國々のごとく、葉は萬物のごとく、花實は人のごとし。葉も花實も一本の木より生ずといへども、葉には全體の木の用なし、數有て朽ぬるばかりなり。花實はすこしきなりといへども、一本の木の全體を備へし故、地に植ぬれば又大木となりぬ。かくのごとく、萬物も同じく太虚の一氣より生ずといへども、太虚天地の全體を備ふる事なし。人は其形すこしきなれども、太虚の全體あるゆゑに、人の性にのみ明德の尊號あり。故に人は小體の天にして、天は大體の人といへり。人の一身を天地に合せて、少し

東鑑—鎌倉幕府の日記

周程諸子—周は周敦頤、程は程顥程頤、朱は朱熹、王は王陽明

を受けながら、竹を切て雪中にさし、竹に向ひてもの云ひたる振舞などは、苟且なる事の様なれども、心の智仁勇あらはれ候。東鑑のみ確なるやうに世以て申し候へ共、鎌倉中の事は委しくして、遠國の事はおろそかなり。平家物語義經記も、大かた實事と見えたり。文法にても虚實は見ゆるものにて候。正しく記したる書の中に、定めてよき生付の人あるべく候。重て暇の日に考へ可レ申候。源の頼光、小松の内府重盛、畠山の重忠、文武を兼て士君子の風ある人なり。かゝる人々に聖學の心法を聞かせば、唐までも聞ゆる程の人に成り給ふべく候。時節あしく出られし事不幸なる儀なり。宋明の書、周子、程子、朱子、王子などの註解發明の日本に渡り人の見候事は、わづかに五六十年ばかりなり。しかれども、市井の中にとゞまりて、士の學とならず。十年このかた、武士の中にも志のある人、はし〴〵見え候間、後世には好人餘多出來候べし。

一 來書略。萬物一躰といひ、草木國土悉皆成佛と云ふときは、同じ道理の様に聞え候。

平泉寺—陸中國

患難云々—中庸に富貴に素しては富貴に行ひ貧賤に素しては貧賤に行ひ夷狄に素しては夷狄に行ひ患難に素しては患難に行ふとあり。

き様言成して通りしを、平泉寺にては、鎌倉殿よりの討手にてもなきに、法師の身ながら、邪欲のあまりに、義經をうちとゞめて恩賞にあづからんとて、取籠めたれば、遁れざる所の第一なりき。然る所に、うつくしき兒を倶しける故に、坊主ども目をうつして時刻をふる間に、老僧など出て管絃のもよほしあり。義經は笛の上手なり、供奉の中に笙ひちりきの得たるあり、ちごは箏を彈じ給へば、老若ともに邪心やはらぎ、難をのがれたり。此時北の方ましまさずはあやふかるべし。かくあしかるべき催しだに、道にしたがへば吉なり。此一事を以ても、辨慶仁厚の心は見え侍り。平生義理に感じやすく、涙もろなる者と見えたり。戯言をなどいひたるは、患難に素しては患難を行ふの氣象也。義經一代難儀の堺にしたがひしかば、諸人の氣屈する節なり。辨慶は仁にして勇なる故に、敵におそれざるのみならず、難に遇てもこゝろ屈せず、人をいさめ助くる所ある故に、戯言など云ひたるなり。君子を其地は置たらば、斯くあるべきと思はれ候なり。吉野河にて、跡にまぢかく大敵

身もたゞに―㷔姙せるをいふ

る人に候。隱れたる處ありて、世人知る事稀なり。勇にかさのある事類すくなく、智謀は泉のわき出るがごとし。仁は士にて時にあはざるゆゑに、見えがたく候。勇智にならぶべき仁愛見え申し候。義經の好色なるをば、度々いさめ候ひき。然るに、奧州落の時、北の方をば、辨慶すゝめて供いたし候。人の同心すまじき所をはかりて、先辨慶大に氣色をつくり、倶し奉る事はなるまじきよしをいひて後、又氣色をやはらげ、さは云ひつれども、まさしき北の方なり、身もたゞにましまさず、鎌倉殿はたのもしげなし、都に殘し奉るべき義にあらず、行かるゝ所まで行きて、叶はざる時は、先北の方をさし殺し奉り、各自害し給ふべきより外はあらじとて、稚兒の形につくりて相倶し、北陸道をへて落ちられしに、關所々々にて、義經とは見知りたれども、うちとゞめて軍功にもならじ、實は兄弟にてましませば、恩賞を得ても心よからぬ事なり、其上罪なき人の、大功ありながら讒に遭ひ給へるもいたはしくて、進まざる心の氣色を、辨慶やがて見しりければ、關の人々の理のたつべ

大樹―後漢の馮異が故事に基づく

亡ぶべき天命あらはれ、又將軍は京より申し下して假なる事なれば、天子より外に主君なく候。主君よりの仰なれば、賴まれ申したるといふ事にては無く候。臣下の權つよくて、一旦君をなやまし奉りし事は、平の淸盛も同じ事なり。後白河院賴朝に天下をあづけ給ひてより、武家の世といへり。しかれども王威過半殘りて、全く武家の天下ともいひがたし。されば後醍醐天皇までは、いにしへの王德をしたふ者も多かりき。しかる處に、北條の高時奢りはまり、天道にそむき、人民うとみたる時節、天下をとりかへし給ひしかば、公家に歸したり。しかれども、天皇道をしろしめさず、賢良を用ひ給はず、昔と時勢のかはりたる事を知り給はざりし故に、うらみいきどほる者おほく出來て、武家の權を慕はしく思ふをりふし、高氏おこりて天下をとりてよりこのかた、一向武家の世とはなれり。是より天下の諸大名、大樹を主君とし奉りて、天子には仕ふまつらず、陪臣の國の君を主とすると同理なり。是を以て今ならばたのまれ申すまじきと申す事に候。扨士にては辨慶、氣質に智仁勇あ

大學の旨—大學に小人間居して不善を爲す。至らざる所なし（中略）人の己を視ること其肺肝を見るが如く然りと

相摸入道—北條高時

かぎらず。惣じて不善ある人の氣遣、かくの如くに候。大學の旨も、君子より人の肺肝を見るにはあらず。小人みづから肺肝を見らるゝ如く苦しきにて候。性善の理明白なる事に候。

一來書略。楠正成は智仁勇ありし大將といへり。德もなき天子にたのまれ奉りたるは、智とは申しがたくや候はん。武家の世と成りて此かた、よき人誰か候つるや。

返書略。不レ知して天よりあるを氣質と云ひ、知て我物とするを德といへり。正成は氣質に智仁勇の備りたる人と聞え候。聖學をきかせ候はゞ、たぐひすくなき文武ある君子たるべく候。今の時ならば、天子にもたのまれ申すまじく候。正成の時分は、北條の代と後世よりは稱すれども、京都より將軍を申し下し奉り、北條は諸大名と傍輩の禮儀にて交り、たゞ天下の權を握りたるばかりに候。賴朝の子孫九州にもおはしまし候事なれば、主君と成て諸士にのぞむ事は、人情のしたがはぬ所ありたると見え候。この故に、正成も北條と君臣の禮はなく候。其上相摸入道無道にして、

五人—禹、皐陶、稷、契、伯益

遂げて云々—隱しおはすべしとはの義

ならべて善人多かりしだに、政の才ある人は五人ならでは無かりしとなり。周の盛なりしにも、九人ありといへり。學問して其まゝ仕置のなる事ならば、古の聖代には、五人九人などといふ事はあるまじき事なり。古の才と云たるは、德智と才學と兼ねたる人の事と聞え候。博學有德にても、人情時變に達する才なき人は、政はなりがたく、世間智ありても心ねぢけたる人は害おほく候。是は昔の人のえらびなり。今の政に從ふといふはしからず。其位に備りたる人か、衆の指ところか、いかさまに人情のゆるす所ある人の中にて、凶德なきをえらぶとみえたり。これなほ無學なりとも、我政をせんといふ學者の國政にはまさり候はんか。

一來書略。昨日下拙不善ありき。遂げてかくし可レ申とは存ぜずながら、申しは出ざる内に、先生すでに肺肝を御覽ぜらるゝと覺え候ひき。

返書略。愚拙いかで人の不善をさぐり申すべき。何事の候へるやらん不レ存候。貴殿の心に明德あるによりて、肺肝を見らるゝ樣に覺え給ひ候なり。貴殿と我等とに

し。才あらば稱すべし。德あらば好すべし。

一來書略。今の世に學問する人は、天下國家の政道にあづかり度思ふ者多く候。學者に仕置をさせ候はゞ、國やすく世靜なるべく候や。

返書略。いづれの學問にても、利欲を本としてつとむる者は、各別の事なり。實に道を求めて學ぶ人は、貴殿我等をはじめて、今の世の愚なる人と可レ被二思召一候。此世に生れて、神の智を開くにしたがひて、世間に入る人は、利發なる故なり。世間の利害に染りぬれば、道德には遠きものに候。しかる所に、貴殿我等ごとき、此世に生れながら、世間に入るべき智識もさとからず、しかも流俗には習ながら、中流にたゞよひ居り候處に、幸に道を聞てよろこび候。其愚なる下地故に難き事をば知らずして、古の法を以て今を治めんと思へるなり。我せんと思ふ學者に仕置をさせ候はゞ、亂に及び候べし。たとひ古の人の如き賢才ありとも、人力を以てなさば不可なり。況や古人におよばざる事はるかなるをや。堯舜の御代には、屋を

は、其身に道を行ふ事全からぬ人にても、文才に器用なる者には學問をさせ、ひろく文道を敎へて、人民のまどひをとき、風俗をうるはしくし、その身に勇氣少き人にても、武藝に器用なる者には、弓馬をならはし、あまねく兵法を敎へて、人民の筋骨をすこやかにし、能を遂げしむ。國の武威を強くせんとなり。これ主將の人を捨てず、ひろく益を取給ふ道なり。學力無くして孝行忠節なるは、氣質の美なり。道を知らざる勇者をば、血氣の勇ともいへり。人の德を達し才を長ずることは、文武にしくはなし。今宣へる人は、文の末のみを知て本に達せず。武も又かくの如し。且天の物を生ずること、二つながら全きことなし。四足のものには羽なく、角あるものには牙なし。形あるものは必ずかくる所あり。大かた文才に器用なる者は德行にうすく、德行によき人は文才拙きことあり。智聰明なる生付の者は行かけやすし。行篤實なる者は智に足らざる所あり。君子は其善を取りて備らん事を求めず。小人は人のみじかき所をあらはして、其美をおほへり。すべて世に才もなく德もなき人多

兵法者―武藝巧妙の者

集義和書

卷第一

○書簡之一

一 來書畧。博學にして、人にさへ孝弟忠信の道を敎へられ候人の中に、不孝不忠なるも候は、いかなる事にて候や。

返書略。武士の武藝に達したるは、人に勝つことを知るにて候へども、武功なき者あり。無藝にても武功ある人多し。兵法者の無手の者に切られたるあり。學問の道も同前に候。夫智仁勇は文武の德なり。禮樂弓馬書數は文武の藝なり。生付仁厚なる人は、文學せざれども孝行忠節なるものなり。生付勇强なる人は、武藝をしらでも勝負の利よきものなり。しかればとて、文武の藝廢るべき道理なければ、古の人

卷第十四……四一一
義論之七
卷第十五……四四七
義論之八
卷第十六……五〇五
義論之九
集義和書索引……五四一・・五五四

集義和書目録

巻第一……一
書簡之一
巻第二……三三
書簡之二
巻第三……六三
書簡之三
巻第四……九九
書簡之四
巻第五……一三七
書簡之五
巻第六……一五一
心法圖解
巻第七……一六七
始物解
巻第八……二〇一
義論之一
巻第九……二三五
義論之二
巻第十……二七一
義論之三
巻第十一……二九九
義論之四
巻第十二……三四一
義論之五
巻第十三……三七一
義論之六

して當時に仰慕せられ、爲に幕府の忌憚を招きて幽囚の厄に遭へるが如き、高く古文辭の學を唱へて眼一世を空しうせる荻生徂徠をして「仁齋の道德、了介の英才、余が學術を合せて一と爲さば、聖人と謂ひつべし」と稱讃せしめしが如き、以て此老の面目を推すに足るべし。

原本刊行の年月を缺く。但本書と併刊せりと思はるゝ集義外書に寶永七年の奧付あり。以て畧〻其年代を推すべし。飜刻に就きての用意は一に從來刊行の本文庫本に同じく、校注に關しては多く古賀友太氏を煩はせり。

大正二年八月

校訂者　武笠三

緒言

集義和書一部十六卷は、集義外書と共に蕃山先生熊澤伯繼の著述中其主要なるものにして、門人岡嶋可祐の纂錄する所、書簡五卷、心法圖解一卷、始物解一卷、議論九卷より成る。心法圖解は性理の解說、始物解は易の繫辭傳の一節を和解せるもの、議論は各般の題目に涉りて一家の主張を披瀝し、最著者の學識を觀るべきものたり。其書簡に至りては、蓋し實際應酬の文に非ずして、托して以て自己の思想を叙述せるものなるべしといふ。

蕃山、通稱助右衛門、字了介を以て行はる。元和五年京都に生れ、元祿四年、齡七十三にして下總古河に歿す。其人物事業は、世の知る所、今玆に贅せず。彼が本邦陽明學の開祖中江藤樹の高弟として、聲名藉甚「日本之大賢君子」と

爐邊に携へ行き、軽く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

B
5244
K8555
1913

LIBRARY
APR 7 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

集義和書

全

B
5244
K85S5
1913

Kumazawa, Banzan
Shugi washo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY